
魔女と巫女の物語

咲畑珠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と巫女の物語

【Nコード】

N6843S

【作者名】

咲畑琉璃

【あらすじ】

封印が解けて目を開けると、そこには一人の少女がいた。封印を解いたのはこの少女らしい。その少女は人の心が読め、人間たちから『巫女』と呼ばれていた。解けるはずのなかった封印。主人公が封印されてから、千年の時間が過ぎていた。そのためか、魔女のはずの主人公は魔法が使えなくなっていた。これは、孤独な魔女と『巫女』と呼ばれた少女の物語。※R15にしていますが、おそらく15歳未満の方でも読めると思います。

【本編終了。一ヶ月に一度ほど、後日談や番外編を更新していきます】

す。完結済にはありますが、ある意味連載中……?」

プロローグ 人間たちの願い（前書き）

我慢できずに書いてしまいました。

駄文です。更新速度も遅いです。それでも読んでくださる方は、感想を書いていただけると嬉しいな……とかは考えていませんよ。ただ読んでくださるだけで、私は満足です！

プロローグ 人間たちの願い

「本当に……いいんだね？」

薄暗い洞窟に少女の声が響く。尋ねられた人間は、少しためらった後うなずいた。少女は寂しそうな顔をし、その人間に液体が入った瓶を渡す。

「その薬を飲めば、君は苦しまずに死ぬことができる。……もう一度訊くよ。本当にいいんだね？」

「はい。心残りはもうないですから」

少女の確認の声に、今度はためらわずにうなずいた。そして、今から死のうと思っているなんて嘘のような笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、魔女様。……魔女様にもう少し早くお会いできていたら、私は自殺しようと思わなかったかもしれませんね」

魔女様、と呼ばれた少女は顔を泣きそうに歪めた。

魔法が使えるのにもかかわらず、自分はこの人間に何もしてあげられない。魔法に、人間を助けられるようなものはないのだ。自分にできるのは、ただ苦しまずに死ねる薬を渡すだけ……。それが悔しかった。

今までの人間たちにも、それしかできなかった。この薬を飲むと、骨も何も残らない。だから墓も作ることができないのだ。

彼女は少女から瓶を受け取ると、もう一度感謝の言葉を口にする。

「ありがとうございます」

感謝されることなんて望んでいない。

死なないでほしい。

そう思ってしまう。それが自分勝手な願いだとわかっているのに。今まで、少女の目の前で死んでいった人間たち。その人間たちも、今ここにいる彼女も、生きていくことが辛いのだ。無理に生きさせるよりは、苦しまずに死ぬるよう協力した方がいい。

「……来世では、君が幸せに生きられますように」

そんなことしか言えない。

瓶のふたを開けた彼女は、一瞬動きを止めた。

「心残り……。ありました」

「？」

少女はその言葉に首をかしげる。先ほどまではないと言っていたのに、なぜ今になってあると言いつ出したのだろうか。

彼女は、ふわりと儚げに微笑んだ。

「魔女様の優しさを、皆に伝えられないことです。それだけが心残り……。伝えたって、皆信じてくれないに決まっています。魔女という存在を、皆恐れていますから。私もここに来るまではそうでした」

「……そっか」

わかっていたこと。それでも少しだけ、悲しかった。

「でも、魔女様とお話してそんな思いは吹き飛びました。この方が

恐ろしいはずはない、と」

「……ありがと」

何だか照れてしまい、彼女から目を逸らす。ここが薄暗くてよかった。明るいところだったら、顔が赤くなっているのを気付かれてしまうかもしれないから。

「最後に魔女様に出会えてよかったです。……そろそろ私、飲みますね。いつまでも開けたままなのはどうかと思いますから」

「うん。元気だね、……って言うのは変か」

「ふふっ。私はもう死にますからね。んーと、私は何を言いましたか。……魔女様がどうか幸せになれますように、ですかね」

目を丸くした少女に「さっき、私に言ってくれましたから」と言う。

なぜここに来た人間は、皆同じことを自分に言うのだろうか。ここに来た直後は、魔女の自分が何か言うたび、動くたびに怯えていたと言うのに。

そんなことを言うから、こんなにも悲しくなってしまうのだ。

少女は出てくる涙を必死に堪えた。自分に泣く資格はない。いつも、少女は人間たちが消えてから涙を流す。泣いてはいけなそう思っている、我慢できなくなるのだ。

隣に座っていた使い魔が、心配そうに少女の顔を覗きこんできた。心配しなくてもいい、という意味で少女は使い魔に首を振る。

「不思議と死ぬのが怖くないんです。これも、魔女様のおかげですね」

また、この人間も死んでしまうのか。他の人間と同じように。他

の人間たちだって、最期は笑顔で薬を飲む。この人間も、笑っていた。なぜ死にたいのか、と問いたくなるほどの笑顔で。

こくっ。人間が薬を飲んだ。飲んでしまった。

辺りに風が舞い上がり、人間の姿はだんだんと消えていく。きつともう、生きていないのだろう。少女は最期の姿を目に焼き付けようと、目をしっかりと開く。今まで消えていった人間たちの最期を、誰一人として忘れたことはない。この人間の最期も、忘れないようにしなければ。

「……こいつで百人目か。魔女の作った薬で死のうとする物好きな奴は」

人間が消えてしばらくし、使い魔がぽつりと言う。

「よくそんなこと覚えてるね？ 白猫のくせに」

「それは今、関係ねえだろう」

魔女の使い魔は普通、黒色をしている。白い使い魔なんて、彼だけではないだろうか。彼はそのことを気にしているから、少女も普段はそのことに触れない。だが、こういう時は別だ。悪いとは思うが、八つ当たりさせてもらっている。

「俺は何も見えてねえし、何も聞いてねえぞ。だからいつもみたいになんて泣いていいからな」

「……いつも、って何さ」

確かにいつものことなのだが。少しむっとしながらも、素直に従う。今まで我慢していた涙が、あふれ出てきた。使い魔の言った通りなら、もう自分は百回も泣いている。それなのにまだ慣れない。

人間が目の前で死んでいくことに。

使い魔は、先ほどまで人間がいた空間を見つめた。

「あいつらの願い。忘れんなよ」

魔女様が幸せになれますように。

彼に言われずとも、忘れるはずがない。

人間たちの最期の願い。それはきつと、叶うことのない願いだ。
それでもいつか、自分が幸せだと思いう日が来るのだろうか。

この一カ月後。この魔女は、ある人間の男に封印されることになる。

第一話 目覚め（前書き）

プロローグの時と、話の雰囲気が変わっているかもしれません。
それから、話があまり進んでいません……。

※2011. 5. 03 少し修正しました

第一話 目覚め

ふわふわと宙を浮くような不思議な感覚。それが長い間続いていた。ぼんやりとししか頭が働かないから、どのくらい時間が経ったのかわからない。

その感覚がいきなり終わった

辺りが明るくなった気がし、目を開けると……。

＊ ＊ ＊

海のような色の瞳が、ルーシエルの瞳を覗き込んでいた。しばらくその瞳に見惚れていると、だんだんと意識が覚醒してくる。そして、ルーシエルは悲鳴を上げた。

「ふぁ！？ き、君誰？ ……あれ？ 何で動けるの？ 僕は封印されてたはず……ってノギスは！？ あの変態に何かされてない！？」

あわてて飛び起き周りを見ると、見慣れた白猫が座っていた。どこも変なところがないのを見て取ると、ルーシエルは安堵の息を漏らす。少し気になるとしたら、機嫌が悪そうにしつぽをパタパタ振っていることだろうか。

こちらを覗き込んでいた少女が、おそるおそる声を発する。

「えっと、落ち着いた、よね？ 私はセリア。その白猫君に言われて、貴女の封印を解きに来たの」

「封印を解く……？」

ルーシエルを封印したあの男は、自分か自分より強い力を持つ者

にしか封印は解けないと言っていた。自分より強い者などいないから、実質自分にしか封印が解けないとも。

この少女にそんな力があると思えない。だが、一見ただの十歳ぐらいの少女に見えても、もしかしたら強い力を秘めているのかもしれない。あの男だって、全く強そうに見えなかったのだから。

「貴女はルーちゃんだよね？ 白猫君に聞いたわ」

「ル、ルーちゃん……。ま、まあいいか。とりあえず」

なぜ封印が解けたのか。それを尋ねようとする、セリアと名乗った少女に遮られた。

「なぜ封印が解けたか、でしょ？」

「うん。君は……何か特別な力でもあるの？」

少女は困ったように笑って、ルーシエルの瞳を見つめてきた。なぜだか少女の瞳を見ると安心できる。ルーシエルもセリアの瞳を見つめ返した。

（綺麗な色だよ……。僕は魔女だから黒い瞳だけど）

羨ましい。ルーシエルは髪の毛も瞳も真っ黒だ。産まれた時から魔女の証を持つルーシエルを、両親は捨てた。魔女の身内は皆殺しされることになっていたので、誰にも気付かれないようこっそりと結局村人にばれて殺されてしまったが。ルーシエルが生きているのは、村人の一人カリマという老婆のおかげだった。

カリマと過ごした日々を久しぶりに思い出していると、セリアがぽつりとつぶやいた。

「ルーちゃんの方が羨ましい。私も……魔女だったらよかったのに」

「え？」

聞き返すと、セリアは「何でもない」と言った。私も……の後に続いた言葉は何なのだろう。ルーちゃんの方が羨ましい、とは？

（何だか、僕の考えが読まれてる気がするんだけど。気のせいかな？）

「気のせいじゃないわ。……私は人の心が読めるの」

気のせいではない、と言われて、思わず首を傾げてしまう。人の心を読むことなんて、魔女の自分にだってできなかった。もちろん、そんな魔法は存在しない。それを、この少女ができるというのだろうか。

（僕にその能力があれば、あの人間たちを生きさせることができたのかな）

また、羨ましいと考えてしまった。だってそうではないか。ルーシエルにそんな能力があったら、あの人間たちを考え直させることができたかもしれないのだ。

そうルーシエルが考えると、セリアはほっとしたように微笑んだ。

「……羨ましい、かあ。うん、白猫君の言った通りだったんだね。私のことを……恐れないなんて」

「白猫君って……あ、ノギスカ。そういうばノギス、そこにいたんだっけ？」

パタパタしていたしっぽが、ぴたりと止まる。……なぜ睨むのだろう？ 自分が何か、悪いことをしただろうか。ノギスのことを忘れてただけで、こんなに睨まないと思うのだが。

「白猫君はずーっと貴女を心配してたのよ？ やっと封印が解けたと思ったら、ルーちゃんは私とばかり話しているんだから、怒って当然」

「……ごめんノギス。えっと、僕ってどのくらいの間封印されてたの？」

そう尋ねると、顔をぷいっと背けられる。

（うー。そんなに怒らなくても……）

「この場合は、ルーちゃんが悪いよね？」

悪意のないセリアの笑顔に打ちのめされた。彼女は人の心を読むのだから、ノギスがどれほど怒っているのかわかっているはずだ。セリアの言うとおり、ルーシエルが悪いのだろう。

（あ、ノギスは猫なんだけど心を読むのかな？）

「読めるわ」

「……口に出していないのに相手が答えるって、何だか変な感じだな」

そうつぶやくと、セリアの顔がこわばった。ルーシエルには彼女の心は読めないが、どんなことを考えているかすぐわかる。きっと、以前の自分と同じだ。カリマが死んでからの自分と。

カリマはルーシエルが十歳の時に死んだ。それまでの間、外には出れなかったけど幸せだった。カリマが死に、ルーシエルの存在が村人にばれてしまってから……初めて魔法を使った。カリマには魔法を禁じられていた。それでも魔法を使わなければ殺されてる。

ただ少し、脅すだけのつもりだった。小さな炎を出して、脅すだけのつもりだった。それなのに。

一瞬で村人は灰になった。

何が起きたのかわからなかった。

他の人間たちの悲鳴。皆逃げていった。

そこでようやく、自分がやったのだと気付いた。思わず村と反対にある森の中へ、走り出していた。頭の中で先ほどの出来事が何度も何度も浮かんで。

小さな洞窟を見つけ、そこへ飛び込んだ。

殺してしまった。……あんなことをしたくなかった。嫌われたくない。このままだと自分は独りぼっちになってしまふ。独りになりたくない。人間を殺してしまったのに、嫌われたくないと思うのは悪いことなのだろうか。嫌われたくない。嫌われ――

「ルーちゃん！」

セリアの声で、はっと我に返る。ぱちぱちと目を瞬いて、セリアの顔を見る。セリアは辛そうな顔をしていた。……そうか、先ほどの記憶を読まれてしまったのか。

「大丈夫、大丈夫だよ。私はルーちゃんを嫌ったりしないから！」

必死なセリアに、安心させるように微笑んでうなずく。笑顔がこわばっていないか心配だ。

「……うん。僕も、君を嫌ったりしない」

「え、本当に？」

大人びていたセリアの顔が、目を見開くことによって歳相応に見える。

「じゃ、じゃあ……あの、ね？ 私村の人たちに怖がられてて、ね。友達がいないの。それで……」

彼女の言葉をノギスが遮った。

「怖がられてなくても、その立場だと友達がなくなたって仕方ねえだろう」

「立場？ って、そういえばノギスもいたんだね。また忘れてたよ」

ルーシエルの発言に彼は沈黙する。そして疲れたように叫んだ。

「……何でお前はいつもそうなんだ！ 大体千年前のあの日だって……！」

「あの……」

もじもじと指を絡ませているセリアの前で、魔女と使い魔の舌戦が繰り広げられる。

「千年？ ってことは僕が封印されて千年も経ってたんだね。まあ、今はそんなことどうでもいいよ。あの日は仕方なかったでしょ？

というか、いつも『そう』ってどういう意味！？」

「じゃあ言い直す。何でお前はそんなにアホなんだ！」

「あ、ノギスは僕のことそんな風に思ってたんだ？ ふっふん。でも残念でした。正しくは阿呆^{あほう}って言うんだよ！ ノギスの方が阿呆だね？」

「……ルーちゃん？ 白猫君？」

「ふん、お前の方がアホだ。どっちでも正しいんだからな」
「むっ！ その偉そうな態度、何だかイライラする！」

「……二人とも。私の話、聞いてくれないのかな？」

ずっと無視されてきたセリアが、とうとう怒りをあらわにする。
そんなに怒ると、綺麗な顔が台無しだ。……と、余計なことを考えてしまった途端、睨まれてしまう。

「そんなくだらない話してないで、私の話も聞いて！」
「「なっ！ くだらない話！？」」

セリアも参戦した『くだらない話』は、約一時間続いた。

＊ ＊ ＊

結局、セリアの話を聞きそびれてしまった。セリアが帰った後、ルーシエルはこっそりため息をついた。セリアは誰にも言わずに村から出てきたらしく、早く帰らないと怪しまれてしまう。それで帰ってしまったのは納得できる。

（だけど……あそこまで怒ったんだから大事な話だったんだろうな。聞いてあげればよかった。それに、もっと一緒に話したかったな）

千年封印されている間に、当たり前だが色々と変わっていて、彼女の話には知らない言葉がたくさん出てきた。ルーシエルの知らない食べ物、知らない国や町。もっと詳しく、そういう話を聞きたい。

「……ノギス。またセリアは来てくれると思う？」
「さあな」

相変わらず適当な返事だ。仲直りは先ほどしたはずだから、怒っているわけではない。千年経っても彼の性格は変わっていないのだな、となぜだか嬉しくなる。

「あ、そういえばセリアの立場って何？」

「さあな」

「……怒ってるの？」

「さあな」

……仲直りでできていなかったらしい。

第一話 目覚め（後書き）

主人公は僕っ娘でした。最初はそんな設定じゃなかったのに……。僕っ娘が嫌いな人、ごめんなさい。

第二話 使えない魔法（前書き）

なんと、この小説をお気に入り登録してくれた方がいらっしました！ 読んでいただけるだけで嬉しいのに、お気に入り登録まで……。ありがとうございます！

最初はセリア視点です。

第二話 使えない魔法

村へ戻っても、自分がいなくなったことに誰も気付いていなかった。こっそりと家に入ると、思った通り誰もいない。

セリアは、静かな家に響く自分の足音を聞きながら考えた。

（……これなら、ルーちゃんともっと話していてもよかったかも）

龍神さまへの祈りの時間は、夜が明ける頃に一度だけ。雨が降るよう祈るのが、巫女であるセリアの役目だった。『巫女』とは龍神さまの声が聞ける者を指す。

普通の巫女だったら、村人たちに崇められ大切にされるのだが……。どうしてか産まれた時から、セリアには特別な力があった。生き物の心が読める、という。

その能力のせいでセリアは人々から恐れられ、こうしていつも独りでいる。両親でさえ、セリアを気味悪がって近づかないのだ。たまにここへ来るのだって、きちんと巫女の役目を果たしているかを訊きに来るだけ。最後に両親がここへ来たのは、いつ頃だろう。

（あの人たちと違って、ルーちゃんは私を嫌わないと約束してくれた。自分だってあんな辛い思いをしたはずなのに……。どうしてあんな素直な子に育ったの？）

心を読んだから、彼女の一部の記憶まで知ってしまった。それなのにあんな風に育つなんて、奇跡に等しいと思う。本当に不思議だ。

（……また明日、会いに行こうかな。友達になろうってちゃんと一言なきや）

今日はそれを言えなかった。どんな話でも、彼女たちと話すことは楽しいのだが。

変わった魔女とその使い魔を思い出し、セリアは微笑んだ。

＊ ＊ ＊

翌日。セリアがそんなことを考えていたとは知らず、ルーシエルはノギスと仲直りする方法を考えていた。ノギスはまだ、機嫌が悪そうにしつぽを振っている。どうにかして仲直りしたくて、昨日から話しかけてはいるのだが……。ルーシエルがしつこすぎたのか、とうとう何も返事をしてくれなくなってしまった。

黙って木の椅子に座っていられなくて、ルーシエルはうろうろと歩き始めた。

（物で釣るっていうのも……確かノギスの好きな物はベルガエンフエン、だっけ？）

ベルガエンフエンは金色をしていて、とても美味な魚だ。ルーシエルも好きだった。だがそれも、千年前の話。もしかしたらもうノギスは好きでなくなっているかもしれないし、ベルガエンフエンが絶滅しているかもしれない。

そこまで考えて、ふと洞窟に置いてある棚に見慣れない物があることに気付いた。ここには千年前に作った薬が並んでいた。もちろん、もう飲むことはできないが。

（これ……手紙？）

棚には、手紙らしき白い封筒があった。それを手に取り見てみると、宛名も差出人の名前も書いていなかった。

「それは、あの男が置いていった物だ」

ノギスが話してくれたことに少し喜びながら、手紙の封を切る。手紙は二枚入っていた。その内の一枚を開き、小さく口で読み始めた。

「拝啓……ってな、何これ？」

だが、最初の一文で思わず顔が熱くなる。手紙には、口に出すのが恥ずかしいほどの美辞麗句が延々と続いていた。こんなことを書く変態は、あの男だけだろう。

ノギスがルーシエルの肩に飛び乗り、手紙を覗き込む。

「何を書いてあった？」

「口が裂けても言わないよ。こんな恥ずかしいこと……」

ノギスは人間の文字が読めないから、見せても大丈夫と、ルーシエルは手紙を隠さなかった。

だが。

「ふむふむ。これは面白いな」

「へ！？　な、何で……もしかして千年の間に文字を覚えた、とか？」

「暇だったからな。ん、この手紙には重要なことは書いてないぞ。早く次の手紙を見せろ」

固まっているルーシエルの頭をぽんぽん叩いてくる。ノギスの手では、封筒の中の手紙を取り出せないからだろう。ルーシエルはため息をつき、手紙を見せる。本当はあんな変態の手紙なんて読みたくなかったが……ノギスと仲直りできそうだったから。

「……？ ルーシエル、これは呪文か？ お前に教えるって書いてあるが」

「呪文？ 何であいつが呪文なんか知ってるの？ 呪文って魔女しか知らないはずなんだけど……しかも僕に教えるって？」

カリマがどこからか持ってきた本に、簡単な魔法は書いてあった。ルーシエルはそれで魔法を覚えたのだ。難しい魔法は、その後知り合った魔女の友達に教えてもらった。

だから、人間が魔女に教える魔法など、存在しないはずなのだ。それはあの変態もわかっているはずだ。首をかしげながら手紙に目を通す。

『こつちが一番伝えたかったこと。この手紙を読んでいるってことは、もう封印が解けているんだろう？ 残念ながら、僕よりも強い力を持つ奴がいたようだね。もちろん、それを知っていて書いているんだけど。』

今から教えるのは、『蘇生』の魔法だ。君が使うことがあるかもしれないと思ってね。

v b §

簡単だろう？ 君にだったらこれを読めるはずだ。

君のある物と引き換えに、他の生き物を生き返らせることができる。ある物が何かは説明しないよ。この魔法は本当に大切な存在に使ってくれ。それから』

その先を読んだルーシエルは、手紙をぐしゃぐしゃに丸めた。あの状態は、やはりルーシエルとは相容れないようだ。

この手紙をどうしようか？ そのままにしておくのは腹が立つか

ら、燃やしてしまおうか……。ノギスに離れるように言って、手紙を地面に置く。そして

「L○X！」

『炎』の呪文を唱えた。――はずなのに。

何もでない。

本来なら、この魔法で手紙が燃えるはずだ。ルーシエルは嫌な予感がしながら、また呪文を唱える。

「L○X！ L○X！ L○X！ L○X！ L○……何で魔法が使えないの！？」

他の呪文も試してみる。『水』『風』『樹』『雷』――どれも簡単な魔法だ。カリマにもらった本に書いてあったくらい。魔女ではなくとも、何年かかければ人間でも使える。どの人間にも魔力は少しあるから、魔法を使えるのが魔女とはいえないのだ。

そんな人間にも使えるような魔法が、魔女の自分に使えないわけがない。

ノギスは炎がでないことがわかったからか、ぐしゃぐしゃになった手紙を伸ばして続きを読んでいる。

「……あ。おい、ここ読んでみろ」
「ふえ？」

半泣きの状態のルーシエルに、手紙を口にくわえて持ってくる。
しわだらけの手紙を読むと、最後にこう書かれていた。

『追伸 僕が封印したせいで、魔法が使えなくなったらごめんね』
「……うん。これは見なかったことにしよう」

何となくそうしたくなり、手紙を今度は綺麗に折りたたむ。そして封筒に入れなおし、元の場所に戻した。

「ルーちゃん！ 白猫くん！」

そこへ元気なセリアがやってきた。ルーシエルとノギスは同時に黙り込む。

（……ふう、セリアは元気いいよな）

ルーシエルは今、とてもそんな元気はでなかった。
何を感じたのかセリアはうろたえ始める。

「え、え？ 私って来ちゃ駄目だった……の？」

「ううん、僕は来てくれて嬉しいよ。嬉しいんだけど、ねえ……」

顔を見合わせた二人（？）にセリアはあわあわと口を動かした。

「ま、まだ怒ってるのね？ そうなのね？ そうなんだ……」

「何で自分で訊いて自分で答えてるのさ。君なら心が読めるはずでしょ？」

その言葉ではつと気付いたセリアが落ち着き、昨日言いかけた話を切り出すのまでそうはかからなかった。

第二話 使えない魔法（後書き）

またあまり進んでいませんね……。

多分火・木・金曜日は更新できません。

すみません！ 投稿した後タイトル間違えてたのに気がつきませんでした。

第三話 友達（前書き）

一日あいた上、短いです……。

第三話 友達

「友達になろう？ ルーちゃん」

セリアは不安げにそう言った。その言葉をルーシエルは頭の中で反芻する。

トモダチニナロウ

しばらくした後、ようやく意味を理解した。
友達になろう。

彼女はそう言ったのだ。だが、意味を理解してもなぜセリアがそんなことを言い出したのかわからない。

ルーシエルは魔女。そして、セリアは人間だ。少し変わった能力があっても人間なのだ。

魔女と親しくした者は殺される。それが千年前は当たり前のことだった。

（もしかして、今はもう魔女は恐れられていないのかな？）

「ううん。残念ながら今でも、魔女は異端の存在よ。友達になったりしたら、村の人たちに殺されるのはわかってる。たとえ私も……それでも、私はルーちゃんと友達になりたいの。嫌、かな？」

嫌ではない。だがセリアのためにも、これは断らなければならないだろう。セリアが自分のせいで殺されるのは嫌だ。それに彼女の立場というのはわからないが、彼女が死んだら、村人が困るのではないだろうか？ なぜだかそんな気がする。

この近くだったらアスメリ村か、ネオプレン村か……。もしくはこの千年の間にできた村か。どの村であっても、ルーシエルが村人が困るなんて考える必要はない。だがやはり、困らせたくないのだ。それがルーシエルのいいところでもあり、悪いところでもあると自分でも思っている。

「私が住んでいるのはアスメリ村よ。きっと千年前よりずっと大きくなってるけどね。今じゃ小さな町よりずっと大きいもの。私はアスメリ村の外れに住んでるの。そのおかげで、私はこうしてルーちゃんに会いにこれるんだけど。」

……ねえルーちゃん。ルーちゃんは何でそんなに、優しいんだろうね？ 私がルーちゃんだったら、人間を恨んで、そんな心配しない。むしろ、困らせてやれって思うわ。ルーちゃんが薬を渡した人たちも皆、ルーちゃんのことを優しいって言ってたね」

なぜそれを知っているのか、と考え、すぐに彼女的能力を思い出す。確かにセリアの前で、あの人間たちのことを考えた。その人間たちが皆、自分のことを『優しい』と言ったことも。

それを言われるたびに、ルーシエルは苦しくなった。優しくなんてないのだ。ただ、殺してしまったあの人間に対しての償い。誰かに優しくしたら、きつと許してくれるんじゃないか。そう考えて。

そんなことは有り得ないとわかっていても、そう考えてしまう。結局は、自分のためなのだ。罪から逃れたいだけ。

「……私はルーちゃんと友達になりたい。ルーちゃんといると、私は安心できるの。自分のためなのは、私も同じよ。それでも駄目なの？」

「君とは友達になれない。昨日は言い忘れたけど、もうここへ来てもいけない。……セリア、もう帰ってくれないか？」

きっぱりと断ったルーシエルを、セリアはじっと見つめる。どうしても考えを変えないのがわかったのか、泣きそうな顔をして洞窟をの外へ走っていった。

ノギスが呆れたように言う。

「いいのかよ。お前もあいつと、友達になりたいんじゃないんじやなかったのか？」

「ノギス、僕は一言もそんなこと言ってないよ？ ……まあ、友達になりたかったのは確かだけど」

彼が胡乱気に見てきて、つい本音を漏らしてしまう。

魔女の友達なら一人いる。だが、生きているのかわからない。魔女の寿命は短くて百年、長くて一万年くらいだ。魔女は十六歳の頃に体の成長が止まる。ルーシエルも封印されていた時期を除き、二百年以上生きているが姿は十六歳のままだ。あの魔女だって十六歳くらいの姿だったが、実年齢はルーシエルと同じくらいだった。もう死んでいてもおかしくはない。

他に友達と呼べるのは、ノギスくらいだ。ノギスはおそらく、ルーシエルのことを友達ではなく主と見ているだろうが。

封印される前だったら、ルーシエルの噂を聞いて来る人間がいた。だがルーシエルが封印されたことは、あの変態が人間に知らせたはずだから、もう人間は来ないだろう。

もし魔女の友達——ノエルが死んでいたら、話し相手がノギスだけになってしまう。セリアはルーシエルの心を読んだのだし、きっともう来てくれない。

（寂しいけど……仕方、ないか。ノエルが死んでなければいいな）

あの騒がしい友達が聞いたら、もっと騒がしくなるだろうことを考え、ルーシエルはため息をついた。そしてふと、彼女に関する嫌なことを思い出す。

(……人間嫌いって、そう直らないよな)

ノエルは大がつくほど人間が嫌いだ。過去に何があったのかは知らないが、とにかく目に入った人間を殺してしまうほど。ルーシエルがやめてほしいと言ったから、相手が何かノエルにしなければ平気だと思うが……。

ノエルとは、仲が良かった。ノエルはルーシエルが人間に封印されたのを知っているのだろうか？ ノギスは無事だったのだから、彼の口から聞いているかもしれない。

ルーシエルは蒼白になった。あのノエルが、このことを知ったら人間を滅ぼしかねない。人間がまだ生きているということは、まだ彼女は知らないのだろうか。

「ノギス。……聞くのが怖いけど、ノエルに僕が封印されたこと話した？」

おそろおそろ尋ねると、ノギスはうなずいた。

「話したぞ。聞いた途端、お前が封印されていた壺を破壊しようとして大変だった。俺が止めなければ、お前はあいつに殺されてたぞ。感謝しろ」

なぜだか偉そうに踏ん返るノギス。

「……話したんだ。で、ノエル、何か言ってなかった？」

「『封印が解けたら、あたしにわかるよう魔法かけといたわ』とか

言ってたな」

「気持ち悪いよ」

意外にノギスの物真似は上手かった。だから余計に気持ち悪く感じる。

ノギスは感謝されなかったからか、気持ち悪いと言われたからか、ぷいっとそっぽを向く。また怒らせてしまったかとあわてたが、しっぽを振っていないから怒っていないのだろう。

(……僕の封印が解けたことを知ってるんだよね？　なのに何で、ノエルはここに来ないのかな？)

ノエルだったら、封印が解けた途端『移動』の魔法を使うと思う。まあ、もし来ていたらセリアは殺されていたかもしれないが。いや、かもではなく絶対に。

とりあえず、深く考えないでおこう。ノエルが来なかったおかげで、セリアは殺されなかったのだから。

ノギスのしっぽがパタパタし始めた。

第三話 友達（後書き）

タイトルが友達なのに、ルーシエルはセリアと友達になれませんでした。……タイトルつけるのが苦手です。

第四話 巫女（前書き）

今回は全部セリア視点です。

第四話 巫女

窓から差し込む月明かりが、妙に明るく感じる。寝台に入ってから、どれくらい経ったのだろうか。

セリアは今日何回目になるかわからない寝返りを打った。

（ルーちゃんの気持ちはわかる……。けど）

ぎゅっと目をつぶって思い出すのは、ルーシエルの寂しそうな顔。あの子は自分では気付いていないのかもしれないな、とセリアは思う。

（けど、納得できないわ）

ルーシエルだって、セリアと友達になりたいと考えていたのに。自分の意思に逆らってまで、セリアを望みを拒絶するのには腹が立った。ルーシエルが嫌なのであれば、納得できる。そうではないのに、どうしても断る必要があったのか。

確かに、彼女の気持ちはわかる。ルーシエルと友達になれば、たとえ『巫女』である自分だって殺されてしまうのだ。自分のせいで人が死ぬのは誰だって嫌だろう。セリアだって、もし自分のせいでルーシエルや村の人間が死んでしまうのは嫌だ。

（……どうせ、瞳がこの色でなければ私はきっと殺されていたもの。ルーちゃんの友達になって死ぬのなら、私は別に構わない）

セリアの瞳は、海に似た色をしている。角度によって色味の違う青、緑や紫に見えることもある。実際に海を見たことはないが、こんな色をしていたらとても綺麗なのだろう。自画自賛になってしま

うが、セリアも自分の瞳は綺麗な色をしていると思う。

だが、綺麗だと思うのと好きかどうかは別の話だ。海色の瞳は巫女の証。セリアは巫女になんてなりたくなかった。だからこの瞳が嫌いなのだ。龍神さまに会えたことは、自分にとっての数少ない幸運だと思っているが……。

自分のことを恐れている者は、無理にでも愛想をよくしようとする。セリアに愛想を良くするのが嫌だから、皆セリアとなるべく会わないようにしているのだ。孤独を味合わされるのなら、セリアが生き物の心を読めるとわかった時に、殺してほしかった。

独りぼっち。

セリアにはルーシエルの気持ちが痛いほどわかった。だがセリアの方が、まだましなのかもしれない。滅多に会わないとはいえ、セリアの周りには龍神さまが、人間が、家族がいる。

（あの人たちを家族とは思っていないけどね）

思わず目を開けて、自嘲するように笑ってしまう。お父さん、お母さんとは一度も呼んだことがない。いつも名前にさんを付けて呼んでいる。

もっとも、セリアはここ数年両親の姿を見ていないが。

（村長さんの所にでも、厄介になっているのかも）

心が読める、と知った途端の両親の顔は忘れられない。恐怖で染まったあの顔。

その時から、セリアはこの家で暮らすようになった。一人で住むのには広すぎる家にいると、たまにふと寂しくなる。その寂しさも龍神さまと話すことで紛れていたのだが。

（龍神さま……なぜ、私の声に答えてくれないのですか？）

一昨日――ルーシエルの封印を解いたあの日から、龍神さまの声が聞こえない。いや、一年ほど前から口数が少なくなってきていた気もする。それにもう、鎮月ちんげつに入ったのに、雨は一滴も降っていない。龍神さまの身に何かあったのではないか、とセリアは心配だった。村のたくわえも、もうすぐ尽きる。

（ルーちゃんの封印と、何か関係あるの……？）

ルーシエルの封印を解いた日に、龍神さまの声が聞こえなくなるのはおかしい。何の関係もないのかもしれないが、その二つを結びつけずにはいられなかった。といっても、そのことに気付いたのはつい先ほどだが。

ふと窓の外を見ると、東の空が少しだけ明るくなってきたところだった。

（もうすぐ夜が明けそう）

祈りの時間だ。寝台から起き上がり、靴を履いて外へ出る。最初の頃はきちんとした服に着替えていたが、龍神さまは気にしないとおっしゃってくれた。

供の者はいない。心が聞こえると、龍神さまの声を聞くのが難しいから。もちろん、読まないようにするのも可能だ。だがそれは、集中しなければできない。龍神さまの声を聞くのだって集中しなければならぬから、供のものは連れていけない方がいいと判断した

のだ。

龍神さまへの祈りは滝で行う。水の多い所、勢いの激しい所の近くで龍神さまの声はよく聞こえる。少量の水があれば大丈夫なのだが、それだと声が聞こえづらい。

（今日は……）

答えてくれるだろうか。不安を抱え、セリアは急ぎ足で滝へ向かった。

＊ ＊ ＊

（龍神さま……龍神さま……声を聞かせてください）

必死に話しかけるも、一向に声は聞こえない。セリアはため息をつき、立ち上がった。正座をしていたが、慣れているから足はしびれない。

一時間近く話しかけても、龍神さまは何もおっしゃらなかったのだ。これ以上話しかけたって無意味だろう。

その時だった。

「わ…みこ……」

かすかな声が聞こえた気がした。

「龍神さま!？」

水に駆け寄って、耳を澄ます。だが、それ以上は何も聞こえない。我が巫女、と言われた気がしたのは気のせいだったのだろうか。

龍神さまは、セリアのことを『我が巫女』と呼ぶ。龍神さまの艶やかな声でそう呼ばれるのは、なぜだか心地良かった。

(……ここは滝なのに、なぜこんなにも声が聞きづらいの？ やっぱり、龍神さまの身に何か……)

そのままじっと、そこへ座ったままにいる。そこへ座っていたら、また龍神さまの声が聞こえるのではないかと思って。朝日が昇り、太陽が真上に来ても——夜になり、空に白銀の月が輝き始めても。

龍神さまの声は、聞こえなかった。

第四話 巫女（後書き）

時間があつたので短いですが投稿です。明日もきつと投稿できます。

鎮月は四月の別称だと思うのですが……もし間違っていたら教えてください。

ちなみに、この世界は現実と同じように一月から十二月が一年です。数字だと何だかつまらないな、と思い鎮月にしました。

第五話 使い魔（前書き）

……また短いです。

第五話 使い魔

セリアは今日、ここへ来なかった。

当たり前だと考えながら、ルーシエルは洞窟の外へ出て空に浮かぶ月をぼんやりと見つめた。ぼんやりと光る月は美しくて、見ていると心が落ち着いた。

(……別にセリアが来ないからって、寂しいわけじゃない)

もしかしたら、今日は用事があったて来られなかっただけかもしれない。そんな淡い期待を、ルーシエルは首を振って否定する。

(やっぱり僕って自分勝手だな)

ここへ来るな、と彼女に言っておきながら、本当に来ないと寂しくなるなんて。

先ほどは寂しくないと自分を誤魔化したけど、やはり寂しい。セリアと過ごした時間は短かったけど、それでも楽しかったから。

冷たい風が吹いて、ルーシエルはぶるりと体を震わせた。以前だったら魔法を使って暑さ寒さを感じなくさせていたけど、今はそれができないのだ。慣れなくてはいけないと思っただけでも、体が震えてしまうのは仕方がない。

震えたルーシエルを見て、ノギスが洞窟から出てくる。

「ルーシエル、もう寝たらどうだ。いくら待っていたって、あいつは来ないと思うぞ?」

「わかってる、そんなこと……」

ノギスの声に力なく答える。そして、洞窟に置いてある寝台に潜り込んだ。この洞窟へ来たとき、『創造』の魔法で創り出した物だ。洞窟の中を見回すと、小さな机と椅子、棚が見える。全てルーシエルが創った物。『創造』の魔法で創ることができるのは、生きていない物に限られていた。そのため、人間や動物は創れないのだ。ノギスがいつもの場所で丸くなったのを確認して、目を閉じる。

(……創れたら、友達になってもらうのに)

そんなことを考えながら、ルーシエルは眠りについた。

＊ ＊ ＊

寝息を立て始めたルーシエルを、起こさないようそうと外へ出る。こんな時、自分の色が黒だったら良かったのに、いつも思う。白猫だと目立ってしまったって、誰かに見つからないか周囲に気を配らなければならないのだ。

もつとも、白猫でなかったらルーシエルに出会っていなかったが。

(あいつはもう、ここへ来ないつもりなのか?)

巫女と名乗ったあの少女は、ルーシエルに必要な存在だ。あの少女がもうここに来ないとなると、毎日ルーシエルの寂しそうな顔を見なければならぬ。それは我慢できなかった。

一度も口に出したことはないが、ルーシエルには感謝している。捨てられたノギスを、彼女は拾ってくれたから。しかも契約をし、使い魔にもしてくれた。

ノギスは元々、使い魔の一族に生まれた。

だが、魔女の使い魔は黒くなくてはならない。なぜかは知らない

が、そういう決まりだそうだ。白猫だったノギスは捨てられた。その自分を拾ってくれたのがルーシエルだ。

(……ルーシエルの寂しそうな顔は、あまり見たくない)

だから今、あの少女に話しに行くのだ。アスメリ村の場所なら知っている。大きくなったと言っていたが、今夜いっぱい探せば見つけ出せるだろう。

それからしばらく歩くと、滝の音が聞こえてきた。耳のいい自分にとって、この音は大きすぎる。早く滝から遠ざかろうと走り出したノギスは、ふと足を止めた。

ルーシエルの封印を解いてくれ、と頼んだ自分に、あの少女は「巫女だから」と断った。巫女とは何だ、と問いかけたノギスに、彼女の言った言葉は。

『巫女って言うのはね、龍神さまの声を聞ける人間のことなの。夜が明ける頃、この近くの滝で祈るのが巫女の仕事。……それができるのは巫女だけだから、私は大切にされているんだけど』

滝で祈る。

夜が明けるのはまだまだ先だが……。

(行ってみるか)

ノギスは、音のする方へ駆け出した。

＊ ＊ ＊

鼓膜こまくが破れてしまいそうな轟音に、ノギスは顔をしかめた。あの少女は水の近くに、呆然としたように座っている。よくもあんな滝の近くにいて、平気でいれるものだ。

「おい」

滝のせいで声が聞こえなかったのか、少女は何の反応もしない。もう一度大声で呼ぶと、のろのろとこちらを向いた。

「……白猫君？ どうして」

「白猫君ではなくノギスだ。……お前に頼みがあつてな」

「封印を解くよう頼みに来た時と、同じ言葉ね」

小さく微笑む少女は、今にも倒れてしまいそうだった。よろよろと近づいてくるのを見て少し心配になったが、そのことに気付いていないふりをして、少女に話しかける。気付いていないふりをして、目の前の少女には筒抜けだろうが。

「ルーシエルと、友人になってほしい。あいつが断ったとしても。

……頼む」

「あら、もちろんよ。頼まれなかったって私はそうする」

あっさりとした言葉に、耳を疑う。

昨日ルーシエルに断られたせいで、今日会いに来なかったと思ったのは、間違いだったのだろうか。

じゃあなぜ来なかったのか、と言おうとすると、先に答えられてしまう。

「龍神さまの声が聞きたかったから……?」

自分でもよくわかっていないのか、最期に疑問符がついていた。

「……その龍神とやらは、お前にとっての大事な存在なんだな。いつからここにいるか知らんが、その様子を見るとずっと前からここにいるんだろ? ただ声を聞くだけのためにそこまでするのは、龍神が大事な存在だからだろう」

「ええ、厚かましいかもしれないけど……私は龍神さまを母のように思ってる。あ、それから龍神じゃなくて、龍神さまね? 白猫君」

ノギスのことを白猫君と呼んだのは、絶対にわざとだ。龍神さまと呼ばなかったことを、余程怒っているのだろうか? 笑顔なのに、目だけが笑わずにこちらを見ている。

「……」

「……」

「とにかく頼んだぞ」

沈黙に耐えられなくなり、ノギスはそれだけ告げてその場を去ろうとした。だが呼び止められる。

「白猫君。名前で呼んでほしいのなら、私のこともセリア、って呼んでほしいな」

冗談じゃない。口に出さずともこの少女には伝わるから、何も言わずに歩き出す。

ノギスが名前で呼ぶのはただ一人。

ルーシエルだけだ。

第六話 友人（前書き）

短いです。……どうやら私、長く話を書けないようです。
もう長くするのは諦めます。

第六話 友人

ルーシエルが目を覚ますと、近くでノギスが眠っていた。いつもなら自分より早く起きているはずなのに、と不思議に思いながら大きな欠伸をする。

その時に出た小さな声が聞こえたのか、ノギスが身動みじろぎをした。

「……ん」

「あ、起こしちゃった？ 眠いなら寝ててもいいよ」

「いや、いい」

そう言っ、て、ノギスはむっくりと起き上がった。目が半分以上閉じている。なぜこんなに眠そうなのだろう。

ノギスが昨日の夜出かけていたことを知らないルーシエルは、首をかしげて彼を見た。

「具合悪いの？ 薬を作ろうと思っても、魔法使えないしな……」

薬を作るには『調合』の魔法を使う必要がある。しかも材料を集めるのにだって魔法を使うのだから、どうしたってルーシエルには薬が作れない。

魔法が使えない魔女は、寿命が長いだけの人間だ。

そのことを改めて感じて、ルーシエルは少し落ち込む。

髪の毛が黒くて、瞳も黒い。魔法が使えないのにそれは変わらず、それだけで人間から恐れられる。今の自分は非力だ。もし人間たち

に襲われたら、太刀打ちできない。

それは、大切なものを守れないということ。

魔法が使えないのなら、自分は生きている意味がないように思う。契約のせいで、自分が死ぬとノギスまで死ぬようになっていいるから、わざと死んだりはしないが――

「魔法が使えないのが何だ。ルーシエルはルーシエル、それは変わらん。俺は守られるだけなんてごめんだ。これで少しは、お前の役に立てる」

「……ノギス、この千年の間に心が読めるようになってないよね？」

つい疑ってしまうと、睨まれる。

「あいつじゃあるまいし、俺にそんなことできるわけないだろう」

「……セリア、もう来ないのかな」

つい漏らしたルーシエルの言葉に、ノギスはしまった、という顔をした。彼は彼なりに、きっとルーシエルのことを心配してくれている。だから、そんな顔をしなくともいいのに。

「別に気を遣わないでいいんだよ。僕はノギスが心配してくれてるだけで嬉しいし」

「な！ 誰がお前の心配なんかっ！」

「あははっ」

必死に否定するノギスがおかしくて、思わず笑ってしまう。

ルーシエルの笑顔を見たノギスが、なぜだか安心したようにため息をついた。

「？」

「いや、何でもない。……きっとあいつは来るぞ」

彼がそう言った途端、誰かが洞窟に飛び込んできた。

「ルーちゃん！ 昨日は来れなくてごめんね！」

そう言いながら。

ルーちゃん、と自分のことを呼ぶのはセリアだけだとわかってるのに、彼女のことを凝視してしまう。海と同じ色のこの瞳は、まさしく彼女だ。瞳に氣をとられて髪の毛をそこまで見ていなかったが、銀色の髪も美しい。思い出せば確かにセリアは銀髪だったから、目の前にいる彼女が本物だとわかる。

なぜセリアは謝ったのだろうか。来れなくて、ということは、本当は来るつもりだったのだろうか。だったらなぜ来なかったのだろうか。

ぐるぐると頭の中を考えがめぐって、ルーシエルは何が何だかわからなくなった。

「ちょっと昨日は用事があった……。ごめんなさい」

「え！？ な、何で謝るの？ セリアは何も悪いことしてないよね？」

「今日はルーちゃんと、友人になりに来たの」

さらっとルーシエルの質問を流したセリアの言葉に、首を傾げる。一昨日友達になるのを断ったはずだ。友人も友達も意味は同じだと思うのだが。もしかして、言葉が違うのならいいとか、そういうことだろうか。

「ええ。『友達』になるのは断られたけど、『友人』になるのは断

られてないわ。……白猫君にも、昨日の夜ルーちゃんと『友人』になってほしいと頼まれたから」

「余計なことを言うな！」

だから、ノギスは眠そうだったのか。納得してノギスを見つめると、彼は怒ったように顔を背ける。これはノギスの照れ隠しだ。

「……ノギス。君は僕とセリアが友人になってほしいんだね？」

答えは返ってこなかったが、それを肯定の意味だと受け取る。ルーシエルはため息をついて、それでも笑顔でセリアに言った。

「しょうがない。ノギスの頼みなら断るわけにはいかないよ。僕は『友達』になるのは断ったけど、『友人』になるのはまだ断っていない。……よろしくね、セリア」

握手をするため手を差し出すと、セリアはその手を無視して抱きついてきた。

「ルーちゃん大好き！」

「へ……。セ、セリア、照れるからやめて」

顔を真っ赤にしてつぶやくと、もっと強く抱きしめられる。セリアの力はそれほど強くないから、逃れることはできるが……。

セリアの嬉しそうな顔を見て、このままでもいいかと思った。彼女の笑顔は本当に嬉しそうで、ルーシエルも思わず笑みを浮かべてしまう。

何だかノギスがしっぱをパタパタ振り始めた。なぜ怒っているかわからなくて、ルーシエルは抱きしめながら首をかしげる。彼が怒

るようなことを、した覚えはないのだが。今したことの中に、何かあったのだろうか。

ルーシエルが考えれば考えるほど、ノギスのしっぽの動きは大きくなっていった。

＊ ＊ ＊

気に入らない。

ルーシエルが笑っているのも、首をかしげているのも。

自分には、滅多に笑いかけてくれることなどないのに。ノギスがなぜ怒っているのか、ルーシエルがわかっていないのも腹が立つ。長い間一緒にいるのに、彼女はノギスの気持ちかわかっていない。

（……まあ、いいか。こんなに嬉しそうなルーシエルは初めてだしな）

今まで彼女の笑顔は数えるほどしか見たことがない。それなのにここ数日笑顔が増えたのは、少女のおかげだろう。

あの魔女と友達になった時は、ここまで嬉しそうにはしていなかった。やはり、この少女が人間だからなのだろうか。

（まったく、自分で頼んで嫉妬するってのはどうなんだ？）

少女に頼んだのはノギスだ。それでもやはり――

大切な主に、ノギスは笑いかけてほしかった。

第六話 友人（後書き）

ノギスは、ルーシエルに対して恋愛感情を抱いていません。大好きではありますけどね。

第七話 黒い狼（前書き）

昨日は投稿できずすみませんでした。

今日も投稿できなさそうだったのですが、流石に二日連続はちよつと……。

いつもよりさらに短いです。

第七話 黒い狼

今日からは遅くなくても平気だということで、ルーシエルとセリアは椅子に座って話していた。たまにだが、昔はノエルが来ることもあったのでこの洞窟には椅子が二つある。

「千年の間に起こったこと？」

その言葉に、ルーシエルはまじめな顔でうなずいた。千年の間、何が起きたのか。それを自分は知らない。だからセリアに尋ねようと思ったのだ。やはり世の中のことを知らないのは、色々とまずいだろう。

セリアは唇に手を当て、考え始めた。

「えっと……。特に大きな出来事はなかったけど、変なことはあったらしいわ。ルーちゃんは『キカイ』って知ってる？」

「ううん。それって何なの？」

「……わからない。だってそれを発明しようとする、黒い狼が壊しにくるんだもの。キカイを作るために必要な物も、壊されてしまっ……。だからこの世界の文明は、ルーちゃんが封印された頃と、そう変わってないかも」

黒い狼。

心当たりがある。というか、あれ以外は有り得ないだろう。

（い、いや、でもまさか……）

あの子がそういうことをするとは思えない。こんな小さな嫌がらせのようなことはせず、堂々と人間を絶滅させるはずだ。だってノ

エルだから。

黒い狼の心当たりとは、ノエルの使い魔のことだった。彼女の使い魔は『アベル』といって、とても強くてノエルに従順な狼だった。野生の狼が、キカイという物をわざわざ壊しに行くとは思えないから、黒い狼とは十中八九アベルのことだろう。

問題は、なぜノエルがそんなことをしたかだ。

いや、おそらくルーシエルが封印されたからであると思うが……。何のために、キカイを壊したりするのだろうか？

「その魔女って、どんな子なの？」

セリアは首をかしげる。言葉で説明するのは難しいから、心の中で思い浮かべる。

とにかく明るく、元気な魔女だった。ルーシエルと話している時、彼女の黒い瞳はキラキラと輝いていて。とても綺麗だった。

その反面、人間に対しては残酷。ノエルの愛らしい顔が、スウツと無表情になるのは恐ろしかった。ためらいもなく、人間を殺す彼女が恐ろしかった。

あのノエルなら……。

こんなことはしないとと思う。やるのならもっと悲惨なこと。

「そっか、ルーちゃんはノエちゃんのこと、大切に思ってるんだね」

ふふっと笑ったセリアに驚く。今思ったことのどこに、ルーシエルがノエルのことを大切に思っているなんてことが入っていたのだろう。こんなことはしないで、もっと悲惨なことをやるだろうと思っただけなのに。

「あれ？ 僕そんなこと考えてないよね。……ってノエちゃん？
セリア、君ノエルに殺されるよ？ 他の人の名前を短くするのは、
セリアの癖なの？」

ルーシエルのことはルーちゃん、ノエルのことはノエちゃん。ノ
ギスのことは白猫君と呼んでいるが。

短くするというのは間違えかも知れない。白猫君という呼び名は、
ノギスというよりも文字数が多い。ルーシエルとノエルの呼び名だ
って、ちゃんを付けてしまえば短くする意味はないだろう。

こてんとセリアが首をかしげた。

「癖というか、何だか短くした方が仲良くなれる気がして。白猫君
は何となく白猫君と呼んでいるけど」

「何となく！？ そんな理由でだったのか！？」

ノギスが目を見開いて叫ぶ。確かに、何となくで白猫君と呼ばれ
たら怒るかもしれない。だが、猫のノギスが怒ってもそこまで怖く
なかった。セリアもそう思っているのか、ノギスのことを微笑まし
げに見つめている。

そんな顔をしたら、ノギスはもっと怒ると思うのだが。彼がつむ
じを曲げて困るのはルーシエルだ。ノギスは怒るとなかなか機嫌を
直さないのだから。しばらく話してくれなくなるのだ。

「昨日の夜言ったでしょ？ 私のことを名前で呼んでくれたら、白
猫君のことだって名前で呼ぶわ」

「……それだけは嫌だ」

「ふーん、やっぱりそうなんだ。……これが恋愛感情だったら面白
かったのになあ」

セリアがぼそっとつぶやいた言葉は、ルーシエルの耳には聞こえ

なかった。セリアはにやにやしながら残念そうな顔をするという、何だか変な顔をしている。

詳しいことは訊かないほうがよさそうだとルーシエルは洞窟の外に目を向けた。

「……あ、セリア。もう日が沈んできたよ。そろそろ帰ったほうがいいんじゃないかな」

「はあ、残念だけどそうするね」

椅子から立ち上がり、そう言う。

「じゃあ、また明日」

「う、うん」

セリアの言葉に照れながらうなづく。こういうことはノエルもしていたが、未だに慣れない。セリアと本当に友人になったのだな、と思うと嬉しくなった。

洞窟を出て行った彼女を見送り、視線をノギスに向けると不機嫌そうだった。先ほどの会話が原因なのだろうか。

「気に入らない」

「え、セリアのこと？ 悪いけど、我慢してくれないかな」

「そっちじゃない」

ならどっちなのだ。

ノギスがなぜ不機嫌なのかわからなかった。

＊ ＊ ＊

この時、セリアと話した話の内容をルーシエルは忘れていた。

もっと深く考えていたら、
のちに後悔するとは知らずに。

第七話 黒い狼（後書き）

黒い狼は会話にしか登場していませんね……。。

第八話 親と子（前書き）

今回の話は暗いかもしれません。
タイトル難しい……。

最初に少し、あの子が登場。その代わり、ルーシエルとノギスは登場していません。

第八話 親と子

「アデライードさま、私早くルーシエルに会いたいです」

ぷくつと頬をふくらませながら言う少女。それを見て、そばにいた女性は苦笑した。もう千年以上生きているのに、なぜこんなにもこの子は子供っぽいのだろうか。

そう思った途端、少女は口の中に溜めていた空気を吐き出す。

「……今、失礼なこと考えましたか？ 考えましたよね？」

「ははっ、すまない。頬を膨らませる君が可愛くてな。まあ、それは今置いておこう」

つい笑うと睨まれてしまった。以前はこんなことをしない子だったから、それだけ打ち解けたのかと思うと嬉しい。会った頃はもっと刺々しい雰囲気の子だった。……今も、人間に対しては非情なのだが。

自分のしよとしてに罪悪感を感じながらも、女性は少女に笑いかけた。

「君はまだ、ルーシエルに会わないでくれ。あれをもっと弱らせてからだ。人間たちもあれがいないと困るだろう。君の復讐はそれで達成される。皆殺しにするより、こうやってじわじわと苦しめたほうがいいんだよ。わかってくれるな」

不満そうな顔で少女はうなずく。女性は愛しそうにそれを見つめ、彼女の頭をなでた。気持ちよさそうに目を細める彼女に言う。

「良い子だな。……ノエル」

＊ ＊ ＊

セリアが家に着くと、なぜかそこには両親の姿があった。久しぶりにみる両親は、ギラギラと目を輝かせてセリアのことを見てきた。まさか、ルーシエルに会っていることがばれたのだろうか。それとも、雨が降らないことに対して、何か話があるのだろうか。……心を読む限り、後者のようだ。

口に出さず、心の中だけで座れと言う父に従い、素直に椅子に座る。

「……どんな話をしにきたのか、お前ならわかっているだろう？」

「はい」

「相変わらず気味が悪い奴だ。なぜお前のような奴が生まれ、『巫女』になったのか……。今はどこに行っていた」

汚い物でも見るような目。隣を見ると、母も同じような目でセリアを見ていた。

ルーシエルは一度もしなかった目だった。しばらくルーシエル以外には会っていなかったから、忘れていた。思わずびくっと身をすくめる。

どうやって説明しよう？ どこに行っていたか正直に話したら、ルーシエルの封印が解けたことが知られてしまう。洞窟に魔女が封印されているのは、この辺りでは有名な話だ。かといって、セリアはルーシエルに会う前、昼間は滅多に外に出なかった。ノギスに会

った時は、何となく散歩をしていたが。両親もそのことは知っているはず。

ここは、少し散歩をしていただけだと言っておこうか。
口を開こうとすると、父がため息をついた。

「まあいい。お前、龍神さまにきちんとお祈りしているのか。雨が降っていないのは、お前が何か無礼を働いたのではないか？」

「そんなんっ！……実は龍神さまの身に何か起きたようなのです」

確信を持ってそう告げると、父は声を荒げる。

「何！？　なぜそれを早く言わないのだ！　何が起きたのか、はっきりと説明しろ！」

「私も説明はできません。ただ、龍神さまのお力が弱まっているとしか。龍神さまの声がここ最近聞こえないのです。昨夜も祈りをささげたのですが、耳を澄まさねば聞こえないような、小さな声しか聞こえませんでした」

それを聞いた途端、父は家を飛び出していった。おそらく、村長にこの話をしに行くのだ。後にはセリアと母だけが残る。

母はセリアを睨みつけた。

「せっかくその瞳の色に産んであげたのに、なぜ巫女の役目を果たせないの？　龍神さまのお声が聞こえないのも、貴女のせいじゃなくって？」

それだけ言うと、父の後を追いかけるように家を出ていった。いや、実際に追いかけるのだらう。それを、どこか遠くのここのようにセリアは見ていた。

貴女のせいじゃなくて？

頭の中で母の声が響く。

考えたこともなかった。今回のことは、龍神さまの力が弱まっているせいだと思っていた。だが、もしかしたら自分の『巫女』としての力が弱まっているのかもしれない。そんな巫女の話は聞いたことがないが、十分に有り得る話だ。心が読める巫女だって、セリアが初めてなのだ。

巫女の力が弱まるのではなく、生き物の心を読めなくなったらいいのに。龍神さまの声が聞こえなくなるのは嫌だ。先ほど会っていた本物の母より、龍神さまは母親らしかった。龍神さまも生き物の心が読めるから、セリアの気持ちもわかってくれる。

巫女になどなりたくなかった。そう考えてしまうセリアを、黙って見つめてくれて。しばらくしたら、優しくなでられるような感覚がおとずれる。それをされるといつも泣きたくなって、最初の頃は泣いてばかりいた。今では我慢できるようになっているが。

本当に、龍神さまの身に何が起きたのだろう。

そこでふと、母の言ったことを思い出した。

(……その瞳の色に産んであげた、か)

そんなこと望んでいない。そう母に言えたら、どんなに楽だろう。だが怖いのだ。両親に何か言われることが。もうセリアはあの人たちのことを、親とも思っていないのに。両親だって、セリアのことを自分の子だと思っていないのかもしれない。

だって――

両親は今まで一度も、セリアの名を呼んだことがないのだから。

第八話 親と子（後書き）

セリアの名前を付けたのは、もちろん両親です。生まれる前に決めていました。ですが、変な能力がわかってからは呼んだことがあります。最後のところを正確に言うと、セリアが物心ついた時から、ですね。

セリアに名前を教えたのは村長です。セリアのことを恐れてはいませんが、村の中ではましな方です。

第九話 元気にする力（前書き）

本日二回目の投稿！

第九話 元気にする力

セリアが来ない。

もう昼を過ぎたのに、まだセリアは来なかった。だんだんとソワソワしてくるのが、自分でもわかる。

（早く来ないかな）

今日は封印されている間にできた、国や町について訊きたい。椅子に座って洞窟の外をチラチラと見る。

もしかしたら、一昨日のように何か用事があるのだろうか。その可能性もあることに気付き、ルーシエルはうなだれる。そうだとしたら、今日はもうセリアに会えないのだ。

寂しさを紛らわすためにノギスと話でもしよう、とルーシエルはノギスの姿を探した。

「……あれ？ ノギスがいらない？」

いつの間にか、あの白猫がいなくなっていた。先ほどまで一緒にいたはずなのに。ソワソワしていたせいで、彼がいなくなったことに気付かなかったのだろうか。

ノギスがいつの間にかいなくなっているのはたまにあることだから、気にせずため息をつく。

（暇だな……。本当に、魔法が使えなかったら僕は何にもできないんだ）

以前は薬を作って暇をつぶすことができていたが、今はノギスやセリアと話す以外に何もすることがない。魔女は何も食べずとも生

きていけるから、食事もしないのだ。食べることはできるが、いつもは魔法で調理していたため、調理の仕方がわからない。いや、一つだけならわかるのだ。

(……カリマ)

彼女の料理はとてもおいしかった。頼めばどんな料理でも作ってくれた。ただし、後で勉強をしなければ怒られたが。

カリマの本を借り、字を読む練習。その本の知識を頭に覚えさせる。葉草や魔法の勉強は、カリマの本でしたのだ。その次には、計算の練習。そして夜寝る前に日記を書き、字を書く練習もした。

魔法の使い方さえ知らなかったのだから、彼女がいなければあの時死ぬのはルーシエルだっただろう。咄嗟に魔法を使ったせいで、顔も、女か男かさえ覚えていない人間。

(もう何百年も前のことなのに。未だに引きずってるなんて知られたら、ノギスに笑われちゃうかもな)

彼は捨てられたことに対し、仕方がないとすっぱりと諦めた。ノギスが仕方ないと諦めたように、ルーシエルも諦められたらどんなにいいだろうか。

なぜ使い魔は黒色でなくてはいけないのだろう、とルーシエルは思った。白猫のノギスは、ルーシエルの立派な使い魔だ。それを否定されるのは嫌だった。

カリマの本には、使い魔の一族についての説明が書かれていた。人間の言葉を解する、黒い動物たち。猫や狼の他にも、鳥や兎、猿や羊。獅子も虎もいる。要するに、どんな動物でもいるのだ。

魔女はなぜか、必ず使い魔の一族の動物に会うらしい。自分から

会いにいかなくとも、なぜか出会ってしまったのだ。それを読んだ時、自分はどんな使い魔に会うのだろう、とわくわくしたのを覚えている。そして、ノギスに出会った。

使い魔と契約するかどうかは、魔女が決める。気に入らなければ、契約をしなくていいのだ。だがあの時、目の前にいた白い子猫と契約することに、ためらいはなかった。

名前は決まっていなくて彼が言ったから、ルーシエルは『ノギス』と名付けた。適当に頭に浮かんだ名前を言うと、彼は喜んでくれた。

（あの頃はノギスも素直だった）

今ではあんな生意気になってしまったが。それでもルーシエルは、彼のことが大切だ。

「……ルーシエル？」

「ふぁー！　ノ、ノギス！？　いつからそこに！」

恥ずかしいことを考えていたせいで、顔が真っ赤になる。ここにセリアがいなくて良かった。もしセリアがいたら、ノギスに今考えていたことを話してしまうかもしれない――

「ふふっ、ルーちゃん。私はここにいるよ？」

「あ、あはははは」

乾いた笑い声が口から漏れる。

「あのね、白猫君。ルーちゃんは――」
「うわー！　それ以上は言わないで！」

慌ててセリアの口を手で塞ぐ。恥ずかしさでぎゅっと目を閉じる。しばらくしても、何の反応がないのが気になって、目を開けるとセリアが気を失いそうになっていた。そこでようやく、彼女の鼻まで塞いでいたことに気付く。

「わっ、セリア大丈夫!？」

「だ、大丈夫、夫？　か、な」

ゼーゼーと息を吸いながらの彼女の答えに、ほっと安心する。大丈夫そうにはあまり見えないが、とりあえず死にそうな状態ではない。

息が整ってきたセリアは、ルーシエルのことを恨めしげに見てきた。

「……ルーちゃんひどい」

「うう、ごめん。だけど、ノギスにそのことは言わないで」

「そんなに嫌がること？　白猫君が聞いたらよろこーご、ごめんなさい。もう言わないから、そんな怖いこと考えないで、ね？」

いつ自分が怖いことを考えたのだろう。自分でも知らない内に、セリアが真っ青になるようなことを考えていたのだろうか？　ただ少し、ほんの少しだけ、セリアの口を塞いで気を失わせてから土の中に埋めちゃおうかな……なんて考えただけなのに。

「ルーちゃん、それ死ぬからね？　一応言っておくけど」

「うん、わかってるよ？　ははっ、僕が誰かを殺そうとするわけないでしょ？」

「本気でやろうとしてた!」

笑うルーシエルに、セリアは顔を青くして言う。だが、どこかこ

の会話を楽しんでいるようにも思えた。セリアの口は、少し微笑んでいるようにも見えたから。

その様子を見ながら、ノギスが言う。

「……ルーシエル、どんなことを考えたんだ？」

「ノギスは知らなくてもいいことだよ。それよりどこ行ってたの？」

まだ何か訊きたそうだったが、ノギスはルーシエルの質問に答えてくれた。

「こいつと一緒に来たことでわからないか？ お前がソワソワしてたから呼んできてやったんだよ」

「へ……。僕がソワソワしてたの気付いてたの？ えっと……とりあえずありがと」

「ふん」

顔を背けたノギスだが、おそらくこれは照れているだけだろう。生意気になっても、照れ屋なところは変わらない。昔からお礼を言われたり褒められたりすると、必ず彼は照れるのだ。

ふとルーシエルは、セリアが立ったままのことに気が付いた。

「あ、セリア、座って話そ？」

「そうね。今日は千年の間にできた、国についてだよね」

「……セリアが来てから、そのこと考えたっけ。もしかして、しばらく前から洞窟の外にいたんじゃないの？」

彼女は「さあ」と笑いながら続ける。

「可愛かったよ？ ソワソワしてるルーちゃん」

その言葉にルーシエルが怒ったのは、言うまでもない。

＊ ＊ ＊

セリアの話を聞いた感想はこうだ。

できた国多すぎだろう、という……。

千年。その間にできた国の多さで、その長さを改めて感じる。セリアも全ての国を覚えていくわけではないから、実際はもっと多いはずだ。セリアが話してくれた国だけで、三十カ国はあるのではないだろうか。国というものはそう簡単にできるものではない。

「文明はそう変わっていないけど、国は本当にたくさんできたから。ルーちゃんがびっくりするのもわかるわ。私が覚えていない国でも、あと十カ国くらいあるかな？」

「そんなに!？」

「……この千年間、ちょっと変なの。国はたくさんできるし、『黒い狼』にキカイは壊されるし。最近の異変は、雨が降らないこと」

眉をひそめるセリアの言葉に、そういえばと思い出す。ルーシエルの封印が解けてから一度も雨が降っていない。この辺りは二日に一度は雨が降るほど、雨が多かったのに。

「え? そんなに降ってたの？」

セリアの驚いた声に、こちらが驚いてしまう。

「私が知る限り、そんなに雨が降ったことはない。……今は鎮月なんだけど、今年に入ってから一度も雨が降ったことがないの」

「それって……大丈夫なの？」

「全く大丈夫じゃないわ」

雨が降らないと、作物が育たない。そうすると、人間たちの食べる物がなくなってしまう。いや、人間たちだけではなく、動物だって食べる物がなくなる。

草食動物は植物がないから何も食べられない。草食動物が死ぬと、今度は肉食動物が何も食べられない。人間は作物も動物の肉も食べられなくなる。

「それ以上に心配なのは……龍神さまの声が聞こえないこと」

龍神さま。聞いたことのない単語に、ルーシエルは首をかしげた。

「そういえば、ルーちゃんには言ってなかったね。……私は村で『巫女』と呼ばれてる。その役目は、龍神さま……雨を降らすことのできる神さまに、祈ること。龍神さまの声を聞ける人間が巫女なのだけど……」

そこまで言って、セリアは黙り込む。

「……声が聞こえなくなったの。龍神さまの身に何かが起きたのか、私の巫女としての能力が失われたのか。それがわからない」

「なるほど、それでセリアが僕の封印を解けたのか。いくら力がある人間だって、神さまにはかなわないよね。んーと、まあよくわからないけど、龍神さまっていう神さまは強いんだし、心配しなくても平気じゃないかな」

あの変態は強かった。それでも、神にはかなわないだろう。

納得するルーシエルを見て、セリアはなんともいえない顔をした。

そして次の瞬間には笑いながら言う。

「……ルーちゃんは、何だか人を元気にする力があるみたい」
「え？」

ぱちぱちと目を瞬く。人を元気にする力？

「ううん、何でもないわ……あははっ。あっルーちゃん、私もう今日は帰るね。また明日」

詳しいことを何も言わず、セリアは洞窟から出て行く。それを見送って、先ほどの言葉の意味を考える。

（人を元気にする力……）

そんな力が自分にあるのだろうか。確かに、あの人間たちもここへ来た時は元気がなかった。それなのに、薬を飲む時には笑顔だったのだ。もしかしたら、本当にそんな力があるのかもしれない。

嬉しくなって、ルーシエルは微笑んだ。魔法が使えなくなったのが何だ。

そんな力があつたら、もう他に何もいらぬい。

第十話 魔法と術（前書き）

遅くなってすみません！

実はGWの宿題全然やってなくて……。

今回あまり進んでいないかも？

第十話 魔法と術

セリアと友人になって、もう一週間が経つ。あれから毎日会って、たくさんのお話をした。そのおかげで、千年の間に起きたことも大体わかるようになった。

ルーシエルは丸くなって寝ているように見えるノギスに声をかける。

「ねえノギス。そろそろセリアのこと名前で呼んであげたら？」

一週間以上経つのに、まだノギスはセリアのことを『お前』とか『あいつ』としか呼ばない。なぜそれほどまでに、頑なにセリアの名を呼ぶことを拒むのだろうか。

「嫌だ」

即座に目を瞑ったまま断るノギス。

(……『お前』って言うと、セリアがいつも怯えた顔すること気付いてるのかな?)

もし気付いているのならノギスはひどいと思う。なぜセリアが、あんな顔をするのかはわからない。だが、いつまでもセリアのあの顔を見るのは、耐えられないのだ。

もうすぐで、セリアの来る時間だ。それまでにノギスを説得したい。

セリアもノギスが『セリア』と呼んでくれたら、ノギスのことを名前で呼ぶと言っていた。ノギスも『白猫君』と呼ばれるのを嫌がっていたから、セリアの名を呼ぶのは彼にとってもいいことだと思

うのだが。

「だから、何で嫌なのさ。理由を言ってくれなきゃ」

彼は理由を言ってくれないのだ。ため息をついてルーシエルは言った。

「それはね、ルーちゃん！」

「わっ！ セ、セリア、君はいつもいきなり出てくるね？」

いきなり洞窟に入ってきたセリアは、キラキラと面白そうに目を輝かせている。何か面白いことでもあったのだろうか。

そんなセリアの頭を、ノギスは飛び上がってしっぽで叩く。相変わらずすごい跳躍力だ。セリアの頭はルーシエルの肩ほどまでしかないとはいえ、猫からしたら高い位置にあるのに。

「余計なことは言うな！」

「ふふっ？ どうしようかな？」

「セリア、ノギスをからかうのはやめなよ」

ノギスをからかうのが楽しいのはわかるが。そう考えてしまうと、むうっとセリアは頬を膨らませる。

「ルーちゃんだって、白猫君をからかうのが楽しいのはわかる、って考えてるじゃない」

「ルーシエル！」

「わわっ、ノギスごめん許して！」

シャー、と威嚇するような鳴き声をしたノギスに、あわてて謝る。彼は人間の言葉を話せるが、猫のように鳴くこともあるのだ。

ノギスが言うには、ルーシエルたちが「ミャー」「ニャー」と聞こえる鳴き声は、きちんと意味をもったものらしい。とても怒った時、慌てた時に、ノギスは猫語を使ってしまうのだ。彼は今、とても怒っているのかもしれない。

ルーシエルが心配になった時、セリアが笑って言う。

「大丈夫。白猫君は怒ってないから」

「良かった……セリアが言うならそうなんだね」

その言葉に安心したが、ノギスのしっぽがパタパタ動いているのを見てまた不安になる。セリアの言葉を信じないわけではないが、どう見たって今のノギスは怒って見えるのだ。

「白猫君、ルーちゃんをからかうのは駄目。本気にしちゃうから」

「……それはわかっている」

「え、え？」

ルーシエルはノギスにからかわれていたのだろうか。

「うんうん、ルーちゃんはからかわれても気付かないよね」

「それが面白いんだ」

ノギスをからかうのが面白い、とルーシエルも考えてしまったから何も言えないが……。

彼女たちの会話にだんだんと腹が立ってきた。

（ふーんだっ。しばらくはセリアともノギスとも口利いてあげない！）

「え！？ ル、ルーちゃん謝るから！ だから許して！ 白猫君、謝らないとルーちゃんが口利いてくれなくなっちゃうよ！」

セリアの扱い方がわかってきた気がする。もちろん、二人と口を利かないというのは本気だが。それでもこれで、もしノギスが謝るのなら、許そうとは思っている。

「悪かった」

「まあ、ノギスがそう簡単に謝るわけな——って『悪かった』!？」

こんな簡単にノギスが謝るはずがない。すんなりと彼が謝ったことに、ルーシエルは驚く。今までノギスと喧嘩して、向こうから謝ってきたことがあっただろうか。いや、ない。

いつもルーシエルが折れて、彼に謝っていたのだ。これはおそろく、またルーシエルのことをからかっているのだろう。

「白猫君は、ルーちゃんのことをからかってないわ。……何で白猫君が素直に謝ったか、理由は言えないけど。怖いくらい、心で『言うな』としか言っていない」

この千年の間に、何か心の変化でもあったのだろうか。そういえば、言葉遣いも心成しか変わった気もする。

「うーん、まあいいか。ノギスは話す必要のないことは話さないしね」

「話す必要……あ」

ノギスが口を小さく開け、固まった。しばらく経っても動かないので、セリアと二人でノギスの顔の前で手を振る。それではつとしたのか、今度は急に洞窟の外へ飛び出していった。

「ノギス? どこ行くの……って聞こえてないよな、あれは」

何か思い出したようだった。それは話す必要のあることだったのだろう。なぜ洞窟の外へ飛び出すのかは、わからないが。

その疑問に、ノギスの心を読んだのかセリアが答える。

「えっと、壺かな？　小さい壺を男の人に渡されて、土の中に埋めたのを思い出してた。男の人は、ルーちゃんがいつも『変態』って心で呼んでいる人だと思う」

「あの変態に渡された壺！？」

そんな大事なことを、なぜ彼は今まで忘れていたのだ。

「埋めた後、術をかけられたらしいわ。どういう術かまではわからないけど、記憶を操るものじゃないかな？」

「術……」

ルーシエルを封印したのも、その『術』というものだった。魔法とは似て非なるもの。

術は、魔法でできないことも、普通にできる。あの変態は、魔法は術をもとにして作られたものだと言っていた。だがその性質は全く違うとも。

『魔法』は人を傷つけるもの。

『術』は人を守るもの。

例えば魔法の『炎』。威力を抑えることができなければ、山一つを燃やしてしまうほど。

術の『炎』。その小さな炎は、辺りを明るくしたり、生き物に希

望を与えることができるらしい。

ルーシエルが普段使うのは、『調合』の魔法や『創造』の魔法だった。だがそれは、人を傷つけるためのもの。それを知った時、ルーシエルは思わず涙が出てきてしまった。その後すぐ、歯が浮くようなことを言われ、涙は引っ込んだのだが。

あの変態に教えてもらった、『蘇生』という魔法。本来なら、そんな魔法は存在しないはずなのだ。あの変態の言ったことが正しいのなら。

「……ルーちゃんって、魔法が使えなくなったんだよね？ それってその変態さんが使えなくしたんじゃないかな。ルーちゃんがそう願ったから」

「確かに昔はそう考えてた。……でも、僕はあの変態にそんなこと一言も言っていないよ？」

というより、セリアにまであの男は『変態さん』と呼ばれてしまふのか。何だか、あの男が哀れに思えてくる。変態なのは、事実ではあるのだが。

「だって、ルーちゃんは魔法が人を傷つけるもの、って知った時泣いちゃったんでしょ？ だから、わかったんじゃないかな。人を傷つける魔法なんて、ルーちゃんが望んでいないこと」

「……まあ、あの変態、優しかったしね」

確か女の子は皆好き、とかなんとか言っていたが。魔女の自分に對しても、優しく接してくれた。封印する時だって、ちゃんとルーシエルの承諾をとってからしたのだ。彼の話を聞いていると、何だか封印されてもいいような気がしてきて不思議だった。

そう考えると、セリアがにやにやと笑う。

「おやおや？ ルーちゃんは変態さんに恋しちゃったのかな？ かな？」

「な！ そ、そんな。僕はただ、あの変態が優しくかったって言っただけだよ！ あんな人間を好きになるなんて、絶対に有り得ない！」

「……そんなきっぱり言われちゃって。変態さんもかわいいそうね」
どこがだ。

そもそも、ルーシエルは褒められるのが苦手なのだ。それなのに、あんなことを延々と言われ……。顔から火が出そうなほど熱くなった。だがそれとは反対に、鳥肌も立った。

とにかく、あいつは嫌いだ。

「まあ、ルーちゃんをからかうのはやめておいて」

「からかったの！？」

「気にしない気にしない。話は変わるけど、白猫君遅いね？ 壺を埋めた場所を忘れちゃったのかな」

セリアのことを少し睨む。

（でも……ノギス遅いな）

もしセリアの言う通り、壺を埋めた場所を忘れてしまったのだらうか？ ノギスがそんな大事なことを忘れるとは思えないが、千年前のことだったら覚えていなくとも当たり前前だ。

「……誰か来る」

その時、セリアの目が細くなって外を見つめる。

「誰かって？」

「わからない。誰かが何かを考えて、こっちに向かっていることはわかるんだけど……」

何かを考えて、とは？ セリアが心を読めないなんて、一体誰が来るのだろう。そもそも、ルーシエルの封印が解けたことを知っている者など――

（あ、ノエル？）

一人いた。最悪の人物が。

このままではセリアが危ない。

どこかに隠れさせようとルーシエルが立ち上がった時、人間がこの洞窟に入ってきた。

その人間の姿を見て、ルーシエルは目を見張った。

「……お前がルーシエルという魔女か？」

——そこには、あの変態がいた。

第十一話 白と黒（前書き）

また遅くなりました！
タイトル思いつかない……。

第十一話 白と黒

まずい。

どこに壺を埋めたかわからない。

ノギスは手当たり次第に土を掘っていた手を、いったん休める。

(……もう千年前のことだしな)

壺を埋めて、十年ほどはどこに埋めたのか覚えていた。それから先は壺のことなど思い出さなかったのに、千年経った今覚えているわけがない。

洞窟の周りのどこかに埋めたところまではわかるのだが……。

「はあ……」

思わず口からため息が漏れる。なぜ自分は壺を埋めたのだろう。その理由はわかっていているが、そう考えずにはいられなかった。

ルーシエルが悪い。彼女が封印されることを承諾したから、ノギスはあの男の言う通りに、何が入っているかわからない壺を埋めなければならなかったのだ。

壺を埋めた場所は思い出せないのに、なぜだかあの男の言葉は思い出せる。

『この壺は、もしルーシエルちゃんの封印が解けた時に、彼女に渡してくれ。それまでは土の中にも埋めておいた方がいい。それを狙う奴がいるかもしれないからね』

何が入っているのかは教えてくれなかった。ルーシエルに必要なものかもしれないけど、あの男は言っていたが。一体何が入っているのだろう。

ノギスが不思議そうな顔をしたのがわかったのか、男は笑って言った。

『ルーシエルちゃんにはわかるはずだ。もし必要なものだ判断したら、この壺を割ってくれ。あ、それからルーシエルちゃんを封印した壺を割ると、ルーシエルちゃんは死んじゃうから気をつけてね、白猫君。封印が解けると、自動的に消滅するけど』

そういえば、あの男もノギスのことを『白猫君』と呼んでいたのだった。もうずっと昔のことなのに、今更腹が立ってくる。

それ以上の説明はせず、あの男は帰っていった。依頼主に、ルーシエルを封印したことを知らせに行くと言って。依頼した者の名を問い詰める前に、彼の姿は消えていた。

(何でこんなことは思い出せるんだ!)

壺を埋めた場所の方が、余程重要なことだ。あの男の言葉を、一言一句正確に覚えていることがノギスには信じられない。

休めていた手を、また動かし始める。

確か浅い場所に埋めたはずだ。だが、猫のノギスでもぎりぎり持てるくらいの大きさだったのだから、見つけるのは難しいかもしれない。

ノギスは舌打ちをし、ただひたすらに土を掘った。

＊ ＊ ＊

「……お前がルーシエルという魔女か？」

どうして、と頭が真っ白になる。あの変態は人間だった。あれから千年経ったのだ。生きているわけがないのに。

セリアが安心させるようにルーシエルの手を握ってきて、少し冷静になった。

この男の目には、侮蔑の色が宿っている。あの変態なら、絶対にこんな目はしない。それに、言葉づかいも違う。この男は、ただあの変態に似ているだけだ。……似すぎているが。

男はこちらに歩いてきて――

「答えろ。お前が――うわっ！」

転んだ。つまり物など何もないはずなのに。

顔が少し笑っている、ルーシエルとセリアに気付いたのか気付いていないのか。何もなかったかのように立ち上がり、また歩き出す。先ほどより、顔が赤くなっている気がするのは気のせいだろうか。

「何でまた……」

何かをぶつぶつとつぶやいている。またということは、何度も何もない所で転んでいるのだろう。

（あ、やばい。笑いが抑えられなくなりそう）

セリアはルーシエルの手を離して、自分の口を隠していた。目を見る限り、笑っているに違いない。それを確認すると、ついにルーシエルは笑いをこらえることができなかった。

「……っあはははは！ 君、あの変態とはやっぱり別人だ！ あの

変態はこんなにドジじゃなかったもん！」

「ドジだと！？ いや……否定は、できない……が」

自覚があるのだろう、男はうつむいた。だが「今はそれは関係ない！」と顔を上げる。

「もう一度訊く。お前がルーシエルか？」

「あははっちょ、ちよっと待って。お腹いた……」

素直に男は待ってくれる。笑っているルーシエルのことを、なぜか怪訝そうに見ながら。その目にはもう、侮蔑の色はなかった。

「……よし、もう大丈夫かな。君の質問に答えるよ。僕の名前はルーシエル。君の言う通り、魔女だよ。……君の名前と、何をしにここに来たのか訊いていい？」

「俺はクロード。お前を封印しに来た。……一つ訊いてもいいか？」
「どうぞ」

返ってきた答えは予想通りのものだったから、大して驚かずにうなづく。セリアは急に真剣な顔をして、彼を見つめたが。ルーシエルを封印しに来たと言われ、警戒しているのだろう。

「あの変態とは、もしかやフィルマンさまのことか？」

「フィルマン？ えっと、変態っていうのは僕を封印した男のことだよ」

今思えば、あの変態の名前を聞いていなかった。この男が最初にルーシエルを見た目は嫌なものだったが、名乗っただけあの変態よりましたなのかもしれない。

「それがフィルマンさまだ。……女誑おんなたらしだとは聞いていたが、変態と言われる程だったのか……？」

「何か衝撃を受けてるとこ悪いけど、君と変態の関係って何なの？」

クロードは自尊心が高そうだ。確実にそうであるとは言い切れないが、彼がフィルマンさまと呼んでいるのなら、あの変態は彼にとって尊敬に値する者なのだろう。

「フィルマンさまは、我が一族の中で一番強い力を持った方だった。俺はフィルマンさまのような方になりたい」

「へえ、変態になりたいの？」

ルーシエルの目が冷たくなったのを感じたのか、クロードは慌てて否定する。

「ち、違う。そういう意味ではなく、フィルマンさまのように立派な……」

「立派？ あの変態のどこが立派なのかな？」

「う……そ、それは——」

「まあ、君をからかうのは面白いけど、そろそろやめておこう」

にっこり笑ったルーシエルを、クロードはぼかんと見てきた。

これは、からかわれていたことに気付いていないのだろう。セリアとノギスの言っていたことに同意するのは癪だが、これは確かに面白い。

ようやく理解したのか、むすっとした顔で尋ねてくる。

「お前は本当に魔女か？ その髪と瞳の色がなければ、人間と間違えそうだ。魔女が人間ではないと理解しているが、今まで封印してきた魔女とはどこか違う」

「……クロード。君、人間と魔女を差別するようだと、あの変態のようにならないよ」

あの変態のただ一つ良いところは、人間も魔女も動物も、分け隔てなく接すること。まあ、男より女に甘い、そこは立派だと認めてやる。クロードにはそれができないのだから、フィルマンのようにはなれないだろう。

彼はルーシエルの言葉を聞き、黙った。

「……………」

「とりあえず、早く帰ってくれない？　僕はあの時と違って、封印されたくないんだ」

「……また来る」

彼は力なく洞窟の外へ出ようとし――

「うわっ」

また転んだ。なぜ何もない所で転ぶのだろう。魔女を封印したことがあるのなら、それなりに力があるはずなのに。体を動かすことが苦手そうだとルーシエルは苦笑して考える。

彼は無言で立ち上がり、振り向かずもせず去っていった。

帰るのなら歩いていかずに、『移動』の術を使えば良いのではないだろうか。『移動』の魔法があるのだから術もあるはずだ。一度行ったことがあれば、一瞬でそこへ移動できるのに。

「……クロ君の心、どうして読めなかったのかな？」

首を傾げるセリアに、クロードはクロ君なのか、と心で突っ込み

を入れる。

「だって白猫君とクロ君で、丁度白と黒……って白猫君は？」
「あ」

そういえばまだ帰ってきていない。クロードが来たことで、すっかりノギスの存在を忘れていた。これをノギスに知られたら、また怒られてしまうかもしれない。

(言わないでおこう)

今回はセリアも彼のことを忘れていたのだから、おそらくセリアは言わないでいてくれるだろう。

彼が何も持たずに帰ってきたのは、それから二刻後のことだった。

第十一話 白と黒（後書き）

明日は投稿できないかもしれません……。。

第十二話 必要なもの（前書き）

午後は投稿できないので、早めに投稿です。
短いです。

第十二話 必要なもの

すっかりしょげてしまったノギスを、そんなに落ち込まなくてもいいのにといいながら見る。彼の白い手は、すっかり汚れてしまっていた。

ルーシエルに必要なものだったかもしれないが、今自分は幸せだ。ノギスもいて、セリアもいる。それだけで十分だ。それ以上、必要なものなどない。

「そんなに落ち込まなくてもいいよ。もうこれ以上、必要なものなんてないんだし」

「いや、それでもやはり、明日もう一度行ってくる。今日はルーシエルたちに何も言わずに探しにいったから、ひとまず戻ってきたんだ。……お前がいるんだったら、別に見つかるまで探しても良かったかもな」

またノギスは、セリアの名を呼ばなかった。そのことに気付き、ルーシエルはそっとセリアの顔を盗み見た。一見何も変わらないように見えるが、彼女の顔が少し強張っているのがわかる。

「心配しなくても大丈夫よ、ルーちゃん。……ちよつと、嫌なことを思い出しちゃうだけだから」

ルーシエルの心を読んだのか、そう言って微笑む。その笑顔を見て、腹が立ってきた。

気付いているはずなのだ。人の心に敏感な彼なら。何度も頼んでいるのに、ノギスはセリアの呼び方は変えようとしなない。

セリアは心配しなくても大丈夫だと言うが、ルーシエルにそれはできない。

「ノギス。いい加減セリアの名前を呼んであげたら？ 君なら気付いてるんでしょ、セリアが辛そうにすること。それなのに、どうしてセリアの名前を呼ばないの？」

「私は理由を知ってるから、そんなに怒らないで。しょうがない、って諦めてるから」

それでも納得できない。

セリアのことをキッと睨む。

「セリアもセリアだよ。嫌なら嫌って、はっきり言わなきゃ。ノギスがセリアの名前を呼ばない理由なんて知らないけど、しょうがないなんて思っちゃ駄目だ」

ついセリアに対しても、口調がとげとげしくなってしまう。彼女からノギスに視線を戻すと、なぜか傷ついた顔をしていた。

それを見ると、スツと頭が冷静になるのがわかった。自分は今、ノギスにひどいことを言っていただろうか？ ルーシエルが今言ったことに、ノギスを傷つけるようなひどいこと……。

おそろおそろ彼の名を呼ぶ。

「ノ、ノギス？」

「……また壺を探してくる」

「あっ」

ノギスは洞窟を出て行った。後を追おうとして、一瞬ためらう。今彼を追いかけて、何を言えればいいのだろう。自分のどの言葉が、彼を傷つけたのかもわかっていないのに。

「早く白猫君を追いかけて。私はここで待ってるから」

セリアに言われ、ようやく踏ん切りがつく。ここでためらっていても、どうにもならない。早く、ノギスを追いかけよう。

ルーシエルは走り出した。

＊ ＊ ＊

そこかしこに、ノギスが掘ったのだらう穴が開いていた。一時間でこれだけ掘れるのは、彼が壺を見つけようと必死に探していたからだろう。

ルーシエルのために頑張ってくれたのに、その彼を傷つけてしまった。

(……そういえば、こんな喧嘩初めてかも)

今回は喧嘩とは言わないかもしれないが。

喧嘩をしたことはたくさんある。だがその中で、傷つけたり傷つけられたりしたことはどのくらいあっただろう。ルーシエルの記憶が正しければ、そんなことは一度もなかったはずだ。

(相変わらず走るの速いな……っ)

足はルーシエルの方が圧倒的に長い。ノギスは猫なのだからそれは当然のことだ。普通だったらルーシエルの方が速いはずなのに、まだノギスの姿は見当たらない。

「ノギス！」

大声で呼んでみるが、返事は聞こえなかった。それは近くにいな

いのか、見つかりたくないのか。ルーシエルがそう考えた時、小さな声が聞こえた。

「……こっちだ」

とても嫌そうな声。だがそれでも答えてくれたことに、嬉しさを感ずる。

声が聞こえた方向に走っていくと、白猫がしっぽを振りながら待っていた。そこに壺はないから、まだ見つけていないらしい。

ルーシエルは俯きながら、ノギスに声をかける。

「ごめん。傷つけてしまったことと、どうしてノギスが傷ついたのかわからないこと」

「……まあ、ルーシエルだから仕方ない」

ため息をつかれ、ルーシエルはしゅんとする。仕方ないと言われ、落ち込まないというのは無理だ。ノギスと長い間一緒にいるのに、彼の気持ちをわからない自分が情けなくなってくる。

だが。

ルーシエルは顔を上げ、ノギスの目をまっすぐに見た。

「こんなこと言うのは恥ずかしいけど、僕は君とセリアがいれば他に必要なものなんてない。……だから、許してほしい」

「ふんっ」

ぷいっと顔を背けられ、許してもらえないのかとまた落ち込んで

しまう。だが、続いた言葉にルーシエルはぽかんとした。

「俺が許さなかったのか？」

「へ……？」

よくわかっていないルーシエルに、ノギスは苛立ち気に言う。

「俺にだって、ルーシエルは必要な存在だ。……あいつがルーシエルに必要ななら、俺にだって必要だしな。あいつの名前を呼ぶのは無理かもしれないが、考えておこう」

猫は顔が赤くなったりしない。そうでなければ、今のノギスは恥ずかしさで真っ赤になっているだろう。彼の口からこんな台詞が出るとは、ルーシエルは思っていなかった。

「えっと……。うん、まあよろしくね。壺は探さなくてもいいから、とりあえず帰ってセリアに謝ろ？」

「……あいつに謝るのは嫌だ」

「嫌って言わないでよ」

顔をしかめるノギスに、ため息をつく。そして、ノギスの体を持ち上げた。

「な、何するんだ」

「いや、何となく。ノギス重くなったなあ」

以前ノギスを抱いたのは、ノギスがまだ子猫だった頃だ。重くなったのは当たり前か、とばたばたと腕の中で暴れているノギスを見つめて、ルーシエルは考える。

(……あの変態が何を壺に入れたかは気になるけど、もうこれ以上必要なものなんて僕にはない)

ノギスとセリア。この二人がいれば、ルーシエルは幸せでいられる。

あの人間たちの願いを、少しは叶えることができるのかもしれない。

第十三話 心を読む力（前書き）

遅くなりました！

第十三話 心を読む力

セリアはルーシエルとノギスを待ちながら、彼女の言った言葉を思い出していた。

『セリアもセリアだよ。嫌なら嫌って、はっきり言わなきゃ。ノギスがセリアの名前を呼ばない理由なんて知らないけど、しょうがないなんて思っちゃ駄目だ』

嫌なら嫌とはっきり言う。それができないからこんなに辛いのに。セリアがルーシエルの気持ちがあっても、彼女にはセリアの気持ちはわからない。だからそんなことが言えるのだ、と意地悪なことを考えてしまう。

ノギスに『お前』や『こいつ』と言われるのは嫌だ。だが、ずっと一緒にいたら呼んでくれるかもしれないがしばらくは無理だろうと、セリアが納得したのだから別に良いのだ。

（あの人たちに……名前を呼んでもらいたいとは思わないのだけど）

両親の顔を思い浮かべる。自分の名を呼んでもらいたいとは、思っていない。おそらく、が付いているが。

自分の気持ちなのに、よくわからないのだ。あの人たちのことを親とも思っていないのに、たまにふと、優しくしてもらいたくなることがある。セリアにこんな力がなかったら、家族で幸せに暮らしていたかもしれないと思うと。

（心なんか読めなくても良かった。どうしてこんな力が、私にあるの？）

それは、仕方がないと諦めるしかない。そう考えてから、またルーシエルの言葉を思い出す。しょうがないと思ってはいけない、という。

(……これからは消極的に考えるのやめられるかな)

ルーシエルに言われるまで、自分が今まで色々なことを諦めていたことに気付いていなかった。それに気付けたのは、彼女のおかげではある。気付けたって、それができる可能性は低いが。

(ああもう！ 可能性が低いとか考えちゃうから駄目なの！)

自分で自分を叱咤する。そして、洞窟の外をチラリと見た。

(早くルーちゃんと白猫君、帰ってこないかな……)

先ほど意地悪なことを考えてしまったことを、謝りたい。彼女はなぜ謝れたかわからず、きっとあわてるだろう。その様子を想像して、セリアは小さく笑った。

＊ ＊ ＊

ルーシエルは帰った途端セリアに謝られ、目を白黒させていた。彼女はルーシエルが帰ってすぐ、立ち上がって頭を下げたのだ。

セリアに謝られるようなことは、何もなかったはずだ。むしろルーシエルが謝らなければいけないのに。

あわてるルーシエルを見て、セリアはぷつと吹き出した。

「え、あ、う……僕何かおかしかったかな!？」

「ふふっ平気よ。ルーちゃんの反応が予想通りだったからつい。も

う一度言うけど、ごめんね？」

もしかして、セリアはルーシエルの反応を見て楽しんでいてはないだろうか。その考えに思い至り、セリアを疑いの眼差しで見る。

「楽しんでないかないわ。ルーちゃんひどい……」

「ご、ごめん」

謝るルーシエルを、セリアはなぜか嬉しそうに見つめてきた。だが、口を開こうとしたその顔は驚愕のものに変わった。目を見開いて、セリアはルーシエルのことをもっと見つめる。

「どう…し、て……？」

「セリア、大丈夫？」

「……どうして、こんなこと今まで一度も——」

ルーシエルの言葉も耳に入らないのか、彼女は呆然と何かをつぶやき始めた。その様子を見て不安になる。

（どうしたんだろう）

いつもなら、ルーシエルがこう考えれば、口に出す前にセリアは答えてくれる。だが今は、何も答えてくれなかった。試しに考え得る限りの悪口を、心の中で言ってみる。それにも彼女は何も答ええない。

そこでふと、嫌な考えが浮かんた。いや、セリアにとってはいいことなのかもしれない。

（僕の心を、読めてないの？）

「読めてはいる……の。小さく途切れ途切れにしか聞こえないだけ……だけど。こんなこと初めてで……」

小さく途切れ途切れにしか聞こえない。

それはどういふことなのだろう。セリアの心を読む力が、失われつつあるということだろうか。そういう力というのは、失われるものなのだろうか。

周りにそんな人間も魔女もいなかったから、よくわからない。そもそも知り合いなど数えるほどしかないが。

「何だか……気持ち、わる……」

「セリア！」

ふらっと彼女の体が倒れてきて、あわてて受け止める。セリアはぐったりしていて、その顔には血の気がなくなっていた。気絶しているようだ。

ルーシエルはあわあわとノギスに助けを求める。

「ノ、ノギスどうしよう！ セリアが気絶しちゃった！」

「言われなくてもわかってる！」

珍しいことに、彼もあわてているようだった。それがわかり、少し落ち着く。

だが落ち着いたところで、気絶してしまった人間に対しどのようなすればいいのかわからない。できるだけ人とかかわりを避けてきたせいで、こんな時の対処法など知らないのだ。

「とりあえずえっとえっと……寝台に寝かせよう！」

目に入った寝台に、セリアを運ぶ。いくらセリアが子供だとは言

え、気絶した人間を一人で運ぶのは、そう容易いことではなかった。何とかセリアを寝台に運び、顔を見ると幾分顔色が良くなっている気がした。そのことに安堵し、なぜセリアが気絶してしまったのかと疑問を抱く。

（心を読む力が失われる……？ そのことに関係してるのかな？）

小さく途切れ途切れにしか心が聞こえなくなるまで、セリアは元気がだった。それなのにいきなり気絶してしまったのは、確実にそのことが関係しているのだろう。

だが、どう関係しているのかまではわからない。

（あ、そういえば、クロードの心が読めないって言ってたけど……。それってクロードが何か術を使ってたせいなの？ それとも、セリアの力が失われかけてたから？）

彼のことを思い出し、そこでふと、大変なことに気付く。

ぎぎぎつと音が鳴りそうなほどぎこちなく、首を動かしてノギスを見ると、訝しげに見られてしまう。

（ノギスにクロードのこと話してなかった！）

また怒られてしまわないか……。もちろんセリアのこのの方が心配だが、そのことにも不安になる。

「あの、ですね。僕、大事なことを思い出したんです。怒らないで聞いてくれます……か？」

思わず丁寧な口調になってしまったのは、仕方のないことだと思う。

「言ってみろ」

「うう。怒らない、とは言ってくれないんだね……。実は、あの変態の一族の人間が来たんだ。ノギスが帰ってきた一時間くらい前に」
ノギスの目が細くなり、ルーシエルのことを見る。無言なのが怖い。

しばらくの沈黙の後、ノギスは息を大きく吸った。

「……お・ま・え・は！ 何でそのことを早く言わないんだ！」
「だって……忘れてたし」

その言葉が火に油を注いだ。

「忘れてた忘れてた……お前はいつもそればかりだ！」
「怒らないでよ！ 忘れちゃうのは僕が悪いけど、ちゃんと思い出して話したんだからいいでしょ！？」

「良くない！」
「……あ。ねえ、気絶してる人間のそばで口喧嘩って、体に悪いのかな？」

そうっとセリアを見ると、ノギスもつられて彼女を見る。またしばらくの間、どちらも何も言わなかった。

（……今回の喧嘩、終わるのが早かったな）

セリアのおかげだ、と気絶しているセリアに感謝する。

（だけど、いつまで気絶してるんだろう？）

気絶した人間は、どのくらいの時間で目を覚ますものなのだろうか？

セリアを見ると、一生目覚めないのではないのかと心配になる。まさかそれはないだろうが……。

こんな心配を、ノギスもルーシエルが封印された時にしたのだろうか。ルーシエルが封印されて千年。彼はずっとここで待っていてくれた。千年間、どれだけ不安だったのだろう。

（もしかして、封印が解けた時に怒られたのはそのせい？）

長い間ずっと心配していて、それなのにそこにいたのを忘れられるとは……。今更ながら、彼にひどいことをしてしまったと反省する。

「ごめんね、ノギス」

「さっきのことか？」

違う、と言うとノギスは首をかしげた。

「まあ……いっか。とりあえずセリアが起きるの待ってよう」

椅子を寝台の隣に持ってきて座る。そうすると、ノギスが膝の上に乗ってきた。

心配するくらいには、セリアに気を許しているのだな、とルーシエルはノギスに気づかれないよう微笑んだ。

セリアが目覚めたのは、すっかり外が暗くなってからのことだった。

第十三話 心を読む力（後書き）

実は私も、ノギスにクロードのことを話していないのを忘れていました……。

第十四話 弦月

自分の中で、大切な何かが失われる気がした。それが何かはわからない。ただ、それが自分にとって、大切なものだとか。

大切なものなんて、龍神さまと友人の魔女、その使い魔くらいしかいない。だが、今失われる大切な何かは、それ以外のものだと感じた。

それ以外に何か、大切なものなどあっただろうか。

少女は考える。そしてそれ以外にはないと結論を出した。

それなのに、なぜか寂しくなった。自分にぽかんと大きな穴が開いたようだった。

＊ ＊ ＊

「ん……」

セリアがうつすらと目を開けてくれて、ルーシエルはほっとした。彼女が気絶して五時間ほど。もしかしたらもう、目覚めないのではないかと何度も考えた。

セリアはごしごしと目をこすり、洞窟を見回す。

「何だか暗い……ってもう夜!？」

がばっと飛び起きたセリアを、あわててまた横たわらせる。不満そうな顔をしていたが、おとなしく従ってくれた。

目覚めてすぐ、アズメリ村へ帰るのは無理だろう。顔色は良くなっていたが、まだぼんやりとしている。

「私ってあの後気絶したの？」

「うん。……それでその、僕の心読める？」

おずおずと尋ねると、セリアは今気付いた、という顔をした。

「読めないわ……。全く心が聞こえない。なのに違和感がなかった。……どうしてかな？」

「僕に訊かれてもな。でも、セリアは心が読めることを嫌がってたんじゃない？　僕と同じように」

ルーシエルは、魔法なんて使えなく良かったといつも思っていた。おそらく、セリアも生き物の心を読めなくても良いと考えていたのではないだろうか。

予想通りうなずいたセリアに言う。

「ならもう、考えなくてもいいんじゃないかな。生き物の心を読めなくなるのは、セリアにとっていいことじゃないの？」

「それはいいことだけど……」

暗い顔をしたセリアを、ルーシエルは首をかしげて見た。いいことだと自分でも言っているのに、なぜ暗い顔をするのだろうか。

心の中の疑問にセリアが答えないことで、もう彼女は心を読めないのだということを実感する。

セリアは寂しそうに「だけどね」と続けた。

「今更、普通の『巫女』として生活することはできないわ。心が読めなくなったと私が言っても、村の人たちが私を恐れるのは変わらない」

ひどい、とは思っても、それがおかしいとは思わない。

ルーシエルだって魔法が使えない魔女だ。それでもおそらく、人間たちと仲良くすることなど不可能だろう。

人間は、自分と違うものを恐れる。

それは当然のことだ。

「当然のこと、よね」

心を読まれたのか、と驚いてセリアを見るが、どうやら偶然らしかった。

「うん、偶然だよ」

「……セリア、本当に心読めないの？」

「ルーちゃんの考えは単純だから。心が読めなくても、ある程度わかると思うわ」

単純と言われ、少し落ち込む。 貶けなされたわけではないだろうが……。

「貶してないよ？」

「ええっ！ 僕ってそこまで単純!？」

またもセリアに心を読まれ、うろたえてしまう。こんなにぴったりと考えていることに答えられてしまったのだ。

本当にセリアは心を読めていないのだろうか。

「読めてないってば。読めてるのに読めてないって言って、私が何か得する？」

「するんじゃない？ 僕にはわからないけど」

だがそれだと、なぜセリアが気絶したのかわからない。いや、心が読めなくなったとしても、理由はわからないが。

とりあえず信じよう、とセリアの顔を見る。目が覚めてからしばらく経ったし、もう帰らせても平気だろう。

「セリア、そろそろ帰らないといけないんじゃない？ 親が心配してると思うよ」

「……そう、ね。そろそろ帰ることにする」

セリアは少し黙った後、そう答えて立ち上がった。そこで気付いた。

セリアのことを心配する親など、いないのではないかと。

今の間は、そういう意味だったのかもしれない。

「じゃあ、ルーちゃん、白猫君また明日」

笑顔でそう言われてしまうと、もう何も言えなくなってしまふ。ルーシエルも「また明日」と手を振り、先ほどまでセリアが転がっていた寝台にもぐり込む。

寝台は暖かくて、すぐに眠りにつけた。

＊ ＊ ＊

遅くなってしまった。

月明かりを頼りに家へ帰ると、そこにはまた両親の姿があった。ふと、自分が心を読めなくなったことを知ったら、この人たちはど

ういう反応をするだろうと考える。

他の村人なら、セリアを恐れることは変わらない。だがこの人たちは、仮にも自分の両親なのだ。

もしかしたら……。

そんな淡い期待を持ってしまう。

「……どこへ行っていた？」

父が訊いてくる。母はこの間のように、黙ったままだった。

「少し、散歩をしていました。……月が綺麗だったので」

今夜の月は弦月だった。セリアは満月が一番好きだが、どんな月でも綺麗だと思う。

「それに……考え事を、したかったのです」

「考え事？」

父は眉をひそめる。その顔を見て、ああ、これを言っても無駄なのだ、と理解してしまった。

だが、訊かれたからには答えないといけない。

「私の力……生き物の力を読む力が、失われたようなのです」

「……なるほど」

何になるほどのかわからなくて、父にばれないよう首をかしげる。

「龍神さまのお声が聞こえなくなったのも、そのせいなのだな」

「ち、違います！ 巫女としての力と、この力は別物です！」

「そうよ、こんな忌まわしい力と一緒にしないでちょうだい！」

黙っていた母の一言で、セリアは涙がこぼれてしまいそうになった。

忌まわしい力と言われるのは、慣れている。慣れているのに、どうしても泣きそうになってしまうのだ。

「……それもそうだな。すまないメリア」

メリア、とは母の名だった。父の名はセルジュだから、セリアの名は二人の名を合わせたものなのだろう。それに気付いた時は、嬉しかった。

だが今は、メリア、セルジュと互いのことを呼び合っている両親が、セリアの名を呼んでくれないと思うと悲しくなる。

「……お父さん、お母さん」

初めて口に出す単語。声が震えたのがばれていないといい。

「私は……生まれてこない方が良かったですか？」

ずっと訊きたかった。だが、どんな答えが返ってくるか怖くて、一度も訊いたことがなかった。

「ええ、もちろん」

きっぱりと。

母はもちろんと言ったのに、父は黙って何かを考えていた。

「……お前は巫女としては役に立ったからな。どちらとも言えない

だろう」

「ああ、言われてみればそうね」

目のふちに溜まっていた涙が一滴こぼれた。そこからは、後から後から涙がこぼれてきた。今まで我慢していたものが、一気に流れていく。

両親は一瞬だけ驚いた後、不快そうに顔をしかめた。

セリアは物心ついた時から、両親の前で泣いたことがなかった。なぜだか泣いては駄目だと思っていたのだ。

「……また、散歩をしてきます」

父も母も、何も言わなかった。

扉を開けて、セリアは家を出た。最初はゆっくりと歩き、だんだんと速く。最後には全力疾走していた。

（……訊かない方が、良かったかな）

訊いてしまったことを後悔する。父はどちらとも言えない、と言った。だがそれは、巫女として役に立つというだけ。

そんなふうには、あの人たちはセリアを見てくれないのだ。

セリアは立ち止まって、空を見上げた。

（……満月が、見たかったな）

空に浮かんでいるのは弦月。セリアが見たい満月の、半分の大きさしかない。

だが、満月よりもずっと大きく、綺麗に見えた。

第十五話 憧れ（前書き）

また遅れてすみません……。
これから更新速度もつと遅くなるかもしれません。

第十五話 憧れ

朝起きると、洞窟内の椅子にクロードが座っていた。寝台から上半身だけ起こして、ぼんやりと彼を見る。クロードはまだ、ルーシエルが起きたことに気付いていないようだった。ルーシエルの隣では、ぐっすりとノギスが眠っていた。

「ふぁ……」

あくびをすると、クロードはこちらを見た。自分がなぜこんなことをしなければならぬのか、という惘然とした顔をして。

彼がここにいることに何の疑問もたず、ルーシエルは「おはよう」と言う。聞こえなかったのか、クロードが何の反応もしなかったので、また言った。

「おはよ、クロード」

「……は？」

挨拶をしたルーシエルを、今度は訝しげに見てきた。こんな顔でされるようなことをしただろうか？ 朝起きて頭が働いていないルーシエルは、なぜクロードがこんな顔をしているのかわからなかった。

「ん？」

クロードがこの洞窟にいる。そのことに違和感を感じ、ルーシエルは首をかしげた。もう一度大きなあくびをし、彼の顔をじっと見つめる。

(……あれ？ 何でクロードがここにいるの？)

昨日眠るまでのことを思い出してみる。

セリアが来て、ノギスが壺を探しにいった後クロードが来た。そしてまた来ると言いクロードが帰ると、戻ってきたノギスと喧嘩をして、セリアが気絶してしまって、目を覚ましたセリアが帰った後にすぐ眠った。

(また来るって言ったって……。来るの早すぎだと思っただけかな？)

丸一日も経たずに、こんな朝早く来るとは思っていなかった。
ルーシエルは、歩いてクロードの向かいの椅子に座った。

「来るの早いね？ それで、何をしに来たのかな？」

昨日、彼はなぜルーシエルを封印せずに帰ったのだろう。あの変態のようになれないと言われ、落ち込んだせいだろうか？

ルーシエルが尋ねると、クロードは気まずそうに顔をそらした。

「……フィルマンさまが、どのような方だったのか訊こうと思ってな。一族に伝わる話だけではよくわからない。少々あの話は美化しすぎている気がするのだ」

「へえ。どんな話が聞いてみたいけど……今は僕が話さなきゃね」

あの変態が、どのような人間だったのか。それはもう、クロードには言っているはずだ。

一言で言えば、変態。

それ以外に言いようがない。

（まあ、クロードみたいに魔女を異端視していないだけいいのか）

『魔女だろうが何だろうが、女性には優しくしないと』

ルーシエルが何だかほっとするような笑みを浮かべ、あの男はそう言った。

ふと、彼の不機嫌そうな顔を見る。あの変態と瓜二つなのに、こんな顔をしていると別人に見えた。昨日初めて見た時はあの変態と間違えたが。

「あの変態は、君と本当にそっくりだったよ。もちろん外見だけだけどね。あの変態は……『魔女だろうが何だろうが、女性には優しくしないと』とか言うほど、女には甘かった」

先ほど思い出した言葉をそのまま告げると、クロードはがっかりした顔をした。

「幻滅を感じるな」

「理想と現実が違うからね。クロードは、僕があの変態に封印されたこと知ってる？」

答えは聞かなくともわかっているが、一応そう尋ねる。ルーシエルが封印されて、その封印が解けた時に丁度ここへ来るなんておかしい。大方、あの変態が封印する際に何か術を使っていたのだろう。

「ああ。フィルマンさまがお前を封印した壺に、『感知』の術をかけたのだ。封印が解けた時、我が一族にわかるようになる」

「一つ疑問があるんだけど。僕が封印されてた壺って、一体どこに行ったの？」

この洞窟に、ルーシエルが封印されていた壺はなかったのだ。封印が解けたのはここなのだから、絶対にここにあると思っていたのだが。

「あの壺は封印が解けると、消滅することになっている。そのような術はないのだが……。昔からそうらしい」

クロードが不思議そうに言う。

『消滅』という魔法は存在する。だが、術は人を守るものだ。そんな危険な術が存在するはずない。

あの変態なら、そんな術を自分で作ってしまいそうだが。手紙に書いてあった『蘇生』の魔法だって、あの変態が作ったのではないかと思えてくる。

「ま、それはおいといて」

寝台の方をチラリと見ると、それに反応してかノギスの耳がピクリと動いた。

「いつまで寝た振りしてるつもりかな？ ノギス」

「……ばれてたか」

「当たり前でしょ？ 君の寝た振りはわかりやすいんだから」

ノギスが寝た振りをしている時、必ずしっぱがまっすぐに伸びているのだ。もしその癖を直されてしまったらわからなくなるから、彼にそのことを教えたことはない。

ノギスを見て、クロードが驚いたように言った。

「使い魔なのに白猫なのか？」

その質問に、思わず顔をしかめてしまう。

使い魔という存在を知っている者だったら、当然のものだ。

だが、この質問をされるのは快いものではない。白猫が使い魔で何が悪いのだ。ノギスのことを否定されているようで嫌な気持ちになる。

「そういうところが君とあの変態の違うところだね。あの変態はそんな質問しなかったもん」

使い魔という存在を知っている者だったら、当然の質問。それでも、あの変態はこんな質問をしなかった。

「……教えてほしい。俺とフィルマンさまの違いを」
「お？」

真剣な顔で頼まれてルーシエルは戸惑った。こんな反応をされるとは思っていなかった。

「違い、ね？ 昨日も言った通り人間と魔女を差別するようだと、あの変態のようになれない。……って、さっき幻滅したって言ったのにまだあの変態のようになりたいの、かな？」

「幼い頃の憧れだったからな、フィルマンさまは。そう簡単に気持ちが変わるわけないだろう」

少し自慢そうに言ったが、ルーシエルにはよくわからない。幼い頃からの憧れ。

そんな感情を知らないから。

（誰かに憧れる……それってどんな感じなのかな）

知りたいとは思わないが。懂れて、その人物に裏切られた時を考えたら。

「人間と魔女を差別する、か。……お前がそう言うのなら、しばらくは毎日ここを訪れよう」

「ま、毎日？ 何のために？」

「魔女と共にいたら、差別するようなこともなくなるだろう？ だからだ」

クロードが毎日ここに来る。

そのことを考え、げんなりしてしまった。性格は全く違うとはいえ、あの変態にそっくりなクロードがここへ来る。それは、大が何個も付くほどあの変態が嫌いなルーシエルにとって、とても迷惑な話だった。

（まあ、クロードに差別するなって言ったんだから、僕も差別しちゃだめだよな）

そう自分を納得させる。封印されるよりはましだ。ルーシエルは、セリアが死んでしまうまで封印される気はないのだ。いや、ノギスを独りにさせるのは嫌だから、封印されたくない。

（そういえば、セリア今日は遅いな）

なぜこんな日に限ってセリアは来ないのか、と少し恨めしく思ってしまう。

結局、昼頃にセリアが来るまで、ルーシエルはクロードと話していたのだった。

第十五話 憧れ（後書き）

見直しをしていないので、もしかしたら変なところがあるかもしれません。

第十六話 残り一週間（前書き）

二日あいてしまいました……。

なので早めに投稿です。ですが、今日中にもう一度投稿できるかはわかりません。

最初は十五話の最後より前の話です。

第十六話 残り一週間

弦月をしばらく見てから家に帰ると、なぜか父がまだいた。母は帰ったのか、家には父だけだった。

扉を開けたセリアを、睨みつけるように見てくる。その瞳の鋭さに、思わず身を震わせてしまう。

「お前、何か隠していないか」

「……何も、隠していません」

一瞬間が空いたのが悪かった。その間で、セリアが何かを隠していることを察したのだろう、呆れたようにため息をつく。

「巫女の力を失い、この地にはもう四ヶ月以上雨が降っていない。後一週間で五ヶ月経つ。その意味がわかるか？」

わかっている。それは、幼少の頃から言い聞かされてきたことだ。うなずいたセリアを見て、父は顔を少しだけ和らげた。

「頼むぞ——セリア」

ずるい、と思った。こんな時だけ。

——最期だけ、セリアの名を呼ぶなんて。

＊ ＊ ＊

「あ、セリア！」

自分の名を嬉しそうに呼ぶルーシエル。その声は無邪気で、昨夜初めて父に名を呼ばれたことより、彼女に呼ばれたことに喜びを感じる。

(……駄目よ、暗い顔したら)

ルーシエルに、心を読む力がなくて良かった。もし読まれてしまったら、彼女に止められてしまう。

セリアはいつもと変わらないよう心がけて、ルーシエルに笑顔を向ける。

「遅くなってごめんね、ちょっと用事があった。……でも、お邪魔だったかな？」

チラリ、と見たのは、ルーシエルの向かいに座っているクロードだ。セリアがそうからかうと、ルーシエルは慌て、クロードは真面目な顔で否定した。

「じゃ、邪魔じゃないよ！むしろセリアが来てくれてすっごい嬉しいよ！」

「邪魔ではない。……お前は昨日もいたが、こいつの知り合いか？」

彼の反応を面白くないと思いながら、ルーシエルのことを『こいつ』と言われたことにむっとする。不機嫌そうな顔を隠そうとせず、セリアは答えた。

「お前じゃなくてセリア。私とルーちゃんは友人よ、クロ君。それ

が何か？」

クロ君と呼ばれ、クロードは若干顔を引きつらせる。

「……魔女と人間が友人なのか？　それが他の人間にばれたら……っと、差別してはいけなかった。このことは誰にも言わないから安心しろ」

もしアスメリ村の者にばらされたら、と少し不安だったセリアは胸をなでおろして礼を言う。

「ありがとう。ところで、クロ君は何をしにここへ来たの？」

以前の自分だったら、訊かずとも答えがわかったはずだ。心を読めないとは不便だ。

そう考え、本来ならそれが普通なのに気付き、なぜか少し笑ってしまう。

「俺はフィルマンさまがどのような方だったのか、こいつに訊きに来たのだ。フィルマンさまに少しでも近づきたくてな」

セリアが笑ったことに気付かなかったのか、クロードは質問に答えた。

フィルマンとは、ルーシエルが変態と言っていた者のことだ。ルーシエルの心を読んだ限り、あまり変態とは思えなかったが。ルーシエルが変態と呼んでいるから、セリアも変態と言っているだけで、魔女に対しても普通に接していたことに、敬意を感じるくらいなのだ。

「あの変態さんに近づきたいの？」

「……このような少女にまで、フィルマンさまは変態と呼ばれているのか」

「そんなに落ち込まないで？ 私自身は、その変態さんに敬意を感じてるから」

ズーンと、後ろで音が鳴りそうなほど落ち込んだクロードを慰める。彼は自分と同じ気持ちの者がいたと思ったからか、ぱあっと顔を明るくした。

だが。

「――呼び名は変えないけどね」

「……………」

笑顔で続けた言葉に、また落ち込む。

（昨日も思ったけど、クロ君をからかうのは面白そう）

恋愛方面には疎そうだが、それ以外のことではからかいがいがありそうだ。

（……後一週間、か）

後一週間で自分は――

「セリア？」

心配そうな声に、はっとルーシエルを見る。肩にはノギスが乗っていて、少し心配そうにしていた。

「何でもないわ。心配しなくて大丈夫」

「でも、何だか今日は来た時から、暗い顔してたでしょ？」

気付かっていたのか。

内心の焦りを微塵も見せず、セリアは「何のこと？」と首をかしげた。

「あ……でも、昨日はいつもより遅く寝たから眠いのかも」

一応本当のことだ。嘘には事実も混ぜないと、すぐに嘘だとばれてしまう。

「そっか」

まだ心配そうな顔をしながらも、ルーシエルは納得して微笑む。それを見て、ズキリと胸が痛んだ。

（ルーちゃんに隠し事……。でも仕方ないよね）

仕方がない、と考えてしまっただけでまた彼女の言った言葉を思い出す。諦めてはいけない。だが、こんな時に諦めないことなどできるのだろうか。

自分には無理だ。

だから精一杯。

残り一週間を過ごそうと思った。

第十七話 術の創造者（前書き）

本日二度目の投稿です。

頑張ったわりに、あまり進んでいない……？

最初の方は前回の、セリアでなくルーシエル視点からのものです。

第十七話 術の創造者

洞窟に入ってきたセリアは、なぜか暗い顔をしていた。それでもルーシエルが呼ぶと、彼女は笑顔になった。

「遅くなってごめんね、ちょっと用事があった。……でも、お邪魔だったかな？」

慌てて否定しながら、セリアの様子を観察する。いつもと変わらないように見えるのに、この笑顔は何だか無理をして作っているように見えた。

（何か悪いことでもあったのかな？）

クロードと話していたセリアの顔に、ふと影がさす。それに気付いたのか、ノギスがルーシエルの肩に乗りセリアの顔を覗き込んだ。

「セリア？」

ルーシエルも心配になって尋ねると、彼女は何でもないと言って微笑んだ。その笑顔も無理に作っているようだ。

「昨日はいつもより遅く寝たから眠いのかも」

嘘ではないのだろう。だが、本当のことでもない。友人になってまだ一ヶ月も経たないが、それはわかった。

（……セリアが話さないってことは、僕に話さなくてもいいことなんだよね）

そう納得したが、自分には関係ない、と言われたようで悲しくなる。

(……話してくれるまで待とう)

話してくれるかわからないけど。

悲しそうなセリアを見て、そう考える。ルーシエルに関係のない話かもしれない。だが自分に話すことで少しでも、彼女が楽になればいい。

だから待とう、と思った。

「ルーちゃん。今日は私、夜までここにいるわ」

「本当に!？」

セリアはいつも、外が暗くなったらすぐ帰っている。だから夜までセリアがここにいると思うと嬉しくなった。

なぜいきなり彼女が夜までいようと思ったのかはわからないが、何も尋ねないことにした。

「なら俺も夜までいることにしよう」

続いたクロードの言葉に、思わず顔をしかめてしまう。嫌いではないのだが、せつかくのセリアと過ごす時間を邪魔されるようで、できれば彼には帰ってほしかった。

「まだ魔女と人間を差別する癖が、直っていないからな」

昨日来た時に比べれば、随分ましになっただろう。まだ満足していないのか。

（あの変態にどれだけ懂れてるの？）

セリアも、あの変態に敬意を感じると言っていた。どこが、と信じられなかったが、セリアがそう言うのなら少しはクロードの言っていた『立派な』人間なのだろうか。

（名前は……フェルマン？）

そんな感じだった気がする。

「ねえクロード、あの変態の名前ってフェルマンだっけ？」

「馬鹿か。フィルマンさまだ、フィルマンさま」

馬鹿と言われむっとする。だが今のはルーシエルが悪かったから、ぐっと怒りたいのを我慢した。

（フィルマン、ね）

これからは心の中で『変態』ではなく、ちゃんと名前と呼ぼう。口では変態と言うが。

「セリア、君だったらあの変態を名前で呼ぶとしたら、どう呼ぶ？」

「フィルさん、かな？　だけど私は、ルーちゃんが変態と呼ぶ限り変態さんって呼ぶわ」

ごめん、と心の中でフィルマンに謝罪する。永遠に君は名前を呼ばれないだろう。

「……まあ、あの変態のことは置いとして」

「なっ！」

「クロードのことも置いて。セリア、少し寝たらどうかな？
眠いんでしょ？ 夜までいるのなら、まだ時間はあるし」

セリアの目がとろんとしてきている。まだ十歳くらいの少女なのだから、夜更かししたら眠くなるのが当たり前だ。セリアと話していると、年下だということをつい忘れてしまう。

「ううん、できるだけ……じ……んをむ………ないから」

できるだけ、の後を、セリアは小声でつぶやいた。

「え？」

「とりあえず、私は今、ルーちゃんと話していたいの。いいでしょう？」

聞き返すと、そうはぐらかされてしまった。セリアと話したいのはルーシエルも同じだから、しぶしぶうなづく。

「あ、だけど椅子は二つしかないから、一つ足りないわ……。寝台に二人で座る？」

「そうだね」

クロードのせいで、椅子が足りない。少しだけ彼を睨み、ルーシエルは寝台に腰を下ろした。セリアもそこに座ると、

「……ねえルーちゃん。クロ君のこと、どう思ってるの？」

この場にクロードがいるのに、堂々と訊いてくる。ルーシエルは思わず咳き込んでしまった。

「どう思ってるって……僕は別に……ただ」

「ただ？」

「……ちよつと、ここにいられるのは迷惑かなって」

ルーシエルの返答を聞いて、セリアはきよんとする。そして次の瞬間には思い切り吹き出した。

「ぷっ！ あはははは！」

「な、何で笑うのさ！」

顔を赤くさせてそう訊くと、セリアは「ルーちゃんだもんね」と何やらよくわからないことを言い、納得していた。

「……迷惑、か？」

そう尋ねてきたクロードに、少しためらった後うなづく。

「え、あ、う……ん。まあ、君のことは嫌いじゃないんだけど。やっぱり最初の印象が悪かったからね」

あの時の瞳。あの瞳は、ルーシエルを殺そうとしていた村人と、同じものだ。

クロードのことは嫌いではない。だが、あの瞳を思い出すと好きにもなれないと思う。

「まあ、最初に比べれば良くなったんじゃないかな。ただ、魔女と人間を差別しないようになりたいのなら、他の魔女を当たってほしい」

「……俺もそう思い、まだ封印していない魔女に会ってみた。だが、

俺の姿を見るなり襲ってきた」

「それは当然だよ」

よくわからない、という顔をするクロードに苛立ちを感じる。

人間が、魔女にどう接してきたのか。

それを考えれば、襲われる前に襲うというのは当然のこと。ルーシエルのような魔女は滅多にいないのだ。その魔女だって、人間に散々なことをやられただろう。

「クロードは、殺されそうになったことがある？　ただ他の人間と違うっただけで」

「……ある」

てっきりないと思っていたのに、返ってきた答えにぽかんとする。魔法は人を傷つけるもので、術は人を守るものなのだ。それなのになぜ、術を使える者が殺されそうになるのだろうか。

「たとえば術が、人を守るためのものでも。それを知らない人間にとっては魔法と同じだ。ステルダという町の近くの間人は、術の存在を知っているが……」

ステルダ。懐かしい単語が出てきて、まだあったのかと驚いた。ステルダは、カリマが昔住んでいたと言っていた町だ。その町のことをよく話してくれて、いつか自分も行ってみたいと思っていた。

（だけど……カリマが死んじゃった後、怖くてしばらく洞窟の外に出られなかったんだよね）

そのせいで、すっかり忘れていた。魔法が使えたとしても、髪や瞳の色を変えるのはできなかったから、どうせ無理な話だったが。ルーシエルがカリマに話してもらったことを思い出していると、隣で話を聞いていたセリアが首をかしげた。

「何でステルダは、術の存在を知っているの？」

そういえばそうだ。セリアに言われて、そのことに疑問を持つ。

もしかしたら、カリマが持ってきた本と何か関係があるのだろうか。

「術がステルダに住んでいた者が作ったものだからだ。……魔法を作ったのもステルダの者だがな」

忌々しそうにそう言うてから、またやってしまったとクロードは落ち込む。差別したくないのに、どうしても昔からの価値観を変えられないのだろう。

だが、そんなことはどうでもいい。

ルーシエルは立ち上がり、クロードに詰め寄る。

「クロード！」

いきなりルーシエルが大声を出したのに驚いたのか、うつむいていたクロードはびくつと一瞬震えた。

「な、何だ？」

「『カリマ』っていう人知ってる！？」

ルーシエルの剣幕にたじろぎながらも、答えてくれる。

「ああ、カリマさまは術の創造者だ。だが、カリマさまのことを知

る者は少ない。なぜお前がカリマさまを知っている？」

「だって……だって、僕を育ててくれたのはカリマだもん！」

まさか自分の育ての親が、術の創造者だとは思っても見なかった。もしかしたらクロードが、カリマのことを何か知っているかもしれないと思って訊いてみたが……。

ルーシエルの答えを聞いて、クロードは目を丸くした。

「カリマさまが！？ ……ふむ、やはり魔女は危険な存在ではないのかもしれないな」

差別しないと言っておいて、危険な存在だとまだ思っていたのか。だがそのことよりも、カリマのことについてもっと訊きたかった。

「……クロード、カリマのこともっと教えて！」

カリマは、ステルダの町のこと以外、あまり話してくれなかったのだ。

「ああ、いいぞ。俺もカリマさまのことを、詳しく訊きたいからな」
(やったー！)

思わず心の中で叫んでしまう。何て子供っぽいのだ、と自分で自分をおかしく思いながら。

その後、クロードと話していたルーシエルは気付かなかった。

クロードとばかり話す自分を、セリアが寂しそうに見つめていたことに。

第十八話 思い出作り（前書き）

パソコン使っているのって夜の九時までなんですよね……。
ちよつとオーバーです。

思い出作りと書いておきながら、今回は思い出作りの方法を考えています。

第十八話 思い出作り

「――ごめんねセリア！ クロードとばかり話してて……せつかくセリアが夜までいてくれたのに」

ルーシエルは、泣きそうな顔でそう謝ってきた。外はもう真っ暗で、これ以上ここに居るのは無理そうだった。ノギスは話を聞いているのに飽きたのか、寝台の上で丸くなって眠っている。

セリアは背伸びをして、彼女の頭をなでた。

「ううん、私も二人の話聞いてて楽しかったから。謝らなくていいわ。話を聞いているだけでもステルダって町に行ってみたくなっちゃった」

クロードの話は知らないことばかりで、興味深かった。ルーシエルを育てたカリマという老婆が、術の創造者だったとは思わなかったし、術の時に使う言葉がどうやって作られたかも知らなかった。ステルダの話も聞き、行きたくなってしまった。セリアは巫女の仕事があったから、村の近くを散歩するくらいしかできなかったのだ。

「……何で頭なでるの？」

ルーシエルが少しむくれた顔で言ってくる。セリアが笑顔で「何となく」と言うと、ため息をついてされるがままになった。

彼女の髪の毛は、サラサラしていて気持ち良かった。この黒色の髪はとても綺麗なのに、なぜ忌み嫌われているのだろう。魔女の証だというのはわかるが、ルーシエルのような優しい魔女だっているのに。

優しい魔女ならば、人間の友ができて良さそうだ。セリア以外の、だが。

(……ルーちゃんには、白猫君とクロ君がいる)

きっともう、自分はもういなくても大丈夫だ。ルーシエルはクロードのことがあまり好きではなさそうだが、後一週間あれば友達にはなれるだろう。ルーシエルはそういう子だから。

大丈夫。

自分がいなくなった後でも、ノギスとクロードがいる。少し寂しいが、これでもう安心だ。

(私がいなくなったら、ルーちゃんは泣いちゃうかな?)

ルーシエルには泣いてほしくない。だが、セリアがどうすれば泣かないでくれるのだろう。

「セリア、いつまでなでてるの? いや、まあ気持ちいいからいいんだけど……」

ルーシエルの声で、はっと手を止める。

彼女という時に、こんなことを考えてはいけない。

「ふむふむ、ルーちゃんは頭をなでられるのが好きなのね?」

だからそう笑って言うと、ルーシエルは恥ずかしそうにうなずいた。

素直にうなずくとは思っていなかったから、少し驚く。これは、

それだけルーシエルと親しくなったということなのだろうか。

「……ん、それじゃあまた明日」

何だか気恥ずかしくなって手を振ると、ルーシエルも振り返して、

「また明日」

と思わず抱きしめたくなくなってしまいそうな笑顔で、言ってくれた。
「俺もまた明日来る」と余計な言葉も聞こえてきたが、ルーシエルのその言葉だけで嬉しくなった。

単純だな、とセリアは思いながら洞窟を出る。

暗いが、ここから村へはそう遠くない。月明かりだけでも十分だ。

（最期に……何かルーちゃんとの思い出を作りたいな）

ルーシエルとしたことは、あの洞窟で話していたことだけ。それだけでもセリアは楽しいが、最期くらいは何か他のことをしたかった。

（……でもルーちゃんは魔女だから、あの洞窟からは出られないよね）

あの髪の毛と瞳をどうにか隠せないだろうか、と思案してもいい案は浮かばない。

（髪はフードがある外套を着れば……でもこの季節に外套なんて変よね）

北の地では着いてもおかしくはないのだが、この辺りは比較的

暖かい土地だ。春なのに外套を着ることはあまりない。

雨が降っていれば話は別なのだが……。

（龍神さまと話すことができない今、この地には雨は降らない）

龍神さまは、人間より時を遅く感じる。いつ頃雨を降らしてほしいのか、やませてほしいのか龍神さまに祈るのは巫女の役目だ。そうでなければ雨が何年も降らなかったり、逆に何年も降り続いてしまうことになってしまうからだ。祈る、より頼む、の方が正しいかもしれない。

（龍神さま……ご無事ですか？）

話せないのは、セリアの巫女としての力が失われたのか、龍神さまの身に何かあったのか。

前者だったらまだいい。もし後者だったら、雨が降らずにこの世界から生き物の存在が消えてしまうだろう。

だがそれより、セリアは純粹に龍神さまが心配だった。

（ルーちゃんとも龍神さまとも、もう会えなくなるのか……。後一度だけでも、龍神さまの声が聞きたい）

あの声で呼んでほしい。『我が巫女』と。

そういえば、龍神さまに名で呼ばれたことがない。そのことに気付いても、両親のように嫌ではなかった。

「我が巫女……か」

セリアの顔には、自然と笑みがこぼれていた。

＊ ＊ ＊

セリアの姿が見えなくなるのを確認すると、ルーシエルは振り返って口を開いた。

「……クロード。今日のセリア、元気なかったよね？」

そう問い掛けるも、クロードは首をかしげる。

「俺はあいつのことをよく知らないからな。まあ確かに、昨日見た時と比べ、暗い顔をしていたようにも思えるが」

「ような、じゃなくてそうなんだよ」

流石に昨日会ったばかりでは、表情の違いはわからないか。クロードではなく、ノギスを起こして尋ねればよかった、と少し後悔しながら話を続ける。

「だからね、どうやったらセリアが元気になるかっていうのを訊こうと思って」

人間と関わりを避けてきたルーシエルだ。こういう時、どうすれば相手が元気を出してくれるのかよくわからない。

セリアはルーシエルに人を元気にする力がある、と言ってくれたが本当にあるのだろうか。

「あの少女はステルダに行ってみたいと言っていただろう？　だったら連れて行ってやったらどうだ？」

思わず「なるほど！」と言ってしまってから、自分が魔女だということを思い出す。ルーシエルと一緒に行ったら、セリアまでもが

危ない目にあってしまったのだ。
がっくりと肩を落として首を横に振る。

「駄目だよ。僕の髪の毛と瞳の色は、隠せないもん」
「そんなことないぞ」

クロードがさらりと言った言葉に、数秒間何を言われたのかわからなかった。

（僕は隠せないって言って……それに対してクロードは、そんなことないって言った？）

ということは、この色は隠せるのだろうか。

「俺が作った『幻影』という術で、幻を見せることができるからな」

「……作った？」

「ああ。一応俺も、一族の中でかなり強い力を持っている。術を作れることも可能だ」

今までの魔女たちの苦労は何なんだ！ と叫びそうになった。髪の毛と瞳の色を隠すような魔法がないからこそ、魔女はひっそりと人間に見つからないよう暮らしていたというのに。

クロードにできて、一族で一番力が持っていたフィルマンにできないわけがない。やはり、フィルマンは変態の呼び名のままでいいだろう。

「それから『移動』の術を改良して、自分以外も連れて行けるようにした。今まで『移動』の術は自分が――」

「ってことは、セリアも連れて行けるんだね!？」

それならセリアと一緒にステルダへ行ける。

キラキラと瞳を輝かせるルーシエルを、クロードは戸惑ったように見てきた。

(……さっそく明日、ステルダに行こうって言ってみよう！)

『移動』の術を使うなら、移動時間は一瞬で済む。セリアが来たらすぐ行って、夕方になれば帰ってくればいいだろう。

ルーシエルはステルダに行くことを考え、わくわくと胸を躍らせたのだった。

第十九話 幻影の術（前書き）

平日ですが、いつもより早めに更新……？

第十九話 幻影の術

次の日、クロードの持ってきた鏡を覗いて、ルーシエルは呆然とした。その鏡が黒曜石でできていたせいではない。もちろん、こんな高価なものをクロードが持っているのも不思議だったが。

理由は、自分の瞳の色だった。クロードの術によって、瞳の色は黒から緑色に変わっていた。

（信じられない……）

髪の毛が黒から茶に変わったのは、鏡を見なくともわかった。だが本当に瞳の色まで変わっているのか、とクロードに言うと、彼は懷から黒曜石でできた鏡を取り出したのだ。

髪と瞳の色が変わっても顔のつくりは変わらないのに、これだけで自分が自分じゃない気がした。

「感動しているところ悪いが、その術には欠点がある」
「欠点？」

確かに、新しく作った術ならば、欠点があってもおかしくはないだろう。

もし人間に触れたら駄目なのだったらどうしよう、と不安になる。日の光に当たっては駄目だとか、歩いては駄目だとか。

そういうものだったら、すぐに色は戻ってしまう。

不安そうな顔をしたのがわかったのか、クロードは安心させるように言った。

「そう心配するな。ただ水に触ってはいけなただけだ。本当は欠点がある術など、改良するまで使いたくないのだが……」

「ううん！ これで十分だよ！ 水に触らなければいいだけでしょ？ それなら簡単……かな？」

言っている途中で自信をなくしてしまった。水というものは日常生活で、人間がよく使うものだ。それなのにその水に触れないなんて、できるのだろうか。

「……まあ、とりあえずこれでステルダに行けるね！」

気を取り直してそう言う。クロードに『幻影』の術をかけてもらったのは、それが目的だ。セリアを元氣にするため、一緒に行くために術をかけてもらったのだ。

（カリマが生まれた町か……）

実は、セリアのためだけではなく、ルーシエル自身もステルダに行ってみたかった。小さい頃の夢がようやく叶うのだ。

笑顔を浮かべて、机の上に座っているノギスに話しかける。

「ねえ、ノギス。この髪と瞳、似合ってる？」

機嫌が悪いノギスは、ルーシエルの問いに答えてくれなかった。

彼は一人（一匹）だけ置いていかれることになって、すねているのだ。

（うう。でも、クロードの話では愛玩用の動物を連れているのは、貴族だけなんだよな……）

ノギスは愛玩用ではないのだが、できるだけ目立つのは避けたかった。だから彼に残ってくれるよう頼んだのだ。

（早くセリア来ないかな）

そう考えた途端、誰かが洞窟に一步足を踏み出し、戸惑ったように立ち止まる。考えた途端本来に来るとは、セリアはすごい。

「セリア！　どうかな、これでステルダと一緒にに行けるよね、魔女だって気付かれないよね？」

「ルーちゃん？　え、どうして髪の色……って瞳まで？」

そういえば、セリアには何も話していなかったのだった。そう気付いて、セリアに説明する。

「昨日セリア元気なかったでしょ？　元気を出してもらうために、セリアが行きたいって言ったステルダに行こう、ってクロードと話して。そのためには魔女だって気付かれちゃ駄目だから」

どうかな、ともう一度尋ねる。セリアはまじまじとルーシエルを見つめてきた。

「……うん、それだったら、絶対に魔女だって気付かれないわ」

セリアの答えに、身を乗り出して言う。

「そうだよな。だからこれからすぐ、クロードの術でステルダに行こうと思うんだ」

「え、あ、うん。……今から？」

状況を飲み込めていないのか、セリアはまだ驚いていた。ルーシエルはうなずいてから、ノギスのことをチラリと見た。

（悪いけど、ノギスは留守番だね）

「行こう、クロード」

彼に声をかけると、セリアが慌てて言う。

「ちょ、ちょっと待って！ クロ君、私の瞳の色も緑に変えてくれない？ この瞳だと、私が『巫女』だってわかってちゃうもの。遠くの所でも、巫女は有名でしょ？」

「それはいいが……。水に触れると、術は解けるぞ？」

「構わないわ。ルーちゃんが行きたくてソワソワしてるし、早く術をかけて」

くすりと笑われて、気付かれていたのかと顔が熱くなった。セリアの元気がなかったから、と言いながらルーシエルも行きたがっていることなど、彼女にはお見通しなのだ。

「だったら、動かずにそこで立っていてくれ」

クロードはそう言って、集中するように目を閉じた。セリアもつられるように目を閉じる。

「……§ⅡⅢ㍻」

術と魔法は同じ言語なのに、全く意味が理解できない。

（だけど……綺麗だよな）

術を使う時、辺りに真っ白な光が広がる。それが、魔法と術の一番の違いだろう。ルーシエルが魔法を使う時、光なんて出ないのだ。

「もういいぞ、目を開けろ」

セリアが目を開け、不思議そうに首をかしげる。何も変わったようないないのだろう。

セリアに、ルーシエルは持っていたままだった鏡を渡す。それを見たセリアは、目を丸くした。

「わあ……！ 本当に変わってるわ」

「当たり前だ。こいつのだって変わっていただろう？」

心外だ、とばかりに眉をひそめるクロード。それを見てセリアは少し笑って、ルーシエルの方を向く。

彼女の瞳は緑色になっていた。だがやはり、ルーシエルは海色の瞳の方が綺麗だと思う。変わってしまったことを少し残念に思いつつ、ルーシエルはセリアにっこりと笑った。

「それじゃ、そろそろ行こうか。……ノギス、留守番よろしくね」
「ああ」

もう機嫌を直したのか、今度はちゃんと答えてくれた。

クロードはセリアとルーシエルに近寄ると、『移動』の術を使う。

「Ⅱ 6 S」

真っ白な光が、洞窟に広がった。

＊ ＊ ＊

ふわっとした浮遊感。移動時間は一瞬ではなく数秒かかるようだ。

真っ白な光が眩しくて、思わず目を閉じてしまう。

(……ルーちゃんも、私と同じでステルダに行きたかったのね)

理由は違うが。

ルーシエルの理由は、セリアに元気を出してもらうため。

対する自分の理由は、最期の思い出作りのため。それから、ルーシエルに友達を作ってほしいからでもある。

(ルーちゃんだったら、きっとすぐできるよね)

魔女だということに気付かれないよう、友達になる。もし魔女だということに気付かれてしまったら、ルーシエルもその相手も傷つくことになるが、セリアは彼女に友達を作ってほしかった。

クロードは友達とかそういうものではなく……あの二人なら、きっといい恋人同士になりそうな気がするのだ。その仲のよさに、ノギスが嫉妬してしまうような。勘だが、巫女の勘はよく当たる。

それに、クロードと恋人にならなかったとしても、やはり女の子が友達にいた方がいい。

(……あ、着いた)

トン、と軽く地面に足をついた感覚があって、セリアは目を開けた。そこは森の中だった。町の中にいきなり人が現れたら、いくら術の存在を知っていても、町人を驚かせてしまからなのだろうか。隣を見ると、ルーシエルはきよろきよと辺りを見回している。

わくわくとしているのがまるわかりのルーシエルを、セリアは優しい顔で見つめたのだった。

第十九話 幻影の術（後書き）

明日は投稿できなさそうです。でも、できれば投稿したいな……。

第二十話 ステルダへ（前書き）

が、頑張った……。

のわりには進んでいませんし、短いです。

第二十話 ステルダへ

クロードが術を唱え、着いた所は森の中だった。思わずきよろきよると辺りを見回してしまう。

木々が風に吹かれ、さわさわと揺れている。その風が気持ちよくて、つい目を細めてしまった。

遠くでは川のせせらぎ、小鳥の鳴き声などが聞こえた。

(……ステルダじゃなくって、ここだけでも楽しそう)

長い間洞窟から出ていなかったルーシエルは、ここでのんびりと昼寝でもしたい気分になった。見つかったって魔女だと気付かれないのだから、洞窟の外で初めて安らかな気持ちになる。

「……さあ、行くぞ」

クロードの言葉で、名残惜しいがルーシエルは歩き始めた。後ろからセリアも同じようについてくる。

「クロード、ここからステルダまでどれくらいかかるの？」

「一刻もかからない。ステルダから一番近い森に移動したからな」

それ以上は誰も何も言わず、歩いた。
だが。

「うわっ」

昨日は一度も転んでいなかったから、忘れていた。クロードが転んだのを、ルーシエルとセリアは無言で見る。その顔には笑みが浮

かんでいたが。

クロードも無言で立ち上がり、服についた土をはらった。

(……ははっ。何で本当に、何もないところで転ぶんだろうな?)

今までクロードに封印された魔女が、このことを知ったらどうなるだろう。愕然とするか、呆然とするか。はたまた、激怒するか。その様子を考えて、おかしくなった。

だが、しばらく歩くと、自分もクロードにそんなことを言えないことに気付く。

(ああ、まあそうだよな……)

まだ少ししか歩いていないのに、もう足が筋肉痛だ。しかも、息がゼーゼーと切れてしまっている。

運動不足を、実感する。

今まで洞窟内だけで過ごしてきたのだから、当たり前だ。それでもここまで、自分に体力がないとは思わなかった。

「大丈夫？」

セリアが心配そうに訊いてくる。大丈夫、と答えながら、彼女を心配させないように息を整えようと努力する。

セリアの声を聞いて、一瞬クロードがこちらを向いた。

「……」

何か言おうと口を開け、またすぐ前を向いて歩き出してしまう。何を言いたかったのだろう、と不思議に思いながらルーシエルも歩き続けた。

＊ ＊ ＊

「大丈夫？」

セリアの声が聞こえ、少しルーシエルを振り返る。顔はもう真っ赤で、息も切れていた。

「……」

『癒し』の術をかけようか。

そう言おうとしたが、結局言えずにまた前を向いて歩き出す。『癒し』の術は、その名の通り人や動物を癒すことができる術だ。

その術をルーシエルにかければ、彼女はかなり楽になるはずだ。だがなぜだか、ルーシエルのことを心配していることを知られなかった。

（あと少しでこの森をぬけ、すぐにステルダに着く）

それまで我慢してもらい、着いたら広場にある長椅子にでも座って休ませよう。まだ太陽が頭上に来るまでしばらくあるのだ。少しぐらいは休んだっていいだろう。

（……あまり眠れなかったみたいだな）

ルーシエルの目の下には、くっきりと隈ができていた。おそらく、セリアと一緒にステルダに行くことが嬉しくて、あまり眠れなかったのだろう。『幻影』の術を使うついでに、隈も隠しておいた。

こういう所はやはり、人間と変わらない。人間と魔女の違いは、魔法が使えることとその寿命だけだ。フィルマンさまは、最初から

魔女が恐ろしい存在でないとわかっていたのだろうか。

（そういえば、まだこいつらに会って二日しか経っていないのか）

もつとずっと前にあった気がするのに。一昨日はすぐに帰ったから、一緒に過ごしたのは昨日だけだ。

（……この二人は、どうやって知り合ったのだろうか）

ルーシエルは封印されていた。その封印を解いたのが、セリアなのだろうか。巫女ならば、フィルマンさまの封印を解くのにも納得できる。

海色の瞳は、巫女の証。それは、この世界の人間の誰もが知っている有名な話だ。それが必ず、アズメリ村という小さな村に生まれることも。

一昨日はよく見ていなかったが、昨日セリアの瞳に気付いて驚いた。人間と魔女が友人だということも驚きなのに、その人間が『巫女』なのだ。驚かずにはられない。

（封印が解け、まだ一月も経っていないのに）

この二人は、本当に仲が良い。それが羨ましくて、羨ましいと思うってしまう自分に首をかしげる。

「うわっ」

考え事に気を取られていたせいか、また何もないのにつまづいてしまう。体が前のめりになったが、今度は転ばなかった。

昔から変わらない、と自分に呆れてため息をつく。昔からドジというか……鈍くさかったのだ。歩けばすぐ転ぶし、運動はまるで駄

目だった。

後ろでルーシエルたちが笑いをこらえる気配がして、クロードは恥ずかしくなった。この二人の前で転んだり転びそうになったのは、これでもう三度目だ。これでも少しましになったのだ、と言いたくなつたがもつと笑われそうなので何も言わずに歩く。

もうすぐで、森をぬけそうだった。

＊ ＊ ＊

ステルダには人間がごった返していて、その様子をルーシエルは目を丸くして見た。こんなたくさんの数の人間を見るのは、生まれて初めてだった。

「すごい……」

「ルーちゃんルーちゃん、目がすごいきらきらしてるわよ」

笑いながら言われ、思わず赤面する。

「だ、だって、こんなにたくさんの人間を見たのは初めてだから。……でも、そう言うセリアだって嬉しそうだし、きよろきよろ周りを見てるよ」

せめてものの反撃にそう言うと、セリアはいっそう笑みを深めた。

「そう？　だったらそれは、ルーちゃんというからね。ルーちゃんとどんな所に行こうか、とか考えるのが嬉しいの」

ふえ？　と間拔けな声を出したルーシエルは、もごもごと彼女にお礼を言った。今自分の顔は、先ほどよりも赤くなっていることだろう。

クロードが手招きをした。

「こっちだ。……お前が疲れてそうだから、しばらく広場で休むぞ」
本当はすぐにでもこの町を観光したかったが、もう足が限界なので素直に彼の後についていく。

（……子供も大人も、たくさんいるな）

子供の無邪気な笑い声は、聞いているだけで疲れが取れる気がした。

人混みの中でクロードを見失わないよう歩いていたルーシエルは、その人ごみの中に子供と手をつないでいる母親らしき人物を見つけた。

それを見て、ふと自分の親はどのような人間だったのだろうと思う。ルーシエルは生まれてすぐ捨てられたから、親の顔も名前も何一つ知らないのだ。

（今更知ったって、どうにもならないけど）

別に親がいなくなたって、今まで生きてこられたのだ。セリアもノギスも、クロードもいる。そう考えると、全く寂しくなかった。

「ルーちゃん」

セリアが、歩きながらルーシエルを呼ぶ。人々の声にかき消されないよう、いつもより少し大きな声で。

「今日は目一杯楽しもうね」

セリアの笑顔に、ルーシエルも笑顔でうなずいたのだった。

第二十話 ステルダへ（後書き）

初めてクロード視点を少し書きました。なぜか彼は難しいです。

第二十一話 幼馴染（前書き）

お気に入り件数が5件になりました……！

サブタイトルが思いつきません。

第二十一話 幼馴染

広場の長椅子に座ると、棒のようになっていた足が少し楽になった。ルーシエルの隣にはセリアが座る。長椅子は二人用だったので、クロードは立ったままだ。

「ごめんね、クロード。クロードも疲れてるんじゃない？」

「いや、俺は慣れているから疲れていない。ゆっくり休んでいろ」

そういえばセリアも疲れていた顔をしていないし、あれしか歩いていないのに疲れるのは、やはりルーシエルの運動不足が原因だろう。

(……ん？ 慣れている？)

あの森からここまで、結局クロードは五回転んだ。町人でクロードに声をかけた人は、全員が転ばないように気をつけて、ということとを心配そうに言っていた。慣れているのなら、なぜ転ぶのだろうか。

それを訊いてもきつとクロードは答えられないから、その疑問は口に出さずに、彼に親しげに話しかける人々をぼんやりと見る。

(結構有名なんだな)

よくクロードはここに来るのだろうか。挨拶されるたびに彼は笑顔で挨拶を返している。そのことに違和感を感じて、ルーシエルは小さく首をかしげた。

「クロ君の笑った顔、初めて見るわね」

セリアの言葉で、違和感の正体はそれだったのかと納得する。昨日話している間、クロードは一度も笑っていなかった。ずっと眉間にしわを寄せていたのだ。この町に来るまでも、ずっとそうで。

（僕たちに気を許してない、ってことか）

なぜだか寂しくなる。

（……べ、別にクロードと仲良くなりたいたいなんて思っていないもん。仲良くなりたいとは思ってなくても、信頼されてないのは寂しいだけだよ！）

心の中であせりながら否定したが、自分は誰に言い訳をしているのだろうと不思議になった。誰に何を言われたわけではないのに、なぜこんな言い訳をしているかと。否定する意味があるのかもわからなかった。

「ね、ルーちゃん。どんなことしたい？」

「え？ あ、僕はどんなことでも。……だって、こんな時どんなことをしていいのかわからないし」

声をかけられた時また心を読まれたのか、と思ったがどうやら違うらしい。心の中で誰に言い訳してるのと笑われなかったから。

ルーシエルの返答に、セリアは困った顔をした。

「私もよくわからないの。……ルーちゃんが初めての友達だから。友達とは、普通どんなことをするのかな？」

クロードだったらわかるかもしれない、と彼を見ると小さな子供

にからかわれている最中だった。この子供たちも、クロードがよく転ぶことを知っているらしく、クロードもからかわれるのは半ば諦めているようだった。

「転ぶのの何が悪い」

開き直ったのか子供たちにそう言う。子供たちは笑いながら親のもとへ走っていった。

「うん、転ぶのは悪くないよね。仕方ないことだよ」

ルーシエルは立ち上がって、ぽんとクロードの肩を叩いた。彼は間違ったことを言っていない。転んでしまうのは仕方ないことで、悪いことではないのだ。

「……あの子たちの言葉以上に傷つくぞ」

「まあ、ルーちゃんに悪気はないんだから、怒らないでね」

セリアも立ち上がり微笑む。

どこが悪かったのだろう。必死に考えても、ルーシエルにはわからなかった。とりあえず、クロードに頭を下げる。

「何だかわからないけど、ごめん」

「……………」

「素直なのはルーちゃんのいい所ね」

黙ったクロードを慰めるようにセリアは言ったが、全く慰めになっていないと思う。ただルーシエルのことを褒めているだけだ。

「…………そろそろ平気か？」

まだ足は疲れているが、先ほどに比べたら大分いい。クロードにうなずくと、どこに行こうかという話になった。

ルーシエルもセリアもこの町のことはよく知らないから、クロードに任せることにする。

「任せるよ」

「案内、お願いね」

二人に言われ、しぶしぶとクロードは了承してくれた。

「だが、お前たちが楽しめる所へ連れて行けるかわからないからな？ それよりだったら、適当に歩いて見て回った方が余程いいと思うのだが」

ルーシエルはセリアと顔を見合わせた。こんなに言うのであれば、彼の言う通り案内なしでそこら辺をぶらぶらしていた方がいいのかもしれない。

「じゃあ、そうしようか」

クロードがあからさまにほっとした顔をする。

「――っていうのは嘘で、やっぱりクロードに任せるよ」

「なぜだ！」

「うんうん、その反応を見たかったんだ。セリア、行こう」

少しクロードに意地悪をしてから、セリアに声をかける。セリアは笑いながら歩き出した。

「ふふっ、ルーちゃんが言わなかったら、私が言ってたわ」
「そうだよね。クロードの反応って何だか面白いから」

その会話を聞いているのか聞いていないのか、クロードは悄然として後ろをついてくる。

「何でみんなあいつと同じこと……」

おそらく聞こえていないのだろう。

＊ ＊ ＊

十二歳の自分にとって、ルーシエルの足についていくのは少し大変だった。ルーシエルはセリアを十歳くらいだと思っていたようだが、正確には十二歳。ルーシエルが速めに歩くと、セリアは小走りになってしまう。

そのことに彼女は気付いていないし、クロードは後ろでまだ何かをつぶやいていた。

（ルーちゃん、そんなに楽しいんだ）

普段のルーシエルなら、必ず気付くだろう。気付かないということとは、他のことに気を取られているのだ。ルーシエルが楽しんでるのはセリアも嬉しいが、そろそろ気付いてゆっくり歩いてくれないときつくなってしまう。

（……クロ君は何をつぶやいてるのかな？）

声が小さくて聞き取れない。心を読めたらわかるのに、と考えて彼の心は最初から読めなかったのだと思い出す。

あれは、何か術を自分にかけていたのだろうか。

「クロ君。……クロ君？」

返事がない。歩きながら後ろにいるクロードの顔の前で手を振ってみるが、それでも反応しなかった。

これは駄目だ、と諦めて前を向いて歩く。クロードを呼ぶ声で振り返ったルーシエルが、やっとセリアの息が切れていることに気付いてくれた。

「ご、ごめん。歩くの速す——」

「あっ、クロード！」

ルーシエルの声を遮ったことに、苛立ちを感じながら声の出所を探す。人がたくさんいたが、その人物は手をぶんぶん振っていたからすぐに見つかった。

声を聞いた途端顔をしかめたクロードは、顔を見てもっと顔をしかめた。セリアの声には反応しなかったのに、彼女の声には反応するのか。

「エデ……ここに來てたのか」

「あれあれ？ 久しぶりに幼馴染に会った反応がそれなのかな？」

先ほどまで遠くにいたのに、今はクロードのすぐ隣にいる。すごい移動速度だ。

「腐れ縁の間違いじゃないか？」

「むう……。昔はあたしと仲良く遊んでたくせに！ ……まあ、それはどうでもいいんだけど」

「どうでもいいのか？」

クロードを無視して、セリアとルーシエルを見る。エデと呼ばれた少女は、にっこり笑って言った。

「初めまして、あたしはエデ。クロードの幼馴染で、一応これでも術を使えまーす。そっちの茶色い髪の子、からかいがいありそうだね？」

その笑みを見て、セリアはこの子と気が合いそうだと思った。

第二十一話 幼馴染（後書き）

茶色い髪の子とはルーシエルのことです。クロードの術で色が変わったので。

第二十二話 長い先（前書き）

何だかタイトルが変……。。

第二十二話 長い先

からかいがいありそう、とエデが言うとセリアは仲間を見るような眼差しで彼女を見た。それはセリアもそう思っているということなのか。

睨むと、彼女は曖昧な笑みでごまかした。

セリアのことを睨んでいると、エデが頬を膨らませる。

「もう、クロードこーんな可愛い知り合いがいたなら、紹介してくれたらよかったのに」

クロードはうんざりしたようにため息をついた。

「紹介する必要があるか？ それに、こいつらに知り合ったのは一昨日だ。お前はジャルマルに行っていたのだから、紹介するのは無理だろう」

「うーん、こんなことなら依頼を受けなきゃよかった。今回封印した魔物、すっごい瞳がうるうるしてて罪悪感が……」

魔女だけでなく魔物まで封印するのか、と感心する。

この世界には魔物というものが存在する。魔物は人間を食らうもの、人間に悪意がなくひっそりと暮らしている二種類のものがあるのだ。そういう魔物は植物を食べていた。エデが封印したのはそっちだろう。

昔は多かったのだが、セリアに聞いた話では数が少なくなっているらしかった。

エデの言葉に引っかかることがあって、ルーシエルは首をかしげ

た。

「依頼？ エデさんは依頼を受けて、魔物や魔女を封印しているんですか？」

「そんなかたくならないでいいって。あたしのことはエデでいいし」

ルーシエルには珍しく丁寧な口調で話したのだが、エデは顔の前で手を振った。こういう喋り方は苦手なので、素直に普通に話すことにする。

「じゃあ言い直すね。エデは依頼を受けて、魔物や魔女を封印してるの？」

「うん。『封印』の術が使える人だったら、みんな誰かに依頼されて封印するんだ。この町に、そういう依頼するところがあるんだよ？」

あ、クロードに術の話は聞いてるよね」

クロードもそうなのか、と彼を見るとクロードはうなずいた。

あの変態も、誰かに依頼されていたのだろうか。女性には優しくしないと、と言っていたあの変態が、自分から進んで魔女を封印するとは思えない。

そう考えていると、エデがじれたように言った。

「そろそろ名前教えてくれないかな？ あたし、まだ君たちの名前知らないんだけど」

自己紹介がまだだったことに気づき、慌てて姿勢を正す。

「えっと、僕はルーシエルだよ」

「私はセリア。……あなたのこと、ディーちゃんって呼んでもいい？」

エデの名前は二文字なのに、それでも短くするのか。
エデはセリアの言葉を聞いて、面白そうに笑った。

「ディーちゃんか。いいよ、そう呼んで。……二人のことは呼び捨てでいいよね」

ルーシエルは別にどう呼ばれてもいいので、うなづく。

「じゃ、ルーシエルとセリアね。それで、二人はクロードとどういう関係なの？」

「え？　ただの知り合いだよ？」

なぜ訊かれたのかわからない、という風に答えると、エデは見るからに残念そうな顔をした。……そしてなぜかセリアも。

クロードもルーシエルと同じようにわかっていないようで、二人でエデとセリアを訝しげに見る。

それを見て、彼女たちはもつと残念そうな顔をした。

「セリア、この二人どう思う？」

「ルーちゃんもクロ君も、きつとわかってないと思うわ。……けどしばらくすれば、私たちの期待通りになるかも」

期待通りとはどういう意味だ。

こそこそと話しているが、丸聞こえだ。

「クロ君……ね？」

「……勝手に呼ばれているのだ」

にやりと笑うエデ。クロードは、なぜ言ったのかとセリアを恨め

しげに見る。

「あたしも『クロ君』って呼ぼうかなー」

「拒否する」

「ふはははは。クロ君、君に拒否権はないのだよ」

二人は仲が良さそう（クロードが聞いたら絶対に否定するだろうが）に話している。思わずむっとし、そのことにルーシエルは不思議になった。

（これって……嫉妬？）

嫉妬するほど、クロードのことが好きではないはずだが。

変な気持ちで二人が話すのを見る自分を、セリアはにやにやと見てきた。

＊ ＊ ＊

やはり、ルーシエルは思っていることが顔に出やすい。今だってエデとクロードが話しているのをむっとして見て、なぜだかわからず不思議そうな顔をしているのだ。

（クロ君の最初があんなだったからね……。私もどうしてルーちゃんが好きになるかわからないけど）

クロードではなく、彼に似ているあの変態が好きなのだろうか。だがクロードとあの変態の中身は全く違う。顔が同じだけで好きになるのは、ルーシエルの性格ではありえないと思う。

もっとも、彼女は自分の気持ちに気付いていないが。

「あ、ルーシエルにしか訊いてなかったけど、セリアはクロード……じゃなくてクロ君のことどう思ってるのかな？」

エデの質問にきよとんとする。

セリアはクロードのことをどう思っているのか。

エデと話していたせいか、疲れた顔をしているクロードをじっと見つめる。

「クロ君は……友達？ いや、お兄さん？ お父さん？」

「候補多いね。……セリアは、ルーシエルとクロ君のことを応援してる？」

エデは声を落として言った。セリアもルーシエルとクロードに聞こえないように声を落とす。聞こえたら聞こえたで、二人の反応は面白そうだが。

「うん。ってことは、ディーちゃんはクロ君のこと、ただの幼馴染って思ってるの？」

「恋愛対象には見てないよ？ あたし好きな人いるしね」

「え！ 今度教えてくれな……」

ルーシエルとはこんな話はできないから、つい夢中になってしまった。

(……今度なんて)

後五日。セリアがルーシエルたちといられるのは、五日だけなのだ。

黙り込んだセリアを不審に思ったのか、エデが首をかしげた。

「ん？ どした？」

「う、ううん！ 何でもない。気にしないで」

そんなセリアを、ルーシエルが心配そうな顔をして見てくる。もしかして、今自分は暗い顔をしていたのだろうか。

せっかくステルダに来たのに、そんな顔をしてどうするのだ。

自分を叱咤して、ルーシエルに微笑む。

「ルーちゃん、どうしたの？」

「……気のせいかな。何でもないよ」

気のせいではない。

ほっとしたように笑うルーシエルを見て、辛くなる。騙すようなことなど、本当はしたくないのだ。

（……ルーちゃんは、ディーちゃんとも友達になった）

セリアの目的は達成された。ルーシエルは、名前を言っただけでエデと友達になったとは思っていないかもしれない。

彼女のためにもはっきりさせておいた方がいいだろう、とセリアは口を開いた。

「ディーちゃん、私とルーちゃんのこと、友達だと思ってる？」

「あたしはもう会った時点で友達だと思ってたけど？」

案の定、ルーシエルは目を見開いた。慌てて何かを言おうとしたが、それを遮る。

「それじゃ、二人で……クロ君とルーちゃんを応援しようね」

「そうだね。直接手伝ったりしないで、こっそり応援しよう。その方が面白いからね！」

「セリア、エデ！ 君たち、こっそりと話してるようで丸聞こえだからね！？ 応援って何なの！？」

聞こえて当然だ。ぎりぎり聞こえる声量で話しているのだから。

「応援は応援よ。ね、ディーちゃん？」

「ね、セリア？」

顔を合わせるセリアとエデを見て、ルーシエルはむすっとした顔をした。何を言っても無駄だと理解したのだろう。

エデはにっこりとクロードに笑った。

「さて、クロ君はこの会話の意味がわかるかな？」

「クロ君と呼ぶな！」

「拒否権はないと言って言ったもんね！ ……で、わかんないんだ。これじゃ先は長いかな？」

ルーシエルもクロードも、そういう話には疎い。この会話の意味を全くわかっていないのがその証拠だ。

「「……先が長い？」」

声を揃えて言う二人。エデの言う通り、先は長いかもしれない。下手をすれば年単位で。

その先を見られないと思うと、寂しくなった。

第二十二話 長い先（後書き）

明日は学校があるので、投稿できるかわかりません……。。

第二十三話 川の音（前書き）

今日は一度しか投稿できない……。。

第二十三話 川の音

視線だけで人が殺せるのなら、とつくに彼女はこの男たちを殺しているだろう。

水晶の中のルーシエルと、その他三人を見つめるノエルは、そう思えるほどの目をしていた。本来ならばこの魔法は水晶を使わなくてもいいのだが、それでは自分にしか見えないから水晶を使っている。

見せない方がよかったか、と少し後悔してノエルに声をかける。

「ノエル、わかっているな？」

「殺したい殺したい殺したい……」

何やら物騒な単語が聞こえる。自分も魔女だがそういうことはあまり好きではないので、思わず一瞬ひるんでしまった。

「……はっ！ 申し訳ありません。少し取り乱してしまいました」

少しとは言えない気がするの、自分だけだろうか。周りに誰もいないので、何とも言えない。

「コホン。私は本当はこういうことは嫌いなんだ。それを君のためにやっているんだぞ？」

「……はい」

落ち込むノエルを見て、少し言い過ぎたかと思った。

「そう落ち込むな。……しかし、面倒なことになったな」

ルーシエルの近くに、術を使える者がいるとは。しかも、一人ではなく二人だ。

(……女の方の弱点はわかった)

後はそれをどうするかだ。

だがその前に、ルーシエルの正体をばらす。すでに、策は打っているのだ。

(あの女は、どう反応するか……)

その反応次第で、女をどうするかノエルが決めるだろう。殺すか、生かすか。

ノエルが生かすはずがないが。

やはり、こういうことにはむいていない。ノエルが女を殺すことを想像し、思わず身震いしてしまった。

＊ ＊ ＊

ステルダの観光が終わり、ルーシエルたちはエデと共にあの森へ向かっていた。人がいないのならば『移動』の術で、すぐに洞窟に行けるのにわざわざ森へ行くのはエデの希望だ。

ルーシエルとセリアともっと一緒にいたいらしい。

「あたしたちの一族に、同じ年頃の女の子っていないんだ。だから、二人と友達になれて嬉しい」

友達になったつもりはない。

そう言おうとすると、セリアに睨まれてしまった。……確かに、エデがこんなに嬉しいがっているのに否定するのはひどいかもしれない

い。

セリアがにこつと微笑んだ。

「私も嬉しいわ。ディーちゃんと友達になれて。ルーちゃんも、でしょ？」

「……うん」

エデと友達になれたら嬉しいと思う。だが、エデはルーシエルが魔女だということを知らない。そのことがばれたら、きっと嫌われてしまう。

それは嫌だ。

（それに……エデは『封印』の術を使えるんだし）

もしかしたら、自分は封印されてしまうかもしれない。セリアもノギスも残して封印されなくなかった。だから、できればエデと友達になりたくないのだ。

「ふうっ。やっぱここは気持ちーね」

だから好きなんだ、と言いながらエデは木々を見上げる。

「……あっ！ そうだ、この近くの川に行かない？ 近くって言うかはわかんないけど。まだ夕方にもなってないし、時間はあるよね？」

そういえば森に来た時、遠くで川のせせらぎが聞こえたのだった。楽しそうだしいいかとうなずこうとして、ルーシエルにかけられた術が水に触ると解けてしまうことを思い出す。

川に行ったら、嫌でも水に触ることになってしまうだろう。

「ごめん。僕この後人と会う約束してて……」

嘘を言うのは心苦しいが、この場合他に言いようがない。

「そっか……。セリアもルーシエルと一緒に帰るの？」

「私、お母さんにここへ来るって言っていないの。だからそろそろ帰らなきゃ」

セリアも申し訳なさそうに嘘を言った。お母さん、と言った時とても辛そうにしたのは、ルーシエルの気のせいだろうか。

「セリアはまだ子供だもんね……。何歳なのかな？」

「十二よ。……あ、だけど明後日で十三歳になるわ」

「へえ。……え!？」

驚いて、エデと一緒に変な声を出す。

明後日で十三歳ということは、明後日が誕生日ということだろうか？

セリアが何をそんなに驚いているのか、という不思議そうな顔をした。

「言ってなかった？」

「初耳だよ!」

ルーシエルの誕生日は正確にはわかっていない。だから、カリマとあった日を誕生日にしていた。

毎年カリマは、いつもより少し豪華な料理を作り祝ってくれた。

最近誕生日を祝わないのか、と尋ねたくなったが、エデに不審に思われてしまうかもしれないから我慢する。

エデが近づいてきて、ルーシエルの耳のそばでささやいた。

「ルーシエル、明後日ってステルダに来れるかな？」

「来れるよ」

「なら、セリアの誕生日お祝いしよう」

誕生日を祝う習慣は、昔も今も変わらないようだ。

「場所はあたしが確保しておくね。ルーシエルは……うーん、約束した人と会ったら、またクロードとステルダに来てくれないかな？ 広場で待ってるから」

そういうことなら、セリアが家に帰ってすぐにでもここへ来たいのだが。言ってしまった以上、すぐに来るのは無理だ。

残念に思いながら、ルーシエルはセリアに気付かれないようこっそりうなずいた。

「わかった。贈り物を買うの？」

「あたしと一緒に選ぼう！」

買い物をするのなんて初めてだ。しかもそれが、人間の友達に贈る物なのだ。

「……ねえ、クロ君。私って気付かないふりをしてた方がいい？」

「そうだろうな」

セリアとクロードが何か話しているが、ルーシエルの耳には入ってこなかった。

（楽しみだな……）

思わずにやけてしまった時だった。
子供の、悲鳴が聞こえた。

＊ ＊ ＊

ルーシエルはクロードに『加速』の術をかけてもらい、悲鳴が聞こえた方へ走っていた。エデ、セリアも後ろからついてくる。クロードは転んでばかりで、あまり進んでいない。

「……ルーシエル、セリア。おかしいと思わない？」

エデが険しい顔で言った。

「おかしい？」

「……川の音が、大きすぎるってこと？」

ルーシエルはわからなかったが、セリアはわかったらしい。

「そ。このところ雨が降ってないのに、何でこんなに川の音が大きいのかな？」

言われてみれば、おかしいとすぐに気付いた。セリアの話では、今年に入ってからはまだ雨が降ってないのだ。

「アスメリ村の、あの滝ならともかくこの辺りの川の水が、そんなに多いわけないわ」

「……セリアはアスメリ村から来たの？」

「そうよ。あの滝は、龍神さまの力が一番強いところ。雨が降ってなくなったら、水は常にある。だけど、この辺りの川は……」

水が多いわけない、とセリアはもう一度言った。
エデが遠くを睨むような顔をする。

「……ここら辺、魔物も野生の動物も少ないから。子供が川によく水を汲みに来るんだ。ステルダには井戸が二つしかない」

所によって、川に汲みに行った方が早いのだ。
その言葉に、ルーシエルの顔が青くなる。

（ってことは、川に水を汲みに来た子供が……）

落ちたのかもしれない。

「もうすぐ、川に着く。そうになったら、あたしが術で子供を助ける……あ、れ？」

エデの走る速度がだんだん遅くなっていく。ついには、ぺたりと地面に座り込んでしまった。

「な、何でだろ。急に疲れて……」

エデは小さく、術らしきものをつぶやく。真っ白な光が出て、エデの顔は楽そうになった。
だが。

立ち上がってしばらく走ったかと思うと、また座り込んでしまう。

「な、何で？ ル、ルーシエルとセリアは先に行ってて」

エデの様子が気にかかったが、子供の方が優先だ。そのままセリ

アと走り続ける。

「……ルーちゃん、どうやって子供を助けるつもりなの？ まだ落ちたって決まったわけじゃないけど」

それはもちろん泳いで、と言おうとして水に触ってはいけなことを思い出す。それに、ルーシエルの体力では子供を助けることができないかもしれない。

ルーシエルがそう考えたのかわかったのか、セリアは走りながら首を振る。

「体力の心配はいらないと思うわ。ルーちゃん、全く息が切れてないから。……魔女だから、なのかな？」

「多分ね」

そう言いながら、ルーシエルは迷っていた。

体力の心配はない。だが、子供を助けるために川へ入ったのなら、『幻影』の術は解けてしまう。

（……魔女だって、ばれちゃうのか）

クロードはもう見えないほど遠くにいる。術が解け、エデに見られる前になおすのは無理だろう。そうなると、エデと友達ではいられなくなるのではないか。

川に子供なんて落ちていないかもしれない。だが、絶対とは言い切れない。

もし魔女だつてばれても、とルーシエルは思った。

もし魔女だとばれても、子供を見捨てることなんてできるはずがない。

第二十三話 川の音（後書き）

ステルダの観光、短かったですね……。本当はもっと長かったはずなのですが。

第二十四話 感謝（前書き）

セリアの性格が変わってしまいました……。どうしてこうなったんだろう。

第二十四話 感謝

ルーシエルなら、正体がばれたとしても子供を助けるだろう。それは最初からわかっていた。

エデがいれば、ルーシエルが子供を助けなくてすむのに。

見知らぬ子供よりも、ルーシエルの方が大切だと思うのはおかしいだろうか。

（どうしてディーちゃんは、急に疲れちゃったの？）

その前までは、疲れた様子などなかった。それなのに急に座り込むほど疲れてしまったのは、どうも変だと思った。

誰かがルーシエルの正体を、エデにばらそうとしているような。

「……川が近いわ」

こんなに音が大きいのも変だ。やはり、誰かが何かしたとしか思えない。

だが、何のためにそんなことをするのか、どうしてこんなにぴったりと、ルーシエルがここににいるにできるのか。

それがわからない。

「誰か！ 誰かいませんか！」

少年の焦ったような声に、はっと我に返る。

この声は川の中にいる者が出す声ではないから、おそらく子供は二人いたのだろう。

「やっぱり、子供が……」

ルーシエルはそうつぶやいて、子供の声に答える。

「もうすぐ行くから待ってて！」

「！は、早く！ トニーが川に！」

川を見たセリアは目を疑った。

川は氾濫していた。

音を聞き、もしかしたらと思っていたが、実際に氾濫していると
は思っていなかった。雨なんて降っていないはずなのに、なぜ川が
氾濫しているのだ。

ルーシエルではなく、自分が助けられるのではという希望は呆気な
く打ち碎かれた。

丁度良く掴まれる木があったのか、川に落ちた子供はそれに掴ま
っていた。そして丁度良く、ルーシエルが近づいた時に川の勢いが
弱まる。それでもセリアのような子供は入れない。

（誰か知らないけど……こんなあからさまにやるな！）

ルーシエルが聞いたらしばらく固まりそうな言葉づかいで、セリ
アはこれをやった人物を罵る。

（やるならやるで、もっとわからないようにやれ！ これをやった
人はどんだけの馬鹿！？ それとも、わざとわかるようにしてるの
！？ どんな理由があるにしたって、私は絶対に許さない！）

もうこれは、誰かが何かしているに違いない。セリアはそう確信
した。

(もし会ったら、ぶん殴ってやる!)

こんなことをする者に、容赦は必要ない。こんなに頭に來たのは生まれて初めてだ。

セリアは右手を握り締めた。

もし会ったら殴ってやる、というのと自分は何もできないというやるせなさに。

「ルーちゃん……ごめんね」

「? セリアが謝る必要ないよ」

子供を助けた後、エデや子供がどんな反応をするか。それを考えたのか、ルーシエルの笑みはどこか寂しそうだった。

「助けてください!」

真っ青になっている少年の、助けを求める声。それに大きくうなずいてから、ルーシエルは川に飛び込んだ。

＊ ＊ ＊

女の人がアーサーの言葉にうなずいて、アンソニーを助けるため川に飛び込んだ。

(え? 髪の色が……変わっ、た?)

黒い髪。泳いでいるその人の瞳を、目を凝らして見る。瞳の色は黒。

御伽噺でしか聞いたことがない色に、思わず口から情けない悲鳴

が漏れた。

（魔女！？ な、何でこんな所に……！）

魔女の話は、母からよく聞いていた。残酷で、魔法というもので人間を見た途端殺してしまう。

術と似ているが、全く別のもの。

（トニーが殺される！）

アーサーは、自分がまだ生きていることに何の疑問も持たない。母から聞いた話が本当なら、アーサーはとっくにこの世にいないというのに。

（トニーを助けなきゃ……！）

魔女がアンソニーを殺してしまう。

彼女が今、そのアンソニーを助けようとしていることなど、アーサーの頭にはなかった。

周りを見て、何かないかと探す。

（あつ）

アーサーが投げられそうな大きさの石を見つけた。それを手に握ると、急に少女の声がした。

「投げるつもり？」

少女がここにいることに気付いていなかったアーサーは、目を見開いた。

声を出せなくなっている自分を、少女は睨みつけてくる。

「……あなたがその石を彼女に投げると、あの子を助ける人はいなくなるわよ」

少女の指差した方を見ると、魔女がアンソニーを抱えて川を泳いでいるところだった。

「それでも投げるの？　まあ、投げたら投げたで、私もあなたに石を投げるけど」

少女はアーサーから視線を逸らし、地面に落ちていた石を拾った。

「な、何で君は魔女なんかの味方をするの？」

「……次に魔女『なんか』なんて言ったら、石投げてぶん殴るから」

何だかアーサーには、魔女よりこの少女の方が怖く感じた。涙目になって、何度もうなずく。

「もう言わな」

「ルーちゃん！　平気？」

アーサーが最後まで言い切る前に、少女はいつの間にか川を出ていた魔女に、心配そうにかけよった。その豹変ぶりに、思わず啞然としてしまう。

（僕にはあんな態度だったくせに……）

確かに、ほんの少しはアーサーも悪かったかもしれない。だが、自分と魔女への態度が変わりすぎではないだろうか。

「お兄ちゃん！」

涙でぐしゃぐしゃになった顔で、アンソニーはアーサーに抱きついてきた。

とりあえず大事な弟が無事で良かった、とアンソニーの頭をなでてやる。

「……セリア。僕の髪と瞳、もとに戻ってるよね」

綺麗な声で、そう言った魔女。チラリと見ると魔女は寂しそうだが、すっきりしたような顔をしていた。

魔女もこんな顔をするのか、と驚いた。母に聞いた話では、いつも魔女は悪者。必ず人間を殺し、最後には封印されていた。

だがこの顔を見て、もしかして魔女は髪と瞳の色以外人間と変わらないのではないかと思った。

「後悔してるの？」

「ううん、全くしてない。その子を助けられたからね」

そうだ、この魔女はアンソニーを助けてくれたのだ。魔女だろうが何だろうが、それは事実だ。

「……あ、あの！　ありがとうございます！」

ぺこりとおじぎをすると、二人の驚いたような気配が伝わってきた。

「……どういたしまして」

なぜか魔女ではなく、隣にいる少女が返事をする。

「何で君が？」

「ルーちゃんは驚いて、何も言えないみたいだから」

やはり、魔女だって人間なのだ。

そのことに安心して、今度は魔女の顔を見てお礼を言う。

「ありがとうございました。……えっとルーさん？」

「へ。い、いや、あの。そんなにお礼言わないで！ 照れるから……」

顔を背けたルーの顔は、真っ赤になっていた。

「それから、ね。僕はルーじゃなくてルーシエルだよ。ルーちゃんって呼ぶのは、セリアだけ」

セリアというのは、この少女なのだろう。名前を間違えてしまったことを、慌てて謝った。

「す、すみません！ ルーシエルさんと、セリアですね」

「……何で私は呼び捨てなの？」

「だって君は、僕と同じくらいの歳だから」

アーサーは十三歳だ。セリアがアーサーよりも年上だとは思えないし、ルーシエルに対してのように感謝もしていないので、別に呼び捨てでもいいと思ったのだ。

セリアは不満げな顔で文句を言う。

「歳で人を判断するのはよくないわ。それに、私が止めなかったら

あなたはルーちゃんに石を投げてたでしょ？　ルーちゃんに感謝して、私には感謝しないの？」

まだ石を手にとっていたことに気付き、遠くに投げた。これをルーシエルに投げなかったのはセリアのおかげだから、一応お礼を言っておく。

「ありがと、セリア」

「……感謝の気持ちが伝わってこないけど、まあいいわ。それより、早く帰った方がいいんじゃない？　その子、寝ちゃってるから」

セリアに言われてアンソニーを見ると、疲れたのかすやすやと眠っていた。

頼まれていた水汲みはできそうになくて、アーサーは弟を背負って転がっていた容器を持つ。

「ありがとうございました！」

もう一度お礼を言って、アーサーは歩き出した。

自分の名を伝えていないのに気付いたのは、家に着いてからだっ

＊ ＊ ＊

少年が去ってからしばらくし、エデがようやく川にたどり着いた。川が氾濫しているのを見て目を丸くし、ルーシエルを見てもっと目を丸くする。

彼女の言葉を聞きたくない。だが、聞かないといけない。ルーシエルは耳を塞ぎたくなるのを、目をつぶって我慢した。

どんな言葉が出てきたって、泣いたりしない。そう考えていても

怖くて、目をつぶったまま彼女の言葉を待つ。

「……ルーシエル？」

第二十四話 感謝（後書き）

トニーとはアンソニーの愛称です。

今回、一番アーサー視点が多かった……。

第二十五話 笑顔（前書き）

どうしたらタイトルが思いつくのか……。。

第二十五話 笑顔

「――ぷっ」

エデから出たのは、そんな笑い声だった。

「エ、エデ？」

わけがわからず、呆然として彼女を見る。ルーシエルの声に、エデは答えず笑い続けるだけだった。

隠していたことを、怒っていた。そして、魔女である自分を封印すると思っていた。

エデはなぜ、笑っているのだろう。ルーシエルが魔女で、それを隠していたのがそんなにもおかしかったのだろうか。

「……ルーシエル、隈がすご……っ」

そう言っ、また笑いを堪えられなくなったのか笑いだす。セリアも改めてルーシエルの顔を見て、吹き出した。

「え？ え？」

そういえば、今日が楽しみで眠れなかった。そのせいで隈ができたのかもしれない。だが、瞳の色を確かめるため鏡を見た時、ルーシエルの顔に隈はなかったはずだ。

そこまで考え、クロードが『幻影』の術をかけた際、一緒に隈も隠した可能性に気付いた。気付いた途端、先ほどの少年にも隈で変になった顔を見られたのか、と今更ながら恥ずかしくなる。

「セリア、あの子たちに見られちゃったかな!？」

「大丈夫、きっと気付いてなかったわ。私もディーちゃんに言われて気付いたから。……ディーちゃんが、どんな反応をするか心配で」

まさかこんな反応だとは思わなかった、とセリアは笑いながら言った。

(……魔女だって、気付いてないわけないよ、ね?)

だって、ルーシエルの髪は黒に戻っているのだ。瞳の色は自分ではわからないが、髪が戻ったのなら瞳も戻っているはず。

それなのに、なぜエデはそのことに触れないのだろう。限のことに気が取られているとしても、こんなに長い間。

ルーシエルが魔女だと気付いていないはずがないのだ。

尋ねるのが恐ろしくても、尋ねなくてはいけない。ルーシエルはおそろおそろ、エデに尋ねた。

「エデ……。僕が魔女だってこと、気付いてるよね？」

「うん、それが？」

けろりとエデは言った。そう返されるとは思っていなかったルーシエルは、驚いてしまった。

「それが? って……。どうも思わないの?」

「……魔女だからって何? あたしはルーシエルのこと、友達だと思ってるけど?」

ルーシエルは違うのかな? と笑うのをやめ、ルーシエルを睨みつけて言う。

「あたし、本当は魔女も魔物もあんまり封印したくないんだ。ルーシエルは友達だし、余計にだよ？　それとも、ルーシエルはあたしに嫌われたかったのかな？　封印されたいならあたしも、正式な依頼としてルーシエルを封印するけど。ルーシエルがそうしてほしいのならしょうがないもん」

これは相当怒っているようだ。

(怖い……)

怒っているエデは恐ろしくて、ルーシエルの目には涙がにじんできた。これなら普通に嫌われた方が数百倍いい。

ルーシエルが涙ぐんでいることに気付いたのか、エデはぼつが悪そうな顔をした。何かを言おうとしているのか、何度か口を開けそのたびにまた閉じている。

「……ああもう！　あたし慰めるのとかすっごい苦手なんだから！　だから泣くな！　これ以上泣くなら、容赦なしに封印する！」

それは嫌だ、と慌てて涙をとめようとする。ノギスともセリアとも、もちろんエデとも、もっと一緒にいたいのだ。セリアへの贈り物を買うのだってまだしていない。

そんなことを考えられることに少しだけほっとして、涙は自然に止まった。

そこでふと、本来ならここにいるはずのクロードの姿がないことに気付いた。

「……あれ？　そういえば、クロードは？」

「多分クロード……もうめんどいからクロードでいいや。クロードはもうすぐ来るんじゃないかな？　あの子は走るとすぐ転ぶからさ。」

それで遅いんだよ」

昔から何も変わらない。そう言って、エデは笑った。

「クロードって真面目だから、からかうの面白いんだ。ルーシエルをからかうのも面白そうだけど」

「……僕、からかわれるの嫌いなんだけど」

この間ノギスにまで面白がられていたと知り、少し落ち込んだのだ。正直に言くと、からかわれるのは嫌いだ。

「だってさ、セリア」

「知ってるわ。だけどルーちゃんは、絶対に私を嫌ったりしないから、安心してからかえるの」

否定できない。ルーシエルがセリアが嫌うなど、髪の毛が黒くない魔女ほどありえないのだ。

自分で考えておいて、髪の毛が黒くない魔女などいないだろう、と突っ込んでしまった。もしセリアが心を読めたのなら、ルーちゃんが一人突っ込みしてるーとからかわれたはずだ。

「……あ、何だか今、心を読めなくなったことがすごく残念だわ」

「セリア、君本当に心読めてないの？」

「巫女の勘ね」

巫女の勘はすごい、と素直に感心してしまう。心を読めなくなつて、ほとんど読めてしまうではないか。それとも元々心を読めた、セリアだからなのだろうか？

「……アスメリ村から来た……み、こ？　ってことは、セリア偉い

人!？」

ルーシエルが魔女だと知った時よりも、セリアが巫女だと知ったときの方が反応するのか。

慌てふためくエデに、セリアはさらりと肯定した。

「そうよ。それがどうしたの？」

「え、え？　それがどうしたのって……。いや、セリアはセリアだよ？　だけど巫女って……？」

エデの困ったような顔を見て、セリアは唇を尖らせた。

「ルーちゃんの時はそんな反応しなかったのに……。ディーちゃんは私のこと、友達だと思ってないのね」

「ごめんごめん。セリアも友達だって。ただちょーっとびっくりしたかな？　ってだけ」

そうエデが謝るも、セリアはまだ不満そうだ。つーんと顔をエデからそむけた。

「……あ、クロ君。やっと来たのね」

セリアの向いた方を見ると、服が汚れたクロードがよたよたと歩いてくるところだった。走るよりも、歩いた方が速いと思ったのだろうか。

「遅くなってすまない」

本当に申し訳なさそうにするクロードに、三人は顔を見合わせうなずいた。

「遅すぎだよ！」

「おっそすぎ！」

「遅すぎるわよ」

考えてたことは同じらしい。見るからに落ち込んでしまったクロードを、三人で睨む。

本気ではないが。

「……クロード、僕はそんなことじゃ怒らないんだけど？」

「あたしだって。慣れてるからね」

「私たち、ただクロ君で遊んでいただけよ？」

それを『ただ』と言ってしまふセリアはすごい。それに、ルーシエルを二人と一緒にしないでほしい。

ルーシエルは遊んでいたのではなく、ただクロードの反応を見て面白がってるだけなのだ。

「ルーちゃん、それ、遊んでるのと同じ」

もはや、セリアが心を読めないのに心を読まれてしまうのを疑問に感じなくなってきた。エデは何のことだかわかっていないようだった。

「……？」

クロードが眉をひそめる。まだ自分が遊ばれていたことに気付いていないようだった。

いい加減気付いてもいいだろうに。少し呆れてクロードを見る。

「……ま、いっか。クロード、僕とセリアを洞窟に送ってくれない？
もう遅くなっちゃったし」

子供を助けたりクロードを待っている間に、もう夕方になっていた。

エデが何かに気付いたように「あ！」と叫んだ。

「ルーシエル、人と会う約束してたんじゃない？」

「う……ごめん、それ嘘なんだ。クロードにかけてもらった『幻影』の術は、水に触ると解けちゃうから、川には行けなかったんだ」

そう言うと、エデは納得の声を上げる。

「だから髪が黒に変わった……っていうか戻ったんだね。ふむ、未完成の『幻影』の術、か。クロード、長老に報告してないのかな？」

その言葉に、クロードは「うつ」とうめいた。

「どうなのかな？」

「……完成するまで、長老さまには報告したくなかったのだ」

術を作ったら、いちいち長老という人に報告しなければならぬのか。何て面倒なのだ、とルーシエルは思った。

「あたしが知ったからには、絶対長老に報告してもらおうから。ってことで、クロード、早く二人を送ってあげてね」

とてつもなく嫌な顔をするクロード。そこまで嫌なのか、と少しクロードがかわいそうになった。嫌なことを無理やりやられる思

いはわかつている。ルーシエルも、大嫌いな勉強をしなければカリマに怒られてしまったのだ。

「じゃ、また明日……セリアには内緒でね？」

最後にこっそりと付け加えられた言葉に、笑顔でうなずく。

「そろそろ行くぞ。近寄れ」

不機嫌なクロードに近づくのは少しためらったが、このままでは帰られないので言われた通り近づく。セリアはルーシエルのようにためらったりせず、普通に近づいていた。

不機嫌だからか、クロードはいつもより大声で術を唱える。

「It's 6 S！」

真っ白な光を見て、やっぱり綺麗だとルーシエルは思った。

第二十六話 買い物(前書き)

短いですが、明日更新できそうにないので投稿です。

第二十六話 買い物

ステルダの市場で、ルーシエルは真剣な顔でセリアに贈るものを選んでいた。セリアには「ちょっとエデと約束があるから」と上手くごまかした。全く上手くごまかせていないことを、ルーシエルは気付いていない。

ノギスにはかわいそうだが、今日も洞窟で留守番してもらっている。

そんなことよりもルーシエルが不安なのは、エデとは別々に買うことになったから、一人で選ばなければならないことだ。買った後、広場で会う約束をしている。

幸い、千年前とお金は変わっていなかったから、ルーシエルでも普通に買い物ができるのだ。

銅貨、銀貨、金貨の順に価値が高くなっていく。銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚で金貨一枚としても覚えやすい。それより高い場合は、紙幣になる。だが普通の市場などで使うと、ただの嫌がらせになってしまう。紙幣一枚で、金貨五十枚分の価値があるのだ。なぜこれだけ十枚ではないのか、と不思議に思うが、そう決まっているのだから仕方がない。これは全て、カリマに教えてもらったことだ。

今手元にあるのは金貨一枚。ルーシエルはお金を持っていないため、エデからもらったのだ。金貨が一枚あれば大抵のものが変えるが、それによって何をかうか悩まされている。

（セリアぐらいの歳の女の子って、何がほしいんだろう？）

ルーシエルの歳の十分の一にも満たないのだ。ルーシエルが十二、

三歳だったときのことなんて覚えてはいるはずがない。

市場にはちらほらセリアと同じ年頃の少女がいるが、怪しまれるのが嫌でなかなか話しかけられない。それに、いくら術で髪と瞳の色を変えていると言っても、何かの拍子に魔女だということがばれたらと思うと。

せめてエデがいればよかったのだが、とため息をついた。

別々に選んだ方が自分たちにとっても面白い、と何も考えないでそうしてしまったことを後悔する。

「あれ……？ ルーシエルさん？」

自分の名を呼ぶ声に振り向くと、そこには昨日の少年がいた。そういうえば名前を聞いていなかった、と思いながら知り合いを見つけたことに安心する。

少年は不思議そうに首をかしげた。

「どうしてここに？」

「セリアが明日誕生日なんだ。それで贈り物を買いに……というか、あの川で会ったのならここにいたっておかしくないんじゃない？」

「でも、その……。ルーシエルさんみたいな人は、人間がたくさんいる所に来ないかと思って」

魔女、と言わなかったのは、周りの人間に聞かれることを危惧していることだろう。

「まあ、僕も本当はあまり来たくないんだけどね。だけど、セリアにどうしても、いつもの感謝の気持ちを伝えたくて」

少し照れながら言う。

セリアには感謝してもしきれない。初めての人間の友人だし、何

より彼女のおかげで毎日が楽しいのだ。

今回の贈り物で、その感謝の気持ちが少しでも伝わってくれればいいな、と思う。

「あ、だったらいいものがありますよ」

「いいもの？」

少年がそう言って歩き出したので、後をついていく。そろそろ名前を訊きたいのだが、どう切り出そうか。

「えっと……君の名前、そろそろ教えてくれない？」

「！ す、すみません。昨日は助けてもらったのに、名前も言わずに。帰ってから気付いて……」

少年は慌てて謝った。

「僕の名前はアーサーです。みんなにはアートって呼ばれています。えっと、助けてもらった弟はアンソニーで、僕はトニーって呼んでいます。呼びやすいほうで呼んでください」

「じゃ、アートとトニーだね」

セリアだったらアーサーのことを、『アー君』と呼びそうだ。アンソニーは……『アン君』だろうか。彼女が人の名前を短くする時、最初の二文字をとることが多い。でもアンソニーのアンだと、女の子の名前みたいになってしまうな、とどうでもいいことを考える。

そんなことを考えている間に、アーサーは目的の店に着いたようだ。彼が止まったので、自然と後ろを歩いていたルーシエルも立ち止まる。

「ちょっと高いですけど……。最近の女の子に人気だそうですよ、この指輪。宝石を使っている割には安いですし」

指輪だったら、贈り物にも丁度いい。そう思って値段を確認してがっかりする。

金貨一枚半。

あと銀貨が五枚たりなかった。宝石を使ってこの値段なら確かに安いのだが、ルーシエルが持っているお金では買えない。

（とりあえず、どんなのが女の子に人気なのだけでも見ておこう）

ため息をついて指輪を一つ一つじっくり見ていくと、一つの指輪に目が引き付けられた。

「これ……」

思わず手に取ると、おばさんが話しかけてきた。店の人らしい。

「それは青玉^{せきぎよく}の指輪だよ。気に入ったかい？」

「青玉？」

青玉はセリアの瞳と、少し違うがよく似た色をしていた。

じっとその指輪を見つめて、その場を離れようとしないうるしエールに、おばさんは苦笑する。

「相当気に入ったみたいだね……。そんなに気に入ったなら、譲ちゃんには特別に金貨一枚で売ってやろう」

「本当ですか！？ 良かった……。僕、金貨一枚しか持っていなかったんです」

気前のいいおばさんに、ルーシエルは顔を上気させて何度もお礼を言う。ルーシエルが持っているお金と、ぴったり同じ額にしてくれるとは。何て運がいいのだろう、と嬉しくなった。

「はは、そんなに喜んでくれるとはね」

「本当にありがとうございます！　これ、お金です」

金貨を差し出すと、おばさんは大事そうにそれを受け取った。

「まいどあり。……誰かへの贈り物かい？」

「そうですけど……」

どうしてわかったんですか、と問うルーシエルにおばさんは笑って言う。

「譲ちゃんみたいな子は、自分のためにこんなものは買わないからね。少し待っていてくれ。綺麗に包装するから」

時間は気にしなくともいい。

ルーシエルはうなずいて、鼻歌を歌いながらおばさんが指輪を包装するのを待つ。歌なんて知らないから、適当に自分で作る。それくらい、今のルーシエルは機嫌が良かった。

「ほい、お待たせ」

「ありがとうございます！」

そんなに礼を言わなくていいよ、とおばさんは少し顔を赤くする。照れているらしかった。

もう一度「ありがとうございます」と言って振り返ると、そこにはまだアーサーがいた。

「あれ、アートまだいたんだ？」

「いえ……その、セリアに僕がおめでとうと言っていたと、伝えてください」

それだけです、と逃げるようにしてアーサーは走っていく。

どうしてそんなに慌てるのかわからなくて、ルーシエルは首はかしげた。

（まあ、いっか。そんなことより……）

早く、エデと何を買ったのか教えあいたい。

ルーシエルは笑顔で、広場への道を進んでいった。

第二十六話 買い物（後書き）

今回、少しお金の説明をいれました（少しではないですかね？）。
話に関係はないので、別に覚えなくとも平気です。

第二十七話 幸せ

ルーシエルは、自分のためにどんなものを買うのだろうか。

昨日別れる前にエデと約束がある、と言ったのは、十中八九セリアへの贈り物を買に行ったのだろう。

（それで間違えてたら、悲しいけど）

そんなことを考える。

洞窟に行かないと言ってもあの家にいるのは嫌で、セリアは今滝へ来ていた。ここにいと落ち着く。相変わらず大きな音だ、と滝を見上げた。

ここの上にはまだ行ったことがない。数日後には、嫌でも行くことになるが。

（……龍神さまは、やっぱり答えてくだらないのね）

最初から答えてもらうのは諦めていたが、それでも残念だ。

「龍神さま」

小さく呼ぶも、辺りに響くのは滝の音だけ。

（龍神さま、龍神さま、龍神さま、龍神さま……）

何度も何度も、心の中で龍神さまを呼ぶ。そうすれば、龍神さまが答えてくれるのではないかと思ったからだ。

あの夜のように、もしかしたら小さな声が聞けるかもしれない。どうせ答えがこないと諦めていても、希望は捨てきれなかった。

「……我が巫女よ。私の声が聞こえるか？」
(え……?)

誰に呼ばれたのかわからず、目をまたたく。いや、わかってはい
るものの、信じられないのだ。

一瞬遅れて誰の声だか理解し、セリアの目には涙が浮かんできた。
龍神さまの声。

ずっとずっと、セリアが聞きたかった声だ。

「龍神さま！」

龍神さまが心が読めるから、別に声に出さなくてもいい。だが、
声を出さずにはいられなかった。久しぶりに聞いた声は、やっぱり
少しも変わっていないくて。嬉しかった。またこの声を聞ける。

それに、龍神さまが無事なのなら、セリアはルーシエルたちとず
っと一緒にいられるのだ。

「龍神さま、なぜ私の声に答えてくださらなかったのですか？」
「……すまぬ」

セリアの問いに、龍神さまはそう謝ったきり答えない。

しばらく迷ったような気配の後、真剣な声で龍神さまは言った。

「我が巫女、そなたに伝えなくてはならないことがある。我は今、
ある者に捕らえられて……もう限界か」

ぽつりとつぶやかれた言葉の、意味がよくわからなかった。限界
だ、と言った直後に龍神さまの声が聞きづらくなる。

「我には、何もでき……。そな……。そん……。いがば……。る……。ぎ……」
「龍神さま？」

「わがみ……。せっか……。う……。でき……。いうの……。すまぬ」

すまぬ、と。

それだけが、やけにはつきりと聞こえた。

また、龍神さまの声が聞けなくなるのか。ルーシエルたちと一緒にいられなくなるのか。

そう考えると怖くなって、先ほどとは違う涙が目溜まってくる。

（捕らえられて……。？）

確かにそう言っていた。

捕らえられていたとは、どういうことだろうか。ある者に、とはつきり名前を自分に伝えなかったのは、なぜだろう。

（……龍神さまが捕らえられるなんて）

相手は相当力の強い者だ。龍神さまは、自分より上位に位置する神にしか、捕らえられたりしないはずなのに。

だがそれはありえない、とその考えを否定する。

神が捕らえたのならば、雨を何カ月も降らせないのはおかしい。龍神さまの代わりの神を用意するだろう。

セリアには納得できないが、何らかの理由で捕らえられた神がいた場合、代わりの神を用意するのだ。

龍神さまは、自分が三代目の龍神だと言っていた。龍神さまが捕らえられる可能性も、全くないわけではない。

（だけど……）

代わりの神が、用意されないはずがないのだ。

（どうということなの？）

神ではない。だが、神ではないとしたら一体誰が？ 頭の中で、疑問が渦巻く。

明日、せつかくルーシエルたちが誕生日を祝ってくれても、あまり喜べないかもしれないな、と思った。

＊ ＊ ＊

セリアが滝で、龍神と話していた時。

ルーシエルは広場でエデと、買った贈り物を見せ合っていた。

「へえ、エデはチョコレート買ったんだ？」

意外に思っ、エデの持っているチョコレートを見つめる。贈り物とは普通、後で残るものかと思っていた。食べ物は食べてしまえばなくなるし、花などは枯れてしまう。だから、贈り物には適さないと思ったのだが。

エデは恥ずかしそうに言った。

「あたし、チョコレート好きなんだ。チョコレートって結構貴重だし、セリアは食べたことないかなって思っ。……あ！ でも、セリアは巫女だから食べたことあるかな！？」

せっかく買ったのに……と、がっくりと肩を落とす。

チョコレートは貴重で、ルーシエルも滅多に食べられなかった。それでも、少しでも食べられたのはカリマのおかげかな、と思う。どこでいつ買ったのかわからなかったが。

落ち込んでいるエデを、どうやって励まそうか考える。

「うーん、買っちゃったなら、渡せばいいんじゃない？ セリアなら、きつとどんなものでも喜んでくれると思うし」

「そうかもしれないけど！」

「それに……セリアは、食べたことないと思う」

絶対、とは言い切れないがおそらくそうだろう。

セリアは、生き物の心が読めた。巫女というのは偉いらしいが、そうだとしてもその力のせいで、恐れられていたのではないだろうか。

そう考え、そういえばエデは知らないのだ、と気付いた。

「あのね、セリアは生き物の心が読めたんだ。今はもう、読めなくなっちゃったけど」

「心を読む？ ……なるほど、そういうことか。このチョコレート、喜んでくれそうだね」

納得して、手に持っているチョコレートを嬉しそうに見るエデ。

「神の加護。何百年に一度はいるらしいけど。その加護を受けた者は、特別な力がある。セリアの場合は、生き物の心を読める力、かな？」

「加護って……。そのせいで、セリアは辛い思いをしたのに」

護れていないではないか。これでは、加護の意味がないと思う。

「結局は、神の自己満足なのさ。あたし、だから神があんまり好きじゃないんだよね」

エデは、どこかを睨むような目をした。

「……ま、セリアが食べたことないならいっか。ルーシエルは指輪買ったんだね。セリア女の子だし、そういうの絶対喜ぶよ」

そう言われ、何だか嬉しくなる。セリアが喜ぶ。それだけで、こんなに嬉しくなるのが不思議だった。これが友達——友人というものなのか。

エデの誕生日の時は、セリアと二人で祝おう。
そう考えるだけで、今からわくわくしてくる。

「……あ、エデの誕生日っていつ頃？」

「ん？ もう過ぎたけど？」

「過ぎた!？」

それでは、あと約一年もエデの誕生日を祝えないのか、とがっかりする。

(……一年経てば、祝えるのか)

その先も、セリアやエデが死んでしまうまで。
幸せ者だな、と思う。ルーシエルは、二人がいなくなった後もノギスと共に生きる。それでもそれまで、ずっと一緒にいられるのだ。
それは、すごく幸せだ。

「考えてみたら幸せだよね、僕って」
「何さ、いきなり？」

きよとんとするエデに、理由を言うのが何となく嫌で、ルーシエルは首を振った。

「ううん、何でもない」

「そう？ あ、明日クロードを迎えに行かせるから、セリアと一緒に来てね。ちゃんと、あたしが場所用意しておくから。クロードが案内してくれるよ」

どこ、とははっきり言わない。

だが、とりあえずクロードが案内してくれるのなら、心配はいらないだろう。

ルーシエルはうなずいて、明日のことを考え出す。封印される前は、こんなことを考える日が来るとは思っていなかった。

(……あの人間たちは)

幸せになれますように、と。そう願っていた。

この間、その願いを少しは叶えることができるのかもしれない、と考えたが。

今のルーシエルは、今まで生きてきた中で一番幸せだった。

第二十七話 幸せ（後書き）

明日頑張って投稿します！

昨日投稿できなかったの……。

第二十八話 青玉の指輪（前書き）

タイトルが……。思いつかないです。他の作者の方は、どうやって考えているのでしょうか？

第二十八話 青玉の指輪

翌日、ルーシエルはクロードと、セリアが来るのを待っていた。ノギスは今日も一緒にいけないということで、しっぽをぱたぱたとしている。

（ノギスも、セリアの誕生日と一緒に祝いたいよな……）

一応、ノギスもセリアのことを、少しは大切だと思っているのだろう。それなのに誕生日を祝えないなんて、彼がかわいそうだ。

（そういえば、エデにまだノギスのこと話してないんだっけ）

エデにノギスのことを話したら、絶対に連れて来いと言うだろう。ルーシエルは怪しまれたくなくてそうするのだが、エデはそんなことを気にしないと思う。ルーシエルだって、できればノギスを連れて行きたいのだが……。

（……セリア、遅いな）

もうそろそろ、太陽が真上に来る。いつもはもっと早いのに。何かあったのではないかと心配になってしまう。

時々セリアは用事があつて、いつもより遅い時間に来ることがあるが、今回もそうなのだろうか。

セリアが遅くなる時、何だか彼女は暗い顔をしている気がする。ルーシエルの気のせいかもしれないが、彼女の誕生日にまでそんな顔をしてほしくない。

クロードが、洞窟の外を見ながら言った。

「……あいつが、ここに来ないことはあるのか？」

「ないけど……あ、でも一回あったな。僕とセリアが友人になる前」
「だとしたら今日、来ない可能性もあるのではないか？」

あ、と思わず声が漏れる。

「ど、どうしよう！？ もしそうだったら……せっかくエデが場所も用意してくれたのに！」

「……ひとまず落ち着け。もしもそうだったら、明日に変えるよう俺がエデに言うだけだ」

呆れたようなクロードの声で、しゅんとなる。

こんな楽しみにしていたのに、その楽しみが明日までお預けになるなんて。

もしかしたら、自分が楽しみたいからセリアの誕生日を祝いたいのかもしれない。純粋に、今までの感謝の気持ちを伝えたいとも思っているが。

（はあ、何でその可能性を考えなかったんだろう）

自分に怒りたくなってくる。

心の中で自分をけなしていると、ノギスの耳がぴんつと立った。

「あいつの足音だぞ」

彼の耳はすごくいい。ノギスが言うのなら、今セリアはここに向かっている途中なのだろう。

先ほどの気分は綺麗に吹っ飛んで、ルーシエルはまたわくわくしだした。

セリアの姿を見た途端、そのわくわくは最高潮に達した。

「ルーちゃん、クロ君遅れてごー」

「セリア！ 待ってたよ！ さ、クロード。急いで、すぐ、一刻も早く行こう！」

「……それは全て、似たような意味だ」

余計なことを言うクロードをせかして、術を使ってもらおうよう頼む。しぶしぶと、彼は従ってくれた。

「ÿþ6\$……」

「え、そんないきなり！？」

セリアの叫んでいる声がしたが、気にしないことにする。

＊ ＊ ＊

洞窟に着いたら、いきなりステルダの近くの森へつれていかれてしまった。遅くなったことで、ルーシエルの我慢はもう限界だったらしい。これからきつと、セリアの誕生日を祝うのだろう。

それがわかっていたから、そんな気分ではなくとも洞窟へ行ったのだ。だが、来ない方が良かったかもしれない、と思った。

横で話しているルーシエルの話は、少しも耳に入っていない。全て適当に相槌をうっているだけだ。

（龍神さまが……捕らえられた）

頭の中で、何度もそのことを考える。昨日龍神さまと話してから、ずっとそうだ。

あの時、滝へ行かなければ良かった。龍神さまの声が聞けたのは嬉しかったが、あんな話を聞かされては……。この調子では、今日

せっかくルーシエルたちが自分の誕生日を祝ってくれるのに、樂しめそうにない。

「……セリア？ 大丈夫？」

いつの間にか、ルーシエルがセリアの顔をじっと見つめていた。

「やっぱり、セリアが遅くなった後って、必ず暗い顔してるよね？」
「そ、そう？」

ルーシエルに言われ、初めてそういえば、と思った。ルーシエルに会いに行くのが遅くなった時、嫌なこと、気になることが必ずあった。

こんな気持ちで、このままルーシエルたちと過ごすわけにはいかない。

「……ルーちゃん、私ちょっと熱があるみたい。頭が痛いし、何だかぼーっとするの」

「熱！？ 大変だ、クロード、すぐに洞窟に送って！」

慌てるルーシエルを見て、心の中が罪悪感でいっぱいになる。本当は熱なんてないのに。

「わかった」

クロードも、セリアの言葉を少しも疑わずにうなづく。

この二人は、どうしてこんなに真面目で、素直で、優しいのだろうか。セリアは悲しくなってきた。ここにいないエデだって、真面目ではないにだって素直で優しい。

(もうすぐ、お別れか)

「ÿ6\$!」

何だかあせっているような、クロードの術を唱える声が、セリアの心でつぶやいた言葉に重なる。

(クロ君、私のこと少しは心配してくれてるのかな?)

そうだったら嬉しい。クロードもノギスも、セリアのことをあまり好きだとは思っていない気がするから。

セリアは大好きなのに。ルーシエルもノギスも、クロードもエデも。

いつの間にこんなに好きになっていたんだろう、と真っ白な光の中で思った。

＊ ＊ ＊

熱がある、と言ったセリアが帰るのを、ルーシエルは心配しながら見つめた。ルーシエルの肩の上では、ノギスも心配そうに見ている。

本当なら家まで送っていきたかったが、セリアに断られてしまったのだ。村の誰かに見られたら、怪しまれてしまうからと。

(……何かあったんだよね、あの顔は)

これからセリアがいつもより遅い時間に来たら、何かあったと考えることにしよう。

「……クロード、エデに伝えておいてね。セリアが来れなくなったって」

「わかった。そう伝えておく」

そう答えた声は、早口だった。彼もセリアを心配しているのか、と不謹慎だが嬉しくなった。クロードとセリアが仲良くなったように。

クロードが『移動』の術を唱え、その姿が消える。

（あ……。そういえば、トニーを助けた時）

あの時『移動』の術を使えなかったのだろうか。エデは川へ行っただことがあったようだし、その術を使えば一瞬でアンソニーを助けに行けただろうに。クロードはわからないが。

まあ、結果的にアンソニーを助けられたのでもいいか、と考えることにする。だが、一応今度会った時訊いてみようと思った。

「ルーシエル。やはり、俺はステルダに行ってはいけないのか？」

流石に二日留守番は辛かったようで、ノギスは元気がなかった。

「うう……。そうだよ、ノギスもセリアの誕生日、一緒にお祝いしたいよね」

「べ、別に祝いたいとかは考えていない！」

「はいはい。ま、ノギスもセリアのことを嫌いじゃなくなった、ってことだね。……。僕もノギスを連れて行きたいんだよな。こっそりついてくる？」

そう言うと、ノギスは目を大きくして耳を立てた。余程嬉しいのだろう、しっぽをぴんと垂直に立てている。

「本当だな？」

「うん、絶対」

こんなことで嘘をついても、ルーシエルには何の得もない。ノギスもそれをわかっていているから、嬉しそうにしているのだ。

ノギスは否定したが、本当はセリアの誕生日を祝いたいのだろう。相変わらず意地っ張りだ。

（早くお祝いしたい）

ルーシエルは、そうっと服から指輪の入った箱を取り出した。あのおばさんが綺麗に包装してくれた。だからもったいなくて指輪を見ることができないのだが。

（青玉、見たいな）

この指輪についている宝石は、セリアの瞳とよく似ている。見ていると安心するのだ。

ルーシエルは箱を見て微笑んだ後、取り出した時と同じようにそうつとしまった。

第二十九話 守る（前書き）

タイトル……。。

第二十九話 守る

店の扉を開けると、エデが椅子から立ち上がった。

この店は、エデの両親が経営している。術を使える者は、ある程度歳を取ると普通の職に就くようになるのだ。エデが説明しておいたのか、店は貸し切り状態でエデの両親もいなかった。

彼女はクロードの後ろを見て、誰もいないことに首をかしげた。こいつも楽しみにしていたのにな、と残念に思う。

「あいつ、熱が出たから来れないらしい」

クロードがそう伝えると、エデはほっとしたように、椅子に座りなおした。

「そっか……ルーシエルとセリア、来れなかったんだね」

その声が、いつもと違って震えていることにクロードは気付いた。本人は必死に隠しているようだが、エデのことはよくわかっていづもりだ。幼馴染……というか腐れ縁なのだ。これぐらいわからないはずがない。

わからないのは、声が震えてしまうほどのことがあったかどうか。あの二人が来られないと知った時、なぜほっとしたのか。

エデは今日を楽しみにしていたはずだ。

クロードは眉をひそめて尋ねた。

「どうかしたか？」

「う、うん。何でもないから、クロードはもう帰っていいよ。そっか、ルーシエルとセリア、来れなかったのか」

もう一度同じことを言い、クロードから顔を逸らすエデ。その顔が一瞬緩んだのを、クロードは見逃さなかった。

「そんなにあいづらがここに来ないことが、嬉しいのか？」

「……嬉しいっていうか、ほっとしたかな？ 理由は、言いたくない」

否定しなかったことに、若干の驚きを感じる。

「クロード……。あたしどうしようかな」

振り向いたその顔は、泣きそうに歪んでいた。いや、すでに目には涙が溜まっている。まばたきを一度でもしたら、その涙は零れ落ちてしまいそうだった。

どうしよう、と言われても、理由を言いたくないと言われてしまったは何も答えられない。どう答えようかと考えたが、何もいい言葉は見つからなかった。

しばらくの静寂の後、エデがぽつりとつぶやいた。

「……あたしが理由を言わなかったら、クロードも答えられないよね」

「……」

エデはクロードの目をまっすぐ見つめた。

「ねえ、あの二人のこと、クロードが守ってくれないかな？」

守るとは、どういうことだろうか。

困惑してエデを見ると、彼女は悲しそうに笑った。

「あたしは、守れそうにないから……」
「わかった」

驚いたようにエデは目を見開いた。溜まっていた涙が、ぽつりと落ちる。クロードが即答するとは思っていなかったのだろう。

恥ずかしいが、思っていることを正直に言う。

「俺だって、あいつらを守りたいからな。何で急にそんなことを言うのかは、よくわからんが」

「……守りたいと思ってるなら、ルーシエルとセリアのこと、名前と呼んであげなよ。クロード、一回も呼んであげたことないでしょ？」

そんなことを言えるくらいの、余裕はできてきたらしい。

エデの問いには答えず、クロードは言った。

「俺はあいつらを守る。エデは……守れないのか？」

こんな時だけ笑うなんてずるい、とエデがうつむく。いつの間にか、クロードは笑顔になっていたようだ。

「そんなに、俺は笑わないか？」

「だって、あたしとかルーシエル、セリアの前ではいつも不機嫌そうな顔してるじゃん。眉間にしわ寄せてさ。クロードの笑顔なんて、滅多に見たことないよ」

思わず眉間を、指でこすってしまう。

確かにいつも、眉間にしわを寄せていたかもしれない。ステルダの町人の前では、反射的につい笑みを浮かべてしまうから、エデの前で不機嫌な顔をしていることなど気付かなかった。

この三人の前では気を遣わなくていいから、ついそんな顔をしてしまうのだろう。

「……あたしは。クロードの笑ってる顔見ると安心する。もっと、笑ってて」

今、クロードの笑顔が見てたい。

泣きそうな顔でそう言われ、断ることなどできるだろうか。

「……笑えと言われたら、笑いづらい」

何とか笑みらしいものを浮かべると、エデは不満そうな顔で泣きだした。

「違う……けど、いいや。それでいい……よ」

「何だ、その言い方は」

クロードはそう言いながらも、ずっと作り笑いをしていた。
エデが泣きやむまですっと。

＊ ＊ ＊

家への道を歩きながら、セリアは考えた。

（何だか……本当にぼーっとする）

熱はないはずだが、頭も痛い。こんな気分だから、そんな気がするのだろうか。

自分ではまっすぐ歩いているつもりだが、ふらついてしまう。しかも、足が鉛のように重い気がした。帰りたくないから、こんなに

重い気がするのだろうか。

（帰りたくない）

このまま帰って、もし両親に会ったらと思うと。最近、よく家に来るのだ。

（あの人たち、私のこと疑っている気がするわ）

セリアが出かけているのは、散歩をしているからと話してある。だが、毎回毎回その理由では、怪しまれてしまっても仕方ない。

家が見えてきて、セリアは思わず足を止めた。

アズメリ村のはずれにあるから、村人に会う心配はないはずなのに。セリアを気味悪がって、村人は近寄ることさえしなかったのに。

——武器を持った村人たちが、セリアの家の前に集まっていた。

第二十九話 守る（後書き）

何だか、最近やる気が出なくなってきました……。来週から朝と放課後に体育祭の練習が始まるので、更新スピード遅くなるかもしれません。

第三十話 涙（前書き）

三十話いきました。……もうすぐ終わりそうですが。

第三十話 涙

寝台に入ろうとした時、なぜか胸がざわついた。だが、それを気のせいだと思ってそのまま眠りについたのだ。

だが、この目の前に横たわっている少女は一体……？

「セリ、ア……？」

何だろう、この赤いものは。

どうして、彼女の顔はこんなにも真っ白なのだろう。

どうして――

どうして彼女は、ルーシエルが呼びかけても返事をしてくれないのだろう。

＊ ＊ ＊

「……シエル、ルーシエル！」

ノギスの声に、ルーシエルははっと目を覚ました。周りを見るがまだ明るくなく、どうしてこんな時間に起こされたのだろう、と不思議になった。

自然と閉じてしまうまぶたをこすって、首をかしげる。

「のぎす？ まだあさじゃないよお？」

「あいつが来る」

この場合、あいつというのはセリアだろうか？ それとも、エデ

かクロードか。

誰が来るにしても、こんな時間に来るはずがない。セリアだとしたら、こんな時間に出歩くのは危ないとわかっているし、クロードだったら『移動』の術で来られるのだ。わざわざ歩いては来ないだろう。エデは『移動』の術を使えるかどうかわからないが、彼女だつたらクロードを叩き起こしてでも来そうだ。

だとしたら、セリアしかない。

その異常さに気付いて、眠気は吹っ飛んだ。

「何でセリアが、こんな時間に……」

ノギスにわかるわけがないが、そうつぶやかずにはいられなかった。

「……あいつ、怪我してるみたいだぞ。歩くのが遅いし、ふらつきながらここに向かってる」

「怪我!?!」

暗い洞窟にその声が響いて、ルーシエルはあわてて声を小さくする。

「な、何で……?」

「わからない」

「……もしかしたら」

ルーシエルと会っていることが、ばれてしまったのかもしれない。ルーシエルの顔から、さあっと血の気が引いた。

そう考えたくはなかった。だが、それ以外に『巫女』であるセリアがふらつくほど怪我をするとは思えないのだ。

村人に、何かされたのではないか。

そう思うといっても立ってもいられなくなって、ルーシエルは洞窟を飛び出していた。気付けば、いつの間にかノギスも全力疾走している。

彼も、同じ結論にたどり着いたのだろうか。

「……セリア！」

洞窟からそう離れてない所でセリアを見つけ、思わずほっとして名前を呼ぶ。だが、その様子を見てルーシエルは動きを止めた。

「ル……ちゃ……」

かすれた声。セリアはこちらを見ると、ぎこちなく笑った。ふらふらとルーシエルに近づいてきたと思うと、ぱたりと倒れてしまう。嫌な予感がして、ルーシエルはセリアに駆け寄り彼女の横に膝をついた。

「セリア！」

「だい…じょ……ぶ」

全く大丈夫そうに見えないから、ルーシエルはこんなに心配しているのだ。

セリアは、血まみれだった。顔は生きているのかと疑問に思うくらい、白い。心臓に近い位置には、矢が刺さっていた。頭は何かでなぐられたのか、他の箇所よりも血が多い。これで死んでいないのは、セリアが必死で逃げたからなのだろう。

「ルー…ちゃ、ん…」

どこを見ているのかわからない虚ろな目で、セリアはルーシエルに手を伸ばした。

「何、何？ セリア、どうしたの！？」

その手を掴むとセリアは安心したように微笑む。

「……………」

「聞こえない、セリアもう一回言って！」

セリアの唇の近くに耳を寄せると、セリアはゆっくりと口を動かした。

「わたし…し、ルー…ちゃん…とあえ、て」

「うん、うん」

「しあわ…せ、だ……ったわ」

「だったって何！？ そんな死んじゃうような言い方、やめてよ…
…。まだこれから、いっっぱい話して、遊んで……」

もつともつと幸せになるのだ。エデとクロードもノギスも。四人と一匹でもつと——幸せになるはずだったのに。

もうセリアは助からない。

それを理解してしまって、ルーシエルは顔を歪めた。

「僕を……置いていかないで、セリア……」

いずれ置いていかれるのは、わかっていた。魔女と人間の寿命は全く違う。人間の方が早く死んでしまうのは、当然のことだ。

だが、それがこんなにも早くおとずれるとは思っていなかった。

「な……か、ない……で」

もう一方の手を伸ばし、セリアはルーシエルの頭をなでた。

そうか、自分は泣いていたのか、と初めて気付く。それがセリアの頼みならどうやっても涙を止めよう、とぎゅっと目をつぶる。

「あ……血が……つい、ちゃ……ね」

「いいよ、そんなの！ セリアが辛いなら、もっとなでてほしい」

「そ、っか」

セリアはなでてくれた。止めたはずの涙がまた出てきてしまう。

セリアは目を閉じてなでているから、泣いていたって気付かないだろう。そう思うと、今度は涙を堪えることができなかった。だが、嗚咽はセリアに聞こえないようにする。

——最期に、心配はさせたくないから。

「あり……が、と」

セリアの手が、ルーシエルの頭の上から力なく落ちた。

なぜ感謝するのだろう。ルーシエルは、何もできないのに。

「セリ、ア……？」

何だろう、この赤いものは。わかっているけど。

どうして、彼女の顔はこんなにも真っ白なのだろう。わかっているけど。

どうして彼女は、ルーシエルが呼びかけても返事をしてくれない

のだろう。わかっているけど。

ただ、信じたくないだけなのだ。

セリアが死んでしまったなんて。

第三十話 涙（後書き）

明日投稿できるかな……？

第三十一話　ありがとう（前書き）

前回の話をセリア視点からです。短め……？

第三十一話　ありがとう

早く、ルーシエルの所へ行きたい。

ぼうっとした頭で考えるのは、そればかりだった。

それ以外に考えたのは、両親が無事かどうか。たとえ親と思って
いなくたって、自分のせいで死んでしまうのは嫌だ。いや、おそらく
セリアがルーシエルと会っているのを村人に伝えたのは両親だから、
殺されてはいないだろう。

だから、両親のことなんて考えたのは一瞬だけだった。後は全て、
セリアにとって一番大切なひとを思った。

（ルーちゃん……）

会って、ありがとうと言わなければ。幸せだった、と言いたい。
彼女はどんな顔をするだろうか。泣いてしまうのだろうか、と思
う。だが、セリアが泣かないでほしいと頼めば、ルーシエルは泣か
ない。

それでも、笑顔は見せてくれないかもしれない。最期には、彼女
の笑みを見たいのだが。

「……セリア！」

呼ばれた方を見ると、ルーシエルが顔を青くして立っている。ノ
ギスもあせったような顔をして、立っていた。

どうしてここにいいのか、という疑問はセリアの頭には浮かばな
い。とにかくルーシエルに会えたことが、とても嬉しかった。

「ル……ちゃ……」

出した声は、自分の声じゃないと思うほどかすれていた。これではルーシエルを心配させてしまう。この顔を見れば、今でも十分心配させていることがわかるのだ。

彼女を安心させるように笑って、ふらふらとルーシエルに近づく。だが途中でぱたりと倒れてしまった。立ち上がりとしても、力がでない。

ルーシエルが、倒れた自分に駆け寄って膝をついた。

「セリア！」

「だい…じょ…ぶ」

ルーシエルは、全く大丈夫そうに見えないからこんなに心配しているのだ、とでも言いそうな顔をする。

それも当然だ。今のセリアは、自分でもなぜ生きているのかわからない。

村人たちから必死で逃げて、最後は矢を射られて倒れてしまったのだ。村人たちは魔女と知り合いのセリアを恐れてか、死んだかどうかは確認しなかった。それが不幸中の幸いだろう。確認されたいたら、確実に殺されていた。それから人がいなくなったのがわかって、重い体を酷使してここまで来たのだ。何度も倒れそうになっても、ルーシエルに会いに。

「ルー…ちゃ、ん…」

ルーシエルの姿が、かすんでよく見えない。本当に彼女はここにいるのだろうか、と不安になって手を伸ばすと、ルーシエルはセリアの手を掴んでくれた。

「何、何？ セリア、どうしたの！？」

セリアは安心して微笑んだ。

「……………」

「聞こえない、セリアもう一回言って！」

ルーシエルはセリアの口に耳を近づけた。彼女に聞こえるよう、できるだけ大きくゆっくりと言う。

「わた……し、ルー……ちゃん……とあえ、て」

「うん、うん」

「しあわ……せ、だ……ったわ」

「だったって何！？ そんな死んじゃうような言い方、やめてよ……。まだこれから、いーっぱい話して、遊んで……」

ルーシエルは、顔を歪めた。理解したのだろう、セリアがもう助からないと。

ルーシエルの性格だったら、もっと理解するのが遅いと思っていた。そんなことを考えていると知ったら、彼女は怒るだろうか。こんな時でも。

「僕を……置いていかないと、セリア……」

置いていく。

置いていかれる方はもちろん辛い、置いていく方だって辛いのだ。

この間思った通り、セリアはルーシエルとクロードの先を見ることができないようだ。それに、ルーシエルとエデから、誕生日の贈り物を受け取っていない。二人は何を買ったのだろう。

まだ色々心残りがある。だが、置いていかないというのはもう無

理だ。

「な……か、ない……で」

泣き出してしまったルーシエルの頭を、掴まれていない方の手でなでる。ルーシエルはなでられるのが好きだと言っていた。最期くらい、彼女に喜んでほしい。

ルーシエルは目をぎゅつとつぶった。涙を堪えているのだろう。やはり、セリアが考えた通り、頼めば泣かないでいてくれるのだ。せつかくだから、笑顔を見せてくれればいいのに。

そこでふと、彼女の綺麗な黒髪に、血がついてしまったことに気が付いた。

「あ……血が……つい、ちゃ……ね」

ルーシエルは首をぶんぶん振る。その動作は大きくて、セリアの今の目でも十分確認できるくらいだった。

「いいよ、そんなの！ セリアが辛いなら、もっとなでてほしい」

「そ、っか」

もう目を開けているのも辛くなって、ルーシエルの頭をなでながら目をつぶった。

（……目をつぶっても泣いてるのわかってるよ、ルーちゃん）

ルーシエルとは友人になって一ヶ月も経っていない。だが、彼女のことはよく理解している。セリアが目をつぶっているから、泣いても気付かないと思ったのだろうか。残念ながら、その予想ははず

れだ。

セリアに聞こえないよう嗚咽は堪えているようだが、泣いていることくらいすぐわかる。ルーシエルが、自分を心配させないようにしていることだって、すぐわかる。

（あ……もう、駄目かも）

最期に、もう二度と会えなくなる前に、ルーシエルに伝えなければ。

「あり……が、と」

ありがとう。それしか言えなかったが、本当はもっと伝えたかった。

ルーちゃんのこと、大好きだよ。

ルーちゃんのおかげで、私は楽しかった。幸せだった。

クロ君とディーちゃんとは、ずっと仲良くしてね。もちろん白猫君も。最期くらい、名前を呼んであげたほうがいいかな？ 省略はしないで……。ノギス君と、ずっと一緒にいてね。

あ、クロ君とルーちゃんはどうなるかな？ 私が思ってた通りになるかな？ そうだったら嬉しいな。ってルーちゃんには意味がわからないか。

……せっかくルーちゃんとディーちゃんが贈り物を用意してくれたのに、受け取れなくてごめんね。私が無理してでも行っていれば、受け取れたのに。

だけど、最期に謝るのは駄目ね。今までありがとう。

最期に、ルーちゃん的笑顔が見たかったな……。

.....

第三十一話 ありがとう（後書き）

書けたので早めに投稿しましたが、今日中にもう一度投稿できるかはわかりません。

第三十二話 現実（前書き）

二度目の投稿。

第三十二話 現実

嘘だ、と思ったかった。

セリアが死んだなんて、思いたくなかった。

だが、ルーシエルの目の前で冷たくなっているセリアは、どう説明できるのだろうか。

(……あ、そうか、夢なんだ)

何だ、夢か。

そう思うと、ルーシエルの顔には笑みが浮かんだ。涙も出なかった。セリアが死ぬはずがない。これはきつと夢で、本当はセリアは死んでいないのだ。目が覚めたら、いつもと変わらない日々がまた始まる。

「……ルーシエル？」

「ん？ どうしたの、ノギス」

笑顔で首をかしげるルーシエルを、ノギスは変なものを見るような目で見つめた。

「それはこっちの台詞だ。こんな時に、なぜお前は笑っている？」

「こんな時？ だってこれは夢でしょ？ セリアが死ぬはずない。そう考えたらおかしくなっちゃって。まあ、夢の中のノギスに説明しても無駄か」

早く目、覚めないかな〜とつぶやくと、ノギスはおもむろに口を開いた。

「……ルーシエル、手を出せ」

何をするつもりか知らないが、ここは夢の中だ。深く考えなくともいいだろう。

そう思って右手を出すと、ノギスが爪を出した。普段は絶対に出さないのに。

え、と言うより先に、ノギスの爪がルーシエルの手の甲を引っかく。鋭い痛みが走って、ルーシエルは思わず目をつぶった。

「——っ！」

「その痛みが、夢だと思うか？」

「は……はは、痛みまである夢なんて、初めて見た」

引きつった笑みを浮かべるルーシエルを、ノギスはじっと見つめる。

しばらくし、ルーシエルは首を横に振った。

「ゆ、夢だよ。夢なんだって！」

それでも、ノギスはルーシエルから目を離さない。じっとこちらを見つめる目が、これは現実だと言っている気がして怖くなった。現実のはずがない。

ノギスにひっかかれた右手は痛い、痛みを感じる夢だってあるはずだ。だから、これは夢なのだ。

自分にそう言い聞かせる。そうしないと、セリアが本当に死んでしまったのではないかと考えてしまっ

「……こいつの、墓を作ろうか」

墓。

今までの人間たちには作れなかったもの。それを、セリアに作るのか？ 冷たくなったセリアを、地面に埋め、墓を作る。それをしてしまったら、いくら夢でも――

「お前の手を見てみる」

のろのろと手のひらを見ると、そこにはべっとりと血が付いていた。自分の血ではない、セリアの血が。

「違う！ これは夢、で、セリアは、死んで、なくて……」

目の前にいるセリアは

「だっ、て。まだ、セリアの……誕生日、お祝いしてな、いのに……？」

死んでいる

「セリ、アと友人になっ、て、まだ。一ヶ月、も経ってな……」

死んでしまったのだ、セリアは。もう話せないし、笑顔も見れないのだ。

セリア、と呼んでも返事をしてくれない。
ルーシエルの目から、涙があふれた。

「う……死ん、じゃ……ひっ、ったの？ セリア……」

「そうだ。死んだんだ、こいつは」

無感動な声で言うノギスにカツとなる。

「何でそんなに平気でいられるの!?! ノギスは……セリアのこと、どうとも思ってたの!?!」

＊ ＊ ＊

どうとも思っていなかったわけがない。

ノギスは泣きながら怒鳴るルーシエルを、自分でも不思議になるほど冷静に見ていた。

「そうだよ、ノギス、セリアのこと嫌いなんですよ!?! セリアの誕生日をお祝いしたかったのは、ただ自分だけ仲間はずれなのが嫌だったんだよ!?!」

「……」

「何も言わないってことは、そうことなんだ!?! いいよ、ノギスがセリアのことをそんな風に思ってたなら、僕は君との契約を破棄する!?!」

それもいいかもしれない、と思った。今ここで契約を破棄すれば、ノギスの寿命はここで終わる。悲しむルーシエルを、これ以上見たくないのだ。

もともと、ルーシエルに拾われなければ死んでいた。だったら今ここで死んでも、変わらないではないか。

「いいぞ」

気付いたら、勝手に口から言葉が出ていた。ルーシエルは目を見開いてノギスを見る。

「するならさっさとしろ」

「――っ何で!?!」

何で、とはどういうことだろう。

「僕、ほんつとうにひどいこと言ったんだよ！？ 何で、ノギスは怒らないの……？ 何で契約を破棄してもいいなんて言うの？」

君まで、僕を置いていかないで。

ぼつりとつぶやかれたその声を聞いて、ああそうか、と思った。契約を破棄してしまえば、彼女だけを残して死ぬことになるのだ。クロードやエデがいても、その二人が死んだらルーシエルは独りになる。ノエルという魔女もいたはずだが、あの魔女はルーシエルにとって大切な存在なのだろうか。千年前にあの魔女と何度も話しているのを見たが、セリアたちと話す時ほど楽しそうには見えなかった。

独りになったら、彼女はもっと悲しむのだ。もしかすると、自殺してしまう可能性だってある。

「悪かった。ルーシエルのことを、何も考えずに言って」

「……謝らないでよ。僕の方がずーっとひどいこと言ったんだから」「……とりあえず、こいつの墓を作るか？」

ようやく現実を受け止められたのだろう。ルーシエルは、ためらわずにうなずいた。

「綺麗な所に埋めてあげたいな。できれば、アスメリ村の遠くで」「だったら、あの男が来るのを待つか？ 遠くの花畑にでも埋めてやればいい」

セリアもそういう所に埋めてやったほうが喜ぶだろう。

そうだね、とルーシエルはうなずくと、慎重にセリアを抱き上げた。セリアはルーシエルに感謝の気持ちを伝えられたからなのか、安心したような顔をしている。その顔を見て、ルーシエルはふっと微笑んだ。

「セリア、僕に会えたことで少しは幸せになれたんだよね？」

「言ってただろ。ありがとうって」

「うん。……軽いなあ、セリアは」

ちゃんと食べてたのかな、とルーシエルが何かが吹っ切れたように言う。

「お墓には、エデが買ったチョコレートと一緒に埋めようかな。僕の指輪も一緒に」

エデはそんなものを贈るつもりだったのか、と呆れてしまう。ルーシエルの指輪はまともだが、いくら貴重だからと言ってチョコレートを贈るのはどうなのだろう。

「……泣いてちゃ駄目だ。笑ってなきゃ。セリアもそのほうが嬉しいよね？」

ルーシエルが、もう二度と目覚めないセリアに問いかける。

もちろん、とセリアの笑う声が聞こえた気がした。

第三十三話 後悔（前書き）

昨日、初めて一日のユニークが50を超えていて驚きました。：
読んでくださっている方、ありがとうございます！

第三十三話 後悔

クロードが『移動』の術で洞窟に行くと、ベッドの上には血だらけの誰かが横になっていた。異臭が洞窟内に立ちこめている。

驚いて固まっていると、ルーシエルがこちらを見た。その顔は全くと言っていいほど表情がなくて、一瞬ルーシエルだとはわからなかった。

「あ、……クロード」

これは誰だ、と尋ねようとしても口が開かなかった。誰かはとくにわかつている。セリアなのだ。だが、どうして彼女が血だらけになっているのだろう。それに――。

ベッドの上の人間は、とても生きているようには見えなかった。

「あのねクロード。セリア、死んじゃったんだ」

軽い口調で言うルーシエル。ルーシエルがこんな口調で、セリアが死んでしまったなんて言うはずがないと思った。

「……冗談、だろう？」

「こんな冗談……言わないよ」

ルーシエルの表情が変わる。泣きそうになるのを我慢しているような顔。

その顔を見て、冗談ではなく本当にセリアが死んでしまったのだ、と理解する。

だが、セリアは『巫女』だったはずなのに……？ これはどう見

ても人間の仕業だ。巫女のセリアがなぜ殺されるのだろう、と考えるルーシエルを見て納得する。

「ばれたのか。……お前と会っていることが」

「うん。そうみたい。……クロード、綺麗な場所知らない？ セリ

アのお墓、作ろうと思うんだ」

「エデも呼ぶぞ」

そのほうがいいね、とルーシエルは笑った。セリアが死んでこんなすぐに笑えるのか、とルーシエルの笑顔を見ると、無理をして笑っているのがわかった。セリアのためだろうか。

あの少女なら、ルーシエルが泣くことを望まない。笑顔でいることを望むだろう。ルーシエルも、セリアがそう考えるところで無理に笑っているのだ。

その笑顔は見ていて痛々しかった。無理をしているのだから当然だ。

（綺麗な場所、か）

それならば、ミリウス湖がいいかもしれない。あの湖は綺麗だし、今の季節たくさんの花が咲いているはずだ。

（……エデ、すまない）

心の中で、エデに謝罪する。おそらく、エデは許してくれないが。

『ねえ、あの二人のこと、クロードが守ってくれないかな？』

エデの言葉がよみがえる。

この二人を守る、と約束したのに。早くもその約束を破ってしま

った。エデはあの時、もうすぐこうなることをわかっていたのだろうか。

クロードは、ベッドに横たわるセリアを見つめた。ひどい怪我をしているにも関わらず、その顔は安心していているようだった。

（村人にやられたのか）

村人はセリアを恐れて、死んだかどうか確認しなかったのだろう。彼女は最後の力を振り絞って、ルーシエルに会いにきたに違いない。

（……守れなかった）

悔しくて、申し訳なくて、クロードは唇をかみしめた。
守れなかった。

もしクロードがその場にいたら、助けられたのに。エデの言った言葉の意味をもっとよく考え、セリアと一緒にいれば。

「Ⅱ 6 §」

エデはどんな反応をするだろうか。

＊ ＊ ＊

セリアが殺された。アズメリ村の村人に。

クロードが告げたその言葉に、エデは目の前が真っ暗になった気がした。

「……だから、あいつの墓をミリウス湖に作ろうと思ってエデを呼びにきたのだ」

クロードがそう言う。エデは答えられなかった。

（セリアが死んだ……）

ルーシエルは、今どれだけ辛いだろう。

彼女の気持ちを考えると、胸が押しつぶられそうだった。

「――守るって……言ったくせに！」

クロードの後悔にあふれた顔を見て、エデははっと口を押さえた。自分にそれを言う資格はない。セリアが殺されると知って、何もできない自分が。

エデは、セリアがもうすぐ殺されることを知っていたのだ。村人にはではなく、あの魔女にだったが。魔女と言っても、ルーシエルではない。名は名乗らなかったのだ。

（ごめんね……ごめんね、セリア。ルーシエル）

謝っても許されない。自分が知っていたということを、ルーシエルとクロードに話す勇氣はエデにはない。二人に、嫌われるのは嫌だ。

何もできなかったのは、仕方がない。人質を取られていたのだから。

そう一瞬でも考えてしまう自分に、吐き気がする。人質を取られていたのは確かだ。両親と……好きな人を。

昨日ルーシエルたちを待っている間に、魔女が来たのだ。なぜそんなことをするのか、と尋ねても魔女は何も答えてくれなかった。ただ、このことをルーシエルに言うなとしか。

黙っているエデの目を、クロードはまっすぐ見た。

「すまなかった」

「何で……謝るの？」

素直に謝るクロードに、苛立ちを感じる。

「クロードは、何も悪くないのに！ 悪いのは、全部あたしで……」

クロードは理由を尋ねてこなかった。

昔からそうだ、とエデはうつむいた。いつも、エデが訊いてほしいことは訊かない。してほしくないことはしない。

なんだかんだと言って、クロードはエデを大切にしてくれた。だからエデは、そんなクロードと一緒にいるのが安心するのだ。

無理だと思っても、ついぽつりと訊いてしまう。

「……セリア、生き返らせたりできないのかな？ クロードなら、

新しい術を作るんじゃない？」

「無理だろうな、俺じゃ。フィルマンさまだったら……可能だっただろうが」

死んだ人間を生きかえす。それは世の理に反している。

フィルマンだったらできたのだろう。もし彼が生きていたら、と
考え、エデは首を横に振った。『もしも』を考えたって、むなし
いだけだ。

「行こうか、クロード」

エデは『移動』の術を使えない。術にはそれぞれ使う人間との相性があり、エデにもクロードにも使えない術はある。

「……泣かなくていいのか？」

「クロード、そういうのは思っても口に出さないで」

そう訊いてほしかった。同時に、訊いてほしくなかった。そう訊かれたら思い切り泣けるが、エデに泣く資格なんてないのだから。それに、昨日も泣いたのだ。クロードの前で。二日連続も泣くのは嫌だし、泣くとしても今度は誰もいないところで泣きたい。

「行こ」

彼が『移動』の術を使わないと、ルーシエルとセリアが待つ洞窟に行けない。

エデが今泣きたくないのがわかったのか、クロードはうなずいた。

「Ⅱ Ⅲ 6 §」

どんな顔をして、ルーシエルに会えばいいのだろうか。

エデは、彼女に会うのがたまらなく怖かった。だが、会わなければならぬ。行って、セリアの墓と一緒に作るのだ。

守れなかったかわりに、せめてそれだけでもしてあげたかった。

第三十四話 希望

『今から教えるのは、『蘇生』の魔法だ。君が使うことがあるかもしれないと思ってね』

クロードとエデを待っていると、手紙の中のそんな一文が頭に浮かんだ。

『蘇生』の魔法を使えば、セリアを生き返らせることができたのに。

ルーシエルは寝台の横に椅子を持っていき、それに座ってセリアの顔をじっと見た。昨日まで普通に自分と話していた彼女は、もう動くことも話すこともできないのだ。

魔法が使えない、無力な自分。魔法なんて使えなくていい、と思っていたのに、今は使いたいと思っている。自分勝手だとはわかっていても、あの変態を恨まないなんてできなかった。

『僕が封印したせいで、魔法が使えなくなってたらごめんね』

なってたらではなく、あの変態はこうなることがわかっていたに違いない。『蘇生』の魔法を使う必要があることも、彼はわかっていたのだろう。

だがそうなると、なぜわざわざ『蘇生』の魔法を教えたのかわからない。魔法が使えなくなることをわかっていたはずなのに。それとも、ルーシエルの魔法がまた使えるようになると思っていたのだろうか。

自分でしておいてそれはないだろう、と考え、あの変態からもらった壺の中身をまだ確認していないことに気が付いた。

(もしかして……!)

希望は、まだあるのかもしれない。

「ノギス！」

振り向いて叫ぶと、ノギスは驚いたのか乗っていた机から落ちた。

「……大丈夫？」

「ああ。どうしたんだ？」

不思議に思いながら、先ほどの勢いをなくして彼に尋ねる。

「あの変態からもらった壺、本当にどこに埋めたか覚えてない？
あの壺に……僕の魔力が入ってるかもしれないんだ」

「『蘇生』の魔法のためか。……悪い。もう、埋めたと思ったところ
一帯を探したんだが……」

「そっ、か」

ルーシエルががつくりとうなだれると、ノギスも同じようにうなだれた。魔力が入ってるかもしれない、と言ってすぐに『蘇生』の魔法のためだと気付いたのだ。彼もルーシエルと同じことを考えていたのだろう。

セリアの体にたかってくる虫を、手で払いのける。

（……セリア。もうすぐ、綺麗な所に連れて行ってあげるからね）

クロードがどこに墓を作る気なのか知らないが、彼が選ぶなら本当に綺麗な所なのだと思う。

墓を作る前に、セリアの傷を癒してくれないだろうか。

ふと、そんなことを思いつく。術は人を守るためにあるのだし、

傷を癒す術だってあってもいいはずだ。

（『蘇生』の術は……？）

『蘇生』の魔法があるなら、術もあるのではないだろうか。

そう考えて、ルーシエルは首を振った。そんな術があるのなら、クロードはあんな顔をしなかったはずだ。生き返らせないのがわかっていたからこそ、あんな辛そうな顔をしたのだ。

その時、真っ白な光が洞窟に広がった。意外に早かったな、と思いつながら座っていた椅子から立ち上がる。

エデはセリアを見ると、ふらふらと寝台に寄ってきた。今までルーシエルが座っていた椅子に、エデが座る。

「セリア……」

彼女の瞳に、みるみる涙が溜まっていた。だが、その涙を手でぐいっとぬぐう。その顔は、泣いてはいけないと思っっているように見えた。

泣いてもいいのに、とルーシエルはエデを見つめた。ルーシエルだって泣いたのに、エデは泣かないつもりなのだろうか。

「……ИЮ」

エデが何かをつぶやくと、セリアの体が白い光に包み込まれた。

その光の中でセリアの傷が治っていくのを見て、これはきっと『治癒』の術なのだろう、と思った。

光が消えると、セリアの傷は完全に治った。彼女に刺さっていた矢も、どうやったのかなくなっている。

生きているように見えるのに、セリアの白い顔が生き返ったわけ

ではないと物語っていた。

エデが椅子から立ち上がった。

「……ルーシエル、セリアが死んで辛い？」

「え？ ……辛いに決まってるよ」

急に何を訊くのだろう。

「セリアが死んだこと……セリアのこと、忘れない？」

そう言ったエデの顔は真剣だった。

彼女は、術でルーシエルの記憶からセリアのことを消し去るつもりなのだろうか。

「忘れない。僕は、セリアのこと忘れたくない」

初めて、一緒にいて心から楽しいと思える友人。ノエルの場合、楽しいは楽しいのだが疲れてしまうのだ。

セリアと友人になって一ヶ月も経っていないなんて、信じられないほど彼女と過ごした日々は楽しかった。話してばかりだったが、話すことは尽きなかった。あまり話すことが得意ではないルーシエルでも、ずっと話していられたのだ。

話す以外にも、最近はステルダへ観光へ行った。そこでエデと友達になり、アンソニーを助け。そういえば、アーサーが「おめでとう」と言っていたと伝えるのを忘れていた。アーサーのためにも、あの壺を探さなければ。

質問の答えを聞いてほっとしたようなエデと、クロードに言う。

「エデ、クロード。あの変態からもらった壺を、一緒に探してくれ

ない？ それに壺に、僕の魔力が入っているかもしれない。……それしたら、『蘇生』の魔法を使える」
「！」

二人は、ルーシエルの言葉に目を見開いた。この反応では、やはり『蘇生』の術は存在しないのだろう。

「協力して……セリアを生き返らせるために」

エデもクロードも、『蘇生』の魔法が使えることを信じていいのか迷っているようだった。当然だ。魔法は人を傷つけるためのものしか存在しない。人を生き返らせるための魔法なんて、誰が想像できるだろう。

あの変態が嘘を手紙に書いたのかもしれない。だがそんな嘘をつくような人間には見えなかったし、セリアを生き返らせるかもしれないのならどんなことでもやりたかった。

「……うん、頑張って探そう！ あたしはその壺が見つかるまで探す！」

「そうだな。俺も協力しよう」

心なしか、二人の表情は明るくなったようだった。

「——うーん、残念！ それは無理ね」

聞いたことのある声に、はっと洞窟の入り口を振り返る。

そこには、面白そうにこちらを見ている、ノエルの姿があった。その手に握られているものを見て、ノギスが息を飲む。

（……あれって、壺？）

てつきり大きな壺を想像していたが、その壺は手のひらほどの大きさもなかった。

そんなことを考えていると彼女がルーシエルをじーっと見てきて、思わずたじろいでしまう。なぜこんなにも見られるのだろ――

「ルーシエルー！ 会いたかったー！」

「ふぁ！」

一瞬にして、ノエルがすぐ近くにやってきてルーシエルに抱きついてきた。

「ノ、ノエル……」

僕も会いたかった、とは嘘でも言えなかった。

ノエルの眩しい笑顔見ながら、最悪の人物が来てしまった、とルーシエルは思った。

第三十四話 希望（後書き）

希望ってタイトルはあってないでしょうか？

第三十五話 魔女の友達

ルーシエルに抱きついていたノエルは、打って変わって剣呑な顔をしエデとクロードを見た。その目は二人を射殺しそうなほど鋭い。二人がびくつと震えたのも仕方がないことだろう。ノエルの視界に入っていないだろうノギスも、そうっとノエルから距離をとった。

「ルーシエルの封印が解けた時から見てたけど……。この女と男、気に入らない。殺しちゃうけどいい？」

「なっ！ やめて、ノエル！ この二人、というか、人間は殺してほしくないって言ったよね？」

さらっと殺すなんて言う、ノエルの気持ちはやはり理解できない。

「……って、見てた？」

彼女に見られてた覚えはない。

首をかしげると、エデとクロードに向ける表情とは全く違う顔になる。千年前から彼女は変わっていないのだな、と呆れてしまう。好きな相手と、その他の相手。相手によって、ノエルの態度は全く違う。

「ええ、ずーっと見てたの。どれだけあたしがこいつらを殺したいと思ったか……。本当に殺しちゃ駄目なの？ おかしいじゃない、封印されたのに人間を憎まないなんて。しかもこの壺、ルーシエルの魔力が入ってる。魔法が使えなかったら、魔女はもう生きていけないのに」

やはりそうだったのか、と思わずルーシエルは壺に手を伸ばした。

「ノエル、それをくれない？」

「ええ。最初からそのつもりだもの。あたしがこの壺を守ってなかったら、ルーシエルの魔力は悪用されてたかもね」

ノエルが、壺をルーシエルに放り投げた。落とさないよう受け止め、その壺を大切に持つ。

これで、セリアを生き返らせることができるのだ。

「で、質問の答え聞かせてくれない？」

心底不思議そうに、ノエルが首をかしげる。確かに、封印され魔力まで奪われたのに憎まないなんて、おかしいと思うだろう。

「……ノギスから聞いてないかな？　僕は、自分の意思で封印されたんだよ」

魔力を奪われたのは想定外だった。だがそれも、ルーシエル自身が願っていたことなのだ。

ノエルは信じられない、という顔をする。

「何でそんなことしたのよ。そのせいで……あたし、寂しかったんだから。人間はもともと大っ嫌いで、魔女でもルーシエルとアデライードさま以外は嫌いなのに。ルーシエルがいなくなったから、あたしはアデライードさまとしか話してないのよ？」

アデライードさまとはノエルが敬愛する、彼女の魔法の師だ。アデライードという魔女がノエルに魔法を教えてもらったのだから、ノエルに魔法を教えてもらったルーシエルにとっても師に当たるのかもしれない。会ったことはまだないが。

「それでね、人間に復讐しようと思って。アデライードさまにどうしたらいいか訊いたら、あっという間に皆殺ししちゃうより、じわじわ苦しめた方がいいっておっしゃったのよ」

（復讐？）

もしかしくなくとも、それはルーシエルが封印されてしまったからなのだろう。

ルーシエルは人間に復讐してほしいなんて、少しも思っていない。だからそんなことしてほしくないのに。

じわじわと苦しめるなんて、一体何を？ ノエルは、アデライードに言われたことなら何でもやってしまうのだ。ルーシエルが止めても、絶対に言うことを聞かない。

「だからアベルに、この世界の文明を発達させないようにしたの。あ、アベルはアデライードさまの所にいるわ。ルーシエルに合えなくて、残念がってたけど。

それから……えーっといっただったっけ？ あたしは龍神を捕まえたの。そしたら雨が降らずに、人間は餓死しちゃうと思って。ま、他の生き物も餓死しちゃうだろうけど、そんなこと知ったこっちゃないわ」

「……え？」

黒い狼はやはりアベルだったのか、とか、じわじわと苦しませるとは餓死させることだったのか、とか色々なことが頭に浮かんだが、一番気になったのはノエルが龍神を捕まえたということだった。

龍神は神だ。神が、ただの魔女に捕らえられるわけがない。どんな魔女よりも強かったろうあの変態だって、巫女であるセリアには敵わなかったのだ。セリアが仕える龍神が、ノエルに捕らえられたなど信じられなかった。

絶句しているルーシエルを見て、ノエルはぷくつと頬を膨らませた。

「あら、その顔は信じてないのね」

「だって……神さまなんだよ？　どうやって捕まえられるって言うの？」

簡単よ、と得意げに人差し指を振る。

「あそこで死んじゃってる子を、人質に取ればいいの。龍神はあの子を大切にしてたもの。もし反抗したら、あの子を殺すって脅したのよ」

「……」

以前のルーシエルだったら、ただ苦笑して諫めるだけだっただろう。自分だって、人間をあまり好きではなかったから。ノエルが人間にひどいことをしても、それくらいの反応をするだけだった。

だが、今は違う。セリアとクロード、エデ。アーサーとアンソニーと……あと、指輪を売ってくれたおばさん。

それだけの人間と、知り合った。人間からしてみれば、それしか知り合いがいないと言うかもしれない。それでも、ルーシエルにとってはとても多いのだ。人間と触れ合い、好きになった。

（セリアを人質に……）

悲しむだろうな、と思う。自分のせいで、大好きな龍神が捕らえられてしまったら。セリアの口から龍神のことは少ししか聞いていないが、セリアが心から龍神を愛していることは伝わってきた。

だから、ノエルのことが許せなかった。

「ノエル……。君は僕のためにやってくれたんだろうけどね。僕にとって、それはしてほしくないことだよ。僕はセリアも……」

黙ってルーシエルとノエルの会話を聞いていた二人に、目をやる。

「エデもクロードも、大好きなんだ。それにステルダって町で人間と触れ合って、人間を好きになった」

「そんなの――」

「きつと、僕が魔女だって気付いたら恐れるんだろうけど」

ノエルは何かを言おうとして、口を閉じた。
そして、クロードとエデを睨んだ。

「あんたたちのせいね……。！　ルーシエルが、こんな変なこと言うのは！」

「違う！　僕は本当に、人間が好きだって思ってる」

そう言っつてノエルの腕を掴むと、彼女は首を横に振った。

「違わない。いい？　ルーシエルは、こいつらに騙されてるの。……はあ、ほんとには死んでなければあいつも殺したかったんだけど」

もう死んでるなら、死体をめちゃくちゃにするだけで我慢する、とノエルは笑みを浮かべた。その顔はとても可愛いはずなのに、恐ろしく感じた。

「でも、この女と男はどうしようかしら。アデライードさまに言われたよう、じわじわ苦しめてから殺した方がいいわよね」

「ノエルやめて！」

悲鳴のように叫ぶと、ノエルは一瞬こちらを向く。
ルーシエルは目に涙を溜め、声を張り上げた。

「ノエルがそんなことするなら、僕は君を攻撃する！ どうやった
って、この三人が殺されるのを阻止する！」

友達と戦うのは、本当は嫌だ。

これでノエルが諦めてくれたら、というのがルーシエルの切実な
願いだった。

第三十五話 魔女の友達（後書き）

見直ししていないので、誤字脱字あるかもしれません……。すみません。

第三十六話 大嫌い（前書き）

お気に入り件数が10件になりました！
ありがとうございます。

……タイトル相変わらず思いつきません。
今回はノエル視点ですね。

第三十六話 大嫌い

真っ赤だ、と思った。

昨日まで普通に話し、優しくしてくれた両親は、真っ赤になっていた。家の床に、どろっとした血が広がっている。

「お母……さん？ お父さん？」

大好きだった両親。自分が魔女だとわかって、大切にここまで育ててくれた両親。

その両親は、殺されていた。鋭い刃物で、何度も体中を刺されて。犯人はおそらく、この村の住人だろう。

「……逃げろって、このことだったの？」

少女の声に、答える者はいない。

昨日まだ夜も明けぬ頃に、少女は両親に言われ一人で遠くの森に逃げた。本当は両親と一緒に逃げたかったが、駄目だと言われたのだ。

一旦は逃げたものの、心配になって戻ってきてしまった。その時はまだ、両親が殺されたなんて考えてなかった。

目の前の光景を見て、少女は怒りで拳を震わせた。

「許さない……」

両親を殺した犯人を。人間を。

そして、たった一人で逃げた自分を。自分が魔法を使えば、両親は殺されなかったかもしれない。

それを両親が望んでいなかったからこそ、自分は逃がされたのだ

ろうが。

「……ごめんね、お母さん、お父さん」

死体に、ぽつりと謝る。

その日、少女が住んでいた村は壊滅した。

＊ ＊ ＊

「ノエルがそんなことするなら、僕は君を攻撃する！ どうやったって、この三人が殺されるのを阻止する！」

涙を溜めてそんなことを言う、ルーシエルの気持ちにノエルにはわからなかった。それに、一人はもう死んでいるのだから殺せないではないか、と余計なことも考える。

「……どうしてそこまで、人間の味方をするのよ」

そう言うってから後悔した。どうせ、先ほどと同じように「好きだから」と答えるに決まっているのに。

ルーシエルは、騙されているのだ。人間のことを好きだなんて信じられない。ノエルは大嫌いだ。人間なんて。

「好きだからだよ。人間が、好きだから」

「同じことを二回も言わなくていいわよ」

やはり、思った通りだった。

「あたしは大嫌い。……大っ嫌い！」

彼女が二度好きと言ったから、ノエルも大嫌いと二度言う。本当は、こんなでは足りない。何十回、何百回大嫌いと言っても、満足できないのだ。

ルーシエルは、目に溜まった涙をぬぐった。赤くなった目で尋ねてくる。

「……ノエル、君は何でそこまで人間を嫌うの？」

「理由なんてない。魔女だからってだけで十分じゃない」

「それだけじゃないよね？ 何か他にあるはずだ」

ノエルはルーシエルから目を逸らした。今まで彼女にその話をしなかったのは、ルーシエルに話したってわかってくれないと思ったから。

人間が、両親を殺した。ルーシエルだったら、憎むのはその犯人だけでいいではないかと言うだろう。その優しいところが好きなのだが、同時に嫌いでもある。

「ルーシエルにはきつと、あたしの気持ちはわからないわよ。……そろそろ、この二人を殺したいんだけど？ あたしに攻撃するなら、攻撃すればいいわ」

何だかもう、何もかもがどうでもいい気分だ。ルーシエルに殺されるのだったら別にいい、と思ってしまうほどに。どうしてこんな気分になるのかはわからないが。

ノエルがそう言うと、そろそろ、と白い何かが歩いてきた。

「ルーシエル、あの男は必要だと思ったらその壺を壊せばいいといっていたぞ」

「……ああ、白猫。あんたいたのね」

全く気付かなかった。

この白猫は、ノエルがルーシエルと付き合いだしたきっかけだったな、と懐かしくなる。一応ノエルは、魔女がいるという噂を聞いたらそこへ行くようにしている。その魔女を気に入ったら、魔法を教えた。普通、魔女は魔女に魔法を教わるのだ。

白い使い魔なんて、いるとは思っていなかった。もし生まれたとしても、それは生まれてすぐに捨てられたり何なりするだろうと。しかもそんな使い魔と契約する魔女は、もつといえるとは思っていなかった。

それが、ルーシエルに興味を持った理由だ。最初はただ興味を持っただけだが、その後彼女と付き合ううちに好きになっていった。ノエルは、白猫（名前は何だっただろうか）に言われても壺を割ることをためらっているルーシエルを、ふんと鼻で笑った。

「さっさとやったらどう、ルーシエル。それともやっぱり、あたしは攻撃できないの？」

「……ノエル、僕は壺を割るけど、それは君を攻撃するためじゃないからね」

だったら何のためなのだろう。壺を思い切り地面に叩きつけるルーシエルを見て、ノエルはぼんやりと思った。

壺は割れたときに音を発さなかった。いや、そもそも割れたのかもわからない。ルーシエルが地面にたたきつけた壺は、跡形もなく消えていた。

「へ？」

ルーシエルも驚いたのか、間拔けな声を上げる。

「……何にも変わった気がしない、けど？」

平気なのかな、と首をかしげて寝台に横たわる少女を見るルーシエル。

ノエルに攻撃せず、何をするつもりなのだろうか。

「えっと確か……v b s！」

ルーシエルがそう言った途端辺りに真っ白な光が広がって、ノエルは目を見張った。

魔法を使う時、こんな光はでない。では、これは魔法ではない？
いや、そんなはずは……。

ノエルが頭の中でぐるぐると考えていると、もつと信じられないことが起きた。

「……え？」

寝台に横たわる少女の顔に、みるみる血の気が戻っていく。

その少女は、
ゆっくりと目を開けた。

第三十六話 大嫌い（後書き）

明日はきっと投稿できません……。ですが、土曜の午前中には投稿します。

第三十七話 蘇生の魔法（前書き）

ぎりぎり投稿できました。かわりに、明日は午前中ではなく午後に投稿すると思います。絶対とは言えませんが。急いだったので、また見直しできませんでした。

第三十七話 蘇生の魔法

セリアがゆっくりと目を開けた。それを見て、ルーシエルはほつと安心する。

あの壺を割っても、何も変わったようには思えなかったのだ。

（ちゃんとまた魔法使えるようになってよかった……）

『蘇生』の魔法は無事成功したようだ。

（……君のある物と引き換えに、か）

どうやらそれは、命ではないらしい。つい『蘇生』の魔法を使ってしまったが、もしかしたらルーシエルは死んでいたかもしれない。しかも、ルーシエルが死んだら契約が破棄され、ノギスも死んでいたのだ。改めて、よかったと思う。

セリアは自分が目を開けたのが不思議なのか、目を瞬かせた。

「……どう……こほん、どうして？」

しばらく話してなかったから話にくいのか、一度せきをしてから体を起こす。

「セリア！」

ルーシエルとエデの声が重なった。ノギスとクロードは何も言わないが、驚き喜んでいるのがわかる。この二人は本当に素直じゃない、と呆れてしまった。

そのせいで、彼女に抱きつこうと思っていたのに、エデに先を越

されてしまった。エデに抱きつかれながら、セリアはよくわかっていない顔をしながらも、彼女の頭をなでる。

「ディー、ちゃん？ ルーちゃん？ 私、怪我してたはず……？ もう駄目だ、って思うくらいひどい怪我だったし、実際ルーちゃんにありがとうって言った後……どうやって、ここに来たの？ それに、その子はノエちゃんよね」

どうしてここにいるの？ とセリアは首をかしげた。

ルーシエルの心を読んだ時、ノエルの容姿もわかったのだろう。

ノエちゃん、と呼ばれ彼女がどんな反応をするのか、そうっと見る。ノエルはまだ、呆然としたようにセリアを見つめていた。

ぴくりとも動かないノエルが少し心配になったが、ひとまずセリアの質問に答えることにする。

「怪我は、エデが術で治したんだ。……それでね。セリアは確かに死んでたよ」

「それは……どういうこと？」

「僕が『蘇生』の魔法を使ったんだ」

そう言うと、一瞬の間の後顔を青くさせた。

「そ、それってルーちゃんのある物と引き換えよね？ もしそれが命だったらどうするつもりだったの？」

先ほどから質問ばかりだ。

彼女の前で、『蘇生』の魔法のことを考えただろうか？ いちいち考えたことを覚えているはずがない。無意識に考えてしまったのだろう。

「ごめん、壺が見つかってつい……」

「壺が見つかった？ ああ、あの変態さんにもらったものね。……それはどうでもいいわ。ついで自分の命がどうなってもいいなんて、思っていないわよね？」

笑顔なのに、目だけが笑っていない。

それはこんなにも恐ろしいのだな、と冷や汗をかきながら答える。

「いや……。もし僕が死んじゃったらノギスも死んじゃうし」

「ふーん？」

「だけど、ノギスも僕ももう十分生きたから……」

「それで？」

だんだんと無表情になっていくセリア。何がそんなに悪かったのだろうか。そんなに悪いことをした覚えはないのに。

「死んじゃっても、セリアが生き返るならいいかな……。って」

「……ディーちゃん、どう思う？」

まだ自分を離さないエデに、セリアは無表情で尋ねた。

「信じられないかな？ あたしもセリアも……。あとクロードも、ルーシエルが死んじゃったら悲しいのにね？」

「えっと、エデさん？ セリアさん？ 二人とも、顔が怖いですよ？」

二人は顔を見合わせる。

「聞いた？ セリア」

「ええ、聞いたわ」

「あたしたちは怒ってるんだから、怖くて当然だよね？」

「もちろん。ルーちゃんは、何で私たちが怒ってるかわかってない。そこがね……」

二人の会話の意味がよくわからない。だがここでわかってない、という顔をしたらもっと怒ってしまうだろう。必死で反省しているような顔を作る。

だが、そんなのは無駄だった。

「……ルーちゃん、やっぱりわかってないのね」

「なっ何のことかなっ？」

声が裏返ってしまったが、ばれていないといい。

「ばれてるわよ？」

「ま、また心読まれた！」

本当に、彼女はもうやってルーシエルの心を読んでいるのだろうか。いくらルーシエルの思考が単純でも、ここまで正確にわからないと思うのだが。

じとつとした目で見てくるセリアとエデに、ルーシエルは今の言葉が自白になってしまったことに気付いた。

「……ごめんなさい。何で怒ってるのかわかりません」

「素直なのは、ルーちゃんのいいところよ。ね？」

「うん、ルーシエルのいいところは素直なところ」

何度も素直と言われると、自分の長所がそれだけのようない気がする。てしまう。

二人の顔を見ていられず、そういえば、と未だに動かないノエル

を見る。

(……ノエル、は)

まだ、ルーシエルと話しているセリアを、信じられないものを見たかのように目を大きく開けていた。その目には先ほどとは違い涙がうつすらと浮かんでいて、ルーシエルはぎよっとし彼女に声をかけた。

「ノエル？ な、何で泣いて……」

ノエルは、はっとしたようにルーシエルに視線を移す。

「ルーちゃん、話を逸らさないで……あ、ノエちゃん本当に泣いてるの？」

ルーシエルが話を逸らすために言ったと思ったのだろうか。そんな嘘はつかない、と少しむっとする。だがそんなことより、ノエルがなぜ泣いているのが気になった。

彼女はうつむいて、口を開いた。

「今のは……魔法？」

「うん、『蘇生』の魔法だけど……？」

自分で言っ、て、自信がなくなる。魔法を使う時、あんな光は出ない。もしかしたら、あれは魔法ではなく術なのだろうか。

だが、あの変態——フィルマンは、『魔法』と書いていた。術であるならクロードやエデが知らないとは思えないし、やはりあれは魔法なのだろうか。フィルマンに教えてもらった魔法でセリアが生き返ったのだから、名前で呼んでやろうと関係ないことをちらりと

考える。

「それは、誰に教えてもらったの？」

ノエルの声が震えていることに疑問を持ちながらも、質問に答える。

「フィルマンって言う……人間、だよ」

「嘘よ」

人間、と言った瞬間にノエルが否定した。

「人間なんかそんな魔法を知ってるわけないもの。アデライードさまが教えてくれなかったのは、きっとその魔法が存在しないから。そんな魔法があったら、あたしに教えてくれたはずよ」

自分自身に言い聞かせるように「きっとそうよ」とうなづくノエル。アデライードを疑ってしまうのを、無理にそうしまいとしているようだった。

『蘇生』の魔法がそれほどまでに、ノエルを取り乱す存在なのだろうか。何よりもアデライードを大切にしていた彼女が、アデライードを疑うなんて考えられない。

「……あのね、フィルマンって人間は魔法を作れるだけの力は、あったと思うんだ。ノエルは術って知ってる？」

ルーシエルの問いに、ノエルは力なく首を振った。

「魔法のもととなったもの。術は、人を守るためのものなんだ。何でフィルマンが『蘇生』の術ではなく魔法を作ったのかは謎だけど

ね。……アデライードさまが知らなかったのも、無理はないよ」

「そんな……そんな術があったら」

お母さんとお父さんを、生き返らせたのに。

そうつぶやいて、ノエルはうつむき傍にあった椅子に座る。

「……ルーシエル、あたしやっぱり人間を許せないわ」

「え？」

「そんな魔法を隠してたなんて。その魔法があったら、お母さんもお父さんも生き返らせた。……ルーシエルには言ってなかったけど、あたしの両親は人間に殺されたのよ」

両親を生き返らせた、と言うということは、両親を生き返らせたかったのだろうか。ノエルが、人間のはずの自分の両親を生き返らせたいと思うのだろうか。

それとも、両親はノエルを大切に育ててくれたのに、その両親を人間に殺されたのが人間が嫌いになった理由なのだろうか。

「お母さんもお父さんも、あたしを大切に育ててくれた」

何も恩返しできなかった、と怒りに燃えた目でルーシエルを見る。

「その魔法があれば……」

「ちょ、ちょっと待ってよ。フィルムマンは、ノエルのお母さんとお父さんが死んじゃった時にはまだ、生まれてな——」

「そんなことどうでもいいのよ。ただ、復讐を実行するだけ。……」

ああ、その女」

エデを睨んで言う。

「もし反撃したら、人質を殺すわよ。わかってるわね？」
「……」

エデはだまって、唇をかんだ。

いつの間に、エデは人質を取られていたのだろう。

ルーシエルは、大切な人たちを傷つけるノエルが許せなかった。

「あと、その女。龍神には、あたしに手を出したらあんたを殺すって言うてるから」

「！」

目を見開いてセリアは絶句した。それを見て、ノエルは満足そうに笑顔を浮かべる。

その笑顔を見て、もっと彼女を許せないと思う。人が傷つくのを見て、笑うなんて。

「男は、あたしでも相手はできるわね。残るはルーシエル。……ルーシエルに、あたしは攻撃できる？」

それは、先ほど攻撃しなかったことを言っているのだろう。ルーシエルはかっとなって、答えるより前に魔法を唱えた。

「π○ㄖ！ ……え？」

『炎』の魔法。ちゃんと威力を調節すれば、死ぬほどの威力にはならない。だが十分な痛手を与えられるだろうとこの魔法を使ったのだ。

「ふざけてるの？」

苛立ったようにノエルは言う。

魔法が、使えなくなっていた。

第三十八話 お人好し（前書き）

今回、会話が多いですね。

第三十八話 お人好し

魔法が使えない。

そのことに焦りはしても、あまり驚かなかった。これが、ファイルマンの言っていた『ある物』なのだろうと。

だが、魔法が使えないとなるとどうしようか。

（クロードより……ノエルはきっと強い）

セリアはもともと戦えないし、エデは人質を取られている。ルーシエルは魔法を使えない。ということはクロードしか、ノエルと戦える者がいないのだ。

だがクロードでは、彼女に太刀打ちできない。

「ふん。やっぱり、ルーシエルにはあたしは攻撃できないの？」

「……違う。僕は魔法を使えなくなったんだ。セリアを生き返らせた代償に、ね」

魔法はもう、使えるようにはならない。そうと決まったわけではないが、何となくわかった。これが魔法を使えなくなったのか、それとも髪が黒い『人間』になったのか。それはわからなかったが。

ノエルは一瞬驚いた顔をし、それから何かを思案するような顔をした。

「代償、ね？　それだけの代償で生き返らせられるなら……あたしは、お母さんとお父さんのどっちを生き返したかしら」

一人しか駄目なのよね、と眉をひそめる。

「……まあいいわ。そんなこと。予定通り、このままあたしは復讐を実行するもの。龍神は解放しないわ」

そんなこと。

そんなことでは、決してない。それはノエルもわかっているだろう。おそらく、どちらを生き返したか考えたくないだけなのだ。

「……ノエル。君は本当に、人間が嫌いなのか？」

「何言ってるのよ。当たり前じゃないの」

怪訝そうにルーシエルを見るノエル。

確かに彼女は、人間が嫌いなのだろう。だが、ただ嫌いなだけではないと思うのだ。

ノエルは、自分の両親が大好きだ。その両親も『人間』だ。両親が大切に育ててくれたなら、ノエルだって人間が全員悪いわけではないとわかってはいるはずだ。

「だって、ノエルのお母さんとお父さんも人間なんだよ？」

「お母さんとお父さんを、人間と一緒にしないで！」

「……憎むのは、殺した人だけでいいんじゃない？」

犯人だけを憎めば、それでいいと思うのだ。人間を憎むのは違う気がする。

ルーシエルがそう言うのと、ノエルは顔を歪め吐き捨てるように言った。

「ルーシエルなら、絶対そう言うと思ってたわ！ ……あなたのそういう優しいところ、あたしは嫌いよ」

「うん」

ルーシエルはただうなずいた。何かを言ってしまったら、ノエルが泣いてしまいそうだったから。

「……あたしも、そう思えたらよかったのに」

「うん」

「ルーシエルが川で助けた人間の子。あの子みたいに、いい子もいるのに」

ノエルがぽつり、ぽつり、と話すのを、皆静かに聞いていた。

「……あたしだってね。何もしていない人間まで殺すのは、きつと間違ってるってわかってるのよ。だけど、それを認めたくなかった。お母さんとお父さんを殺したのは『人間』なんだから、人間は憎まなきゃ駄目って。……あの時、あの村にはどれぐらいいたのかしら。何も知らない人間が」

「あの村？」

「あたしが住んでた村。お母さんとお父さんを殺した犯人は、きつとあの村にいたわ。だからあたしは、あの村の村人たちを皆殺しにした。『地震』の魔法や『炎』の魔法。いろんな魔法を使ってね」

その中には、何も知らなかった人間もいたのだろう。何も知らなかったし、何もしていないのにノエルの魔法によって殺された人間。まだ小さな、生まれたばかりの子供だったはずだ。これから様々なことを体験し、幸せになるはずだったのに。

その人間たちの命を、ノエルは奪った。

許せない、と思っても、彼女にそれを言うことはできなかった。

「でも……もう済んだことよ。今更何を言っても変わらない。……あたしは、人間に復讐するの」

「……もうやめない？」

こんなノエルを、もう見ていたくなかった。後悔し、傷ついているノエル。彼女は今、どんなことを考えているのだろうか。

座っていたノエルの腕をぐいっと引っ張り、立ち上がらせる。

「何するのよ」

「いや……あのさ、ノエル。セリアとエデに謝らない？」

何のためにそんなことを、とでも言いそうにノエルは顔をしかめる。

「それでさ。クロードの術で、髪と瞳の色を変えられるんだ。そして、どこでも行けるよね？」

セリアとエデは許してくれないかもしれない。普通は、あんなひどいことをして許せるはずがないだろう。

「ほら、謝って」

だが、許してくれるかもしれない。

そうになったら、ルーシエルはノエルも一緒に、いろんな所へ行きたい。皆で。

迷っているようなノエルを、セリアたちの方へ押し出す。迷っているなら、本当はノエルも謝りたいと思っているのだろう。

「……ノエちゃん。私、あなたを許せないわ」

「あたしもだよ」

セリアとエデの厳しい顔に、ノエルはうつむいた。

(……昔のノエルだったら、とっくに二人を殺しちゃってたよね)

何がそんなに、彼女を変えたのだろうか。それとも最初から、ノエルは素直になれなかっただけなのだろうか。

二人はうつむいたノエルを見て、ふっと表情を和らげた。

「だけど、ノエちゃんが謝るんだったら。私は許してもいいかなって思ってるんだけど」

「右に同じかな？」

「……ディーちゃん、私はあなたの左側にいるんだけど？」

「小さいことは気にしない気にしない！」

セリアとエデののん気な会話に、思わずルーシエルもノエルと一緒ににほかんとしてしまう。こんな簡単に許してくれるとは、流石に思っていなかった。

「あつ、ノエル、早く謝りなよ」

はっと我に返ってノエルを見る。

彼女の顔を見て、おお、と何だか感動してしまった。ノエルのこんな間抜けな顔は初めて見た。これは、セリアとエデに感謝しなければ。

「……」

「ほら早く」

そうせかすと、ノエルはそっぽを向いた。

「しょ、しょうがないわね。そこまで言われたら、謝ってあげるわ」「はは、全く謝ってるように聞こえないよ?。」

どこまでも高飛車な物言いに、苦笑してしまう。もう少し素直になればいいのに。そっぽを向いたノエルが照れているとわかってるのは、おそらくここではルーシエルだけだろう。

「……悪かったわよ」

しぶしぶと言い直すノエルに、セリアとエデは笑顔で言った。

「よろしくね、ノエちゃん」

「よろしく、ノエル」

人間にこんな風に笑顔を向けられたのは、初めてだったに違いない。

ノエルは戸惑ったような顔をした後、今までで一番の笑みを浮かべた。

「……よろしくお願いするわ」

それさえも高飛車に聞こえてしまうのは、仕方ないことだろう。

* * *

ルーシエルも大概お人好しだが、この二人もお人好しだ。

（……あたし自身、ひどいことをした自覚はあるんだけど）

二人ののん気な会話を聞きながら、それでも許してくれる二人に、呆れてしまう。

「あつ、ノエル、早く謝りなよ」

ぽかんとしていたルーシエルが、我に返ってノエルに言う。その口が小さく「おお」と動いたのを、ノエルは見逃さなかった。自分は今、間抜け面をさらしているのだろうか。

「……」

つい黙ってしまおうと、「ほら早く」とせかされた。

そうは言われても、生まれてこの方一度も謝ったことがないのだ。謝り方なんてわからない。

ノエルはそっぽを向いて、自分なりに精一杯謝った。

「しょ、しょうがないわね。そこまで言われたら、謝ってあげるわ」

「はは、全く謝ってるように聞こえないよ？」

ではどう謝ればいいのだ。

しぶしぶと言い直す。

「……悪かったわよ」

何も言われなかったから、どうやら合格らしい。

視線を二人に戻すと、その眩しい笑顔に戸惑ってしまう。

「よろしくね、ノエちゃん」

「よろしく、ノエル」

両親以外に、こんな純粹な笑顔をした人間を見たのは初めてだった。そもそも、自分は両親以外の人間に笑いかけられたことがあっただろうか。

「……よろしく願うするわ」

気付けば、その言葉が口から出ていた。

この会話の間、忘れ去られていた男と白猫をかわいそうと思ったのは秘密だ。

第三十八話 お人好し（後書き）

次の投稿は、きっと明日の午後になると思います。

第三十九話 茶色の髪（前書き）

三十話の時点でもうすぐ終わると書いたのに……次で四十話です。多分、本当にもうすぐ終わります。

第三十九話 茶色の髪

「……アデライードさまに、ちゃんと謝らなきゃ」

よろしく、と言いつつ後、ノエルはそうつぶやいた。ルーシエルたちはそろって首をかしげる。

こうもそろっているとは何か変だ。まあ、三人とも可愛いのだが。普通なら笑ってしまうところだが、生憎あいにくそんな気分ではない。ノエルは両手をぎゅっと握り締めた。

「アデライードさまは、人間に復讐すること嫌がってたんだもの」

無理に協力させてしまった。

アデライードさまは、最初からノエルのために人間に復讐する手助けをしてくれたのだ。大好きな人に嫌なことを無理にやらせてしまふなんて。

そう考えると、いても立ってもいられなくなった。

「ルーシエル、ちょっとあたし行ってくるわ！ §6――」

「ちょっと待て」

『移動』の魔法でアデライードさまに会いに行こうとすると、今までずっと黙っていた男がノエルの腕を掴んだ。

「……あ、クロード」

「クロ君、いつからそこに？」

「そういえば、クロードそこにいたんだね」

女三人の反応がひどい。やはり、男は立場的に女より下なのか。

思わず笑ってしまうと、男は顔を引きつらせた。

「……はあ。お前らは本当に……」

何かを諦めたような顔をし、ため息をつく。そして、洞窟の外を指差した。

「外にいるのは、そのアデライードとか言う奴じゃないか？」
「は？」

アデライードさまがいるはずない。この場所に來たことがないのだから、『移動』の魔法は使えないはずだ。いつもいるあの鍾乳洞からここまで、馬で來たって一週間はかかるのに。

だが、アデライードさまなら來ているかもしれないという気がする。

半信半疑で洞窟の外に出てみる。ルーシエルたちはついてこないで、洞窟の中で待っているようだ。

そこには土の壁に寄りかかりながら、うつつ、と涙をハンカチで拭いている茶色の髪の美女の姿があった。

「……何してるんですか、アデライードさま」
「おわっ！」

女性にふさわしくない声を上げる。「きゃあっ」とでも言うてくれたら面白いのに、とつい舌打ちしたくなった。普段の口調があらだから、そんな声を出すアデライードさまは想像できないが。

「き、気付かれましたか……」
「気付きますよ、そりゃ」

気付いたのはあの男だが。『クロード』とか言う名前だっただろうか。ルーシエル以外の名前がはつきりわからない。

アデライードさまは悔しそうな顔をした。

「くっ。腕を上げたな」

「何のですか」

「さあ」

この人は本当に時々変になるな、と呆れてしまう。普段は静かで知的な人なのに、どうしてこう変になるのだろうか？

「……それで、何でここにいますか」

「ノエル、私に対する態度が冷たくないかい？」

「質問に答えてください」

冷たくても仕方ないだろう。

アデライードさまは唇を尖らせた。

「君に少し『探知』の魔法をかけててね。すこーし『移動』の魔法を改造して、ノエルの所に移動できるようにしたんだ」

「……お伺いしたいことがあるのですが。アデライードさまは『蘇生』の魔法というものをご存知ですか？」

この人はやはりすごい、と元の丁寧な口調に直す。

魔法を改造するのは、そう誰にでもできることではないのだ。相当強い力を持つ魔女でなければできないことだ。

そのアデライードさまが『蘇生』の魔法を知らないなんて、ノエルには思えなかった。

だが知っていたとすれば、なぜ自分に教えてくれなかったのか。アデライードさまに会ったのは村を壊滅させた次の日で、その話は

してある。あの時に教えてくれたら、両親はまだ生き返らすことができたかもしれないのだ。

「えっ、と。それはだな」

アデライードさまは視線をさまよわせた。この反応は知っているに違いない。

じっと彼女を見つめると、観念したように肩を竦めた。

「知っていたよ。人間の男に教わってな」
「！」

ルーシエルは事実を言っていたのだ。

「洞窟内にいるあの男と似ていたな。確か、ユルヴァンだったか？ 変な男だったよ。魔女である私を恐れず、魔法を教えるとはな。『蘇生』の魔法なんてものがあるなんて、その時まで知らなかった。……さて、ノエル。そろそろ私は洞窟に入り、ルーシエルたちに挨拶をしたいのだが」

「あ、ええ、そうですね……」

洞窟の中に入りながら、ノエルの頭は疑問でいっぱいだった。なぜ知っていたのにも関わらず、教えてくれなかったのだろうか。アデライードさまのことだから必ず理由があるはずだが……。

（……あら、そういえばルーシエルに説明しておくの忘れてたわね）

茶色の髪の魔女。

ルーシエルは、目を見開きアデライードさまを見つめていた。

＊ ＊ ＊

入ってきた女性は、この辺りでは珍しい褐色の肌をしていた。
だが今ルーシエルが驚いているのは、そこではない。

（茶色の……髪？）

外で話していた時、ノエルはこの女性を『アデライードさま』と呼んでいた。だからこの女性がアデライードであっているはずだ。
だがその髪は、魔女の証である黒髪ではなかった。

「こんにちは、ルーシエル。ノエルから話は聞いているよ」
「はっはいっ。こんにちはっ！」

慌てるルーシエルを見て、アデライードは微笑んだ。
その笑みがやけに色っぽくて、女であるルーシエルでさえ、ぼうっと見とれてしまった。いや、それだけでなくセリアとエデも見とれている。だが、男であるはずのクロードは何の反応も示さない。
クロードの反応に、ノエルはキッと彼を一瞬睨んだ。一瞬だったのは傍にアデライードがいたのと、先ほどセリアとエデに「よろしく」と言ったからだろう。

「驚いているようだね、この髪」
「いえっそんなことはっ」

慌てているせいか、何だか語尾が上がってしまう。

「正直に言っているんだよ。ノエルも驚いていたからね、出会った時は」

「その話はやめてください……」

苦々しく言うノエル。出会った時、どんなことがあったのだろうか。

とても興味がわいたが、ノエルが本当に言ってほしくないように見えてやめた。

「まあ、その話は置いておこう。……改めて名乗るよ。私は魔女のアデライード。外での話が聞こえていたなら、わかっているはずだがな」

アデライードは自分の茶色い髪を引っ張って見せた。

「この通り、私の髪は黒ではなく茶色だ。瞳の色は黒だが。どうしてもこうなったのか、私自身もわからない」

この間ルーシエルがセリアが嫌うなど、髪の毛が黒くない魔女ほどありえないと考えたが。実際にそんな魔女がいるのなら、ルーシエルがセリアを嫌いになることもありえるのだろうか。
絶対にはいとはもう、言い切れなくなってしまった。

「さ、君たち一人ひとりに自己紹介をしてもらおうか。ノエルも、君たちの名前を把握していないようだからな」

凶星だったのか、ノエルがそうつとルーシエルたちから目を逸らす。

「僕はルーシエルです。ノエルから聞いてると思いますけど」

「私はセリア。……ええっとアデルさんって呼んでもいいですか？」

「ふむ、アデルさん、か。いいだろう」

ノエルは殺気を出したが、アデライードは笑顔でうなずいた。

「あたしはエデだよ。丁寧な言葉づかいって苦手なんだ。だからこの口調で話すけどいいかな？」

「構わない」

「……俺はクロードだ。エデと同じく、この口調で話す」

「ノギスだ。白猫だが、これでも一応ルーシエルの使い魔をやっている」

「ほう……」

興味深そうに、アデライードは目を細める。ノギスのことはノエルが説明していると思ったのだが、違ったようだ。

アデライードはくるり、と振り返って、後ろにいるノエルに声をかけた。

「だ、そうだ。ノエル、皆の名前を覚えたか？」

「意地悪ですね……アデライードさま。まあ、覚えましたが」

「……あ、そういえば言い忘れてたが、龍神はここに来る前に解放したぞ」

いきなりそんなことを言う。アデライードはノエルがここに来て、心変わりすることをわかっていたのだろうか。

大切なことだと思うのだが、今言うということは本当に忘れていたのだろう。

ノエルは呆れて声も出ないようだった。

「……そんな大切なことは、先に言ってください」

「おや？ またノエルが冷たくなってしまった」

「当たり前です」

先ほどとは違い、ノエルの言葉にはアデライードを敬う気持ちは入っていない。

「龍神には私から謝っておいたから、心配はするな。そもそも龍神と私は、昔からの友人だからな。まあ、龍神は人ではないのだが」
「ゆう、じん？」

「そうだ。友人だ」

アデライードは無邪気な笑顔で言う。

(……ノエル、もうそろそろ限界なんじゃないかな)

爆発しそうだ。

「……ほんつとうに！ あなたは！ 最初から私に協力してなかったんですね！」

「いや、したが。ああ、それからエデの両親と……あの男も解放しておいたぞ」

あの男、と言った時意味深な目でエデを見る。その視線に気付いたエデは、なぜか顔を真っ赤にさせて口をばくばくした。

「その人たちもですか！？ そんな大事なこと、もっと早く言ってくださいよ！」

「今思い出したんだから、仕方ないだろう」

「仕方なくありません！ ……はあ、もう疲れました。あたし先に帰ってますね」

ゼーゼーと肩で息をしながら、ノエルはがっくりと肩を落とした。

「なら、私も帰ることにしよう。さらばだ！」

魔法を唱えたわけでもないのに、一瞬にしてアデライードの姿が消える。ノエルはそれを見て、もう一度ため息をついた。

「はあ……。アデライードさまは時々変なのよ。気にしないでちょうだい。それから、アデライードさまは無詠唱で魔法を使えるの。びっくりしたかしら？」

「無詠唱？　へえ、そんなのできるんだ」

そういえば、フィルマンも術を唱えていなかった気がする。

（あ、フィルマンといえば）

先ほど洞窟の外でアデライードが言った、『ユルヴァン』とは一体誰のことなのだろうか。人間の男だったのだから、魔女ではない。それなのに『蘇生』の魔法を知っているとは。フィルマンが知っていたのは、そのユルヴァンという男から聞いたからなのだろうか。もしかしたら『蘇生』の魔法を作ったのは、その男なのかもしれない。

「それじゃ、また来るわね」

ノエルが『移動』の魔法を唱えた。何の光も出ずに、その姿は見えなくなる。

『蘇生』の魔法を使ったとき、なぜ真っ白な光が出たのだろう。

（うーん、わからないな……）

またアデライードに会って、話を聞きたいと思った。

彼女だったら、理由を知ってそうな気がしたから。

第三十九話 茶色の髪（後書き）

いつもより少し長めです。

第四十話 妖艶な魔女（前書き）

こんなタイトルって、やっぱり駄目ですか？

第四十話 妖艶な魔女

鍾乳洞に戻ると、アデライードさまは魔法で作った椅子に座って、のんびりと紅茶を飲んでいた。

彼女が帰ってからノエルがここに来るまでの間に、紅茶を用意する暇などなかったはずなのだが。もしかして、珍しく魔法で作ったのだろうか。紅茶だけは、いつも自分でちゃんと淹れているのに。向かいの椅子に座って、アデライードさまに尋ねる。

「アデライードさま。その紅茶は？」

「これか？ 久しぶりに魔法で作ったのだが……やはり不味い」

わかっていたのなら作らなければいいではないか。

顔をしかめながらも、それでも飲むのをやめないアデライードさまに呆れてしまう。今日は何だか変だ。時々変になるのだが、今日は少し違う気がする。

ようやく飲み終わったのか、アデライードさまは紅茶のカップを音を立てずに机に置いた。

「さ、飲み終わったことだし。君には、私に訊きたいことがあるんじゃないのかい？」

「……あります。なぜ、私に『蘇生』の魔法を教えてくださいださなかったのですか？」

「逆に訊こう。君は母親と父親、どちらを生き返らすつもりだった？」

その問いに、ノエルは答えられなかった。

どちらを生き返らせたのか。

おそらくあの時、どちらを生き返らせてもノエルは後悔したのだろ

う。

(……どっちも、大切だったもの)

そんなこと、決められない。

アデライードはため息をついた。そのことに、ズキリと胸が痛む。

「答えられない、か。まあいい。……どちらかを生き返らした後、君は魔法を使えなくなっただろう。そうになったら、私が永遠にノエルを守るのか？ あ魔法を使うと魔法は使えなくなるが、寿命は変わらないのだ。私は君より、もう千年は長く生きている。私が死んだ後、君はどうやって自身を守るつもりだった？」

「それは……」

ルーシエルが『蘇生』の魔法を使ったことで、その後外見が変化しないことはわかっている。髪も瞳も黒いまま、魔法が使えずどうやって生きていくのか。

「だから、君に教えなかったのだ。それに、期待させてもしノエルが『蘇生』の魔法を使えなかったらどうする？ ……君にまで、そんな思いはさせたくないかった」

どこか遠くを見るような目で、アデライードさまは言った。

「私には、使えなかった。ユルヴァンを、生き返らすことができなかったのだ」

アデライードさまが『蘇生』の魔法を教わったという、人間の男。この人は、なぜそのユルヴァンという男を生き返らしたかったのだろうか。

じつと彼女を見つめると、こちらを向いて、ふっと悲しそうな笑みを浮かべる。

「ノエルは人間が大嫌いだったから言わなかったが……。私は、ユルヴァンという人間と……その、つまりだな」

珍しく口ごもる。

「……こ、恋仲だったのだよ」

「……………は？」

恋仲の意味は、確か互いに恋い慕っているというものだったと思うのだが？ ノエルの知っている『恋仲』と、アデライードさまの言っている『恋仲』は違う意味なのだろうか。

固まっているノエルの向かいで、アデライードさまは真っ赤になっっている顔を手で隠した。

（え、え？ その反応は……？）

それはつまり。

（……ふう、空が青いわね）

ここは鍾乳洞の中で、空など見えるはずもない。

現実逃避をしていることに、気付いていないノエルだった。

「……ノエル？」

「はい、何でしょうか」

手の隙間から訊いてくるアデライードさまに、にこやかに言う。

「私とユルヴァンはこ——」

「何でしょうか!？」

その先は聞きたくない。おそらく先ほど聞こえたことは、幻聴だったのだろう。

「こいな——」

「何でしょうか!？」

「……」

「何でしょうか!？」

「いや、何も言っていないのだが」

冷静なアデライードさまの声を聞き、いつの間にか立ち上がっていたノエルは椅子に座りなおした。

アデライードさまの顔が今も赤いのは、絶対に気のせいだ。そうなのだ。

「恋仲だ」

「いやー! やめてくださいそんな冗談! しかも私に遮られないよう、早口でおっしゃいましたね!？」

ここまではっきり言われては、もう気のせいだと思えないではないか。

「そう落ち込むな」

「誰のせいだと思いいのですか……」

大声を出すのにも疲れた。

ノエルはがっくりと肩を落とした。アデライードさまが大切なこ

とを忘れるのはいつものことだが、流石にこんなことを言ってくれないなんて。ノエルは信用されていないのだろうか。今もあまり人間が好きではないが、人間が大嫌いなときにだって、それを言われでもアデライードさまへの思いは変わらない。それは絶対だと言い切れる。

「ああそうだ。明日またルーシエルの所へ行こうと思うのだが」
「勝手にしてください」

いじけたアデライードさまの機嫌を直すのは苦勞した。

＊ ＊ ＊

あの二人が帰ると、途端に洞窟は静かになった。
セリアとエデが、まだぼうつとした顔でつぶやいた。

「素敵な人だったわ……」

「うん……あたし、将来あんな人になりたい」

「少々変わっているがな」

余計な一言を付け加えたクロードを一斉に睨む。もちろんルーシエルもだ。

「クロードの」

「クロ君の」

「馬鹿クロードの」

「」「ばーかっ!」「」

その攻撃に参加していないノギスは、呆れたようにルーシエルたちを見ている。

「……ひどくないか？ 特にエデ、なぜ馬鹿と二回言った？」

「馬鹿クロードが馬鹿だからなのだ！」

生き生きとした笑顔で言うエデ。

ルーシエルも馬鹿とは言ったが、その言われようはひどい気がする。あくまでも、気がするというだけだが。クロードが馬鹿だという意見には賛成だ。

実際に馬鹿だから。

「……おい、今何かひどいことを考えなかったか？」

「さーあ？」

そしらぬ顔でそっぽを向くと、クロードは諦めたような顔をする。先ほどもこんな顔をしていたな、と思い出した。

その原因は自分たちだとわかってはいるが、彼をからかうのはやめられない。

「まあ、クロ君は置いておきましょう。アデルさん、とっても綺麗だったわね……。女の私でも見とれちゃった」

「うんうん、何ていうか……妖艶？」

「妖艶かあ。そうだね、僕もそう思うよ」

三人が話している間、クロードとノギスは二人で洞窟の隅のほうにいた。

『白猫、お前だけが俺の味方だ……』

『白猫ではなくノギスだ』

そんな会話が聞こえた気がした。

ほんの少しだけ、彼らが哀れだと思った。

第四十話 妖艶な魔女（後書き）

前回に比べて短めです。……前回は、なぜか少しだけ長かっただけ
けです。

第四十一話 秘密（前書き）

今回、また少し長めです。

第四十一話 秘密

夢を見ていた。普段ならこれが夢だとわからないのに。夢だとわかってしまっているから、こんなにも辛いのだ。

お母さんとお父さんが、笑いかけてくれて。

一緒にご飯を食べて。

自分は嫌だけど勉強をして。

そしたら、お母さんもお父さんも褒めてくれた。

夢の中の自分は笑っている。

そしてその日、自分は逃げた。

お母さんもお父さんも一緒に、一緒に逃げて！　そう思うのに、夢の中の自分は一人で逃げてしまう。

この続きはもう見たくない。もうこの夢は何度も見ていて、最初は幸せで、最後には絶望に落とされるのだ。両親の死、という。

たとえこの二人を生き返らせなかったとしても、あの魔法を教えてほしかった。少しでいいから、希望がほしかった。生き返らすことができなかったら、もっと絶望しただろうが。

アデライードさまの判断は正しかったのかもしれない。自分でその絶望を味わったから、弟子の自分には同じ思いをさせたくなかったのだろう。

だけど。

やはり、納得しきれることではなかった。

そんなことを考えていても、夢の中の自分は家に戻ってきて。扉を開けてしまった。

そこにあるのは、大好きだった両親の死体。

そして自分――ノエルは、村人を皆殺しにするのだ。

目が覚めたとき、寝台は涙でぬれているだろうな、と思った。

＊ ＊ ＊

人の気配がして、ルーシエルは目を覚ました。体を起こし辺りを見回すも、横で寝ているセリア以外誰もいなくて首をかしげる。ノギスはそこで寝ているし、この気配は人間だったと思ったのだが。

(……うーん、気のせいかな)

そう思いまた目をつぶると、首をくすぐられた。

「……誰？」

眠いからか、反応が鈍くなる。首をくすぐられてもあまりきかないが、普通だったらびっくりして悲鳴を上げるくらいはしただろう。

「ふむ、君にくすぐりはきかないのか……」

この声は確か……。昨日聞いたばかりだったと思うのだが、頭が働かず思い出せない。

目を開けると、すうっとアデライドが現れた。

これも魔法でやったのか、とのん気にそう思う。

(あ、でも、ノエルはこんな魔法教えてくれなかった)

ぼうつとして何も言わないルーシエルを、アデライドは不満そうな顔で見る。

「何だ、その反応は。驚かないのか……。ノエルはこの魔法を使え

ないのに」

「ああ、やっぱりそうですよね」

横になったままでは失礼かと思い、セリアを起こさないようゆっくり起き上がって身なりを整える。こんな日に限って、寝癖がすごい。手でとかしていると、アデライードは苦笑してくしを出した。

「とかしてやろう」

どこからも取り出したそぶりはなかったから、おそらく『創造』の魔法で作ったくしだろう。

大人しくアデライードに背を向けて座ると、彼女は丁寧にとかし始めた。

「……セリアはなぜここに？」

「僕と会っていることがばれて、村に帰れないそうです」

本当に、セリアと友人になって良かったのだろうか。

彼女はルーシエルと友人になったせいで、殺されたのだ。

「こら、下を向くな。とかしにくい」

そう言われ、慌てて前を向く。

「……君はセリアを、『蘇生』の魔法で生き返らしたのだったな」
「はい」

「少し、私の話を聞かせてやろうか」

何だろう、と振り返ると、また怒られてしまった。どうやら、とかし終えるまでアデライードの顔を見てはいけならしい。

アデライードは、何をしにきたのだろうか。
髪をとかされながら、ふと疑問になった。

セリアのことを氣遣ってか、アデライードは小さな声で話し始めた。

「昔の話だ。もういつだったのかさえ覚えていない。私は、ユルヴァンという人間の男に出会った。……クロードに会った時は一瞬ユルヴァンかと思ったよ。それくらい、クロードとユルヴァンは似ていた。性格は全く違うようだがな。ユルヴァンは何というか……女にとことん甘い性格だった」

フィルマンだ、と思った。

あの変態もクロードに似ていて、ユルヴァンもクロードに似ている。しかも女に甘いとは。

クロードの一族には、フィルマンの子孫もいるだろう。逆に、昔には先祖もいる。ユルヴァンの子孫が、フィルマンとクロードなのだろうか。そこまで容姿が似ていると、血がつながっているとしか思えない。

（あ、一族ってことは、みんな血がつながってるのか）

考えてみれば当然のことだ。フィルマンとクロードは、ユルヴァンの血を濃く継いだのだろうか。一族の男が皆、あの顔のわけではないだろう。

アデライードは話を続けた。

「ユルヴァンに私を封印しにきたのか、と問うと、彼は君を口説きにきたんだと言った。一瞬冗談かと思ったが、そんなことを言っている顔ではなくてな。……ルーシエル、君はセリアと友人になる時、一度は断ったのではないのかい？」

「断りましたよ、当たり前です」

本当にその人のことを思うのなら、友人になんてなるべきではないのだ。

結局は、セリアと友人になったのは自分のためなのだ。彼女も自分のためだと言っていたから、お互いさまなのだろうか。

「私も断ったのだよ。だが、毎日ユルヴァンは私を訪ねてきた。…根負けしたよ。一年以上も毎日来られてしまっってはな。その時には…私も彼を好きになっていた」

何となくこの話の結末がわかってしまっ、ルーシエルは黙って話を聞いた。

「私たちは、誰にも言わずひっそりと会い続けた。…だが、秘密というものは、結局はばれてしまうものなのだよ。会い続けた結果が…セリアと一緒にだよ」

「…ユルヴァンさんは、亡くなったんですか」

「ああ。『蘇生』の魔法を知っていても、使えなくては意味がない。『蘇生』の魔法を知っていても、使える魔女は本当に一握りなのだよ。ルーシエルのような魔女は珍しい。…さあ、終わった。これでいいか？」

言われて髪に触ると、寝癖はなくなっていた。普段よりサラサラしている気がする。

「話を続けるよ」

ルーシエルは立ち上がり、椅子にきちんと座った。アデライードも座って、『創造』の魔法で作ったのか、いつの間にか紅茶を飲ん

でいた。

「……『蘇生』の魔法はユルヴァンから教わった。今でも信じられないが、ユルヴァンがその魔法を作ったらしい。……彼は術というものを使っただけ。ルーシエルも知っているだろう？」

「人間を守るもの、ですよ」

アデライードは「そうだ」とうなずいた。

「なぜ、術ではなく魔法を作ったのか」

「……僕も、それは気になっていました」

どんな理由があるのだろう、とアデライードを見つめると、彼女は真剣な顔をする。

「それは……」

ぷつと笑ったアデライードに、わけがわからず目を瞬く。

「何となく、だとさ」

「な、何となく？」

そんな適当な理由で『蘇生』の魔法を作ったかというのか。

アデライードは、愛しそうに目を細めた。その表情で、彼女がどれだけユルヴァンを愛していたのかがわかる。

「人間が使うより、魔女が使った方が何となくいいと思った。ユルヴァンはそう言ったんだ」

「何となく、ですか」

「そう。何となく、だ」

フィルマンは、『蘇生』の魔法を知っていた。だが、クロードは知らなかった。これにはどんな意味があるのだろうか。

そして、あの魔法を使った時の光は一体何なのだろう。

「あの、僕が『蘇生』の魔法を使った時、真っ白な光が出たんですが……。どうしてかわかりますか？」

「それは……おそらく、その魔法が限りなく術に近いからではないか？ はっきりとはわからないが、『蘇生』の魔法は術と同じく、人を守るものだからでは、と思うのだが」

アデライードは『蘇生』の魔法を使えなかったと言ったし、ユルヴァンにその理由は尋ねていないのだろう。光が出ることさえ、知らなかったのではないだろうか。

「……そういえば、アデライードさまは何しにここへ来たんですか？」

「この話を聞いてほしくてな。ノエルには秘密だぞ、すねてしまうからね。彼女にはまだ話していいことだから」

秘密というものは、結局はばれてしまうと言ったのは彼女なのに。今から、ノエルがどれだけすねるか……。いや、怒るかを考えて身を震わせる。

アデライードはどこかすっきりしたような笑みを浮かべて、立ち上がった。

「それではもう、帰るとしよう。ノエルが今頃起きて、私を探しているかもしれない」

「一緒に住んでるんですか？」

「ノエルには居場所がないらしくてな」

探せばいくらでもあるだろうに。人間が近づかない所が。
不思議そうにするルーシエルを、ふふっと笑いながらアデライー
ドは『移動』の魔法を唱えた。

「So my！」

わざわざ魔法を唱えたのは、そういう気分だったのだろう、と思
った。

＊ ＊ ＊

ノエルが目を覚ますと、思った通り寝台は涙でぐっしりとぬれ
ていた。

（また見ちゃったわ……）

あの日からもう、何百回、何千回と見た夢。
こういう時は一人だと心細くなって、思わずアデライードさまの
姿を探してしまう。

「……アデライードさま？」

どこかに出かけているのだろう。昨日ルーシエルに会いに行くと
言っていたから、あの洞窟に行ったのだろうか。
勝手にしてください、と言ってしまったからには、ルーシエルの
所へ行くわけにもいかない。あの後機嫌を直そうとした時、なぜそ
の言葉を訂正しなかったのだろう、と後悔する。

（早く帰ってきて……）

寂しい。

アデライードさまに、抱きしめてもらいたい。

帰ってくるまで眠っていようとも思ったが、またあの夢を見たくはないのでやめておく。代わりに、アデライードさまのために紅茶を作ろうと思い立った。作ったことはないが、見よう見まねでもそれなりの紅茶を作れるはずだ。

(……あら？　　そういえば、アデライードさまが紅茶を作るところ、ちゃんと見たことがないわ)

紅茶を作ることは、諦めるしかない。

ノエルはため息をついて、アデライードさまの寝台まで歩き横になる。先ほどまでアデライードさまがいたのか、まだ少し温かった。そのことに安心して、ノエルは目をつぶった。この寝台では、あの夢は見そうにないから。

「……ノエル？　私の寝台で、何をしているのかな？」

「ア、アデライードさま！？」

がぼっと起き上がると、アデライードさまが困ったような顔でこちらを見ていた。かあつと顔が熱くなるのを感じる。まだ帰ってこないと思っていたのに、こんなところを見られてしまうとは。

「申し訳ありません！　これはその……」

「……ふふっ、わかっているよ。いつまで経っても、ノエルは子供だね」

「あう……」

アデライードさまの言う通り、自分はいつまで経っても子供だ。

だから「ほら、おいで」と優しく言われてしまったら、あらがうことができないのだ。

ノエルは彼女に抱きついた。アデライードさまは背が高いから、彼女の顔は上の方にある。頭をなでなれながら、顔を見られなくて良かったと思った。なでられるとまた涙が出てきてしまったからだ。だが、アデライードさまの服をぬらさぬよう我慢する。

「泣くのを我慢しなくともいい」

顔なんて見なくとも、アデライードさまには何でもわかってしまう。そのことが恥ずかしくもあり、嬉しくもあった。

やはり自分は、この人のことが大好きだ。

第四十二話 贈り物

少し困ったことになった。

ルーシエルは、エデとクロードと顔を見合わせた。

「……お昼、過ぎてるよね？」

「うん、そのはずだけど」

「まだ起きないのか」

二人が来てからもうしばらく経つのに、セリアがまだ起きないのだ。

もしかしてまた死んでしまったのかと心配になったが、ちゃんと脈はある。息もしているし、ただ寝ているだけのはずなのだ。

「僕が使った『蘇生』の魔法のせい……？」

フィルマンも、こんなことになるのなら言ってくれたらいいのに。ぐっすりと眠っているセリアの顔を見ていたら、ふと大事なことを思い出した。彼女に関係する、とても大事なこと。

「……あ。セリアの誕生日」

「あっ」

エデが口を押さえる。

「ど、どうしよう。もうチョコレート溶けちゃってるかな？」

チョコレートは溶けやすい。そう保存できるわけではないから、買った日かその翌日には食べるのが普通だ。冬ならば数日もつが、

今は春。しかも、もうすぐで夏になろうというのだ。チョコレートが溶けていないか心配するのも無理はないだろう。

エデがうろうろと歩き回る。それを横目で見ながら、ルーシエルは服にしまっておいた指輪の箱を取り出した。最後に見てからそう日は経っていないのに、何だかずっと昔から指輪を見ていないような気がした。

その箱を机の上に置く。開けようと少し思ったが、セリアと一緒に見たいと我慢した。

エデが立ち止まり、こちらを向いた。

「……まあ、溶けてたって仕方ないよね。それよりもルーシエル」

「ん？ どうしたの？」

「そこにいる、ノギスのこと。何で説明してくれなかったのさ」

説明してくれていたら、セリアの誕生日はここで祝った、とむくれた顔で言う。

どう言い訳をしようか必死に考えていると、エデは何かをひらめいたのかぱっと表情を明るくさせた。

「ああ、今から祝えばいいのか。ちょっとチョコレート取ってくる！ 溶けてたって、セリアは喜んでくれるだろうしね。……さ、クロード。早くあたしをステルダの家につれて帰って。クロードはそのためにいるんですよ」

「……最近、ますます俺の扱いがひどくなってきたな」

そうぼやきながら、しぶしぶクロードは術を唱える。

真っ白な光のせいでセリアが目を覚ましてしまったか、と彼女を見ているがその心配は要らないようだ。ルーシエルが呆れてしまうほど、ぐっすりと気持ち良さそうに眠っている。

(……この洞窟で、お祝い?)

だとしたら飾りつけぐらいはしておきたかったが、そんな準備はしていない。

誕生日のお祝いは、やはり料理だろうか。カリマが作ってくれた料理を思い出し、うつとりする。あれは本当においしかった。

問題は、ルーシエルが料理をできないということだ。魔女は食べなくとも生活できるため、料理をする機会がなかった。カリマも、絶対に料理を手伝わせてくれなかったのだ。

何もできない、と落ち込んでいるといきなりまたアデライードが現れた。その隣には、目を赤くしたノエルもいる。

「ルーシエル! セリアの誕生日を今から祝うのか! ?」

勢い込んで尋ねてくるアデライードに、たじろぎながら答える。

「そうですけど……。どうしてそれを知っているんですか?」

この二人には、教えていなかったはずだ。今日ここで祝うことにしたのはつい先ほど決めたことで、知っているはずがない。

なぜ、知っているのだろうか。

首をかしげてアデライードを見ると、彼女は少し気まづげに目を逸らした。

「いや……。君たちのことは、ルーシエルの封印が解けた辺りからずっと見ていてな。魔法を使って、ルーシエルの見たこと、聞いたことなど、全てが私に伝わるようにしていたのだ。その魔法をずっと君にかけたままで、先ほどの会話も聞いてしまったというわけだ」
「私にそういうことはわからないんだけどね。何も言われずいきなりつれてこられたのよ?」

苦笑しながら言うノエル。その手はアデライードの服をしつかり掴んでいる。泣いたように目が赤くなっているのも気になったが、訊かないことにした。泣いていた理由なんて、言いたくないに違いない。ルーシエルだってそうなのだから、ノエルの性格ではもつとそうだろう。

「しまった……。何も贈り物を用意していないな。弟子の友達なのだから、何か贈ったほうがいいだろうとは思うのだが。人の誕生日なんて祝ったことがないから、何を用意すればいいのかわからない……」

ユルヴァンの誕生日は祝わなかったのか、と尋ねたくなったがノエルがいるのでやめておく。彼女の前でユルヴァンの話はしないほうがいいだろう。ルーシエルのためにも、アデライードのためにも。ノエルは怒ると怖いのだ。

うなだれるアデライードに、ノエルは不思議そうな顔をする。

「別に、誕生日なんておめでとの一言でいいのではないですか？ それだけでも、きっとセリアは喜んでくれると思います」

「……不本意だが、そうするしかないな。本当に喜んでくれればいいのだが。それで、セリアはまだ起きないのか？」

結構な声量で話していたにも関わらず、セリアが目覚める様子はこれっぽっちもない。

アデライードは少し何かを考えた後、にやりと嫌な笑みを浮かべた。

音を立てずそうっとセリアに近づくアデライードを、何をするのだろうかと不安になって見る。

「ルーシエルには効かずにがっかりしたからな」

ルーシエルには効かなかった、というのは、くすぐりのことだろうか。アデライードの手がゆっくりセリアの首に向かっていていることを見ても、間違いない。

無理に起こすのはかわいそうだと今まで放っておいたが、もう半日以上は優に寝ているのである。もうそろそろ、起こさなくてはならないだろう。

そんなことを言い訳のように考えて、セリアの様子をじっと観察する。

「……………。むう、セリアにも効かないのか」

「そうみたいです…残念です」

セリアは首をくすぐられたというのに、身動きもせず眠ったままだ。これでセリアの弱点がわかるかと期待したのだが。

ルーシエルとアデライードは、同時にため息をついた。

それを見てノエルは呆れたかと思うと、ぽん、と手を打った。

「……アデライードさま。私、セリアへの贈り物を思いつきました」

「何だ、それは？」

目を輝かせて、アデライードは身を乗り出す。

「龍神、です。あれを実体化させて、ここに連れてくればいいのではないですか？ それぐらいは容易いでしょう……アデライードさまと龍神は友人、なのですから」

「おお！ そんなことは思いつかなかった！ さっそく迎えにいつてくる。あいつも、可愛い『巫女』のためならば、それぐらいのことはしてくれるさ」

気のせいかな膨れっ面になっているノエル。それに気付いているのか、アデライードは無邪気に喜んでいた。

さっそく、と言った通り、アデライードの姿はすぐに消える。

彼女がいなくなったのを確認し、ノエルは口を開いた。

「……あたしは、アデライードさまと龍神が友人だったなんて、聞かされていなかったのよ」

「うん、昨日そう言ってたよね」

「勝手なんだけど……。アデライードさまはあたしのことを何でもわかってるのに、あたしがわかってないのは嫌なの」

ユルヴァンのことだって聞いていなかった、とノエルはもつと頬を膨らませた。膨らませすぎて、不細工になってしまっている。

これは指摘した方がいいのだろうか？

（……やめとこ。こっちにまで火の粉が飛んできそうだし）

ノギスはノエルのことが苦手なのだろう、彼女が来てからずっと隅のほうで静かにしている。どうせならルーシエルではなくノギスに火の粉が飛べばいいのに。

本当に飛んでしまい、ルーシエルは自分がそう思ったことは決し

て言うまいと心に決めた。

第四十二話 贈り物（後書き）

次かその次がエピソードになると思います。

ですが、明日は投稿できそうにありません。もしかしたら明後日も……。そろそろテスト勉強をしなければいけませんので。すみません。

エピローグ 誕生日（前書き）

遅くなり、すみませんでした。私長い話を最後まで書ききったのは初めてで……。どう終わればいいのか。結局ぐだぐだになってしまいました。

今までで一番長かったものより、エピローグは3000文字くらい長いです。

エピソード 誕生日

セリアが起きて一番に見たのは、思わず守ってあげたくなるような愛くるしい少女だった。

自分にこんな知り合いはいなかったはずなのだが。この洞窟にいるということは、ルーシエルかセリアの知り合いだ。セリアが覚えていないだけで、どこかで会っているのだろうか？

ぽかんとするセリアを、皆苦笑して見ていた。

少女は小さい手で、セリアの額を軽くはたく。見た目に合わず結構な威力だったので、うめき声を上げてしまった。少女は心配そうに瞳を曇らせ、そしてすぐにため息をついた。

「我が巫女よ。起きて第一声……まあ、実際に口に出しているわけではないが。それが『愛くるしい少女』とはひどくないかの？ 仮にも神に向かって」

その声は、とても聞き慣れたものだった。艶やかな、とても少女が出すものではない声。

誰の声だか理解し、だが信じられなくて目を見開く。

「龍神……さ、ま？」

今まで声を聞くだけで、その姿を見たことがなかった。まさかこんな少女だったとは。

少女——龍神さまがすねたようにそっぽ向く。

「だから少女ではないと言っておるのに。……この姿はただ、龍の姿ではそなたが驚くかと思うてだな」

「要するに、人間に^{へんげ}変化すると少女になるということだろう？ 君

たち神は、一億年くらい生きていたって、人間や他の生き物に変化するとセリアの歳ぐらいになるのだから。大人の姿になるには何億年も生きなくてはならないと、昔言っていた」

「うう。アデライード、そなたは我を子供だと言っておるのか？」

少なくともそなたよりは長く生きている、と龍神さまは少し落ち込みながらも言う。

（え？ あれ？ 龍神さまは、アデルさんと知り合いなの？ とうか、どうしてここに皆が……？）

ルーシエルとエデ、クロードならわかる。だがなぜ、アデライードとノエルがいるのだろう。しかも、幼女の姿の龍神さままで。思ってしまったから、そういえば龍神さまはセリアの心を読めるのだったと思い出す。幼女と言ってしまったことはばれてしまっただろう。

あの白猫はどこにいるのだろうか。きよろきよろと探すと、隅で疲れたようにぐったりと丸くなっていた。この中でまともな説明をしてくれるのは彼だけだったのに、とがっかりする。この様子ではまともな説明など期待できそうにない。

「幼女ではない。我が巫女、本当にわかっておるのか？ それから、あの白猫だけではないぞ。ここに我もいるではないか」

龍神さまが胸を張った。そんな姿で言われても、全くえらそうに見えない。ただ可愛いだけだ。

「……のう、我はそんなにえらそうに見えないのか？」

「ええ、全く見えません」

「……そなたは、友人ができて性格が変わったのではないか？ 我

にそんなはつきりと言うことはなかっただろう」

そうなのだろうか。セリアは首をかしげて、ルーシエルの顔を見た。

彼女のおかげで変わったのなら。

それはおそらく、セリアにとって良いことなのだろう。

にっこりと笑うセリアを、ルーシエルは不思議そうに見た。

「我が巫女が幸せそうなのだ……」

そんなセリアに、龍神さまは寂しそうにつぶやく。

「はい。私はとても幸せです。……そろそろ、なぜ龍神さまがここにいらっしゃるのか、説明してくださいませんか？」

冷たくそう言い放つと、龍神さまは目を大きく開いてふるふると小さく震えた。

よろよろとアデライードに凭^{もた}れ掛かる。

「アデライード、我が巫女が冷たいのだが」

「私のノエルも最近冷たくなってな。……諦めが肝心だよ」

本当に、早く説明してくれないだろうか。大体、何を諦めるのだろう。セリアがもう、龍神さまだけが大好きではなくなったからだろうか。

そう考えると、今にも泣き出しそうな顔を龍神さまがした。だから、もちろん今も龍神さまが大好きですが、と付け足しておいた。その途端表情が明るくなって、単純な人だな、と思う。人ではなく神なのだが。

龍神さまはセリアが単純だと思ったことに気付いていないのか、にこにこしながら説明を始める。小さな女の子がにこにこ笑っていると、とても可愛い。

「我とアデライドは、昔からの友人なのだ。……とある理由から、知り合ってた。そなたは気にしているようだが、我は捕らえられていた時何も危害を加えられなかった。ただ、少しだけ力を使えぬようされていただけなのだ」

何だ、そうなのか、と安心する。ずっと気がかりだったのだ。自分のせいで、龍神さまの身に何かあったら。

龍神さま自身の責任でそうなったのなら、ただ心配するだけだが、自分のせいでなったのならそうはいかない。

「……私の責任だったら、それしか思わぬのか？」
「ふふっ、冗談です」

龍神さまなら、冗談で思っていることだってわかるはずだ。それさえわからないほど、うろたえるのか。そう思うと嬉しくなった。

龍神さまが少し顔を赤らめて言う。

「我が巫女、我はそなたを愛しく思っているのだぞ？ うろたえて当然ではないかの。……さて、話が逸れたな。アデライドに、大切な我が巫女の誕生日を祝うと言われたのだ。この姿では少々ためらったが、そなたのためならと思うてな」

「……龍神さま。可愛すぎます」

照れ隠しにそう言うセリアを見て、龍神さまは微笑んだ。

「もう一度言うが、我はそなたを愛しく思っている」

可愛いはずなのに、その笑みは意地悪く見えた。わざわざもう一度言ったのは、絶対にセリアの反応を面白がっているのだろう。

自分も顔が赤くなっているな、とわかる。幼女と少女が顔を赤らめている光景は、はたからはどう映るのだろうか。

こほん、とせきばらいをして龍神さまは言った。

「……だが、すまないと謝らなくてはならぬな。急に心が読めなくなっただろう？」

うなずくと、龍神さまはうつむいた。

「それは私のせい……アデライドのせいなのだ。その能力をそなたに授けたのは、我でな。捕らえられている間、アデライドにそんな能力があったら人間から恐れられると聞いたのだ」

「謝らなくてもいいです。私は、そんなこと気にしていませんから」

見つめあうセリアと龍神さまを見て、ルーシエルがぽつりと言う。

「……二人だけの世界にならないでよ。僕たちのこと、忘れてない？
僕だって、セリアのために贈り物用意してたんだから」

そうそう、とエデも同意した。

「あたしも用意してるもん。セリアは喜んでくれないかもだけどさ。……うん、あたしこれもらっても嬉しくないし」

落ち込んだ様子で、持っていた袋を見るエデ。

何を用意してくれたのだろう、とわくわくしながら、二人が贈り

物を渡してくれるのを待つ。やはりあの日、贈り物を買っていたのだ。龍神さまの声を聞いたあの日。

龍神さまはなぜわざわざ、ある者に捕らえられているとセリアに伝えたのだろうか。危害を加えられていないのなら、何も言わないでくれた方がよかった。それがなかったら、セリアは死ぬ前に二人から贈り物を受け取られたのに。

「ま、いっか。とりあえず、ルーシエルの前にあたしが渡すね」

エデは気を取り直したように顔を上げた。袋の中から、何か長方形のものが入った包み紙を取り出す。その甘い匂いに、セリアではなく龍神さまが目を輝かせる。

「チョコレートか!？」

「い、意外に龍神さまは甘いものが好き、と。これは覚えておかないと。……そんな物欲しそうな顔をしたって、あげませんよ。これはセリアにあげるんですから」

龍神さまに取られないよう、エデはさっと素早くセリアに包み紙を渡した。丁寧な言葉づかいが苦手だと言っていたのにそうするのは、龍神さまを敬っているからなのだろう。こんな姿ではあっても、龍神さまは神なのだ。

受け取ったものの開けていいのかわからずエデを見ると、彼女はばつの悪そうな顔をする。うなずいたので、開けてはいいと思うのだが……。

「……溶けてる？」

「う、ん。溶けちゃってる。……けど、味は変わらない! だからほら、早く食べて」

おそるおそる茶色いチョコレートというものを口に入れ、その甘さに驚いた。

（美味しい……）

こんなものを食べたのは初めてだ。龍神さまが横でだらだらとよだれを垂らしているのも、仕方のないことだろう。セリアがそう考えると、龍神さまは慌てて手でよだれを拭いていた。

エデはほっとしたようにため息をついた。

「はあ、よかった……。ん、その様子なら食べたことなかったみたいだしね。さあルーシエル、早く買ったもの渡したら？」

エデの言葉に、ルーシエルは困ったような顔をして一步セリアに近づいた。

＊ ＊ ＊

エデの渡したチョコレートを、セリアは気に入ったらしい。ルーシエルは、指輪の入った箱を握り締めた。

（さっき気付いたけど……）

セリアの指に、はたしてこの指輪はあうのだろうか。大きかったらまだしも、小さかったら指にはめられない。そうなったら、もう指輪としての意味はないだろう。

「はあ、よかった……。ん、その様子なら食べたことなかったみたいだしね。さあルーシエル、早く買ったもの渡したら？」

エデにそう言われても、それが心配だった。

とりあえずセリアに一步近づいてみるが、渡してはめられなかったら格好がつかない。

この指輪だったら、見るだけでもいいだろうか。

セリアの瞳を見ながらそう思う。この瞳とはやはり微妙に違うが、青玉の色は似ている。

「……その、がっかりしないでね」

そうっと箱を渡し、開けてみるように言う。

言われた通り箱を開けたセリアは、きょとんとした。まさか、指輪を用意しているとは思っていなかったのだろう。

「これ……指輪？」

「は、はめてみて。もしかしたら、セリアの指にあわないかもしれない、けど」

その指輪を嬉しそうに見つめる。少し迷った後、セリアは左手の人差し指にはめた。

入ったことにまず安心し、大きすぎないか心配になる。

「どう、かな？　大きすぎない？」

「……言いつらいけど、私の指には大きすぎるみたい」

がっくりとうなだれてしまう。

ちゃんとこのことまで考えておけばよかった。あの時はただ、セリアの瞳に似ていてつい買ってしまったが。

まあ、小さくなくてよかった。大きいのなら、セリアが成長すればはめられるようになる。

「だけど」

続いた言葉に、ルーシエルは恥ずかしくなった。

「この宝石、私の瞳に似てるから選んだのね。ありがとう」

「……さあ、どうだろう」

セリアの笑顔を見れたことに嬉しくなって、だがそれを知られないよう顔を背ける。そんなことを知られたら、セリアとエデはからかうに決まっているのだ。

何か話を逸らせないかと考えると、まだあれを彼女に伝えていないことに気付いた。

「あ、そうだ。アートがおめでとう、って言ってたよ」

セリアは首をかしげた。そういえば彼女にアーサーの名前を伝えていなかったのだった。

「川で会った子だよ。アーサーって名前なんだ。僕はアートって呼んでるんだ。この指輪のお店、アートに案内してもらったんだよ」

「……ああ、あの子。ふうん、そっか。おめでとう、ねえ？」

セリアはなぜだか不機嫌そうになる。

「アーサーのことは放っておいて……。ルーちゃん、さっきから気になってたんだけどノギス君はどうしてぐったりしてるの？」

アーサー。ノギス君。

アーサーの名前を短くしないこと、ノギスを白猫君ではなくノギス君と呼んだことに驚く。

彼女が自分の名前を呼んだことにルーシエルと同じく驚いたのか、ノギスの耳がピクリと動いた。何かを言おうとし、ノエルのことを見て口を閉じる。

「……ノギスのことも放っておこう」

「放っておくな」

「あら、あまりにもあんたが何も言わないから、そこにいるの忘れてたわ」

ノエルの言葉に納得したのだろう、セリアがノギスを気の毒そうに見る。

「……セリア、何だその顔は。俺はこの魔女と相性が悪いんだ」

「！　そう、なんだ。それは残念だわ」

セリア、とノギスは呼んだ。あまりにもさらっと言ったので、つい聞き流してしまうところだった。ルーシエルが気付いたように、セリアもやはり気付いたのだろう。少し驚いた後口元を緩めた。

嬉しがっているのを隠しているつもりだろうが、ここにいる皆が付いているだろう。

（……あ）

訂正だ。クロードだけは何もわかっていないようだった。

（そういえば、クロードにまだ名前呼ばれたことないな）

エデの名前しか呼んでいるのを聞いたことがない。必ず「おい」と話しかけられたり、「お前」と言われたり。

まだルーシエルとセリアの名前を呼んだことがないのだ。

そんなことを考えていたら、いつの間にかクロードの顔をじっと見ていたようだ。訝しげに尋ねてくる。

「……どうした？ 俺の顔に何かついてるか？」

「え、いや、別に……。ただ、クロードに名前を呼ばれたことないなあって」

「ああ、そういうばそうだな。気付かなかったが」

ルーシエルが気付いたのに、本人が気付いていないなんて。以前から思っていたが、クロードはどこか抜けている。

セリアがにっこり笑って言った。

「クロ君にもセリアって呼んでほしいな？ クロ君は私に何も用意してくれてないんだから。贈り物として、名前を呼んでくれない？」

「……セリア。これでいいか？」

満足げに笑うセリアを見て、何だかむっとする。

これはただ、ルーシエルも名前を呼んでほしいだけで。そしてセリアのように理由がないから呼んでもらえないことに、むっとしただけだ。

心の中で言い訳をする自分に首をかしげる。

なぜだか、セリアとエデはにやにやと笑っていた。それから何なんだろうか、アデライードと龍神の微笑ましげな顔は？

（……それに、何でノエルは）

もうこの顔は、鬼と言ってもいいのではないだろうか。寒気がしてぶるりと震えたルーシエルは、気を取り直して口を開いた。

「……」

開いたものの、何を言えいいのかわからず口を閉じる。そもそも自分は、誰に言おうとしていたのだろうか。

「ふふっ、クロ君。ルーちゃんのこと、名前であげて？」

「へ？ いやいや、僕は別に呼んでほしいなとか、セリアだけ呼んでもらうのはずるいとか思っていないんだよ？」

言ってしまったから、これはそう思っていると言っているのと同じではないだろうか、と考える。とりあえず、クロードはわかっていないようだから良しとしよう。

「ルーちゃんは嫌なの？」

「嫌じゃないけど……」

何だか恥ずかしいではないか。名前を呼んでほしいと言うのは。

「ほら、クロ君。呼んであげて？」

「……ルーシエル、と言えはいいのか？」

「うん、もうそれでいいわ」

ルーちゃんも喜んでいるみたいだし。

にやにやと笑うセリアとエデから、顔を逸らす。

（う、ううん！ 別に喜んでたりしないんだから）

顔を逸らしたら、そのことを肯定しているようなものだ。

そう考え顔を戻すも、どうやらもう手遅れらしい。皆の顔が何だか嫌だ。

そしてクロードは、やはり何もわかっていない。

「……さて。あたし料理作ってきたんだけど食べよっか」

「エデ、料理できるんだ？」

意外に思っただけで、エデはすねたような顔をした。

「できるもん。あたしの両親は一応料理人だよ？　言っただけか」

確か言っただけでなかった気がする。ルーシエルが覚えていないだけかもしれないが。

まあいいや、とエデは持ってきたらしい料理を机に置こうとした。

「うーん、この机じゃ小さいかな？　あ、アデライードは魔法で机を創れたりする？」

「もちろんさ。私にできないことは少ししかない」

「そこはないって言うんじゃない？」

エデが呆れたように言う。

アデライードは気にせず、指をパチンと鳴らした。

その途端、人数分の椅子と大きい机が現れた。無詠唱なら、指を鳴らさなくてもいいのではないだろうか。

ノエルもそう思ったのか、椅子にさっそく座ったアデライードに尋ねる。

「なぜ指を鳴らす必要が？」

「意味はない。ただ鳴らしたかっただけだ」

「……ああはい、そう返ってくることはわかってましたよ」

またアデライドに対しての口調がぞんざいになった。
龍神がため息をつく。

「アデライド、そなたは昔から変わらぬな」

「ふむ、それはどうということだろうか？ 龍神」

「わからぬのか」

「……少し待ってくれ、今考える」

馬鹿にしたように笑う龍神を見て悔しくなったのか、アデライドはあごに手を当て考え始める。

「ま、アデライドは置いところ。早く食べようよ」

エデが今度こそ料理を机に置いた。どこにそんなに入れてきたのだ、と問いたくなるほどたくさん並べていく。

銀色の蓋を取ると、白い湯気が立ち上がった。

（お、美味しそう……）

カリマの料理よりも美味しそうに見える。

龍神は思いのほか食い意地が張っているようだ。チョコレートの時もそうだったか、椅子に座ってだらだらとよだれを垂らしている。待ちきれないのか、手で机をバンバン叩いた。

「早く、早くするのだ。我は今すぐ食べたい」

「龍神さまはわがまま、と……。覚えておきますね」

そう言いながら、取り分ける皿と、フォークやナイフを皆の前に置いていく。もうすでに座っているアデライドと龍神を除いて、他の面々も椅子に座った。

「さ、どうぞ。料理だけには自信あるの」

だけには、ということは他のことには自信がないのだろうか。

料理を食べる時の作法を知らないの、とりあえずルーシエルは目の前にあった料理を口に入れた。

エデの言った通り、彼女が作った料理はとても美味しい。ルーシエルが料理を夢中になって食べていると、セリアが口にあるものを飲み込んで言った。

「……今度は皆の誕生日をお祝いしたい。ルーちゃんもディーちゃんも、ノエちゃんも。ノギス君、クロ君、アデルさん。みーんなの」
「ふあがみよよ。ふおほにふありえによ……ごくん。我の名前を出さぬのはわざとなのかの？ わざとなのだな？」

「はい、そうですか？」

眩しい笑顔で言うセリアに、龍神は涙目になる。セリアは龍神が前半に言ったことを理解しているのだろうか？ 口にものが入っていたせいで聞き取れなかった。

「ルーちゃん、誕生日いつなの？」

かわいそうに、涙目になっても慰められなかったからか、龍神は本気で泣き始めてしまった。だが、龍神を心配しているのはルーシエルだけらしい。

「えっと……。一週間、後、だけ……。ど？」

「「一週間後!？」」「」

セリアとエデはともかく、ノエルに誕生日を言っていなかったの

だろうか。

「ディーちゃんノエちゃん、いつ贈り物買いに行く？」

「そうだね……明日か明後日には」

「どうしてあたしも行くことになってるのかしら？ ……まあ、行くけど」

立ち上がってこそそ話しているが、聞こえてしまっている。これは、気付いていないふりをした方がいいようだ。

料理を食べながら、セリアたちの方を見ないようにする。

『魔女様がどうか幸せになれますように』

ふと、その言葉を思い出す。

指輪を買った日に思い出した時よりも、自分は幸せになっている。セリアが死んでしまった時は悲しかったが、無事に生き返らせることもできた。

皆といれば、もっともっと幸せになれる。
そんな気がした。

エピソード 誕生日（後書き）

最後なのに、もし誤字脱字や変な箇所があったらすみません。

何だか前書き後書きで謝りすぎな気がします。

後日談 指輪の意味（前書き）

他の話を書いている合間に、後日談を書きました。……新しく二つ書き始めるなんて、やめればよかった。いえ、まだ連載してはいないんですが……。

とりあえず、しばらく書いていなかったなのでこの話っぽくなくなっているかもしれません。

後日談 指輪の意味

その日ルーシエルは、そわそわして眠っていられなかった。

まだ薄暗い洞窟をぼんやりと見渡す。この洞窟は昼間は明るいが、朝はまだ薄暗いのだ。

(……誕生日、か)

クロードの話では、昨日あの三人は贈り物を買いにいったらしい。そんなことを言って彼女たちに怒られないのかと思ったが、クロードはどうせ言わなくてもわかっているだろうと言った。

セリアの誕生日を祝った日の話で、自分の誕生日に何か用意してくれることはわかっていた。だが、実際にそうだと言われてしまうと駄目だ。いつもならこの時間にはまだ寝ているのに、目が冴えてしまっている。

ルーシエルはため息をついて、自分の使い魔に声をかけようとした。

「あれ……ノギス？」

洞窟内で寝ているはずの、ノギス姿が見えなかった。しかも、セリアもない。こんな朝早くどこへ行ったのだろうか。ルーシエルの眠りは浅かった。少し誰かが動いただけで目が覚めそうなものなのに、なぜ二人(?)がいなくなったことに気付かなかったのだろう。

こんなことができるのはアデライドだろうか。もしかして誕生日を祝うための準備をしている、とか。彼女だったら、ルーシエルを起こさずにノギスを連れて行くことも可能だ。

そう考えると、またそわそわしてしまう。どんな贈り物を用意してくれるんだろう、エデは何の料理を作ってくれるんだろう、と。

(きっと、クロードもお祝いしてくれるよね)

セリアには何も用意していなかったが、自分にはどうだろう。

(……いや、別に何か用意してほしいとは思ってないけど)

ただ祝ってくれるだけでも十分だ。カリマが死んでからは、誰も祝ってくれなかった。そもそも、自分でも誕生日の存在を忘れていたのだから。だからノエルにも、誕生日を教えていなかったのだろう。

祝ってくれるだけで十分、と思いながらも、本当は何か形として残るものがほしかった。

ルーシエルの寿命と、人間の寿命。セリアたちが死んでも、ルーシエルとノギスは生き続けるのだ。知り合いは、ノエルとアデライードだけになってしまう。

(思い出だけだと、いつか忘れてしまうかもしれない。僕がもっと、記憶力がよかったらな……)

それだったら、ただ一緒にいてくれるだけでいいのに。セリアたちが死んだ後、残るのは思い出だけ。その思い出が薄れてしまうのは、絶対に嫌だ。

セリアとエデ、ノエルは贈り物をくれる。だが、クロードは？
くれるだろうか。

(……くれなかったら、いじけてやるもん)

先ほど考えが変わっていることに気付きはしても、もとの考えに戻そうとは思わなかった。クロードだけには、絶対にもらいたい。洞窟の外に出ようと歩き始めたルーシエルは、ふと動きを止めた。

（クロードだけには？）

セリアたちの贈り物はいらないのだろうか。

いや、そんなはずはない。彼女たちの贈り物を楽しみにしているから、こうしていつもより早く起きてしまったのだ。

だとしたら、なぜ自分はクロードだけにはと考えたのだろう。そんなことを考えるなんて、クロード以外にはもらわなくともいいと考えているようだ。

（む、何だろう。今ここにセリアとかエデがいたら、絶対にやにやされる気がする）

そういう場合は、ルーシエルがいくら考えても理由はわからないのだ。

考えても無駄だと首を振って、ルーシエルは歩を進めた。

こんなに早く起きたことはなかったが、外の空気は気持ちよかった。たまにはこういうのも、悪くないだろう。

「ルーシエル」

「ん、何クロード」

洞窟の中からの聞きなれた声に、思わず普通に返事をして振り返る。振り返った後に、これはどう考えてもおかしいだろうと気が付いた。先ほどまで、確かに洞窟には自分しかいなかったのに。それに、あのセリアの誕生日にしかルーシエルの名を呼ばなかったのに、こんなにあっさりと呼んでしまうなんて。

「……ク、クロードが何でここにいるの!？」

ルーシエルの声が上ずったのを、おそらく彼は気付いていないだろう。

思った通り、尋ねられたことにただ困惑しているだけのようだった。

「なぜ、と訊かれても、『移動』の術を使ったとしかいいようがないのだが。今日はお前の誕生日だから、と楽しみにしていたエデがここにいるかと思ってな。今日の朝、自分の家に来いと言ったくせに、エデがどこにもいないのだ」

『お前』と言われたことに若干落ち込む。

「……ノギスとセリアも、朝起きたときにいなくなってたんだ」

きっと何か関係している、と言うとクロードは納得したようにならずいた。だが、うなずいた直後に首をかしげる。

「お前の誕生日を祝う準備をするのなら、俺も呼ぶのではないか？」

「あ、そうだね。……何でだろう。クロードは忘れられてた、とかかな」

「……その可能性もあるな」

自分で言っておきながら流石にそれはないだろうと思っていたのに、クロードが肯定したのに驚く。

そこまでクロードへの扱いはひどかっただろうか。ノギスもいるのなら、忘れられているということはないはずだ。あの白猫はしっかりしているから。

「いや、忘れられてた可能性はないと思うんだけど……？ 何か理由があるんだよ、きっと」

絶対と言い切れないのが悲しい。ノギスがしっかりとするとはいえ、その可能性は零ではないのだ。

「と、とりあえず、待ってようよ！ 洞窟で待ってれば、いつかノエルかアデライードさまが迎えに来てくれる、はず」

そういえば、ノエルやアデライードの『移動』の魔法の対象は自分だけではないのだろうか。アデライードだったら、魔法を改良していると思うが。『探知』の魔法と『移動』の魔法をあわせてしまうような魔女なのだから。

それだったら心配しないでいい、と安心する。

「す、座って待ってようか」

「ああ、そうだな」

アデライードはいつ頃迎えに来てくれるのだろうか。ルーシエルは洞窟の中に戻り、椅子に座った。

「……………」

この気まずい沈黙をどうにかしてほしい。しかも、どうやらこの沈黙を気まずいと思っているのはこちらだけらしい。クロードはルーシエルのように緊張せずに、ただ椅子に座ってじっとしている。

何を話そう。

必死に頭をめぐらせる。だが、クロードとの共通の話題はない。話せることといえば、今日がルーシエルの誕生日だということだけ

だ。

（でも……。クロードは僕への贈り物買った？　なんて訊けないし）

そんなことを言ったら、ルーシエルがクロードからの贈り物を期待しているわけではないか。実際、期待しているのだが。

アデライードが迎えに来てくれるまで、ルーシエルは沈黙に耐えたのだった。

＊ ＊ ＊

ルーシエルとクロードを城で待ちながら、少しだけセリアは腹を立てていた。

（まさか、クロードの誕生日が昨日だったなんて）

昨日買い物に行ったとき、エデが思い出さなかったらクロードの誕生日を祝わないところだった。セリアがルーシエルの誕生日を訊いたときに、教えてくれたらよかったのに。そんなことを教えるクロードはクロードではないが、そう思うのはやめられない。

幼馴染なのにクロードの誕生日を忘れていたエデもエデだ。彼女が思い出してくれたおかげで、満足のいく贈り物が買えたのだが。

「……ふふっ」

思わず口から笑い声が漏れてしまう。あの二人は、一体どんな反応をするだろうか。ルーシエルはこの意味がわからないと思うが、クロードはわかるだろう。ルーシエルは無邪気にそれを受け取り、クロードは戸惑いながら受け取りそうだ。もしかしたら、少し怒りながら。それでも受け取ってくれるのが彼だ、と思う。

「何笑ってんのよ、気持ち悪いわよ？」

「ごめんなさい、ちょっと用意した贈り物のこと思い出して」

殺気。

命の危険を感じて体を仰け反ると、どこから出したのか今までセリアの首があった場所をナイフが通過していった。

「ちっ。はずしたか」

今、ノエルは本気でセリアを殺そうとしていた。

ノエルの舌打ちに青ざめながら、近くにいた龍神さまの手を握った。子供は体温が高いから、龍神さまの手を握るとほっとした。

「いいと思うんだけどなあ」

エデが残念そうにつぶやく。

セリアがああ贈り物を買ったとき、エデとノエルは正反対の反応を見た。エデは目を輝かせてうなずき、ノエルは殺気を出して首を振ったのだ。

つぶやきが聞こえたのか、ノエルは顔をしかめた。

「よくないに決まってるじゃない。言ってなかったかしら？ 私はルーシエルが今も大好きなの」

「そんなの知ってるわ。ね、ノギス君」

「……俺を巻き込むな」

セリアはもとも知っていたが、ここにつれてこられることを知らなかったノギスは機嫌が悪い。ノギスも主に似てよく寝るのだ。

それなのにまだ日が昇る前に起こされ、つれてこられたら機嫌が悪くなって当然だ。

それだけが理由ではないが……。

「白猫。ノエルとセリア様にその口調は何なのだ」

黒い狼。以前、ルーシエルと話したそれがここにいる。どうやらこの狼は使い魔なのに白いノギスを、忌み嫌っているらしい。だからノギスもこの狼が苦手なのだろう。名前はアベルと言っただろうか。自分より上の存在には丁寧に接するが、ノギスのようなものにはこういう態度を取るのだ、とノエルが苦い顔をして説明してくれた。

ノギスはアベルをちらっと見て、顔を背けた。何を言っても無駄だと、理解しているのだろう。うむうむ、とセリアの横でなぜか龍神さまがうなずいている。

その時、城の扉が勢いよく開きアデライードが入ってきた。

「主役の二人の登場だ！」

＊ ＊ ＊

ぽつんと建っている、とは嘘でも言えないような草原に建つ城。ルーシエルとクロードがつれてこられた所は、王族形無しの城だった。いや、実際にどこかの城を見たわけではないが。

口をぽかんと開けて、その城を見上げてしまう。

（何これ……）

城だ。それはわかっているのだが。これで門がないのだから、何となく違和感がある。

横で微笑んでいるアデライードを見る限り、彼女が魔法で創ったものだろう。こんな大きなものを創るのは、いくら魔法でも大変だ。^{ばくだい}莫大な魔力が必要になる。城を創るなんてそんなことをする魔女は、アデライード以外にどのくらいいるだろうか。

「……アデライードさま。一応訊きますけど、僕とクロードの誕生日のため、なんですよね？」

クロードの誕生日が昨日だったと知ったのは、つい先ほどだ。本人も忘れていたようで、アデライードが言ったときしばらく首をかしげていた。

「そうだが？」

「そうだが、って……。どうしてこんなものを創る必要があるんですか？」

大体は想像がつくが。

「楽しいから以外に、何か理由があるか？」

「お願いだから、きょんとした顔で言わないでください」

「なぜだ？」

ルーシエルはがつくりと肩を落とした。この魔女は本当に、突拍子もないことをやる。ノエルは時々変になると言っていたが、いつもの間違えではないだろうか。会ってから今まで、ずっと変な気がするのはルーシエルだけか？

「ま、とりあえず入るぞ。せっかく日が昇る前から準備したんだ」

アデライードはそう言って、城の扉を勢いよく開ける。

「主役の二人の登場だ！」

（主役って……何か恥ずかしいんだけどな）

城は、中もすごかった。何がすごいのか言えないくらいすごい。外は立派でも中は……というのを少し期待していたのに。

長い食卓には、真っ白な布地がかけてある。一瞬ノギスへの嫌味かと思ってしまった。

その上には、花と料理。この間食べたエデの料理を思い出して、出てきたよだれを手でふく。

誰かに気付かれなかったかと心配になるルーシエルに、龍神とノギス以外の皆が駆け寄ってきた。

「ルーちゃん、誕生日おめでとう！」

「おめでとう、ルーシエル！」

「……………おめでとう」

「おめでとうございます、ルーシエル様」

少し遅れたのはノエルだ。セリアを睨んでいるが、なぜだろうか。その横に黒い狼がいるのを見て、ルーシエルは懐かしさがこみ上げてきた。アベルと会ったのは何年ぶりだろうか。昔何度か会っただけで、ノエルは滅多にアベルと会わせてくれなかったのだ。

アデライードには迎えに来てもらった時「おめでとう」と言われたため、残りはノギスとクロード。ノギスは期待できそうにないから、クロードの顔をこっそり見る。

（あれ？　そういえば、これはクロードのためでもあるんだよね？）

なぜルーシエルにだけおめでとうと言って、クロードには言わな

いのだろう。これが扱いの差なのだろうか。

「クロード、誕生日おめでとう」

可哀想になってそう言うと、クロードがため息をつく。何なのだろう、そのため息は。

皆クロードのことは無視していた。無視ではないのかもしれないが……。クロードが本当に忘れられていたのではないかと、疑ってしまう。忘れていたのを誤魔化すために、クロードの誕生日を祝うことにしたのではないかと。

「私が贈り物を渡すのは最後ね」

セリアが一步下がって言う。理由を尋ねる前に、エデから何かをもらった。小さな瓶に、液体が入っている。怪しい薬かとも思ったが、そんなものを贈り物にはしないだろう。

「えっと……これって何？」

「香水だよ。使い方は後で教えるとして……次、ノエル」

ノエルが持っているものは、意外なものだった。自分でもそう思っているのか、心なしか顔が赤くなっている。

「はい」

ぶっきらぼうに渡されたそれは、可愛い猫のぬいぐるみ。白猫なのは、ノギスのことを意識してのことだろう。ふわふわな触り心地が気持ちいい。これは高かったのではないだろうか。

「ありがとう、二人とも」

笑顔で言うと、エデは満足そうな顔で笑った。ノエルは、ぬいぐるみで喜んでくれるのかずっと気にしていたに違いない。ルーシエルがお礼を言ったのを聞いて、ぱあっと顔を明るくしていた。慌ててそれを隠そうとしているのが微笑ましい。

次にセリアが、にやにやと笑みを浮かべながら、先ほど下がった分一步前に出る。嫌な予感がして、ルーシエルはつい身構えてしまった。

「これは、ルーちゃんとクロ君二人に」

渡された箱を、パカッと開けてみる。クロードも隣箱をもらっている。

中に入っていたのは、指輪。クロードの箱には何が入っているのだろう、と見てみるとおそろいの指輪だった。

「交換してから、左手の薬指につけてね？」

にっこり笑うセリア。

左手の薬指につける、おそろいの指輪。その意味がわからないけど、ルーシエルは馬鹿ではない。小さい頃、カリマがつけていた結婚指輪が羨ましかった。

「交換すればいいのか？」

「……クロードって、やっぱり馬鹿だったんだね」

素直に交換しようとするクロードを、冷たい目で見る。

（というか、どうして結婚指輪……まあ、結婚なんてしてないけど？ セリアが意味を知らずにそう言ってるってことは……）

絶対に有り得ない。それは、皆の顔を見ればわかる。この指輪を見る、ノエルの殺気がこわい。

まさか、クロードがこの指輪の意味がわからないとは。彼が真面目なせいなのか、馬鹿なせいなのか。

セリアがこちらを見て目を瞬かせる。

「え？ この反応ってことは……私が考えてたのと逆？」

「へえ。……ナニヲカンガエテイタノカナ？」

笑顔で訊くと、セリアは青ざめた。

「ル、ルーちゃんがさっきのノエちゃんより怖い！ こんな予想してなかった！」

「怖い？ まあ、怒ってるから怖くて当然じゃない？」

こんな騙されるようなことは嫌いだ。からかわれるのより。

結婚指輪を贈り物にするということは、覚悟はできているのだからか。

青い顔をしているセリアに近づいて、微笑む。

「セリア、覚悟はできてるよね？」

「へっ——痛っ！」

眉間をおさえて涙ぐむセリアに、すこしすっとした。

（ふーんだ、僕の中指の威力思い知ったか）

昔は、カリマによくやられたものだ。実際にやったのは今回が初めてだったが、見よう見まねでも結構な威力があるらしい。

「クロード、僕と指輪は交換しないでね。セリアとエデの思う壺だから」

くるりと振り返って、クロードに言う。もし必死な形相になっていたとしても、彼には気付かれないから安心だ。

ぎこちなくうなづくクロードに、ほうっとため息をついた。

「……さ、エデが作ってくれた料理食べよっか」

「うむ、その言葉を待っていたのだっ！」

見えないくらいの速さで、龍神が椅子に座りさっそく料理を口に運ぶ。

ルーシエルも椅子に座ってから、ちらりとまだうめいているセリアを横目に見る。そこまで強くやった気はないのだが。

ノエルがそのセリアを見て、満足げにしているのはなぜだろうか。

「うう……」

涙にうるんだ目で、よろけながら椅子へと歩くセリアに少しやりすぎたか、と思う。

「ごめんね、セリア。ちょっとやりすぎちゃった？」

「ちょっとどころじゃないわ！　すごく痛い……」

自業自得だ。

ルーシエルがそう思ったのがわかったのだろう、セリアがキツと睨んでくる。

「まさかこういう展開になるとは思わなかったの。予想では、クロ

君が知っててルーちゃんが知らないと思ってた。……痛い」
「ごめん、まあとりあえず食べよう」

龍神のことを指さすと、しぶしぶセリアはうなずいた。これだけの間に、龍神がほとんど食べてしまっている。その小さい体のどこにそんなに入るのだろうか。

食べ始めたしばらく後、セリアがルーシエルに不意打ちをくらわせた。

「——でも、その指輪はつけてね？」

むぐつ、と飲みこもうとしたものを詰まらせてしまう。慌てて紅茶を飲むが、熱くて口の中をやけどしそうになった。

ひりひりする口を押さえながら、くぐもった声を出す。

「わかったよ……。セリアからの贈り物だからね。大切にする」

「じゃあ、クロ君と一緒に毎日つけてくれる？」

おもむろにセリアの眉間に攻撃する準備を始めると、彼女は慌ててクロードに話しかけた。

「クロ君は？ ルーちゃんとおそろいで嬉しい？」

どうしてここで嬉しいかどうか訊くのだ、と思いながらもついつい耳を澄ましてクロードの返答を待つ。

「……嬉しいが？」

「聞いた！？ ルーちゃん。嬉しいって！ クロ君が嬉しいって言ったわ！」

興奮して大声を出すセリアの眉間を、今度こそ攻撃する。先ほどよりは力をこめずに。

それでも十分痛かったらしく、ほんの少し涙目になった。

「クロードはわかってないんだよ」

わかっていたら、こんなことは言わないはずだ。

「……ルーちゃん、顔あ——」

「そんなことより、セリア。龍神さまに全部食べられちゃうよ？」

言葉が続けさせないように、話を逸らす。

自分でも、顔が熱くなっているのはわかっているのだ。おそらくここにいる皆が、ルーシエルの顔が赤くなっていることに気が付いているだろう。

（……何でだろう？）

どうやらクロードは贈り物を用意していなかったようだが、それでも。

何だか、すごく嬉しい。

どうしてこんな気持ちになるのか、ルーシエルはわからなかった。

後日談 指輪の意味（後書き）

エピソードと同じくらい長めでした。

アベルを本編に出すのを忘れていたので、出してみました。……
少ししか話してないです。

しばらくは無理ですが、後日談をあと少し書いて番外編に移りたいです。

後日談 喧嘩（前書き）

先に謝っておきます。ぐだぐだです。長いです。後日談遅くなつてすみませんでした。

後日談 喧嘩

セリアが洞窟で暮らすようになって、しばらく経った。最初のうちは、ルーシエルとの日々がただ楽しかった。これから大切な人たちと一緒にいられると思うと、嬉しかった。

(……私が生きていることがばれたら)

今は違う。毎日そのことを考えてしまつて。まだ夜中なのに起きてしまったのは、それが原因だろう。

もし、セリアが生きていることを村人が知ったら？

そしてもし、この洞窟に来てルーシエルと自分を見たら、どんな行動をするだろう。自分だけが死ぬのなら、まだいいのだ。一度死んだ時に、伝えたいことは伝えたから。

セリアは、寝台で眠っているルーシエルの顔を見た。洞窟にエデは明るくする術を使ってくれて、夜中であってもぼんやりと辺りを確認することができる。あの白猫はどこにいるのか、洞窟内には姿が見えなかった。

(私だけならいいけど、ルーちゃんには)

彼女には、危険な目にあってほしくない。

セリア自身も、もう一度死にたいとは思っていないのだ。寿命まで、ルーシエルたちと一緒にいたい。

自分が死ぬまでは、人間の『死』というものをそこまで深く考えたことはなかった。雨が降らなかつたら、巫女は生け贄としてささげられると知っていてもだ。

だが今は、死んでしまうのが怖い。

死ぬというのは、言葉にならないほど辛くて恐ろしいものだった。殺される、という恐怖もあったが、セリアが一番恐ろしかったのはルーシエルやエデ、クロードを悲しませることだった。

（普通の人だったら、死ぬ時どんなことを考えるのかな？）

ありがとう。幸せだった。

セリアは死ぬとわかったとき、それをルーシエルに伝えようということばかり考えていた。最期には、ルーシエルの笑顔を見たかったと考えはしたが。

（……ここにいるのは、危険、よね）

ルーシエルは、魔法が使えない。セリアを助けるために『蘇生』の魔法を使い、魔力がなくなってしまったからだ。

毎日のようにエデやノエルがここに来るが、朝や夜に襲われたら助けを求める人物は誰一人いない。今のうちにこの洞窟にいるのはセリアとルーシエル、そして今はいないのだがノギスだけだ。

視界の端で何かが動き、セリアはそちらへ顔を向けた。

「ノギス君？ どこに行ってたの？」

セリアが起きているとは思っていなかったのか、白猫は驚いたようにこちらの顔を見てきた。その口に何がかくわえられているかわかり、思わず顔を引きつらせてしまう。

それに気付いたのだろう、ノギスは洞窟の外のセリアに見えない位置に移動した。

しばらくし、ノギスが洞窟に入ってくる。口には何もくわえていなかった。

「……ルーちゃんが何も食べなくて平気だから、ノギス君もそうだ
思ってたのだけど」

「前までは、な」

では、今は違うということだろうか。

先ほどノギスがくわえていたのは、ねずみだった。

「俺が何も食べなくても生きていけたのは、ルーシエルの魔力をも
らっていたからだ。……今、ルーシエルには魔力がほとんどない」

それだったら、ルーシエルも食べなくては生きていけないと思う
のだが。何も食べなくとも生きていけたのはルーシエルの魔力をも
らっていたから、だとしたら、ルーシエル自身だって魔力がないと
何かを食べなくては生きていけないはずだ。

「魔法が使えなくなったと言っても、魔力が完全になくなったわけ
ではない。完全になくなっていたら、ルーシエルは死んでいるだろ
う。今のルーシエルだって、人間の倍は魔力がある。お前たちと何
かを時々食べるだけで生きていける」

セリアの疑問に答えるように、彼は言う。

「使い魔には、魔力が全くないんだ。魔女と契約することによって、
使い魔は魔女から魔力を与えられる。……ルーシエルの魔力を今も
らったら、こいつは死ぬ」

ちらり、とノギスはルーシエルの顔を見た。

セリアたちが深刻な話をしているというのに、その寝顔は幸せそ
うだった。

「……えで、もうおなかいっぱいだよ。あとはぜんぶ、のぎすにたべさせてー」

ルーシエルの寝言に、ついノギスと一緒にふきだしてしまう。夢の中でエデは、一体ルーシエルにどれだけの料理を食べさせているのだろう。残りを全てノギスに食べさせるのは、彼の体に悪い気がする。ノギスはそれでも、猫なのだから。

これ以上ルーシエルは何も言わなさそうなので、ノギスは話を続けた。

「魔女が死んだら契約が破棄され、使い魔も一緒に死ぬ。……死なないためには、何かを食べなくてはいけない」

「一応訊くけど、ノギス君が食べるものは普通の猫と同じなの？
ねずみとか、魚とか」

先ほどのねずみは、おそらくノギスのお腹の中だ。答えはわかっているが訊いてみる。

思っていた通り、ノギスは「ああ」とうなずいた。その瞬間、ルーシエルが飛び起きた。あの夢の続きで、何かあったのだろうか。不思議そうに周りを見て、セリアとノギスで視線を止める。

「あれ？ こんな時間に何で起きてるの？」

「それは……」

ノギスは言うのをためらった。ルーシエルに心配をかけたくないのだろう。

彼には上手く誤魔化せそうになかったので、代わりにセリアが口を開く。

「ルーちゃんの大きな寝言で起きちゃったのよ。ディーちゃんのお食事はどうだった？」

そう言うと、ルーシエルは見ていて面白いほど慌て始めた。

「へ……！？ な、何か言ってた？ えっと、その、例えば……。ノギスに……。へ、変なものを食べさせて、ノギスが死んじゃった……。と、か」

言ってから自分の失言に気付いたのか、はっと口を押さえる。ノギスは呆れて、何も言えないようだった。

セリアは少し憤りを感じた。そんな夢を、ノギスが死んでしまうような夢を見ていたのか、と。

「……ルーちゃん。そんな夢を見てたの？」
「う、うん」

彼女も悪いと思っているのだろう。おそらく、セリアが考えているよりもずっと。ルーシエルはうつむいて、寝台の掛け布団をぎゅっと握り締めた。

（ノギス君が怒ってないのなら……。私が怒るのはおかしい、か）

だがもし次にこんなことがあったら、ノギスが怒らなくとも絶対に怒ろう。ルーシエルだったら、ないとは思うが。

気を取り直してセリアはこの洞窟で暮らすのをやめないか、と話を変えようとしたが、あまりのルーシエルの落ち込み具合に言い出せなくなった。

どうしたら、ルーシエルは元気を出してくれるだろうか。考えをめぐらせていると、ふと自分が死んでしまった時のことを

思い出した。あの時のように、彼女の頭をなでたらどうだろうか。

「……セリア？ いきなりどうしたの？」

セリアが頭をなでると、顔を上げて不思議そうな顔をした。次第にその顔が悲しそうに歪んでいくのを見てしまつて、セリアはなでるのをやめる。

セリアが思い出したように、ルーシエルも思い出してしまったのではないだろうか。そうだとしたら、頭をなでたのは逆効果かもしれない。

「うーん、何となく。ルーちゃんの髪の毛って、サラサラで気持ちいいなつて思つて。湯浴みどころか、水浴びもそんなにしてないのに不思議ね」

洞窟の近くには、水場がありません。それにアズメリ村の近くには、行きたくないのだ。セリアは龍神さまに会う前には必ず湯浴みしていたため、水浴びもしないのは辛い。

ルーシエルもノギスも、そういうことは気にしないようだ。エデやクロードに言われて初めて、思い出したように水浴びをするのだ。

「ねえルーちゃん。この洞窟で暮らすのをやめない？」

わずかにルーシエルの表情が和らいだので、そう切り出してみる。セリアの言葉に彼女は考えるような顔をして、あっさりとうなずいた。

「いいよ。……つて言つてもどこで暮らすの？」

そんなにあっさりと承諾されるとは思っていなかった。セリアが

きよとんとしていると、ルーシエルはもう一度同じことを言う。

「いいよ。どこで暮らすの？」

「ちよ……ちよっと待って！ そんなにあっさりと？」

今度はルーシエルがきよとんとする。

「え？ 何か駄目だった？」

「駄目じゃない、駄目じゃないんだけど……。ルーちゃんは、ずっと昔からここに暮らしてるのよね？」

何か思い入れはないのだろうか。ルーシエルは、あの人間たちが消えるのもここで見届けていたのに。

いや、だからなのかもしれない。見届けていたからこそ、ここから離れることに抵抗を感じないのかもしれない、と思った。

ルーシエルは、どこか遠くを見ているような目で言った。

「昔から暮らしてる、けどね。……そろそろ、色々と乗り越えなきゃいけないから。セリアはどうして、この洞窟で暮らしたくないの？」

「……だって、水浴びも湯浴みも滅多にできないじゃない」

一番の理由はそれではないが。それでもこの理由も大きい。毎日身を清めることができる所に暮らしたいのだ。

セリアの答えに、ルーシエルは大笑いした。

「あははっ。それが理由なんだっ？ ……ははっ」

「むう……そんなに笑わないでよ」

ここまで笑われるとは。これなら、一番の理由を言った方が良か

っただろうか。アスメリ村の近く――両親の近くで暮らしていたくない、と。

近い、と言えるほど、ここからアスメリ村までは近くはない。だが、遠くもない。子供の足でだって、一日はかからないだろう。

（ルーちゃんは……もしかしたら、私がここにいたくない理由がわかってるのかな）

わかっていて、わざとこうして笑っているのかもしれない。ルーシエルには、そんな器用なこととはできないとわかってはいるが。

「まあ、とにかく夜が明けるまでもう一回寝たら？　あ、暮らしたいところの要望とかある？」

「……ルーちゃんが嫌じゃなければ、ステルダがいいわ」

「ステルダ……？」

ルーシエルは顔をこわばらせる。何度か遊びに行ったが、遊びに行くのとそこで暮らすのでは全く違う。何より、ルーシエルが魔女だとばれてしまう可能性が高くなるのだ。『幻影』の術を、クロードが改良してくれていたら話は別だが。

ルーシエルは、言葉を捜すようにして言う。

「……僕も、あの町の人はいいい人だと思う。だけど、魔女だっればれたら？　アートみたいに、信じてくれる人なんていないよ」

（アーサーだって、最初はルーちゃんのこと怖がってたじゃない）

アーサーのことを考えるといらいらしてしまった。

セリアはあの時のことを、いつまでも根に持つつもりだ。ルーシエルに石を投げようとしたのは許せない。自分のことを棚に上げて、セリアは考える。

誕生日の贈り物を選んだ店に、ルーシエルを案内したとしても許す気はない。そんなことで許してもらおうなんて、考えが甘いのだ。

「アーサーは、本当にルーちゃんを信じてくれているの？ 私は信じられない」

「ううん、アートは信じてくれてる」

ルーシエルの言うことに、セリアは納得できなかった。

なぜ、人を簡単に信じることができるのだろう。彼女だって、アーサーが自分に意思を投げようとしていたことを知っているはずなのに。

「……アーサーのことなんてどうでもいいわ。ルーちゃんが、魔女だってばれるのが怖いならこの洞窟に住んだままでもいい」

わざわざルーシエルの癪に障るような言い方をしてしまったのは、やはり自分がアーサーのことが嫌いだからだろう。

ルーシエルから顔を逸らしてしまったので、彼女が今どんな顔をしているのかわからない。おそらく、傷ついた顔をしているのだろうが。

「僕はただ……ばれてセリアやエデ、クロードに迷惑をかけたくないだけだよ」

「そうやって、他人のせいにするのね」

私がここにいるのが怖いって、わからないの？

その言葉を、出てくる寸前にのみこむ。

ルーシエルと会ってから、自分はわがままになってしまったようだ。言わなかったのはセリアが言いたくなかったからなのに、そんなことを言うのは間違っている。

「セリア……どうしたの？　今日はおかしいよ。いつもはそんなこと——」

「別に、どうしてないわ。そもそも、いつもっていつのこと？　ルーちゃんに見せたことのない私もいるの」

勇気を出して、ルーシエルの顔を真正面から見つめる。ぶつかった瞳は、傷つき、困惑しているようだった。

彼女の言う通り、今日の自分はおかしい。このところ気持ちが安らぐことがないから、苛立っているのだ。

セリアはルーシエルに、八つ当たりしているのだろうと思う。言ってしまったことを、後悔してはいない。おそらく、明日になって冷静になれば後悔するだろうが。

「……話は、また明日にしましょう」

このまま話している気にはなれなくて、セリアは眠りについた。

＊ ＊ ＊

朝になりエデとクロードがやってくるまで、気まずい雰囲気は洞窟を支配していた。白い光と共に現れた二人を見て、セリアはほっとした。

もしかして、これが喧嘩というものなのだろうか。今まで喧嘩をしたことがないからよくわからない。

「……あれれ？　どしたのかな、二人とも。喧嘩でもした？」

セリアとルーシエルがいつもと違うことに気付いたのだろう、エデが冗談でも言うように笑う。

彼女がそう言うということは、これはやはり喧嘩なのだろう。こっ所りとセリアはため息をつく。仲直り、とはどうすればいいのだろうか？

エデは目を瞬かせた。

「え、え？ 冗談のつもりだったんだけど……？」

そのエデに、セリアもルーシエルも何も言わなかった。クロードが首をかしげるのが見える。

昨日もそうだったが、いつも存在を忘れられてしまうことが多いノギスは困ったような顔をしていた。昨日セリアたちが喧嘩した時、彼は口を挟まなかった。どうすれば止められるのかわからなかったのだろう。

（謝れば終わりなんだろうけど……）

自分が悪かったとわかっている。だからこそ、「ごめん」とそのたった一言が言い出せないのだ。

こういう時、以前のように心が読めたら、と思ってしまう。ルーシエルが、セリアが言ったことをどう思っているか。許してくれそうなら、すぐにでも謝ることができる。……許してくれそうになかったら、立ち直れないだろう。

許してくれないほど、ルーシエルが怒っていたら。

（……どうやって謝ればいいんだろう）

心を読めたら、今謝るべきか謝らないべきかわかるのに。

ない物ねだりをしたって、どうにもならない。今思えば自分は、心を読む力に頼りすぎていたのかもしれない。

誰も何も言わない中、エデは必死に何を言おうか考えているよう

だった。

「……け、喧嘩したなら仲直りしなきゃ！」

それが簡単にできたら苦労しない。

思わずエデを冷ややかな目で見てしまうと、彼女はダラダラと汗をかいていた。

「えっとえっと……仲直りってどうやってするんだっけ？ あたしの場合、喧嘩してもいつの間にか元通りになってるし……と、とりあえず、遊びに行く？」

そうすれば、エデのようにいつの間にか元通り、となるだろうか。

「……そうね。行くならステルダがいいな」

「僕は今日、この洞窟でノギスと話でもしてるよ」

一緒にいることを拒絶されたようで、セリアは悲しくなった。

セリアが沈んだ顔をしたことで、これ以上ここにるのはやめた方がいいと判断したのだろう。慌ててエデがクロードに声をかける。

「クロード！ 早く行きようか！」

「……囃んでるぞ」

呆れたように言いながら、彼はセリアとエデを近くに來させ術を唱えた。

「Ⅱ 6 S」

もうすっかり見慣れた白い光に体を包まれながら、ステルダに行

くことによつて、ルーシエルに謝ることができるようになったらいなと思った。

＊ ＊ ＊

エデ、クロードと共に市場の道を歩いていく。何度かここには来ているので顔を覚えられたらしく、数人の商人たちに声をかけられた。

「おや、お譲ちゃん。今日はあの子はいないのかい？」

その中の一人、ルーシエルに指輪を売ったお婆さん……いや、女性が不思議そうに尋ねてくる。この女性には、ルーシエルとクロードへの指輪も売ってもらった。

悪気も何もないだろうその言葉に、セリアの気持ちは沈む。エデは慌てたように、セリアの顔を覗き見てきた。

彼女にも心配しなくて平気、と伝えるためにセリアは微笑んだ。

「……ちよつと、喧嘩をしてしまったんです」

「喧嘩？ そりゃあ駄目だねえ。本人たちは大したことない、と思つてても仲直りできずそのままつてこともあるし」

少し悲しそうに、女性はそう言う。もしかしたら彼女は、仲直りができずそのまま死んでしまった人を知っているのだろうか。

私たちは大丈夫です、とセリアは言おうとして口を閉じた。一緒に暮らしているのだから、そのうち仲直りできるだろうが……。そのうちなんて考えでは、一生仲直りできないかもしれない。

「……あ、そうだ。この花を贈って謝ってみたらどうだい？」

女性は花瓶に付けてあった、可愛い小さな桜色の花を指差す。
セリアはルーシエルの髪にその花を挿したところを想像してみた。
あの綺麗な髪の毛に映えそうだ、と知らず知らずのうちに顔が緩んでしまう。

「でもどうだろう。茶色い髪には……いや、あの子だったら似合いそうだね」

そこでようやく、女性がルーシエルの髪の毛の色が黒だと知らないことに気付いた。

もしステルダで暮らすことになったとしたら、隠しておくのは難しいだろう。こんなによくしてくれているこの女性は、ルーシエルが魔女だと知ったらどう思うだろうか。

勇気を出して、セリアは尋ねてみることにした。

「あの、話は変わりますが……」

「ん？」

「貴女は、魔女という存在をどう思っていますか？」

いきなりそんなことを訊かれた女性は、一瞬きょとんとしてからあっさりと言い放った。

「別にどうとも？ 私から見たら、魔女だってお客様だからね。お客様は大切にしなくちゃいけないだろう？」

魔女だってお客様。

そんなことを言える人間は、この世に数えるほどしかいないだろう。

答えてくれたことに感謝の言葉を述べ、花を受け取りもう一度「ありがとうございます」と言う。

「……私は、セリアと言います。貴女のお名前を伺ってもいいですか？」

この女性とは、これからも親しくしていきたい。

「メリア、だよ」

母の名前と同じだ、とセリアは瞠目した。

名前が同じでも、全然二人は違う。そう思うと、なぜだか嬉しくなった。

「さ、早く帰って謝っておいで」

「……はい！」

笑顔のメリアにうなずいてから、セリアは後ろにいた二人に「早く帰りましょう」と言う。待ち構えていたように、エデはセリアの腕を引っ張って走り出した。クロードは転ばないだろうか、と走りながら後ろを振り向くと、案の定彼は転んでいた。またか、という顔をしているのはクロードを知っている人たちなのだろう。それを見て、セリアはまた微笑んだ。

＊ ＊ ＊

「ルーちゃん！」

洞窟に帰ると、すぐにセリアはルーシエルに抱きついた。ルーシエルは面食らったように、目を瞬く。

「ど、どうしたの？」

右手に大切に握っていた花を、ルーシエルに見せる。

「これ指輪を売ってたお店の女の人にもらったの女の名前はメリアって言うんだってそれからごめんなさい！」

そこまでを一息に言うと、息が苦しくなった。

深呼吸をするセリアを、ルーシエルはぼかんとして見ている。早すぎて聞き取れなかったのかもしれない、と一番伝えたいことを再び言う。

「ごめんなさい。ルーちゃんに許してもらいたいです」

ルーシエルは眉をひそめる。

彼女の表情を、許してくれないほど怒っているのだと判断して、思わず下を向いてしまう。

「――セリア、僕が許さないとも思ってたの？」

その言葉に、セリアは顔を上げた。その先にあったルーシエルの瞳は、呆れたようにこちらを見ていた。

「……実を言うと、ほんのちょっと怒ってたんだよ？　だけど」

セリアが持っていた花を見て、そんな気持ちに吹き飛んでしまった、と彼女は笑った。それから、セリアの必死そうな顔も、と。

自分は一体、どんな顔をしていたのだろうか。

熱くなった顔を隠すように、セリアはルーシエルの髪に花を挿し

た。思っていた通り、よく似合っている。

「ありがとう。それから、ごめんね」

「ううん、ルーちゃんは謝らなくてもいいの。私が悪かったんだから」

「僕も悪かった。凶星を突かれてつい、あんなこと言っちゃった」
「あんなことって？ 私は、傷つくようなこと言われてないわ」

少しの沈黙の後、二人は同時に笑いあった。

もはや空気と化してしまった二人と一匹も、セリアとルーシエルが仲直りし、ほっとしたような表情を浮かべていた。

後日談 喧嘩（後書き）

次の更新はいつになるかわかりません。後日談、番外編どちらにするのかも決めていないので、大分先になるかも……？

後日談 南瓜の煮物（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

今回の話は後日談というより……過去のお話がメインですね。
誤字脱字がありましたら、教えてくださると嬉しいです。

後日談 南瓜の煮物

髪の毛も、瞳の色も黒。

最初はそれが、『魔女』の証だとは思っていなかった。『魔女』という存在さえ知らなかった。知った切欠は、カリマが自分を外に出そうとしないことに疑問を持ったこと。

カリマとの生活は楽しかったが、ルーシエルは外で遊んでみたかった。風を感じ、地面の上を歩き、駆け回ってみたかったのだ。

だからある日、尋ねてみた。いつもは怖くて訊けなかった問いを口に出す。

「かりま、どうしておそとにでちゃだめなの？」

カリマは驚いたように、ルーシエルの顔を見た。後から聞いた話では、この時のルーシエルは四歳で、そんなに早く気付かれるとは思っていなかったらしい。

首をかしげたルーシエルの頭を、カリマは優しくなでる。

「……そうだねえ。もうそろそろ、説明しようか」

彼女は本棚から、一冊の絵本を持ってきた。それをルーシエルに渡し、暖炉の前の揺り椅子に座る。冬の寒さは、そこにいれば全く感じない。特等席を取られてルーシエルは恨めしげな目をカリマに向けたが、諦めて床に座った。

（つめたいよお……）

よいしょよいしょと暖炉の傍の床に移動する。そこが温かくて満足したルーシエルは、渡された本に目をやった。

『おひめさまとまじよ』という題名のその本の表紙には、黒い髪と黒い瞳の少女と、銀色の髪と翠の瞳をした少女が二人描かれている。黒色の髪をした少女は、怒ったような顔をしている。

ルーシエルは絵本を開いて、覚えたての文字を一生懸命目で追った。

そして最後の文字まで読み、いくつかのことを理解した。

魔女は恐ろしいものだ。

髪の毛と瞳が黒なのが、その証。

魔法という、不思議なものを使える。

人間には、忌み嫌われている。魔女だとばれてしまったら、殺されてしまう。

ルーシエルは、そうつと自分の髪の毛を指でつまんだ。その色を確認し、ついで部屋に置いてある鏡を覗く。髪の毛も瞳も、紛れもない黒色。それは、魔女にしか有り得ない色で。

だから。……自分は魔女だから、外に出てはいけないのだ。これからはずっと。

カリマの髪と瞳は、黒ではなかった。カリマは魔女ではないのだろう。以前家族ではない、と言われたように、カリマを大切に思っていたのはルーシエルだけなのだ。カリマは、ルーシエルのことを大切に思っていない。

だって、人間は魔女が嫌いなのだ。だとしたら、人間のカリマは魔女のルーシエルが嫌いに違いない。

うつむいたルーシエルに、カリマは優しい口調で言った。

「ルーシエル。私はねえ、あんたのこと、大切に思ってるんだよ。あんたが赤ん坊のときから育ててんだ、大切に思わないはずがない」「でも……でも、にんげんは、まじよがきらいなんですよ？ どうしてかりまは、わたしのときらいじゃないの？」

赤ん坊の時から育てているから。

カリマはもう理由を言っていたが、訊かずにはいらなかった。なぜ人間のカリマが魔女のルーシエルを大切に思っているのか。それが不思議でたまらない。

どうして魔女が人間に嫌われるのか、という疑問はルーシエルの頭には浮かばなかった。だからこそ、不思議でならないのだ。

カリマは顔を上げたルーシエルの頭を、節くれ立った手でなでた。

「あのね、魔女は人に嫌なことをすることをするから嫌われるんだ。この絵本でもそうだっただろう」

確かに絵本の中の魔女は、お姫様に魔法を使ってひどいことをたくさんしていた。頭の上にカエルを降らしたり、転ばせたり。

だけどねえ、とカリマは続ける。

「ルーシエルは、私に何かひどいことをしたか？ いんや、していないよ。何かしてたら、とつくの昔に家の外にほっぽりだしてるさ」

ルーシエルが答える前に、カリマは自分で答えを言った。だがルーシエルが何もひどいことをしていないので、黙って彼女の話聞く。その間も、カリマの手はルーシエルの頭をなでていた。

「だからね、私にはあんたを嫌いになる理由なんて、なーんもないんだよ」

「……そうなの？」

安心させるようなカリマの口調に、逆に心配になって尋ねる。カリマは目を細めてうなずいた。

「じゃあ、かりまはわたしのこと、すき？」

「決まってるじゃないか。好きだよ、大好きだ」

「……そっかあ」

ようやく安心できて、ルーシエルは笑顔になった。カリマは口に出してから自分が恥ずかしいことを言っていたことに気付いたのか、照れ隠しのように立ち上がってルーシエルの体を持ち上がる。

「ふわあ？」

目をぱちくりとさせていると、揺り椅子に座らされた。驚いてカリマの顔を見ると、「ふんっ」と顔を逸らされた。なぜ逸らされたのかわからなかったが、カリマの温もりが残っているのと暖炉の火が温かくて、ついうとうととしてしまう。

「夕飯の時間まで、寝ればいいさ。私は夕飯の支度をするかしょうか」

ふわっと毛布がかけられて、ルーシエルは目をつむった。

（……きょうのごはん、なにかなあ）

カリマのご飯は何でも美味しい。彼女の作ったご飯を食べるのが、毎日の楽しみだ。

早く食べたいな、と思いながら、ルーシエルはすっと眠りについた。

＊ ＊ ＊

夕食は、南瓜かぼちゃの煮物と魚の塩焼き、そして玉蜀黍とうもろこしのスープだった。

いい匂いで目を覚ましたルーシエルは、目をこすりながら食卓につく。

(……ねむい)

今日の夜は、ちゃんと寝られるだろうか。心配だ。あまり寝付くのが早いほうではないので、このままでは夜中まで起きているかもしれない。もっとも、先ほどは驚くほど早く眠れたが。

「さ、お食べ」

カリマのほうを向くと、彼女の前にはルーシエルのような食べ物がない。葡萄酒が入ったグラスが置いてあるだけだった。

この辺りは、冬にとれる食物が少ない。ルーシエルの分を用意するのが精一杯だったのだろう。昨日は少なくともカリマの分もあったのに、と申し訳なくなる。そうっと煮物の皿を差し出してみると、カリマは顔をしかめた。

「子供が遠慮するんじゃないよ。私はこれさえあればいいんだ」

葡萄酒をちびちび飲みながら言う。そういえば、カリマは『しゅごう』というもののなのだった。だが今年で七十歳になるのに、そんなにお酒ばかり飲んでいるのは体に悪いだろう。

これ以上カリマの機嫌が悪くなるのは嫌だったので、ルーシエルは大人しくスープを飲むことにした。スープ飲みながら考えると、ある案が浮かんだ。案と言っているものはわからないが、ルーシエルは立ち上がった。食事中に立ち歩くのは行儀が悪いが、仕方ないだろう。

カリマが椅子に座っていても、口までは手が届かない。カリマの膝の上によじ登り、スプーンで南瓜を切ってカリマの口の前に持つ

ていく。

「たべて。かりまがたべなきゃ、わたしもたべないもん」

「……おやまあ。ついに反抗期かい？」

苦笑いしながらカリマは口を開ける。その口に南瓜を突っ込みながら、ルーシエルは反抗期とは何だろう、と考えた。

まあそれは、寝る前の大嫌いな勉強の時間にも訊けばいいだろう。

「おいしい？」

「そりゃ私が作ったものだからねえ。美味しくなきゃおかしいさ」
「うん、そうだよね」

美味しくない料理など、カリマの料理ではない。

ルーシエルが肯定すると、カリマは嬉しそうに顔をほころばせた。

「そう言われると嬉しいもんだね」

カリマが嬉しそうにするのが嬉しくて、ルーシエルも笑う。

しばらくはルーシエルがカリマに料理を食べさせていると、また苦笑された。

「あんた、自分は全然食べてないじゃないか。……それに、そろそろ膝の上に乗られてるのがきつくなってきたよ」

「……はーい」

そろそろと膝の上から降りる。やはり年寄りには、四歳のルーシエルでも重く感じるらしい。

「失礼な。私はまだそこまで老いぼれちゃいないよ」

「ふえ？　かりま、いまわたしのころよんだ？」

「……鎌をかけてみたけど、当たりだったみたいだねえ」

鎌をかけるとは何だろう。また知らない言葉が増えていく。これも後で訊かなければ、とルーシエルは不急ぎで自分の椅子に戻った。あのまま近くにいるのは、何をされるかわかったものじゃない。

ちらちらとカリマのほうを確認しながら、ルーシエルは自分の口に食べ物を運んだ。

（おいしいな）

カリマの料理は美味しいのだが、それは一緒に食べている人がいるからだ。ルーシエルが知ったのは、もう少し後のことだ。

食べ終わり、流しへ食器を持っていくとすると止められてしまう。

「また食器を割られちゃたまないからね」

「むう……。わったのはいいかいだけだよ！」

「食器を運ぼうとしたのだって、これで二回目じゃないか。運ぼうとした一回目で割ってちゃ、世話ないね」

また知らない言葉が増えた。『世話ない』という言葉も後で訊こう。

カリマと生活するのは楽しい。知らない言葉や、魔法を学べるのも楽しい。ただ、計算だけは嫌だ。五と三を足すと八とか、意味がわからない。あと、七個のりんごがありました、四個食べると残りはいくつでしょう、なんて訊く意味も。ただ数えればいいだけではないか。

唇を尖らせながらも、ルーシエルはカリマに食器を渡した。

これから少しゆっくりとして、それから勉強時間だ。彼女が食器を片付けている間に、カリマに取られてなるものか、と揺り椅子に座る。暖炉の前は気持ちがいい。ゆらゆらと椅子を揺らしていると、戻ってきたカリマは呆れたような顔をした。

「……ふん、まあいいけどね。まったく、ようやく私のことを氣遣ってくれたと思ったら……」

ぶつぶつと何かを言い始め、他の椅子に座る。

何だか自分が悪いことをしているような気持ちになって、ルーシエルは椅子を揺らすのをやめた。だが気持ちがよくて、立とうとしても足が動いてくれない。

「……ルーシエル」

怒られるのかと思って、ルーシエルはびくつとした。

カリマはルーシエルのほうを見ずに言った。

「もし私が死んでも、死のうなんて馬鹿なことは考えちゃいけないよ」

「……かりまは、しぬの？」

そんなこと、考えたこともなかった。ずっとカリマと一緒に、幸せに暮らしていけるのだと思った。だが考えてみれば、人間にも魔女にも『死』というものは存在する。

それに気付くと、途端に怖くなった。

カリマと一緒にいらなくなるのが。この幸せが、失われてしま

うことが。

怖くて怖くて、涙がこぼれてきた。

はっとしたように、カリマがルーシエルのほうを向いて微笑んだ。

「死なないさ。私は、ずっとあんたと一緒にいる」

「……ほん、と……うっ？」

「……ああ」

顔を逸らしながらのその答えに、ルーシエルはほっとした。死なないことも、ずっと一緒にいることもできないと、わかっているのに。そう思いたくなかったのだ。

「やく…そっ、くだよ……？」

「約束だ」

ただの口約束。この約束をカリマは守ってくれど、ルーシエルは本気で信じていた。

六年後の冬、急にカリマはルーシエルに料理を教えると言った。

南瓜の煮物の作り方を。

好きな料理だったから、自分で作れるようになるのは嬉しかった。作って、カリマに食べてもらいたかった。

教えてもらって、南瓜の煮物が完成した。最初だけは少し手伝ってもらったが、初めて自分で作った料理だ。途中からは、一人で作った。味見もしたが、カリマの味そのままだと自信を持って言える。

先に食卓について待っていたカリマに、早く食べさせてあげようと鍋から皿へよそう。

「カリマ、できたよ！」

カリマは、疲れたのか椅子に座って眠っていた。

「……カリマ？」

眠っているだけ。

ただそれだけのこと。

それなのに、なぜか胸がざわついた。

「カリマ！」

食卓に皿を置いて、カリマの耳元で大きな声を出す。カリマは眠りが浅いから、大きな音を出せばすぐに起きる。

——はずなのに。

目を、開けない。おそろおそろ息をしているか、手を口と鼻の前に持っていき確認する。ちゃんと手に風を感じる……そう思っ

（……？ どうして、息してないの？）

息をしていない。

（……死ん、だの？）

いや、そんなはずはない。あの時確かに、約束したのだ。ずっと一緒にいると。死なないと。

十歳になった今、そんなことは有り得ないと理解していた。死な

ない人間なんていなくて、ずっとなんて存在しないと。
それでも。

『死なないさ。私は、ずっとあんたと一緒にいる』

あの言葉を、信じたくて。

死んでいないと無理に思うことにして、眠っているカリマを起こさないように自分の椅子に座る。そう、カリマは今眠っているのだ。カリマのためによそってきた煮物を、自分で静かに食べよう。起こさないように。

口に入れると、南瓜の甘みが口に広がる。温かくて……でも、体はガタガタと震えて。寒くなんてないのに。暖炉では火がパチパチと音を立てて燃えている。南瓜の煮物だって、温かい。では、なぜ？なぜこんなに、体が震えるのだろうか。

(……そっか。カリマが……死んじゃったから)

認めたくはないけど、カリマが死んじゃったから。

こんなに体が震えるのは、カリマが死んで一人になるのが怖いからなのだ。

南瓜の煮物を、口に運ぶ。

「……おいしいよ、カリマ」

だが。

「だけどね……。一人だっつ、おいしくないよ……。っ！」

美味しい。だが、美味しくない。

この矛盾した思いは、全部カリマのせいだ。全部全部、カリマの

せいだ。

「やくそく……やぶるなんてっ」

約束は守らなければならない。

そう教えてくれたのは、誰だったか。……カリマだ。
教えてくれたカリマが、約束を破るなんて。

「……食べて、もらいたかったのに」

それなのに、なぜ食べる前に逝ってしまうのだ。

カリマはひどい。せめて……娘の始めての手料理を食べてから逝けばよかったのに。

カリマとルーシエルは家族ではない。だが自分は、カリマのことを母のように思っている。いかんせん、歳が離れすぎてはいるが。カリマも、ルーシエルのことを娘のように思っていてくれただろうか。いつか、いつか尋ねようと思っていたのに、尋ねる前にカリマは逝ってしまった。

「カリマ、わたしのこと……家族と思っててくれた？」

答える声は、ない。

もう二度と、カリマの声は聞けないのだ。この南瓜の煮物を、食べてもくれない。

（……とりあえず、これを食べきろう）

流れ出る涙なんて無視して、ルーシエルは南瓜の煮物を食べ続けた。

＊ ＊ ＊

(思い出してみれば……)

セリアが死んでしまったときよりも、『死んだ』ということを理解するのが早かった。

もう何百年も前の話なのにこんなに鮮明に思い出せるのは、あの日々が本当に楽しかったからだろう。まあ、今も楽しいのだが。

「ルーちゃん、何してるの？」

「ん？ ああ、料理だよ。南瓜の煮物」

仲直りしたしばらくした後、ルーシエルとセリアは洞窟からステルダに移住していた。もちろんノギスも一緒に来ている。移住した理由は、クロードが『幻影』の術を改良し、水ではなく炎に触らなければ大丈夫にしてくれたからだ。炎にわざわざ触ろうとはしないし、たまたま触るということも水よりは確率が下がるだろう。だがもしかしたらばれるかもしれないので、ステルダでも人通りが少ない所に小さな家を借りた。

今の季節は冬。南瓜の煮物を作ったときと、同じ季節。そして、丁度同じ日だった。

味見をして、うなづく。この味だ。ずっと昔に食べた味と、全く同じ味。

「南瓜の煮物？」

「うん、そうだよ。味見する？」

トテトテと歩いてきたセリアの口に、冷ました南瓜を一つ入れた。その途端、セリアの瞳が輝く。

「美味しい！ この南瓜、どこで買ってきたの？」

「買ったんじゃないくて、メリアさんにもらったんだ」

「メリアさんに？」

メリアには、本当に世話になっている。この家にもよく様子を見に来てくれるのだ。

彼女から南瓜をもらって、どうしてかあの日のことを思い出した。だから作ろうと思ったのだ、南瓜の煮物を。

だがどうせなら、もっと違うものを教えてくれたらよかったのに
と思わないでもない。

「よし、まだ夜ご飯には早いけど、ご飯にしようか」

エデからもらったものもあるし、今日の献立はこれで十分だろう。
いつもなら食べるのはセリアだけだが、今日はルーシエルも食べることにした。減多にないことなので、セリアは嬉しそうに椅子に座る。

「ルーちゃん、料理ができるならもっと作ってくれたらいいのに」

「残念ながら、僕が作れるのはこれだけなのですよ」

スプーンで南瓜を食べる。ホクホクの南瓜は甘くて美味しかった。

（……あのとき食べたときより、美味しいな）

それはやはり、セリアがいるからだろう。一人で食べるものほど、美味しく感じないものはない。エデの料理も美味しかったが、この南瓜の煮物のほうが美味しく感じる。

今度エデやノエル、龍神たちとも一緒にこれを食べたいな、と思った。

後日談 南瓜の煮物（後書き）

次は番外編になるかもしれません。……まあ、今回も番外編のつもりで書いたので、後日談になる可能性もありますけどね。

後日談 雪の日「上」(前書き)

遅くなった上、始めての上下もの……。思ったよりも長くなってしまったんですね。「下」を投稿できるのはいつでしょうか……。

後日談 雪の日「上」

目の前に、銀世界が広がっていた。

手のひらを上に向けると、空からふわふわと落ちてくるそれは溶けていった。

「……セリア、雪積もってるよ！」

家の中に声をかけると、驚いたような声の後に急いで走ってくる足音が聞こえる。

バン、と勢いよく扉が開き、手袋と襟巻きをしたセリアが出てきた。興奮しているのかセリアの顔はほんのり桃色に染まっていた。手袋と襟巻きも桃色で、よく似合っていると思う。

後ろから、ノギスが寒そうに出てきた。猫は寒さが苦手なのだろう、ちらっと雪を見た途端に中へ戻ってしまった。ノギスのことは放っておこう。こんな寒いのに外へ来させたら可哀想だ。

さっそく雪の玉を作っているセリアを、ルーシエルは微笑ましげに見る。

「ここら辺は雪があまり降らないってメリアさんは言ってたけど、見事に積もったね」

「えい！」

返事の代わりか、雪の玉がルーシエルの顔面に直撃した。

数秒ルーシエルは固まった後、ふるふると首を振って雪を落とす。セリアのことをキッと睨み、素手で雪を掴んで玉にすると投げつける。冷たいが、気にしない。

顔に当てられたからとは言え、顔に当て返すのは可哀想なのでお腹の辺りを狙う。

「……えーい！」

セリアは大きめの雪玉を作り、投げつけてきた。

売られた喧嘩は勝てないとわかっているとき以外買う主義だ。ルーシエルはまた素手で雪玉を作った。

「仕返しだ！」

「えい！」

生まれて初めての雪合戦。雪合戦という名の遊びがあることは知っていたが、相手がいなかったのでできなかったのだ。そもそも魔女の自分が、こうして外に出ていることさえ以前では考えられないことだ。『幻影』の術が水を触ってはいけなかったものだったら、きっと雪も触れなかっただろう。

しばらく雪合戦を続け、手の感覚がなくなってきた頃ルーシエルはつぶやいた。

「……セリア、僕、思ったんだけど」

「な、何、ルーちゃ、ん」

「雪合戦、って、ずっとやっ……てると、つか、れるね」

いや、単に自分たちの体力がないだけなのかもしれないが。まだそこまで時間が経っていない気がするのは気のせいなのかそうじゃないのか。

力なくうなずいたセリアは、座り込もうとして顔をしかめた。雪があったことを一瞬忘れていたのだろう。雪の上に座るのは冷たいし、服がぬれるからやめたほうがいい。

（……ん？）

息が整うのを待っていたルーシエルは、首をかしげた。

「ねえ、僕って何をしに外に出たんだっけ？」

「あ……。えっと、メリアさんの所に行くんじゃないかった？」

そういえばそうだった。メリアに会いにいかうとして外に出たのに、つい雪を見て気分が高揚し雪合戦をしてしまった、と。

雪を見たのは別に初めてではないが、一緒に遊ぶ者がいるのは初めてだった。メリアに会うのは約束していたことではないからまあいいか、とルーシエルは手のひらに息を吹きかけた。かじかむ手のひらを握ったり開いたりしてみるのが、まだ感覚が戻らない。

（うーん、霜焼けになるかもしれないなあ）

ルーシエルは寒さに弱いので、足の指先が霜焼けになることがよくあった。またあのかゆくて痛い思いをするのかと思うと、気分が重くなる。せめてセリアのように手袋をすればよかった。

「……とりあえず、行ってくるね」

メリアに会って何をするわけでもないが、あの人に会うのは楽しい。暇なときはいつも、メリアに会いに行くのだ。セリアもたまに一緒に行くのだが、今日は行かないようだった。

「行ってらっしゃい」

セリアはにっこりと笑う。

（何だか雪の中だと、余計セリアの髪の毛が綺麗に見える）

銀色の髪の毛はキラキラと輝いていて、とても綺麗だった。
いつもと少し違うように見えるセリアに見送られ、ルーシエルは
雪の上を歩いていった。

「……あ」

慌てて戻り、不思議そうにしているセリアの横をすり抜けて家の
中に戻る。手袋と襟巻きをしてから外へ出た。今更しても遅いと思
うが、ないよりはいいだろう。

セリアにもう一度「行ってらっしゃい」と言われる。

「行ってきます」

セリアと同じように笑みを浮かべながら、ルーシエルは答えたの
だった。それを言う相手がいることに安心し、そしていつまでこの
言葉を言えるのかという一抹の不安を感じながら。

＊ ＊ ＊

市場は人がいっぱいだった。いつもはこの時間は混雑していない
のに、歩くのもやっとなくらい人がたくさんいる。

何か特別なことでもあるのだろうか。

人の流れに流されないように必死で前に進み、何とかメリアの店
が見えてきた。ほっとした途端、メリアの店で指輪を買った者にぶ
つかられよろめいてしまった。

「悪い」

それだけ言って立ち去る、無愛想な男。謝るだけまだいいのだろ

うと思うことにして、ルーシエルは気を引き締めた。気を抜くと、今のようなことが何度も起こるに違いない。

メリアの店の前は、特に人が多いようだった。何も無いときには指輪を買う者はあまりいないから、やはり何か特別なことがあるのだろうか。

足に力を入れて、人とぶつからないようにルーシエルは店へ向かった。

そこでふと立ち止まる。こんなに客がたくさんいて、何も買うつもりのないルーシエルが行ったら迷惑ではないだろうか。

一瞬迷った後、ルーシエルは家に帰ることにした。お世話になっている方に、迷惑をかけてはいけない。

「……あ、ルーシエルじゃないか！」

しかし、帰ろうとしたときメリアに気付かれてしまった。どうしてこんなに人がたくさんいるのに気付くのだろうか。

呼ばれたのに帰るのも悪い、とルーシエルはメリアの店へ近づく。

「メリアさん、すみません。忙しそうなのに……」

「いやいや、別に構わないさ。……あ、お客さん銀貨が一枚足りないよ！」

メリアはルーシエルに笑いかけた後、慌しく接客に戻った。

指輪はもう少しで売り切れそうだった。指輪を載せてある硝子ガラスの

机には、うっすらと雪が積もっていた。

こんな寒いときによく皆出かけるな、と感心しながら指輪が飛ぶように売れていく様を見てみると、ほどなくしてメリアが並んでいた客たちに「売り切れだよ！ また来ておくれ」と大声で言った。

客たちは残念そうに店を離れていった。こうして見ると、客のほとんどが男だと気付く。

「何か特別なことでもあるんですか？」

「ルーシエル、知らないのかい？」

信じられないとも言いたげに、メリアが目を丸くした。

「もう少しで聖誕祭があるんだよ」

「聖誕祭……？」

聞きなれない単語に、ルーシエルは首をかしげる。聖誕祭。名前に何かの祭りなのだろうが……。カリマはそういうことは教えてくれなかったので、聖誕祭が何か全くわからない。

メリアは急に、ルーシエルがはめていた左手の手袋を取った。その薬指にクロードのおそろいの指輪があることを確認すると、にやりと笑う。

「おや。セリアがルーシエルはクロードとおそろいの指輪を嫌がってるって聞いたんだけどね……。ちゃんとつけてるじゃないか」

「こ、これは別に！　綺麗だからいつつもつけてるだけで、それにクロードとおそろいが嫌ってわけでもなくて、えっと、その……」

「照れなくていいんだよ」

照れていない、と反論したかったが、先ほどから顔が熱いのは確かだ。雪が降るくらい今日は寒いのに、ここまで顔が熱くなるのはおかしい。

どうして自分が照れているのかわからず、ルーシエルは左手で頬を冷やした。手の感覚は戻っているが、まだ十分冷たかった。

「聖誕祭は、言っちゃうと年に一度恋人が愛を誓い合うような祭りだね」

「愛!？」

世の中の恋人たちはそんな恥ずかしいことをするのか。
もっと顔が熱くなったので右手の手袋もはずして両手で顔を冷や
す。

「まあ、最初は誰か偉い人の誕生日を祝う日だったみたいだけど。
だんだん誰の誕生日を祝う日だったのかも忘れ去られていったんだ
よ。今じゃすっかり、恋人同士の行事になっちまって。こっちは売
り上げが増えて万々歳なんだけどね」

満足げなメリアの視線の先には、雪だけが載った硝子の机があっ
た。そういえばいつもは木の机なのに硝子の机になっているのは、
雪が降っているからだろうか。木では雪が溶けたらぬれてしまう。

「で、どうなんだい、ルーシエルは」

「何がですか？」

「クロードとのことだよ。あの子はそういうことに疎いからねえ。
はっきり言わないと伝わらないよ」

そういうことってどういうことですか。

口に出しそうになった言葉を飲み込む。何だか口に出したら、ま
たからかわれる気がしたのだ。それにもともと、どういうことかは
理解している。

話題からしても、メリアの視線がルーシエルの左手に向いている
ことからしても、ああいうことだろう。

(……ああいうことって、うん、つまり。そういうことだよね)

メリアに何と言おうべきか思いあぐね、ルーシエルはおずおずと口

を開いた。

「あのですね、メリアさん。僕はクロードとは何にもないんです。本当に」

「へえ……じゃあそういうことにしておくさ」

絶対に信じていない。これ以上否定しても信じてくれないだろう、とルーシエルはそうっとため息をついた。真っ白な息が広がる。そうっとついても、これではばれただ。

今度は堂々とため息をついて、市場を見回した。

聖誕祭があるからこんなに人がいるのか。

誕生日を祝う日なのに、どこをどう間違えて恋人が愛を誓い合う行事に変わってしまったのだろうか。

（そういえば、さっきの男の人も女の人のために指輪を買ったのかな？）

とてもそういう相手がいるようには見えなかったが。

しかしどうしてだろうか？ あの男をどこかで見たような気がするのだ。それも、一度ではなく何度も。

どこで見たのか思い出そうとしたルーシエルの目の前を、真っ白な雪が落ちていく。雨は龍神が降らしているが、雪は何が降らせているのだろうか。やはり龍神だろうか。

「ルーシエル、さっきは言い忘れたけどね」

メリアの声に、ルーシエルは視線をそちらへ投げた。

「聖誕祭は恋人が愛を誓い合う行事でもあるけど、親しい人同士で祝う行事でもあるんだよ。ルーシエルも、セリアとクロードと祝っ

たらどうだい？ ……誰かもわからない人の誕生日をね」

苦笑しながらメリアは言った。

親しい人。ぱっと思いつくのはセリアとノギス、エデとクロード。そしてここにいるメリア。ノエルとアデライード。もって考えてみれば、アーサーとアンソニーも思い出した。だがセリアはアーサーを嫌っているようだし、アーサーも呼んで一緒に祝うのは駄目か。ああそうだ、食いしん坊な龍神もいる。

ルーシエルたちの家には入りきらなさそうだ。祝うとしたら、エデの両親が経営している店だろうか。

「メリアさんも」

「ん？」

「メリアさんも、僕たちと一緒に祝いますか？ 誰かの誕生日を」

親しい人。それでメリアが思い浮かんだのは、自分でも不思議だった。人と親しくなることを恐れていたはずなのに。セリアたちはルーシエルが魔女だということを知っているからいいのだ。だがメリアは知らない。

それなのに、親しい人と考えたときにメリアが浮かんだ。

メリアはびっくりしたような顔をした。

「私と一緒に？」

「はい。……駄目、ですか？」

もしかしたらメリアはもう、誰かに誘われているかもしれない。やはり誘うのは駄目だったかとうつむいたとき、メリアの笑い声が聞こえた。

「ははっ、ぜひ行かせてもらうよ。いやあ、びっくりした」

そんなにルーシエルが誘うのがおかしかったのだろうか。

「ルーシエルは、あまり人とかかわろうとしないだろう？ セリアやエデ、クロードは別だけどね」

「……人とかかわろうとしないのは、そう、ですけど……。メリアさんとは、親しかったつもりですよ」

メリアはそう思っていなかったのだろうか。そう考えるとルーシエルは拗ねたい気持ちになった。セリアたちよりは親しくしていなかかもしれないが、メリアのことも大切に思っているのだ。相手がこちらをそう思っていなかったというのは悲しい。

「私も初めはただのお客様としか見てなかったんだよ？ お客様とこんなに親しくしたのは初めてさ。もっとも、ルーシエルたちももう指輪を買わないだろうから『お客様』ではないんだろうけどね」

う、と言葉に詰まってしまふ。やはり何か買うべきか。だが指輪はいくつもない。する機会もないので、あっても無駄になってしまう。だとしたら、買わないべきなのだろうか。

メリアは意地悪そうに笑った。

「別を買えって言うてるわけじゃない」

「……でも、買ったほうがいいんじゃないですか？」

「そのほうが嬉しいは嬉しいけどねえ。……歳の離れた友達と、こうして話すだけで嬉しいからいいんだよ」

さらっと言われたその言葉に、ルーシエルは驚いて目を瞬いた。歳の離れた友達、とはルーシエルのことだろうか。誰か別の人のことではないのかと、きよろきよる辺りを見る。こうして話すだけ、

ということは今メリアと話している人物なのだから……やはりルーシエルのことだろうか。

この場合、どちらが年上でどちらが年下なのだろうか。見た目的にはメリアが年上だが、ルーシエルの方が絶対に百年以上は長く生きている。封印されていた期間を入れれば千年以上になるのだ。

「僕が年下？」

どちらが年下なのかわからずそう尋ねると、メリアに呆れられてしまった。

「……何当たり前のこと言ってるんだい。それで私のほうが年下だったらおかしいじゃないか」

そうか、当たり前なのか。

この人はルーシエルが魔女だということを知らないのだから、それでいいのだろう。いつか教える日が来たら、きっと驚くんだろうなとルーシエルは小さく笑ってしまった。

メリアは怪訝そうな顔をして、それから破顔した。
その笑顔を見ながら考える。

（いつか教える日が来たら、か）

本当にそんな日が来るのだろうか。教えて、嫌われることはないだろうか。

そんな不安はあったが、なぜだかメリアに嫌われる想像はできなかった。自分でも楽観的すぎる気もするが、できないのだから仕方がない。

「話は変わりますが、魔女ってどう思いますか？」

だから、意外なほどにするっと訊けたのだろう。

答えは大体予想できる。メリアと付き合いだしてからそれほど時は経っていないが、それくらいはわかるのだ。

しかし返ってきた答えは、予想とは少し違ったものだった。

「二人して同じ質問するなんてねえ。セリアにも言ったけど、別にどうとも思っていないさ。私から見たら、魔女だってお客様だからね」

魔女だってお客様。その言葉よりも、セリアが同じことを訊いていたということにルーシエルは驚いた。

セリアはその質問を、どんな思いでしたのだろうか。

「あの、セリアが訊いたのっていつ頃でしたか？」

「ん？ ああ、確かあんたたちが喧嘩した時だったよ。普段は仲が良かったから、喧嘩したことにびっくりしたのを覚えてる」

桜色の花をセリアからもらった時、彼女はメリアからもらったと言っていた。その時に魔女のことをどう思うかメリアに尋ねたのだろう。

「あ、それでルーシエル。聖誕祭は明後日だけど、どこで祝うんだい？」

「えっと……許可が取れば、エデの、というかエデのお父さんお母さんのお店でやりたいです」

エデのことだから、言えば早速準備してくれるだろう。

そういえばエデは、どうして聖誕祭のことを教えてくれなかったのだろうか。エデの性格だったら、そういうことは真っ先に教えてくれそうなものなのに。ルーシエルたちが知っていると思っていた

としても、一緒にお祝いをしようと誘ってくれるはずだ。

忘れていたのかな、とルーシエルが首をかしげると、同時にメリアも小首をかしげる。

「それは無理じゃないかい？ エデは今年、シルヴァと祝うだろうし」

「シルヴァ？」

「エデの好きな人さ。まあ、シルヴァのほうはエデのことを妹のようにはかと思ってないようだけど。そうそう、クロードの兄でもあるよ」

これでエデとシルヴァが結婚して、ルーシエルとクロードが結婚したら、ルーシエルはエデの妹になるんだねえとメリアは言った。

（……エデの好きな人？）

そんな話聞いたことがない。

だからエデはルーシエルたちを誘わなかったのか。シルヴァという人と、聖誕祭で祝うために。

エデとクロードは幼馴染なのだから、必然的にエデとシルヴァも幼馴染のような関係になるはずで。ルーシエルとよりもシルヴァと仲がいいのはわかるが、何だか寂しくなった。

「……やる場所は、明日までに考えておきます」

エデの邪魔をしては駄目だろう。今年の聖誕祭は、エデ抜きで祝うしかない。いや、シルヴァはクロードの兄なのだから、クロードもエデたちと一緒に祝うのだろうか？ そしたら、クロードも抜きか。

もしかしたらノエルは、メリアのことを嫌がるかもしれない。そ

うなったらノエルも抜きに……。

お祝いに誘う者も、もう一度考えたほうがいいかもしれない。

＊ ＊ ＊

その夜。ルーシエルたちの家の扉を誰かがトントン、と叩いた。

「はーい！」

セリアが扉を開けに行く。この家に来るのはノエルやアデライード、エデとクロード、メリアだけだ。その五人の誰かだろうと扉の外を見ると、予想通りそこにはエデの姿があった。

家の中の灯りが、外に積もった雪が照らす。キラキラと光るそれは、昼間とは違う綺麗さだった。

「夜にごめんね。明後日の聖誕祭、一緒に祝わないかなーって思ってた」

思わずセリアと顔を見合す。メリアと話したことはセリアにも教えてあるので、エデがシルヴァという人と祝うことは彼女も知っているのだ。

どうして自分たちを誘いに來たのだろうか。

不思議に思いながらエデの顔を見て、続きをうながす。

「シルヴァって人も一緒なんだけど……いいかな？」

「それって、ディーちゃんの好きな人のこと？」

セリアが訊くと、エデは一瞬の間の後顔を真っ赤に染めた。

「ななな、何でそのことっ」

「メリアさんに聞いたの。ディーちゃんは、聖誕祭をシルヴァって
いう好きな人を過ごすんだって」

「シルヴァってクロードのお兄ちゃんなんだよね？」

そこまではれてるのかあ、とエデは真っ赤な顔でつぶやいた。襟
巻きで顔の下半分を隠す。それで隠せているつもりなのだろうが、
耳が赤いのは隠せていない。

「毎年シルヴァと祝ってたんだけど……今年は、ルーシエルとセリ
アにも来てほしくて。来てくれるかな……？」

「それはいいけど。それならエデ、メリアさんも呼んでいい？」

「メリアさんだけじゃなくて、ノエちゃんとアデルさんと龍神さま
も」

アデライードと龍神はともかく、ノエルは来てくれるだろうか。
疑問に思ったが、とりあえずエデが了承してくれたら誘うことに
しよう、とルーシエルは決めた。

「もちろんいいよ。あ、じゃあアートとトニーも呼んでおくね。こ
れからアートの家に行くから、今日はこれで。明後日、あたしの店
に来てね」

こちらの返事も聞かず、エデは慌しく去っていた。

おそろおそろセリアの表情を窺^{うかが}うと、先ほどまでの楽しげな表情
とは打って変わって不機嫌そうな顔だった。アーサーの名前が出て
きた途端にこうなったとしたら、つまり、そういうことなのだろう。

セリアはエデのことをため息をつきながら見送り、無言で椅子に
座った。

「セ、セリア……？ どうしてアートのこと、そんなに嫌いななの？」

「……好きなのに理由がいらないうまいに、嫌いなものにも理由はいらないの。ただ一つ理由を挙げるとしたら、あの時にルーちゃんに石を投げようとしたから」

まだそんな昔のことを根に持っているのか。

セリアを怒らせると怖いということに初めて気付いたルーシエルは、アーサーに少し同情した。少なくともアーサーはセリアのことを嫌っていないのだ。人に嫌われるのが辛いことを、ルーシエルはよく知っている。

（これじゃあ、明後日どうなるんだろう）

セリアは、エデが楽しみにしているのならいくら嫌でもアーサーが来ることを受け入れるだろう。そしてアーサーのことを、とことん無視するに違いない。

その様子が容易に想像ついて、ルーシエルはこっそりとため息をついた。

後日談 雪の日「上」(後書き)

なるべく早めに投稿できるように頑張ります。きっと「下」は今回ほど長くないと思います。

後日談 雪の日「下」(前書き)

遅くなりました、すみません。「下」はあまり長くないと書いたのに、長めになってしまいました。多分登場人物が自己紹介を始めてしまったからです。思えば、この小説も登場人物が多くなったものです。

何だかまだまだ後日談が続くそうなのですが、もう完結済ではなく連載中にしたほうがいいんですね……。

後日談 雪の日「下」

空が茜色に染まり始めた。冬なので暗くなるのは早いから、エデの店に着く頃には真っ暗になっているだろう。一昨日とは違い、雪が降っていないのが残念だ。

セリアはルーシエルと歩きながら、大きくため息をついた。真っ白な息が広がるのが面白く、何度もため息をついてしまう。

いや、ため息をつく理由はそれだけではないのだが。

ちらっと隣を歩くルーシエルを見ると、同じ瞬間にルーシエルがこちらを見る。『幻影』の術をかけたままなので、緑色の瞳を視線がぶつかった。

「……セ、セリア。やっぱり怒ってる？」

びくびくしながら尋ねてくるルーシエルに、つい首をかしげてしまう。自分がいつ怒っていたというのだろうか。やっぱり、と言ったということは自分の態度に何か原因があったわけ。

ああそうだ、とすぐに原因を思いつく。これからあの男に会うのが嫌で、ルーシエルに対しても口数が少なくなってしまうていたのだ。

ルーシエルに怖がられているのはあの男のせいかな。

自分でも理不尽とはわかっていながら、あの男に対する嫌悪感はなくなりそうにない。だからこんなふうには、何でもかんでも彼のせいにしてしまうのだ。

「大丈夫よ、ルーちゃん。ルーちゃんには怒ってないから」

「僕には、って……。他の人には怒ってるってことだね？」

「さあ、どうでしょう」

そっけなく返事をしながらまたため息をつく、空気が白く染まる。どうして寒い日は息が白くなるのか、よくわからない。いつか誰かが研究して、どういう理由なのか調べてくれたらいいな、と考えながらもちらちらと頭に浮かぶのはあの男の顔。

あの男の顔が頭に浮かぶたびに苛ついてしまう。思い出すだけでこうなのに、実際に会ったらどれだけの嫌悪感を抱くのだろうか。どうもあの男のことを考えると、自分の性格が変わってしまうように思える。

「……嫌いなのに理由は必要ない、かあ」

小さくつぶやくと、ルーシエルが「ん？」とセリアのほうを向く。苦笑しながら首を横に振ると、多少はあの男に対する苛立ちがなくなってきた。

嫌いなのに理由はない。自分で言っておきながら、理由がないなんて有り得ないと思う。

セリアは両親に嫌われてきた。それは、セリアが生き物の心を読めたからで。

その力がなかったら、両親は自分を嫌わなかっただろう。それどころか、愛情を持って接してくれたに違いない。

両親に好かれない。そう思っていたのは、いつだったか。ずっと前のことだった気もするし、つい最近のことだった気もする。どちらにしろ、あの人たちに好かれようと努力していた事実はあるのだ。

「はあ……」

そろそろこの遊びにも飽きてきた。

エデの店までの暇つぶしに、何をやるうか。ルーシエルとはあの男のせいで気まずい雰囲気だから、会話が弾みにくいだろう。かといって、それ以外にやることもない。龍神さまはもうとっくに集合

場所にいるだろうし、ノエルとアデライドも同じくだ。メリアとは一緒に行く約束をしていないため、一昨日積もったままの真っ白な雪に足跡を残していくのはセリアとルーシエルのみ。可哀想だが、ノギスは今回も留守番を任せてきてしまった。日に日に彼の扱いがひどくなっている気はしても、それをセリアは変えようとはしなかった。

（ノギス君もいないんだから、ルーちゃんと話すしかないんだけど……）

一昨日の夜から、ルーシエルは異様にびくびくと怯えているのだ。怯えるルーシエルも可愛いのだが、そんなに怯えられると少しへこんでしまう。そこまで自分は怖いのだろうか。確かにあの男のことを考えると、ルーシエルが怯えるような感情を抱いてしまうのは認めよう。だが、それを表面に出している気はないのだ。

「人が多くなってきたね……」

ルーシエルのつぶやきに、きよろきよろと辺りを見る。セリアたちが住んでいるのは町のはずれのほうだから、町の中心に行くに従って人が多くなるのは当たり前だ。

だが今日は、この間……一週間ほど前にセリアが市場に行ったときよりも、さらに人が多かった。一昨日ルーシエルは市場に人がたくさんいた、と話していたが、少し驚いているところを見ると一昨日よりも人が多いのだろう。

エデのお店は貸切にしてくれているようだが、こんなに人が多い書き入れ時に店を閉めてしまっているのだろうか。恋人が愛を誓い合う行事なのなら、飲食店には恋人たちがたくさん来るだろう。稼げるときに稼がなくて、店を経営していけるのだろうか。

（私が何か言えるわけでもないけどね）

他人が口出しする話ではない。

自分でそう考えて、少しだけズキッと胸が痛くなった。

他人。そう、セリアとエデは他人だ。セリアとルーシエルだって友人であっても、他人には違いなのだ。セリアにとって他人でないのは、あの人たちだけ。

（……何で今日はあの人たちのことをこんなに思い出すんだろう）

その理由はきっと、自分はわかっている。

聖誕祭という行事は、アスメリ村にもあった。セリアが知ったのは、確か五歳のときだった。龍神さまが「他の奴らは毎年聖誕祭を祝っているというのに、今年も我が巫女は祝わないのか？」と訊いてきたから。そのときまで、聖誕祭という言葉さえ知らなかった。一緒に、祝いたかった。親しい人同士で祝うこともあるのだと訊いたとき。

頭に浮かんだのは、両親の顔。

一緒に祝ってくれないのだろうか、とわかってはいたながらも、その年の聖誕祭の時期になったら期待して。両親が、あの人たちが、一緒に祝おうと誘ってくれることを。有り得ない。そのことがわかっていてなお、セリアは両親と祝いたいと思った。

だがその淡い期待が呆気なく打ち砕かれても、そこまで悲しくはなかった。

ああやっぱり。

そんな諦めの心。五歳でここまで諦めることに慣れてしまっていたのは、自分だけではないだろうか。もうその頃から、両親から愛情を注いでもらうことを諦めていた。

（それなのに、どうして今は）

こんなに欲張りになってしまったのだろうか。

ルーシエルと一緒にいたい。ノギスやエデ、クロード……皆と、一緒にいたい。聖誕祭を祝いたい。誕生日も祝いたい。ずっとずっと一緒にいて――笑って、泣いて、時には喧嘩もして。

そんな普通の、幸せな生活を望む。

それがどんなに欲張りなことか、セリアは理解している。普通なものとは存在しなくて、世の中の人々が普通だと思っている生活は、とても幸せな生活で。

その幸せな生活を今送っているのだと思ったら、自然と笑みがこぼれた。あの男、アーサーのことを考えてもそこまで不快に感じないほど、セリアは何だか嬉しくなった。

隣で、ルーシエルが安堵の息をつくのがわかる。息が真っ白に広がったから。セリアが微笑んだことに気付いて、安心したのだろう。

「……セリア、人がまた多くなってきたから、はぐれないように手を繋ごうか」

「そうね」

にっこりと笑って、差し出されたルーシエルの手を握る。そういえば一昨日の雪合戦で霜焼けになってしまったと言っていたが、平気なのだろうか。ノエルにもらった薬をつけていたが、悪いが彼女の薬は危ない気がするのだ。今度誰かに教えてもらって、役に立つ薬の作り方でも教えてもらおうか。

ルーシエルの手の温もりで何だか心も温かくなってきた。ルーシエルにばれないようそうつと横を向いて、目に浮かんだそれを繋いでいないほうの手で拭う。

嬉しくて泣くのは、初めてだった。

＊ ＊ ＊

ルーシエルたちが店に着くと、もう皆集まっていた。ノエルの髪と瞳、アデライードの髪の色も変わっていて、何だか新鮮に感じた。一人どこかで見たようで知らない者が混ざっているが、あの人がシルヴァだろう。メリアの服はいつも市場で売っているときとは違って、よそ行き用なのだということがわかる。アーサーとアンソニーの姿もあって、彼らを見たセリアの機嫌が急に悪くなった。それを気にしないようにルーシエルは店の中をじっくりを見た。ルーシエルの家の窓より少し大きめの窓の外は、もう真っ暗になっていた。

エデの店の中には、なぜか木が飾ってあった。天辺には星型の飾りがあり、葉の部分にも綿がふわふわとついていて、赤や青などの玉もぶらさがっている。他にも靴下や人形がいくつもあり、髪飾りに使うような細長い布も結んであった。

全部合わせたらいくらになるのだろう、とルーシエルは少し気が遠くなった。星型の飾りは何でできているかわからないが見るからに高いし、綿なんて一般庶民が買えないほどの高級品だ。

そういえばセリアの誕生日の贈り物を買うとき、ぽんっと金貨一枚渡された。もしかして、エデはお金持ちなのだろうか。

「あ、やっと来た！」

エデが入ってきたルーシエルたちに気付き、声を弾ませた。

不思議そうにルーシエルが木を見ているのがわかったのか、笑顔で説明する。

「何でかわかんないけど、聖誕祭のときってこういう木を飾るんだ。まあでも、全部の家で木を飾ってるわけじゃないかな？」

全部の家がこんな木を飾れるほど、裕福なわけがないだろう。

ルーシエルはおそろおそろ木に近づいて、綿に触ってみた。そしてがっくりする。思い描いていた感触とは少し違ったのだ。もっとふわふわしていると思っていたのに、この綿はふわふわしていないがらごわごわだった。

エデがおそらくシルヴァであるだろう人物の腕を掴み、ルーシエルたちの前に来させた。

「ほらシルヴァ、ルーシエルとセリアだよ。さ、挨拶して」

「……シルヴァだ。こいつがいつも世話になってるな」

兄弟だからか、どことなく雰囲気クロードに似ている。無愛想にそれだけ言ってシルヴァは黙った。

この無愛想さ、つい最近同じような人に会った気がするのだが。どこで会ったか思い出そうと、失礼にならない程度にシルヴァの顔をじっと見る。クロードに似ているから会った気がするのかもしれないが、それは違うと思うのだ。絶対にどこかで会っているはず……。

「あっ」

そこでようやく思い出す。

「一昨日ぶつかってきた人！」

「……あ」

そうだった、つい最近会ったような気がしたのはそのせいだ。

シルヴァは一昨日メリアの店で指輪を買っていた、あの男だった。どこかで見たような人だと思ったのはクロードに似ていたからなの

だろう。

「一昨日はすまなかった。急いでいたものでな」

謝罪の言葉が「悪い」の一言だったのを気にしていたのだろうか。気まずそうに、シルヴァは頭を下げた。

エデが目を丸くして、ルーシエルとシルヴァを交互に見る。

「え？ えっと……つまりは一昨日、シルヴァがルーシエルにぶつかって。もう知り合いだったってことかな？」

「知り合いつているのは違うと思うけど。だって僕はこの人がクロードのお兄ちゃんだってことも、『シルヴァ』って名前だってことも今日知ったんだよ？」

それは知り合いだと言えないだろう。知り合いというのは互いに相手を知っているということで、ただすれ違った人が知り合いになるわけがない。それだけで知り合いになるのなら、ルーシエルはステルダの住人ほとんど知り合いになってしまう。

「どこら辺でぶつかったのかな？」

答えようと口を開くと、メリアに目で制された。

不思議に思いながら、ルーシエルはエデに首を振った。

「ごめん、どこかは忘れちゃった……」

「そっか」

軽くそう言って、シルヴァに嬉しそうに何かを話しかけるエデ。恋する乙女、の言葉がぴったりの顔をしていた。目は熱に浮かされたようにとろんとしているように見えるし、頬も赤く染まっている。

シルヴァのことを好きだということを教えてもらっていなかったとしても、明らかにシルヴァに好意を寄せているとわかってしまう。そういえば、シルヴァはエデの気持ちに気付いているのだろうか。あまり表情の変化がわからないシルヴァを見ると、気付いているのか気付いていないのかわからなくなった。

「……ルーシエルっ」

メリアの小さな声が聞こえる。声のほうを向くと、メリアがエデのことを気にしながら手招きをしていた。

何となくそろそろと移動して、メリアの近くに行く。

「……何ですか？」

大きな声を出してはいけない気がして、ルーシエルは小声で尋ねた。こちらとは違い、エデははしゃいだような声を上げて話している。

エデをちらちらと見ながら、メリアは言いづらそうに答えた。

「シルヴァが指輪を買ったのは……クリスラっていう女の子のためだね。エデにそれは知られたくないんだよ」

「……なるほど」

エデはシルヴァが好きで、シルヴァはクリスラという子が好きなのだろう。だとしたら、シルヴァはエデの気持ちに気付いていないに違いない。

ルーシエルは複雑な気持ちで、シルヴァとエデを見つめた。エデの恋が成就することは、おそらくないのだろう。

（あれ？ でも何で、シルヴァさんはそのクリスラって子と一緒に

祝わないんだろう？)

メリアなら知っているのだろうか。

ルーシエルが訊こうとしたとき、エデが皆に言った。

「じゃっ、皆集まったことだしそろそろお祝い初めよっか！」

訊くのは後でいいか、とルーシエルは椅子に座った。右隣にはセリアが、アーサーを睨みながら座る。エデが机に料理を並べ始めた。

「並べてる間に、一人ずつ自己紹介でもしたらどうかかな？」

この場にいるのは十一人。ルーシエルは全員知っているが、一応自己紹介をしておいたほうがいいのだろう。

誰からするのだろうか、と待っていると、なぜか全員の視線がルーシエルに集まった。確かにルーシエルは全員を知っているのだからやりやすいのだろうが、それならセリアやクロード、エデだって同じだ。自分じゃなくてもいいだろうに。

少し不満に思いつながらも、ルーシエルは立ち上がった。

「僕はルーシエル。えっと……何を言ったらいいんだろう？　とりあえずよろしくね」

「じゃあ次は私ね。私はセリアです。親しい人や親しくしたい人には愛称をつけます。……シルヴァさん、シラさんって呼んでいいですか？」

シルヴァがうなずくのを見てから、セリアは座る。先に立ち上がっていた自分が後に座るのはどうしてだろう、と思いつながらルーシエルは座った。

セリアはアーサーのことは愛称をつけずに『アーサー』と呼んで

いる。それは、アーサーと親しくないという遠回しの拒絶なのだろうか。遠回しではないかもしれないが。

そしてノギスのことも『ノギス君』、メリアのことも『メリアさん』。この一匹と一人とは親しくなりたいと思っていけないわけではないと思うのだが……どうなのだろうか？

ルーシエルが考えている間に、セリアの右隣に座っていたノエルが立ち上がる。どうやらルーシエルからだんだんと右に自己紹介をしていくらしい。

「あたしはノエル。ルーシエルの友達よ。よろしくしてくれなくて構わないわ」

つんけんとした態度で自己紹介を終えるノエルを、苦笑いして見る。セリアとエデには「よろしくお願いするわ」と言ったくせに、それ以外の者には「よろしくしてくれなくて構わないわ」なんて。ノエルが素直になれる日は、いつ頃なのだろうか。

次の自己紹介の順番はアデライードだった。

「私はアデライードだ。ノエルの……まあ、保護者のようなものだな。素直じゃない子だが、よろしく頼む」

「アデライードさまは保護者じゃないでしょう。貴女が保護者だったら、私はどれだけ、だるだるでゆるゆるでのんびんだらりなんですか」

アデライードは自分を睨むノエルを見て、苦笑して椅子に座る。ノエルは、アデライードのことを尊敬しているのではないのだろうか。尊敬している人……魔女に、「だるだるでゆるゆるでのんびんだらり」と言うことはないと思う。だがアデライードの前ではノエルの一人称が『あたし』から『私』に変わるし、一体ノエルはアデライードのことをどう思っているのだろうか。

少女の姿の龍神が立ち上がった。

「我は……ルージンだ。アデライードがノエルの保護者ならば、我は我がみ……じゃなく、セリアの保護者のようなものだ。こういう宴のようなときにしか会わんと思うが、よろしく頼むぞ」

流石にメリアやアーサーたちの前では龍神と名乗らないらしい。龍神をなまらせてルージンにしたのだろう。

龍神のことを知らない者たちは、怪訝な表情で龍神を見ている。それはそうだろう、とルーシエルは苦笑いした。こんな少女の姿をしているのに、龍神よりも年上に見えるセリアの保護者だと言っているのだから。知っていなければ、この表情をして当たり前だ。自己紹介の順番が回ってきて、戸惑いながらもアーサーは口を開いた。アンソニーが膝に座っているためか、立ち上がりず椅子に座ったままだ。

「えっと……僕はアーサーです。こっちは弟のアンソニーです」

「よろしくおねがいます！」

セリアを視界に入れないようにして、アーサーとアンソニーを見る。あるとき助けなければアンソニーは今ここにいなかったかもしれないと思うと、不思議な気持ちになった。

兄であるアーサーの膝に乗って、大きな声で「よろしくおねがいます！」と言うアンソニーは可愛かった。注目されているのが嬉しいのか、にこにこ笑っている。その顔を見ると、ルーシエルも自然と笑顔になった。隣から不穏な気配を感じるが、きつと気のせいだろう。そう思いたい。

「じゃあ、次は私の番だね。市場で主に指輪を売ってる、メリアだ。たまに他のものも売っているから、ちよくちよく店を覗きにきてく

れたら嬉しいよ」

ちゃっかりと店の宣伝をしたメリア。指輪以外のものを売っているとは知らなかったため、ルーシエルは素直にちよくちよく店を覗きに行こうと思った。もつとも、そんなことを言われずとも暇さえあればメリアの店へは行くのだが。

その次の順番のクロードが、嫌そうに立ち上がる。

「クロードだ。よろしく頼む」

やはり、兄弟は似ているものらしい。おそらく、シルヴァも彼と同じような自己紹介をするのだろう。

「クロードの兄の、シルヴァだ。よろしく頼む」

予想通り、シルヴァはクロードにそっくりな自己紹介をした。間髪を入れず、エデが頬を膨らませてシルヴァに抗議する。

「何さその二人揃っての自己紹介は！ つまんない、つまんなすぎるよ！ ちょっとは工夫したらどうかかな！？」

そんなことを言われても、クロードとシルヴァは困るだけだろう。エデの言葉にクロードはむすつとし、シルヴァはため息をついてエデに言った。

「そうは言われても、俺の性格じゃ工夫なんてできないぞ」

「そこを何とかするのがシルヴァの仕事！ さあどうぞ、」クロードの兄のシルヴァだぴょん」とか何とか面白いことをやってみてよ」

クロードの兄のシルヴァだぴょん。

家の中に沈黙が流れる。

ルーシエルは、シルヴァがそんなことを言っているところを想像してみた。が、挫折。全く想像できない。代わりに頭の中でクロードに言わせてみる。ついでに兎耳も頭に装着。

『クロードだぴょん』

意外と似合う。

似合う、けれども。

ルーシエルは思わず噴き出してしまった。兎耳をつけたクロード。想像するだけで大爆笑だ。

止まらなくなつて、「あはははは」と声を上げて笑ってしまう。

ルーシエルにつられてか、周りの皆もだんだんと笑っていく。ついにはクロードとシルヴァ以外の皆が笑い出してしまった。クロードが笑わなかったのは、もしかしたらルーシエルが頭の中で「クロードだぴょん」と言わせていることを、うつすらとわかったからなのかもしれない。

お腹が痛くなるまでひとしきり笑った後、ルーシエルはシルヴァに希望した。

「だぴょん……だぴょんっ……!! シルヴァさん、ぜひ言ってください!」

「断る。……さっさと料理を食べよう。冷めるぞ」

そこでようやく、とつくにエデによって料理が並べられていたことに気付く。龍神だけが気付いていたようで、さっさと一人で食べ始めてしまっていた。

まだ笑っている顔で、エデが言った。

「シルヴァの言う通り、早く食べよっか」

それを合図に、皆は料理を口に運び始める。

時々「ぷっ」と誰かが嘖き出すと、次々と笑いが伝染してシルヴァが止めるまで笑い声は続いた。

にぎやかな家の中を見ながら、ルーシエルは感謝した。

（誰かわからないけれど、ありがとう。君の誕生日を祝う、っておかげで、こんなに楽しい日を過ごさせてもらって）

それから同時に、「おめでとう」と小さく言う。皆すっかりと聖誕祭が『誰かの誕生日』だということを忘れているようだから、ルーシエルだけは言ってあげたかったのだ。

窓の外では、また雪がひらひらと降り出していた。

後日談 雪の日「下」(後書き)

だぴょん。何か適当に思いついたのを書いたら、ルーシエルたちが爆笑しました。そこまで面白くはないような……。

そして何気に、エデだけは自己紹介していません。

……十人の自己紹介書くだけで大変でした。

可哀想なのがノギス君。名前しか登場していません。いつか番外編でノギスが活躍する話を書いてあげたい……。

なぜか書いているうちに「これって伏線かな？」と思うものを張ってしまったので、次も後日談になりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6843s/>

魔女と巫女の物語

2011年11月12日08時49分発行